

大友氏館跡 2

大分県大分市顕徳町3丁目所在の大友氏館跡確認調査報告書(2)

2017

大分市教育委員会

大友氏館跡 2

大分県大分市顕徳町3丁目所在の大友氏館跡確認調査報告書(2)

2017

大分市教育委員会



中世大友府内町跡遠景（北より）



大友氏館跡全景（南東より）

巻頭カラー 2



大友氏館跡庭園域全景（北より）



大友氏館跡庭園域全景（真上より上が南）



SG003園池東側（真上より上が南）



SG003園池西側（真上より上が南）

巻頭カラー 4



SG003園池東側 護岸石組周辺 (北西より)



SG003園池西側 (北より)



SG003中島 1より護岸石組を望む (南西から)



SG003護岸石組周辺作業風景 (西より)

巻頭カラー 6



SG003中島 1 より東側から南東側を望む (北西より)



SG003園池東側南斜面 (東より)



SG003園池中島1～中島2周辺 (北より)



SG003園池 出島及び中島2周辺 (東北より)



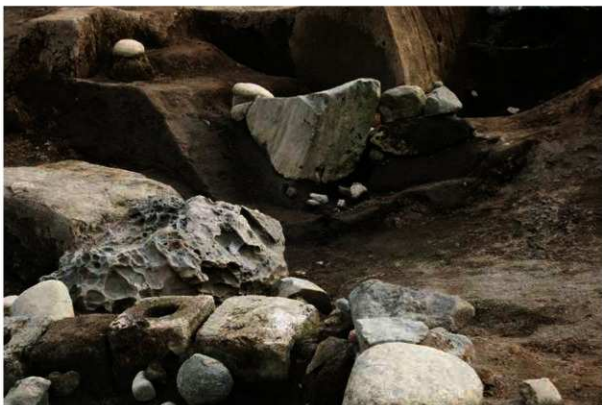
SG003園池西側南斜面（東より）



SG003園池西側北斜面（東より）



SG003園池西側 滝2から北側周辺 (北より)



SG003園池西側 滝2 及び水分石 (北より)



SG003園池西側南斜面景石（南東より）



SG003園池西側北斜面景石（北東より）

序 文

大友氏館跡は、中世の 400 年間、豊後国を治めた守護大友氏の拠点であり、戦国時代には南蛮貿易により日本有数の国際貿易都市として発展した豊後府内（現大分市）の中核を構成しました。

平成 13 年 8 月に館の一部が国史跡に指定されましたが、そのきっかけは本書で報告します池泉庭園跡の発見でした。館の南東部に位置する庭園域は、15 世紀後葉頃に作庭され、2 回の改修を経て、16 世紀後半には、全国の戦国大名居館に築かれた庭園の中でも、屈指の規模を誇りました。

本市では、国史跡大友氏館跡を適切に保存・管理し、地域の新たなシンボルとして活用を図るため、平成 25 年度に『史跡大友氏遺跡保存管理計画』を、平成 27 年度には『史跡大友氏遺跡整備基本計画』を策定しました。

庭園跡につきましては、本成果報告を基に、復元整備を行う計画であり、史跡の価値と重要性を広く情報発信してまいりたいと思います。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究者のみならず、広く市民の皆様に活用され、地域の宝である「史跡大友氏遺跡」に対する理解を深めていただくための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導いただきました先生方をはじめとする関係者、並びに発掘調査・資料整理にご配慮・ご協力いただきました地元の方々、関係各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成 29 年 1 月 27 日

大分市教育委員会
教育長 三浦 享二

例 言

- 1 本書は平成10・11・14・16・23・24・25・26・27・28年度に国庫補助事業として、大分市教育委員会が実施した大友氏館跡確認調査(大友氏館跡第1次・3次・12次・16次・25次・28次・29次・30次・31次・32次・33次・34次)の庭園域を中心とした発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査と本発掘調査報告書に係る整理作業については、下記の4や7に記した委託等において、実施しており、その他一部の遺物実測・遺物トレース及び写真選別作業については、事務局で実施した。
- 3 本書では、大友氏遺跡(大友氏館跡・旧万寿寺地区の総称)ならびに中世大友府内町跡での発掘調査全般について、平成13年度から大分県教育庁文化課・大分県教育庁埋蔵文化財センターと合同で「中世大友府内町跡発掘調査指導者会」を開催し、この調査指導の内容に基づき確認調査を実施した成果を掲載している。各年度における調査指導者については第2表に示している。
- 4 発掘調査担当者は、第1表の文化財課組織一覧表等の中で、太字で示している。また、本書に掲載した発掘調査の記録資料の作成は、各調査担当者および文化財課所属の嘱託職員が行い、業務の一部を以下の各社に委託し作成した。
館25次確認調査に係る掘削・埋戻及び調査記録作成業務委託：大成エンジニアリング株式会社
館28次確認調査に係る掘削・埋戻及び調査記録作成業務委託：株式会社九州文化財総合研究所
館29次確認調査に係る掘削・埋戻及び調査記録作成業務委託：株式会社アーキジオ大分
館30次確認調査に係る掘削・埋戻及び調査記録作成業務委託：株式会社アーキジオ大分
館31次確認調査に係る掘削・埋戻及び調査記録作成業務委託：株式会社アーキジオ大分
館32次確認調査に係る掘削・埋戻及び調査記録作成業務委託：株式会社アーキジオ大分
館33次確認調査に係る掘削・埋戻及び調査記録作成業務委託：株式会社アーキジオ大分
館34次確認調査に係る掘削・埋戻及び調査記録作成業務委託：株式会社アーキジオ大分
以上のほか、庭園遺構に係る遺構などトレース業務・3D計測及び図化・自然科学分析などの業務委託を行った。
大友氏館跡3D計測及び図化業務委託：株式会社木崎工業
大友氏館跡庭園遺構3D計測業務委託：株式会社明大工業
- 5 出土遺物の整理は、五十川雄也・佐藤里恵が行った。
- 6 第1章に係る図版作成は佐藤里恵が、第2章に係る図版は大友氏館跡1より、第3～V章に係る図版の作成及び製図作業は五十川雄也、佐藤里恵、荒木伴世が行った。
- 7 第3章に掲載した出土遺物の実測・製図は、五十川雄也・荒木伴世、以下の各社に委託して行った。
館跡出土の木製品等の実測業務委託：株式会社埋蔵文化財サポートシステム
館3・12・25・29-32次発掘調査に係る資料整理業務委託：株式会社木崎工業
館発掘調査報告書作成に係る資料整理業務委託：株式会社木崎工業
館28-4・33次発掘調査に係る資料整理業務委託：有限会社九州文化財リサーチ
- 8 遺物写真撮影は、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、株式会社木崎工業・有限会社九州文化財リサーチが7の委託中において、デジタル写真撮影を行った。
- 9 本書の執筆は、以下のとおりである。
第1章 五十川雄也 第2章 大友氏館跡1より引用・改変 第3章 五十川雄也 佐藤里恵
第4章 金原正明 五十川雄也 第5章 五十川雄也
- 10 報告書の作成作業については、『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針2014』を基本に実施している。
- 11 本書の編集は、五十川雄也・佐藤里恵が行った。
- 12 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター(大分市大字田原337番地の5)に収蔵・保管している。

凡 例

- 1 本書で用いた遺構記号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
① SB：掘立柱建物跡、② SA：柱穴列、③ SP：ピット、小穴、④ SE：井戸跡、⑤ SK：土坑、⑥ SD：溝跡、溝状遺構、⑦ SX：地業・整地跡・ため池状・その他、⑧ SG：園池跡を表している。
- 2 本書では、大友氏館跡の調査地点については「館」、中世大友府内町跡の調査地点については「町」の呼称を用いる。また、記載される遺構番号は、以下の要領で表記する。
「館 12 SK 025」・・・館(遺跡種別) 12(調査次数) SK(遺構記号) 025(遺構番号)
- 3 本書に用いた方位はすべて座標北(G.N.)である。記載する座標は平面直角座標2系(北緯33°0′、東経131°0′)のX・Y座標を基点として表記し、日本測地系で表している。
- 4 本書に掲載した遺構配置図(遺構の新旧関係を記録した図面)の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
- 5 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル(m)で、遺物の法量はセンチメートル(cm)で表記している。
- 6 遺物の法量の内、器高と口径、底径と高台径は以下のとおり計測している。
器高：底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ
口径：上記の状態で、口径端部外縁の最大径
底径：口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径
高台径：高台端部外縁の最大径
- 7 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
(1) 遺物断面が黒塗りのもの・・・陶器・須恵器
(2) 遺物断面が灰色のもの・・・瓦器・瓦類
(3) 遺物平面の稜線と調整の変換点・・・実線
(4) 調整が同じでその単位が分かるもの・・・長破線
(5) 軸と付着物、黒斑等その範囲を示す必要があるもの・・・一点破線など
- 8 本書では、第Ⅲ章第2節において中世大友府内町跡から出土した土器類を中心に器種・型式分類並びに時期区分について提示している。その中で、各遺物の編年観及び年代観について記載しているので、そちらを参照していただきたい。
- 9 本書では、「豊後府内」「中世大友府内町跡」といった名称を用いている。概ね、「豊後府内」については、府内古絵図A類などに描かれた全体をさし、「中世大友府内町跡」については大友館を中心にした南北2.1km、東西0.8kmの範囲をさしている。
- 10 第Ⅲ章第5節(7)庭園跡の中で用いた語句は、庭園：辞典(小野健吉2004『日本庭園辞典』岩波書店)などを参照し、景石、滝、中島、出島(状)、護岸石組、洲浜(状)、導水路、排水路などを用いて使用している。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
第1節	調査の経過	1
第2節	調査組織	2
第3節	庭園域の確認調査と報告範囲	5
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	8
第3節	大友氏館跡の変遷	13
第Ⅲ章	調査の方法と成果	
第1節	庭園域の調査概要	21
第2節	調査の方法	51
第3節	基本層序	54
第4節	古代の調査	56
	(1)掘立柱建物跡(SB)	56
	(2)井戸跡(SE)	57
	(3)小結	57
第5節	中世の調査(館Ⅰ期～館Ⅳ期を中心とした遺構群)	58
	(1)掘立柱建物跡(SB)・柵跡(SA)・ピット(SP)	58
	(2)井戸跡	67
	(3)土坑	77
	(4)溝跡	100
	(5)地業・整地跡	113
	(6)その他性格等不明遺構(SX)	118
	(7)庭園関連遺構	125
	(8)その他の遺物	183
第Ⅳ章	自然科学分析	
第1節	史跡大友氏遺跡庭園跡および周辺における植生および環境の復元調査報告	184
第2節	館Ⅴ期園池出土大型の石材について	232
第3節	その他の自然科学分析	237
	(1)大友氏館跡第12次調査地点の花粉分析	237
	(2)大友氏館跡第25次調査に係る自然科学分析	242
	(この章の第1・3節は別図版・表番号とし、本報告書の図版・表番号とは連動していない)	
第Ⅴ章	総括	
第1節	中世の時期変遷について	247
第2節	SG003の構造について	249
第3節	SG003の構築過程について	254
第4節	SG003に関連する池水の導排水路について	255
第5節	SG003に関連する池水の水位について	256
第6節	庭園(特にSG003)の観賞地点について	256
第7節	SG003からSX004へ	261
第8節	景石について	263

挿図目次

第 1 図 大友氏館跡調査地点位置図 (1/2000)-----	5	第 42 図 遺構配置詳細図-27 (1/100)-----	50
第 2 図 大友氏遺跡の位置図-----	7	第 43 図 平面直角座標系-----	51
第 3 図 大分川下流域の沖積低地の地形分類図 (「大分市史」上巻 1987 より)-----	8	第 44 図 中世大友府内町跡 グリッド区割図-----	52
第 4 図 大友氏遺跡・中世大友府内町跡 調査地点位置図 (1/8000)-----	9	第 45 図 中世大友府内町跡 中・小グリッド凡例図-----	53
第 5 図 大分市内の遺跡分布図-----	10	第 46 図 各地点基本層序断面実測図①-----	54
第 6 図 I 期 (14 世紀後半～15 世紀前半) の遺構 (1/2000)-----	13	第 47 図 各地点基本層序断面実測図②-----	55
第 7 図 館 12・21・25 次 I 期の建物遺構変遷 (1/1000)-----	14	第 48 図 25SB111 実測図 (1/80)-----	56
第 8 図 II 期 (15 世紀中葉～後葉) の遺構 (1/2000)-----	15	第 49 図 33SE086 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図-----	56
第 9 図 III-1 期 (15 世紀末葉～16 世紀初葉) の 遺構 (1/2000)-----	16	第 50 図 12SX096 出土遺物実測図 (1/4)-----	57
第 10 図 III-2 期 (16 世紀前半) の遺構 (1/2000)-----	17	第 51 図 12SB035 平面 (1/80) 及び 断面 (1/20) 実測図-----	58
第 11 図 IV 期 (16 世紀中葉) の遺構 (1/2000)-----	18	第 52 図 12SB145 平面 (1/80) 及び断面 (1/40) 及び遺物 (1/4) 実測図-----	59
第 12 図 V 期 (16 世紀後半～1586 年) の遺構 (1/2000)-----	19	第 53 図 12SB050 平面実測図 (1/80)-----	60
第 13 図 VI 期 (1586 年以降) の遺構 (1/2000)-----	20	第 54 図 12SB045 平面実測図 (1/80)-----	60
第 14 図 遺構配置図 (1・3・12・16・21・28-34 次 調査区) (1/600)-----	22	第 55 図 25SA198 遺構 (1/80) 及び 25SA199 遺構 (1/80) 及び 12SA(SB?)150 遺構 (1/80) 実測図-----	61
第 15 図 グリッド図 (1・3・12・16・21・28-34 次 調査区) (1/600)-----	23	第 56 図 12SA165 遺構実測図 (1/80)-----	62
第 16 図 遺構配置詳細図-1 (1/100)-----	24	第 57 図 12SA081 遺構実測図 (1/80)-----	62
第 17 図 遺構配置詳細図-2 (1/100)-----	25	第 58 図 28SB068 遺構実測図 (1/80)-----	62
第 18 図 遺構配置詳細図-3 (1/100)-----	26	第 59 図 28SB104 遺構実測図 (1/80)-----	62
第 19 図 遺構配置詳細図-4 (1/100)-----	27	第 60 図 28SB137・28SB258 遺構 (1/60)-----	63
第 20 図 遺構配置詳細図-5 (1/100)-----	28	第 61 図 28SB054 遺構実測図 (1/60)-----	64
第 21 図 遺構配置詳細図-6 (1/100)-----	29	第 62 図 28SA121 遺構実測図 (1/60)-----	64
第 22 図 遺構配置詳細図-7 (1/100)-----	30	第 63 図 28SA214 遺構実測図 (1/60)-----	64
第 23 図 遺構配置詳細図-8 (1/100)-----	31	第 64 図 31SB012 遺構実測図 (1/60)-----	65
第 24 図 遺構配置詳細図-9 (1/100)-----	32	第 65 図 33SA001 遺構 (1/80) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図-----	65
第 25 図 遺構配置詳細図-10 (1/100)-----	33	第 66 図 3SP006・3SP008 遺構 (1/20) 及び 断面 (1/20) 実測図-----	65
第 26 図 遺構配置詳細図-11 (1/100)-----	34	第 67 図 12SP020 遺構・断面 (1/20) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図-----	66
第 27 図 遺構配置詳細図-12 (1/100)-----	35	第 68 図 12SE024 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/1・1/4) 実測図-----	68
第 28 図 遺構配置詳細図-13 (1/100)-----	36	第 69 図 12SE026 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/3・1/4) 実測図-----	69
第 29 図 遺構配置詳細図-14 (1/100)-----	37	第 70 図 12SE080 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図-----	70
第 30 図 遺構配置詳細図-15 (1/100)-----	38	第 71 図 25SE015 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図-----	71
第 31 図 遺構配置詳細図-16 (1/100)-----	39	第 72 図 25SE025 遺構実測図 (1/60)-----	71
第 32 図 遺構配置詳細図-17 (1/100)-----	40	第 73 図 25SE105 遺構実測図 (1/60)-----	71
第 33 図 遺構配置詳細図-18 (1/100)-----	41	第 74 図 28SE040 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図-----	72
第 34 図 遺構配置詳細図-19 (1/100)-----	42	第 75 図 28SE045 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図-----	73
第 35 図 遺構配置詳細図-20 (1/100)-----	43	第 76 図 28SE095 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図-----	74
第 36 図 遺構配置詳細図-21 (1/100)-----	44		
第 37 図 遺構配置詳細図-22 (1/100)-----	45		
第 38 図 遺構配置詳細図-23 (1/100)-----	46		
第 39 図 遺構配置詳細図-24 (1/100)-----	47		
第 40 図 遺構配置詳細図-25 (1/100)-----	48		
第 41 図 遺構配置詳細図-26 (1/100)-----	49		

挿図目次

第 77 図 31SE010 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	74	第 106 図 28-4SK035 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	94
第 78 図 33SE071・33SE084 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	74	第 107 図 31SK001 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	95
第 79 図 34SE001 遺構及び断面実測図 (1/40)	75	第 108 図 31SK009 遺構実測図 (1/40)	96
第 80 図 1SK008 遺構・土層断面 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	77	第 109 図 33SK098 遺構実測図 (1/40)	96
第 81 図 12SK004 遺構 (1/40) 及び 12SK098 遺構 (1/40) 及び出土遺物 (1/4) 実測図	78	第 110 図 34SK024 遺構実測図 (1/40)	97
第 82 図 12SK025 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	78	第 111 図 34SK028 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	97
第 83 図 12SK031 遺構実測図 (1/40)	79	第 112 図 34SK029 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	97
第 84 図 12SK065 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	79	第 113 図 34SK031 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	97
第 85 図 12SK085 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	80	第 114 図 34SK035 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	97
第 86 図 12SK122 遺構実測図 (1/40)	81	第 115 図 12SK086 出土遺物実測図 (1/4)	97
第 87 図 25SK001 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	81	第 116 図 28SD005・28-4SD005・28-4SD010・ 32SD002・32SD003 遺構実測図 (1/600)	100
第 88 図 25SK005 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	82	第 117 図 28SD005 拡大遺構平面図 (1/250)・ 断面図 (1/60) 及び出土遺物①(1/4) 実測図	101
第 89 図 28SK015 遺構 (1/80) 及び 出土遺物①(1/4) 実測図	83	第 118 図 28SD005 出土遺物②実測図 (1/4)	102
第 90 図 28SK015 出土遺物②実測図 (1/4・1/6)	84	第 119 図 28-4SD005・28-4SD010 遺構平面図 (1/150) 及び土層 (1/80) 実測図	103
第 91 図 28SK020 遺構 (1/40) 及び 出土遺物①(1/4) 実測図	85	第 120 図 32SD002・32SD003 拡大遺構図 (1/150) 及び土層 (1/60) 及び出土遺物 (1/4) 実測図	104
第 92 図 28SK020 出土遺物②実測図 (1/4)	86	第 121 図 28-4SD020 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 及び 28-4SD025 遺構 (1/60) 実測図	105
第 93 図 28SK030 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	87	第 122 図 28SD025 遺構 (1/150) 及び 土層 (1/60) 実測図	106
第 94 図 28SK035 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	87	第 123 図 31SD004 遺構平面・断面図 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	107
第 95 図 28SK065 遺構実測図 (1/60)	88	第 124 図 31SD002 遺構 (1/80) 及び断面 (1/40) 及び出土遺物 (1/4) 及び 33SD131 遺構 (1/80) 実測図	108
第 96 図 28SK070 遺構 (1/60) 及び 出土遺物①(1/4) 実測図	88	第 125 図 33SD125 遺構 (1/80) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	109
第 97 図 28SK070 出土遺物②実測図 (1/4)	89	第 126 図 28-4SD030 遺構 (1/80) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	109
第 98 図 28SK071 遺構 (1/40) 及び出土遺物 (1/4)・ 28SK161 遺構 (1/40) 及び出土遺物 (1/4) 実測図	90	第 127 図 28-4SD045 遺構 (1/80) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	110
第 99 図 28SK085 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	90	第 128 図 31SD011 遺構実測図 (1/60)	110
第 100 図 28SK090 遺構実測図 (1/40)	91	第 129 図 34SD027 遺構及び断面実測図 (1/60)	111
第 101 図 28SK156 遺構実測図 (1/40)	91	第 130 図 1SD019 出土遺物実測図 (1/4)	112
第 102 図 28SK199 遺構実測図 (1/40)	91	第 131 図 33SX085 遺構 (1/120) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	114
第 103 図 28SK269 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	91	第 132 図 31SX008・33SX130 遺構 (1/120) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	115
第 104 図 28SK500 遺構 (1/60) 及び 28SK505 遺構 (1/60) 及び出土遺物 (1/4) 実測図	92		
第 105 図 28-4SK015 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	93		

挿図目次

第133図 34SX002 遺構実測図 (1/80)	116	第173図 土層22 実測図 (1/40)	138
第134図 12SX070 遺構 (1/60) 及び 土層 (1/30) 実測図	117	第174図 土層23 実測図 (1/40)	138
第135図 12SX093 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	118	第175図 土層24 全体 (1/100) 及び拡大 (1/60) 実測図	139
第136図 12SX099 遺構 (1/60) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	118	第176図 SG003 西側 (館3次) 出土遺物実測図 (1/4)	141
第137図 12SX202 及び 34SX003 遺構 (1/60) 及び出土遺物 (1/4) 実測図	119	第177図 SG003 西側 (館31次) 出土遺物実測図① (1/4)	142
第138図 28SX012・013・014 遺構 (1/60) 及び 28SX012 出土遺物 (1/4) 実測図	120	第178図 SG003 西側 (館31次) 出土遺物実測図② (1/4)	143
第139図 28SX073 遺構実測図 (1/40)	120	第179図 SG003 東側拡大図 (1/200)	144
第140図 28SX080 遺構 (1/40) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	121	第180図 土層25 実測図 (1/40)	145
第141図 28SX100 遺構実測図 (1/60)	122	第181図 土層26 実測図 (1/60)	145
第142図 28SX306 遺構実測図 (1/60)	122	第182図 土層27 実測図 (1/60)	145
第143図 31SX003 遺構 (1/80) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	123	第183図 土層28 実測図 (1/60)	145
第144図 32SX009・014・015 遺構実測図 (1/60)	124	第184図 土層29 全体 (1/100) 及び拡大 (1/60) 及び出土遺物 (1/4) 実測図	146
第145図 土層見取り図 (1/400)	125	第185図 土層30 実測図 (1/40)	147
第146図 SG001・SG002 実測図 (1/200)	126	第186図 土層31 実測図 (1/40)	147
第147図 土層1 全体 (1/200) 及び 拡大 (1/100) 実測図	127	第187図 土層32 実測図 (1/60)	147
第148図 土層2 実測図 (1/60)	128	第188図 土層33 実測図 (1/40)	147
第149図 土層3 実測図 (1/80)	128	第189図 土層34 実測図 (1/40)	148
第150図 土層4 実測図 (1/60)	128	第190図 土層35 (1/20) 及び 出土遺物 (1/4) 実測図	148
第151図 土層5 実測図 (1/60)	128	第191図 土層36 実測図 (1/40)	148
第152図 土層17 南側出土碑実測図 (1/60)	129	第192図 土層37 実測図 (1/40)	149
第153図 3次トレンチ4 遺構実測図 (1/40)	129	第193図 土層38 実測図 (1/40)	149
第154図 SG001・SG002 成形土及び 埋土出土遺物実測図 (1/4)	130	第194図 土層39 実測図 (1/40)	149
第155図 SG002 出土遺物実測図 (1/4)	131	第195図 土層40 全体 (1/100) 及び 拡大 (1/60) 実測図	150
第156図 SG003Ⅲ期西側拡大図 (1/200)	132	第196図 土層41 実測図 (1/60)	151
第157図 土層6 実測図 (1/60)	133	第197図 土層42 実測図 (1/60)	151
第158図 土層7 実測図 (1/60)	133	第198図 土層43 全体 (1/100) 及び 拡大 (1/60) 実測図	152
第159図 土層8 実測図 (1/40)	134	第199図 土層44 全体 (1/80) 及び 拡大 (1/40) 実測図	153
第160図 土層9 実測図 (1/40)	134	第200図 土層45 実測図 (1/60)	154
第161図 土層10 実測図 (1/40)	134	第201図 土層46 実測図 (1/60)	155
第162図 土層11 実測図 (1/60)	134	第202図 土層47 実測図 (1/40)	155
第163図 土層12 実測図 (1/40)	135	第203図 SG003 東側28次調査出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)	156
第164図 土層13 実測図 (1/60)	135	第204図 SG003 東側31次調査出土遺物実測図 (1/4)	157
第165図 土層14 実測図 (1/40)	135	第205図 SG003 内詳細遺構報告配置図 (1/400)	158
第166図 土層15 実測図 (1/40)	136	第206図 景石番号割付図 (1/400)	159
第167図 土層16 実測図 (1/40)	136	第207図 SG003 西側南北断面実測図 (1/120)	160
第168図 土層17 実測図 (1/60)	136	第208図 SG003 中央高まり部 (中島2) 周辺東西 断面実測図 (1/100)	160
第169図 土層18 実測図 (1/40)	137		
第170図 土層19 実測図 (1/40)	137		
第171図 土層20 実測図 (1/40)	137		
第172図 土層21 実測図 (1/20)	138		

挿図目次

第209図 景石52(滝2)及び景石43周辺実測図 (1/60).....	161	第227図 12SD090 遺構実測図(1/80).....	177
第210図 景石52周辺(滝2)実測図(1/30).....	162	第228図 33SD088 遺構(1/100)及び土層(1/60) 及び出土遺物(1/4)実測図.....	178
第211図 景石5実測図(1/60).....	163	第229図 28SD010 遺構(1/80)及び土層(1/60・ 1/80)実測図.....	179
第212図 景石4・51実測図(1/60).....	163	第230図 28SD010 出土遺物実測図(1/4).....	180
第213図 景石3・19・50・割石1・2実測図 (1/60).....	164	第231図 31SD006・31SD007・32SD010 西溝遺構 及び断面(1/200)・西端拡大及び断面 (1/60)実測図.....	181
第214図 礫集中1(洲浜1)実測図(1/40).....	165	第232図 12SX040 出土遺物実測図(1/4).....	183
第215図 景石38・39・40実測図(1/60).....	166	第233図 28S001 出土遺物実測図(1/1・1/4).....	183
第216図 景石41・53実測図(1/60).....	167	第234図 SG003 出土景石管理番号図.....	233
第217図 中島1東側～SG003東側東斜面実測図 (1/80).....	168	第235図 SG003 出土景石石材別色分け図.....	235
第218図 滝1～護岸石組(1/120)及び 出土遺物(1/4)実測図.....	169	第236図 景石石材産出位置図 (国土地理院1/50000「大分」使用).....	236
第219図 護岸石組内景石15実測図(1/20).....	170	第237図 庭園域時期別遺構変遷図.....	248
第220図 護岸石組内西側(1/30)及び 出土遺物(1/4)実測図.....	171	第238図 園池跡時期別断面模式図(東西方向).....	249
第221図 護岸石組内(館1次調査)出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/4).....	172	第239図 SG003 内構造想定図(1/400).....	250
第222図 護岸石組内(館30次調査)出土遺物 実測図(1/4).....	173	第240図 館V期庭園関連遺構配置図(1/700).....	252
第223図 護岸石組内(館31次調査)出土遺物 実測図(1/4).....	174	第241図 SG003 園池造成工程図(模式図案).....	254
第224図 滝1実測図(1/60).....	175	第242図 SG003 園池想定復元等高線図(1/400).....	257
第225図 滝1～護岸石組東側実測図(1/40).....	176	第243図 SX004 溜め池状遺構復元想定等高線図 (1/400).....	258
第226図 景石25(1/40)及び 出土遺物(1/4)実測図.....	177	第244図 館17・20次調査遺構(1/300)及び 土層模式図(大分市教委2007『市内遺跡 調査概報』).....	260
		第245図 中心建物跡・南側掘り込み整地跡.....	261
		第246図 SG003 園池跡北側建物想定範囲図.....	262

表目次

第1表 文化財課組織一覧表.....	4	第11表 土坑出土遺物①一覧表.....	280
第2表 調査指導者一覧表.....	5	第12表 土坑出土遺物②一覧表.....	281
第3表 大友氏館跡関係発掘調査一覧表.....	6	第13表 土坑出土遺物③一覧表.....	282
第4表 大友氏関連年表1.....	11	第14表 溝跡出土遺物一覧表.....	283
第5表 大友氏関連年表2.....	12	第15表 整地跡出土遺物一覧表.....	284
第6表 景石詳細表.....	234	第16表 その他性格不明遺構等出土遺物一覧表.....	284
第7表 大友氏館庭園跡の調査成果.....	253	第17表 庭園関連遺構出土遺物①一覧表.....	284
第8表 古代出土遺物一覧表.....	279	第18表 庭園関連遺構出土遺物②一覧表.....	285
第9表 建物跡・ビット出土遺物一覧表.....	279	第19表 庭園関連遺構出土遺物③一覧表.....	286
第10表 井戸跡出土遺物一覧表.....	279	第20表 庭園関連遺構出土遺物④一覧表.....	287
		第21表 庭園関連遺構出土遺物⑤一覧表.....	288

巻頭写真

巻頭カラー 1

上 中世大友府内町跡遠景(北より)
下 大友氏館跡全景(南東より)

巻頭カラー 2

上 大友氏館跡庭園域全景(北より)
下 大友氏館跡庭園域全景(真上より 上が南)

巻頭カラー 3

上 SG003 園池東側(真上より 上が南)
下 SG003 園池西側(真上より 上が南)

巻頭カラー 4

上 SG003 園池東側護岸石組周辺(北西より)
下 SG003 園池西側(北より)

巻頭カラー 5

上 SG003 中島 1 より護岸石組を望む(南西から)
下 SG003 護岸石組周辺作業風景(西より)

巻頭カラー 6

上 SG003 中島 1 より東側から南東側を望む(北西より)
下 SG003 園池東側南斜面(東より)

巻頭カラー 7

上 SG003 園池 中島 1 ~ 中島 2 周辺(北より)
下 SG003 園池 出島及び中島 2 周辺(東北より)

巻頭カラー 8

上 SG003 園池西側南斜面(東より)
下 SG003 園池西側北斜面(東より)

巻頭カラー 9

上 SG003 園池西側滝 2 から北側周辺(北より)
下 SG003 園池西側滝 2 及び水分石(北より)

巻頭カラー 10

上 SG003 園池西側南斜面景石(南東より)
下 SG003 園池西側北斜面景石(北東より)

巻末写真

写真図版 1

33SE086 土層断面(北より)
12SE026 検出状況(南より)
12SE026 出土状況(南より)
12SE026 出土状況(南より)
12SE080 検出状況(北より)
28SE040 検出状況(南より)
28SE040 土層断面(北より)
28SE045 検出状況(東より)

写真図版 2

28SE095 出土状況(東より)
31SE010 検出状況(東より)
31SE010 土層断面(東より)
33SE071 土層断面(東より)
33SE084 土層断面(西より)
34SE001 検出状況(東より)
34SE001 掘り下げ途中 1(東より)
34SE001 掘り下げ途中 2(東より)

写真図版 3

34SE001 掘り下げ途中 3(東より)
34SE001 掘り下げ最終(東より)
34SE001 掘り下げ最終(南東より)
15K008 検出状況(西より)
15K008 出土状況(西より)
15K008 土層断面(南より)
28SK015 出土状況(西より)
28SK015 遺物除去後全景(南西より)

写真図版 4

28SK015 南北土層断面(北西より)
28SK020 出土状況(北より)
28SK020 土層断面(南より)
28SK030 検出状況(南より)
28SK030 土層断面(西より)
28SK035 検出状況(南より)
28SK035 土層断面(西より)
28SK065 検出状況(南より)

写真図版 5

28SK065 土層断面(北西より)
28SK070 出土状況(南より)
28SK070 土層断面(西より)
28SK071・161 出土状況(北より)
28SK071・161 土層断面(北より)
28SK085 土層断面(北より)
28SK090 検出状況(西より)
28SK090 土層断面(南より)

写真図版 6

28SK500 土層断面(西より)
28-4SK035・SD040 検出状況(北より)
28-4SK035 出土状況(南西より)
28-4SK035 土層断面(南西より)
28-4SD040 出土状況(南東より)
28-4SD040 土層断面(南西より)
31SK009 検出状況(西より)
31SK009 土層断面(西より)

巻末写真

写真図版 7

33SK098 土層断面 (南より)
34SK024 検出及び土層断面状況 (南より)
34SK029 検出及び土層断面状況 (南より)
34SK031 検出及び土層断面状況 (東より)
34SK035 検出及び土層断面状況 (西より)
28SD005 遠景 (西より)
28SD005 底面確認状況 (西より)
28SD005 A-B 土層断面 (東より)

写真図版 8

28SD005 C-D 土層断面 (西より)
28-4SD005・010 土層断面 (第 119 図) (西より)
32SD002 と 32SD010 合流地点周辺 (東より)
32SD002・003 北壁土層
32SD002 トレンチ 3 北壁土層断面 (南より)
32SD002 トレンチ 4 北側土層断面 (南より)
32SD003 北壁土層
28-4SD025・030 検出状況 (北より)

写真図版 9

28-4SD020 東側検出状況 (南より)
28-4SD020 土層断面 (第 121 図) (東より)
31SD004 S-N 断面 (東より)
31SD004 W-E 断面 (南より)
31SD002・33SD131 検出状況 (南より)
33SD125 土層断面 (北より)
28-4SD030 土層断面 (第 126 図) (南西より)

写真図版 10

28-4SD045 土層断面 (南より)
1SD019 出土状況 (西より)
33SX085 西トレンチ (北西より)
33SX085 東トレンチ (東より)
33SX085 南トレンチ (南より)
33SX085 北トレンチ (北より)
33SX130 検出状況 (北東より)
31SX008 出土状況 (東より)

写真図版 11

34SX002 検出及び一部掘り下げ状況 (北西より)
34SX002 南北土層断面 (北より)
12SX202 掘り下げ状況 (南東より)
34SX003 検出及び一部掘り下げ状況 (南東より)
34SX003 出土状況 (東より)
34SX003 土層断面 (東より)
34SX003 東西土層断面 (南東より)
28SX012・013・014 遠景 (北より)

写真図版 12

28SX013 土層断面 (北より)
28SX073・074 完掘状況 (西より)
28SX073 土層断面 (南東より)
28SX080 検出状況 (北西より)
28SX080 土層断面 (北より)
28SX100 検出状況 (南より)
28SX100 土層断面 (西より)
31SX003 出土状況 (西より)

写真図版 13

31SX003 土層断面北壁西壁 (南より)
32SX009・014・015 周辺検出状況 (南より)
32SX009・014・015 周辺 C-D・D-E・E-F 土層断面 (南より)
32SX009 A-B 土層断面 (南より)
土層 2 南側西壁 (南東より)
土層 2 北側 (SG002 掘り込み状況) (東より)
土層 2 北側西壁 (南東より)
土層 2 北端西壁 (南東より)

写真図版 14

土層 3 西側北壁 (南西より)
土層 4 南側東壁 (北西より)
土層 4 北側東壁 (北より)
3 次調査トレンチ 4 内景石出土状況 (南より)
土層 6 (南西より)
土層 8 (南東より)
土層 9 (北西より)

巻末写真

写真図版 15

土層 9(北西より)
土層 11 東壁(西より)
土層 13(南東より)
土層 14(南東より)
土層 15(南東より)
土層 17 西壁(北東より)
土層 18 北壁(南より)
土層 22 南壁(北西より)

写真図版 16

土層 22(北より)
土層 23 南壁(北東より)
土層 25 西壁(南東より)
土層 26(北西より)
土層 26 北壁(南西より)
土層 29 西壁中央(東より)
土層 29 西壁南側(北東より)
土層 31 西壁(南より)

写真図版 17

土層 34 北壁(東より)
土層 35 西壁(南より)
土層 37 東西ライン(南東より)
土層 37 南北ライン(南東より)
土層 39 南壁(北より)
土層 40 景石 11 除去後 東壁
土層 40 護岸石組南(南西より)
土層 40 北側(西より)

写真図版 18

土層 41 Z S 西壁(南東より)
土層 41 Z S 西壁(北東より)
土層 41 Z W 西壁(東より)
土層 41 Z W 西壁(北より)
土層 42 中央(南西より)
土層 42 南側(南西より)
土層 42 北側(北西より)
土層 43 西側(北西より)

写真図版 19

土層 43 北壁中央(南西より)
土層 43 北壁中央(南東より)
土層 43 北壁東側(南西より)
土層 44 中央付近(南より)
土層 44 東側 南壁(北東より)
土層 45 N-Z 西壁(南より)
土層 45 N-Z 西壁(北より)
土層 45 N-Z 北側 西壁(東より)

写真図版 20

土層 45 Z-W 北壁(南東より)
土層 46 東壁(北西より)
土層 46 東壁(北西より)
土層 47(北西より)
SG003 に伴う西溝 掘り下げ状況(東より)
SG003 に伴う西溝 (28SD010)(北より)
SG003 園池西側 緑泥片岩等出土状況(北西より)
SG003 園池西側 2 南側検出状況(北西より)

写真図版 21

SG003 園池西側 2 南側検出状況(北西より)
SG003 園池東側 景石 15 出土状況(西より)
SG003 園池東側 推定湧水点(北東より)
SG003 園池東側中島 I(北より)
SG003 犬形土製品出土状況
SG003 出土の玉砂利(一部)
SG003 中島 2 から南側出島状検出状況(西より)
SG003 護岸石組西側角礫除去後(西より)

写真図版 22

館VI期西側溝状遺構(西より)
景石 8 除去後 玉砂利等出土状況
景石 10 下出土京都系土師器 P7
景石 13 西壁土層(東より)
景石 20 抜き取り痕(北西より)
護岸石組周辺 作業風景
護岸石組西側 第 218 図 4 出土状況(北より)
第 146 図土器集中 A 出土状況(東より)

巻末写真

写真図版 23

- 第 209 図 F 石製宝塔片出土状況
12SD090 土層断面 (北より)
33SD088 トレンチ 2 北壁土層 (南より)
33SD088 トレンチ 3 西壁土層 (東より)
33SD088 トレンチ 3 北壁土層 (南より)
28SD010 A-B 土層断面 (南より)
28SD010 北側土層断面及び滝 2 検出状況 (西より)
SG003 護岸石組西側角礫除去後状況 (北西から)

写真図版 24

- 竹村恵二先生石材調査風景
1 次調査区 検出状況 (東より)
1 次調査区 作業風景 (西より)
1 次調査区 大分市議会への説明
3D 計測風景 (夜間)
12 調査区東側 検出状況 (西より)
28 調査区遠景 (東より)
28 調査区全景 (北より)

写真図版 25

- 28 調査区東側全景 (北より)
28 調査区砂脈検出状況 (北より)
28 調査区西壁土層断面 (東より) (第 46 図基本層序)
28-4 調査区拡張 (北西部) 検出状況 (北より)
28-4 調査区西側検出状況 (西より)
28-4 調査区東側検出状況 (南東より)
31 景石 25 出土状況及び土層断面 (南より)
34 調査区遺構検出状況 (南東より)

写真図版 26

- 34 調査区遺構検出状況 (北西より)
34 調査区中央付近段差土層断面 (南より)
2013 年度 大友氏遺跡フェスタ
2014 年度 金原正明先生土壌分析調査
2015 年度 小野正敏先生指導
2015 年度 仲隆裕先生 平澤毅調査官 指導
2015 年度 飛田範夫先生来跡
2015 年度 大友指導者会

写真図版 27

- 景石 11 取り上げ状況 (南西から)
景石 11 吊り上げ状況 (南から)
景石 10・11 接合作業 (東から)
北西上空からみた SG003 園地跡

写真図版 28

- 第 89 図 15
第 89 図 19
第 89 図 29
第 90 図 30
第 90 図 31
第 90 図 32
第 90 図 33
第 90 図 34
第 91 図 1
第 92 図 10
第 92 図 11
第 96 図 5
第 96 図 10
第 97 図 25
第 97 図 41

写真図版 30

- 第 218 図 2
第 218 図 3
第 218 図 4
第 220 図 1
第 220 図 2
第 221 図 16
第 221 図 16
第 221 図 16
第 222 図 14
第 223 図 5
第 221 図 19

写真図版 29

- 第 97 図 49
第 99 図 3
第 106 図 3
第 176 図 34
第 176 図 35
第 177 図 42
第 177 図 44
第 190 図 1
第 203 図 7
第 203 図 9
第 203 図 10
第 203 図 12
第 203 図 13
第 203 図 14
第 218 図 1

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

大友氏館跡の比定地は、これまで顕徳町周辺に推定されていたが詳細は不明のままであった。平成8年度に大分駅周辺総合整備事業に伴う代替地が顕徳町に計画された。同事業は大分駅と周辺J R線の高架・立体交差化、大分駅周辺の幹線道路整備、大分駅駐車場跡地等の活用を含む大分駅南土地区画整理事業などからなる大規模な都市計画事業であり、平成7年度に都市計画決定され、平成8年度から本格的に着手された。顕徳町3丁目では計画された代替地は、大分駅南土地区画整理事業地区の移転対象者を想定したものであり、17戸分の宅地と公園1箇所を含む宅地造成が予定されていた。これ以前、起業地には大分市の誘致により昭和36年（1961）に工場が建設され操業していたが、代替地事業に伴って平成8年に移転していた。

事業実施に先立つ平成7年度に、事業を主管する都市整備課駅南対策室（平成7年度、平成8年度から駅周辺総合整備課）から大分市教育委員会へ埋蔵文化財に関する照会があった。文化財課では、起業地が周辺の埋蔵文化財包蔵地「中世大友城下町跡」であること、大友氏館跡の比定地であることから、事業実施前の平成8年度中に確認調査を行うことにした。

確認調査は、平成8年10月14日から10月31日まで行い、対象面積5039㎡に5箇所のトレンチを設定して計550㎡を調査した。調査の結果、直径1mを超える大型の石が3点出土した。これらは一直線上に並んで検出されたこと、非常に大型の石であることから特に注意を惹いたものであったが、どのような遺構を構成するのは不明であった。しかし、大友氏館跡の比定地における初めての考古学的発掘調査において、これまでに例をみない遺構が発見されたことにより、大友氏館跡との関連を強く疑わせる結果を得たと言っている。この結果を受けて、次年度以降に改めて起業地全体を対象とする広範囲の確認調査を実施することとなった。

一方、平成8年度と9年度には、「中世大友城下町跡」における発掘調査（中世大友府内町跡第1次～第3次調査）が大分駅周辺総合整備事業に伴い行われ、推定されていた位置で大規模な道路跡とそれに面する町屋とみられる遺構が検出された。このような調査結果等により、「府内古図」にもとづく現地比定の正しさが改めて考古学的にも証明されることになり、同様に現地比定された大友氏館跡推定地についても、その蓋然性の高さが評価されるようになってきた。

これ以降、市・県が調査主体として当該地域で行われる各大規模事業に伴う発掘調査は、いずれもこの現地比定を参照しながら実施されていく中で、平成10年度に「大友氏館跡」の第1次調査が実施されることになるのである。

大友氏館跡第1次調査では、大きな掘り込み遺構の底部付近に大型の石が多数認められ、遺構の最深部を囲むように連続的に並べられ、遺構最深部には滞水の痕跡があり、調査区の東部付近に特に巨石が集中すること等から、国立歴史民俗博物館の小野正敏氏は戦国大名居館に伴う大規模な庭園遺構であると評価された。このように館1次調査、ほぼ同時に実施された館2次調査で、大友氏に関連する戦国大名居館跡に関連する可能性が高いと評価できる遺構が検出されることとなった。これらの結果を受け、大分市教育委員会は、文化庁および大分県教育委員会と遺跡の保存について協議を進めた結果、平成11年3月2日にこれら2調査地点について、国史跡として指定して遺跡を保存する方向性が文化庁より示されるに至った。その後、平成13年8月に正式に国史跡に指定された。

以上、大友氏館跡が国史跡になるまでの流れを述べたが、詳細は、本市教育委員会が2014年度に刊行した『大友氏館跡』1に、記載しているので、参照していただきたい。

第2節 調査組織

平成7年度以降、文化財課は大友氏館の発見から史跡指定、その後の継続的な確認調査・史跡追加指定・公有化といった事業を継続的に実施している。

大友氏館跡発見当初は、文化振興課文化財室であったが、組織改編の結果、平成12年度に文化財課へと変更された。それに伴い組織の拡充が行われ、平成28年度現在では、約60名の職員・嘱託職員が本市の文化財行政に携わっている。

第1表では、これまでに文化財課（歴史資料館職員も一部含まれる）に在籍し、大友氏遺跡及び本市の文化財行政に携わった職員をまとめている。

また、大分県教育委員会と大分市教育委員会で「中世大友城下町跡」という共通した遺跡の発掘調査をほぼ同時期に実施するにあたり、遺跡に対する共通理解・調査情報の共有を最大の目的として「大友調査指導者会」を立ち上げた。第2表には、大友関連の指導者会や委員会等で、発掘調査に係るご指導をいただいた方々を列記している。

調査組織は、本市教育委員会が2014年度に刊行した『大友氏館跡』1にも、詳細を記載しているので、参照していただきたい。

また調査中、底圖や底石石材に関することについての指導・助言を、以下の方々から頂いた（順不同・敬称略、第2表の指導者の方々を除く）。さらに下記以外の方々にも、行政関係者、大学関係者、考古学・文献史学専門者などたくさんの方々にご来跡頂き、ご教示を賜りました。ご芳名をすべて記載できませんでしたが、記して感謝申し上げます。

飛田範夫 服部英雄 鈴木誠 平澤毅 中島義晴 高橋知奈津 竹村恵二 野田雅之
（故）加藤允彦 （故）石井進

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 足立 一馬（～平成27年5月13日）
三浦 享二（平成27年5月14日～）

平成27年度 大友氏館跡発掘調査報告書刊行事業

【事務局】教育部文化財課

課 長	塔鼻 光司	参 事	長野 清尊
参 事	坪根 伸也	特別顧問	玉永 光洋
＜管理庶務担当班＞		＜史跡整備担当班＞	
主 査（グループリーダー）	首藤 敏行	参事補（グループリーダー）	斉藤 慎悟
主 査	竹中 智美	主 幹	安達 高治
主 任	朝川 貴俊	主 査	伊東 章浩
事 務 員	永野 雄介	主 査	佐藤 道文
		指導主事	岩本 浩典
		主 任	長 直信
		主 事	浅川 祥太
＜文化財保護担当班＞			
参事補（グループリーダー）	高畠 豊	主査(再)	時松 敬司
専 門 員	塩地 潤一	主 任	永松 正大
指導主事	植木 和美	主任(再)	稲葉 孝博

大分市歴史資料館

館 長	武富 雅宣	副 館 長	安東 俊昭	顧 問	讃岐 和夫
〈埋蔵文化財担当班 埋蔵文化財保存活用センター〉			〈学芸普及担当班〉		
参事補 (ぐふーリアーダー)	池邊千太郎	指導主事 (ぐふーリアーダー)	小野 富広		
参 事 補	河野 史郎 (～9月)	参 事 補	河野 史郎 (10月～)		
主 査	五十川雄也	主 査	高野 令子		
主 査	吉野 晃次 (10月～)	主 査	吉野 晃次 (～9月)		
主 事	松浦 憲治	専 門 員	中西 武尚		
事 務 員	小野 綾夏	指導主事	志賀 良史		
嘱 託	佐藤 里恵 (本報告書担当)	主査(再)	矢野 富幸		
		主 事	松岡 健太		

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 三浦 享二

平成 28 年度 大友氏館跡発掘調査報告書刊行事業

【事務局】教育部文化財課

課 長	塔鼻 光司	参 事	長野 清尊	参 事	坪根 伸也
参 事	栗田 博之	特別顧問	玉永 光洋		

〈管理庶務担当班〉

主 査 (ぐふーリアーダー)	首藤 敏行
主 任	大島 輝
主 事	永野 雄介
事 務 員	中山 美穂

〈史跡整備担当班〉

参事補 (ぐふーリアーダー)	吉田 達夫
主 幹	安達 高治
主 査	福岡 正二
主 査	佐藤 道文 (館28次調査担当)
主 査	長 直信 (館21次調査担当)
指導主事	岩本 浩典
主 事	新名 悠由

〈文化財保護担当班〉

参事補 (ぐふーリアーダー)	高畠 豊 (館1次調査担当)	主査(再)	時松 敬司
参 事 補	塩地 潤一	主 任	永松 正大
指導主事	植木 和美	主任(再)	稲葉 孝博

大分市歴史資料館

館 長	武富 雅宣	顧 問	讃岐 和夫
〈埋蔵文化財担当班 埋蔵文化財保存活用センター〉		〈学芸普及担当班〉	
参 事 (ぐふーリアーダー)	池邊千太郎	指導主事 (ぐふーリアーダー)	志賀 良史
主 査	五十川雄也 (館25・26・31～34次調査担当)	参 事 補	河野 史郎 (館3次調査担当)
		主 査	高野 令子
主 査	吉野 晃次	専 門 員	中西 武尚 (館12次調査担当)
主 事	松浦 憲治 (館29・30次調査担当)	主査(再)	久多羅岐明
		主 事	松岡 健太
主 事	小野 綾夏	主 事	河野 美穂
嘱 託	佐藤 里恵 (本報告書担当)		
臨 時	荒木 伴世 (本報告書補助)		

第1表 文化財課組織一覽表（平成27・28年度分は前ページ参照）

[illegible]

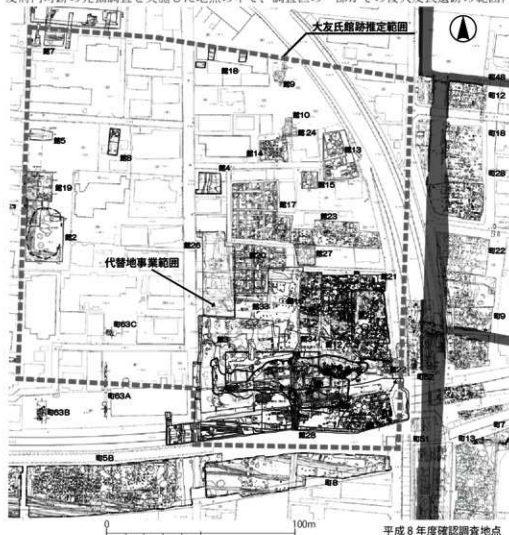
圖書一歷史資料組	管係—管理係	文系—文化財係	管普班—管理普及班
----------	--------	---------	-----------

第 2 表 調査指導者一覧表

氏名 (調査指導者氏名)	本中區	板橋区	西武池袋線	小野正樹	新川	仲藤	河原崎之	後藤	赤松	廣田	江崎	伊藤	水ノ江	金澤	青木	中井	内田
氏名 (調査指導者氏名)	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁	文化庁 文化庁 文化庁
平成10年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成11年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成12年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成13年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成14年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成15年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成16年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成17年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成18年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成19年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成20年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成21年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成22年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成23年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成24年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成25年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成26年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成27年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
平成28年度	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

第 3 節 庭園域の確認調査と報告範囲

大友氏館跡に関するこれまでの確認調査は、第 3 表に示すとおりで、平成 10 年度から庭園地点から始まり、平成 28 年度 9 月現在までで 34 地点に及ぶ。また第 3 表にも示すとおり、大友氏館跡の周辺に展開する中世大友府内町跡の発掘調査を実施した地点の中で、調査区の一部がその後大友氏遺跡の範囲内となったものが 9 地点存在する。



今回の庭園域で行う報告範囲は、第 3 表のアミカケ部分である。ただし第 16・21・25・26 次調査は、部分的に庭園域と中心建物域に亘る。第 III 章以降で扱う遺構配置図等では、これらの調査区について全てを示すが、個別土坑や溝跡等の中では、触れていない遺構も含まれており、詳細報告できなかった遺構に関しては、今後刊行を予定している中心建物域等の中で、取り扱う。

第 1 図 大友氏館跡調査地点位置図 (1/2000)

第3表 大友氏館訪問係発掘調査一覧表

「館」、大友氏館跡、「跡」、中世大友府内町跡の略

調査次数	地区	調査した大友館跡内外区分	調査理由	調査面積 (㎡)	調査期間	報告書	発行年
館1次	庭園域	内	大分県周辺総合整備事業	220	1998.07.21～1999.05.19	『報告書1』 『大友氏館跡2』	平成12年3月 平成23年1月
館2次	西側外郭付近	内	民間[マンション建設]	557	1998.11.04～1999.04.30	『報告書1』	平成12年3月
館3次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	173.16	1999.11.01～2000.03.31	『報告書1』 『大友氏館跡2』	平成12年3月 平成29年1月
館4次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	100	1999.12.15～2000.02.29	『報告書1』	平成13年3月
館5次	西側外郭・建物惣定域	内	重要遺跡確認調査	50	2000.01.06～2000.02.29	『報告書1』	平成13年3月
館6次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	283	2000.05.06～2001.03.30	『報告書2』	平成13年3月
館7次	北西外郭域	内	重要遺跡確認調査	121	2000.07.13～2001.03.30	『報告書2』 『大友氏館跡1』	平成13年3月 平成27年3月
館8次	西側建物惣定域	内	重要遺跡確認調査	60	2000.08.29～2001.03.30	『報告書2』	平成13年3月
館9次	北東外郭域	内	重要遺跡確認調査	6.5	2000.02.08～2001.03.30	『報告書2』 『大友氏館跡1』	平成13年3月 平成27年3月
館10次	北側建物惣定域	内	重要遺跡確認調査	75	2001.12.10～2002.03.01	市内遺跡情報2001年度	平成14年3月
館11次	中央部	内	重要遺跡確認調査	48.5	2001.12.13～2002.03.04	市内遺跡情報2001年度	平成14年3月
館12次	南東部・庭園跡北	内	重要遺跡確認調査	550	2002.05.14～2003.01.27	市内遺跡情報2002年度 『大友氏館跡2』	平成15年3月 平成29年1月
館13次	北東建物惣定域	内	重要遺跡確認調査	486	2003.11.17～2004.03.31	市内遺跡情報2002年度	平成15年3月
館14次	北東建物惣定域	内	重要遺跡確認調査	150	2004.12.15～2005.03.18	市内遺跡情報2003年度	平成16年3月
館15次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	70	2004.02.17～2005.03.18	市内遺跡情報2003年度	平成16年3月
館16次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	320	2004.05.17～2006.03.29	市内遺跡情報2005年度	平成18年3月
館17次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	700	2005.05.11～2007.03.29	市内遺跡情報2005年度 市内遺跡情報2006年度 市内遺跡情報2007年度	平成18年3月 平成19年3月 平成20年3月
館18次	北側外郭域	内	重要遺跡確認調査	60	2005.12.06～2006.03.24	『報告書2005年度』 『大友氏館跡1』	平成18年3月 平成27年3月
館19次	西側外郭・建物惣定域	内	重要遺跡確認調査	419	2006.06.28～2007.03.29	市内遺跡情報2006年度	平成19年3月
館20次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	650	2007.07.25～2007.11.17	市内遺跡情報2007年度	平成20年3月
館21次	中心建物前面域	内	重要遺跡確認調査	523	2008.05.26～2008.08.26	市内遺跡情報2008年度	平成21年3月
館22次	東外郭域	内	重要遺跡確認調査	204.2	2009.10.01～2009.12.26	『報告書2009～2010年度』 『大友氏館跡1』	平成23年3月 平成27年3月
館23次	中心建物域～前面域	内	重要遺跡確認調査	540	2010.09.13～2010.11.10	市内遺跡情報2009～2010年度	平成23年3月
館24次	北東建物惣定域	内	重要遺跡確認調査	28	2011.01.11～2011.01.21	市内遺跡情報2011年度	平成24年3月
館25次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	498.1	2011.05.27～2011.08.19	市内遺跡情報2011年度 『大友氏館跡2』	平成24年3月 平成29年1月
館26次	中心建物域	内	重要遺跡確認調査	754.4	2011.10.24～2012.02.10	市内遺跡情報2011年度	平成24年3月
館27次	中心建物前面域	内	重要遺跡確認調査	110.4	2011.09.27～2012.02.10	市内遺跡情報2011年度	平成24年3月
館28次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	1880.6	2012.09.14～2013.02.27	『大友氏館跡1』	平成29年1月
館29次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	1567	2013.05.27～2014.03.26	『大友氏館跡1』	平成29年1月
館30次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	506.1	2014.01.17～2014.03.14	『大友氏館跡2』	平成29年1月
館31次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	3074.5	2014.05.09～2015.03.13	『大友氏館跡1』	平成29年1月
館32次	庭園域～南外郭域	内	重要遺跡確認調査	407.9	2015.02.04～2015.03.20	『大友氏館跡1』	平成29年1月
館33次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	5200	2015.06.03～2016.03.15	『大友氏館跡2』	平成29年1月
館34次	庭園域	内	重要遺跡確認調査	5740	2016.06.24～2016.11.10	『大友氏館跡1』	平成29年1月
町63次A区	南外郭	内	重要遺跡確認調査	20	2006.06.06～2007.02.23	市内遺跡情報2006年度	平成19年3月
町63次C区	西側建物惣定域	内	重要遺跡確認調査	38	2006.06.06～2007.02.23	市内遺跡情報2006年度	平成19年3月
町56次	西端	外	重要遺跡確認調査	76	2005.06.01～2005.06.30	市内遺跡情報2005年度	平成19年3月
町66次	西端	外	重要遺跡確認調査	48	2006.01.16～2006.03.29	市内遺跡情報2006年度	平成19年3月
町52	館外東側	内 一部外	国選10号古国府址幅事業	1000	2005.04～2005.12	『豊後府内13』	平成22年3月
町12	館外東側	内 一部外	国選10号古国府址幅事業	700	2001.05～2002.03	『豊後府内4』 (1分冊)	平成18年3月
町91次	館外東側	内 一部外	国選10号古国府址幅事業	240	2010.08.30～2010.10.25	『豊後府内18』	平成25年3月
町18(西)	館外東側	内 一部外	国選10号古国府址幅事業	450	2001.11～2002.03	『豊後府内4』 (1分冊)	平成18年3月
町92次	館外東側	内 一部外	国選10号古国府址幅事業	644	2010.04.23～2010.11.30	『豊後府内18』	平成25年3月
町93次	館外東側	内 一部外	国選10号古国府址幅事業	93	2012.07.10～2012.09.11	『豊後府内18』	平成25年3月
町118次	館北西外郭	外	重要遺跡確認調査	10.0	2016.02.03～2016.02.05	(大分市市蔵文化財調査報告書第2016)	平成28年12月予定

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

(1) 大分川下流域の沖積化と遺跡の形成

大分市を流れる二大河川の一つ大分川は、その源を由布市由布岳（標高 1,584 m）に発し、湯布院盆地を通過し、阿蘇野川、芹川、さらに七瀬川と合流する。大分川は、大分市の宮崎の北で今津留川・裏川を分流して別府湾に注ぎ、総延長 55km を測る河川である。大友氏館跡を中心とする中世大友府内町跡は、この下流の左岸に形成された標高 4～6 m 前後の沖積地に立地している。東側を大分川が北流し、北側に別府湾を臨み、南側の上野台地は標高約 30～40 m あり、その西側には標高 628 m の高崎山方向へ標高 80～100 m の台地が続いている。

人々をとりまく自然環境は、現在においても変化しつづける。過去における人々の活動と自然環境とのかかわりについては、単に現在の自然環境について知るだけではなく、過去のそれぞれの時代について古環境の復原を行うことが必要となる。大分川の平野部は、雄城台や城南・森岡などの阿蘇カルデラ形成にともなう阿蘇火砕流堆積面がみられるものの、大分川に由来する更新世段丘面と沖積平野に大別でき、更新世段丘面に対し、完新世になって形成されたのが沖積平野面である。こうした沖積平野は、扇状地帯と三角州帯のすくなくとも二つの地形帯と完新世段丘Ⅰ面（高位面Ⅰ）、完新世段丘Ⅱ面（低地面Ⅱ）、現犯瀬原の三つの地形帯とに分けられ、三角州帯は今から約 7300 年の温暖期に海進が生じた時に海域となった範囲が、後に河川の搬出する土砂によって陸化した範囲にあたる。従来、段丘は更新世に形成され、現在は侵食段階にある古い平野をさす言葉であったが、近年の研究では少なくとも二面以上の完新世に段丘化した地形面の存在が知られるようになった。これらのうち、残存状態がよく各地で確認されるものに、完新世段丘Ⅰ面とⅡ面があり、基本的にはⅠ面は、弥生時代の前期末～中期初頭に河床低下が生じて段丘化した地形である。当時、浅い海域や潟湖であったところは、河川がしばしば氾濫をくり返すこととなり、三角州帯が急速に形成されていった。Ⅱ面は、古代末～中世初頭に段丘化が考えられており、現犯瀬原は完新世段丘Ⅱ面を段丘化させた河床低下によって段丘座の下となったところである（高橋学・足立みなみ 1999・高橋学 2005）。

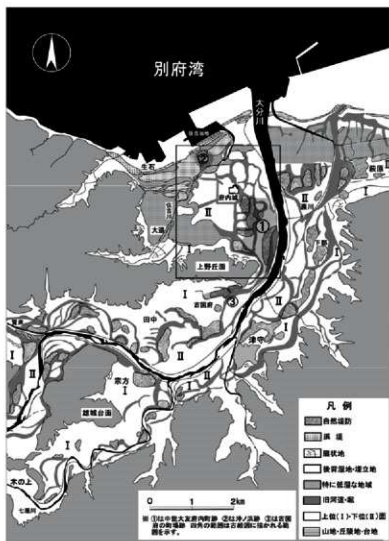
大分平野は、縄文海進最盛期には雄城台から国分の付近まで古大分湾が進入しており、遺跡分布状況をみると、旧石器や縄文時代早・前期の遺跡は、更新世段丘面や段丘下の汽水域周辺のみに確認されるが、その後の海



第2図 大友氏館跡の位置図

退にともなう河川の沖積地化によって、沖積地低地帯（完新世Ⅰ面）にも縄文時代中期以降の遺跡が形成されており、人々の活動範囲が飛躍的に広がっていったことがわかる。

その中で、大分川の両岸の完新世段丘Ⅰ・Ⅱ面には土地割地名や旧河道、自然堤防、後背湿地などの微地形が認められるが、Ⅱ面には縄文時代晩期以前の遺跡の形成が確認されず、Ⅰ面に比べⅡ面の開発はおくれて始まっている。これは、河床低下による段丘化の差によるものと考えられる。Ⅰ面（段丘面と自然堤防の地形帯）には、縄文中～晩期・弥生・古墳・古代・中世以降の集落・墓地・生産地関連などの遺跡が数多く形成されており、とくに、下部の弥生時代後期の環濠をもつ拠点集落や古国府や下部の7～9世紀の古代前半に至る官衙及び関連遺跡、古代末～中世初期と考えられる古国府周辺及び宗方、玉沢付近の共通



第3図 大分川下流域の沖積低地の地形分類図
(『大分市史』上巻 1987 年より)

年の発掘調査より7世紀を中心とした地方官衙に関係する大型建物跡が確認されている。このように石室墳と官衙的な遺跡が集中する状況は市内の他の地域にはみられず、当地が7世紀代における政治の中心地であったことを示している。

8世紀になると、上野台地の東端部に位置する上野遺跡群では、国府に付随した国司館跡と推定される竜王畑遺跡や、基壇と礎石を有した古代寺院の跡である上野庵寺が建立されている。また台地の東斜面には平安時代末期に元町石仏が造営されるなど、上野台地の東端部は古代における豊後国の中心地であった。しかしながら、豊後国府の正確な位置は、「古国府」地名が上野台地の南側に残っているものの不明である。

鎌倉時代になると、大友氏が豊後国拝領にともない、3代頼泰の頃、豊後国へ下向してくるとされるが、この中世大友府内町跡が造られる地域の前段階の古い記録として「宇佐神領大鑑」があり、11世紀代である天喜元年(1053)、康平2年(1059)、承保4年(1077)の文書に「勝津留島」として登場する。このうち、天喜元年の文書によると勝津留島の西の限りは「高国府」とされ、現在の上野台地東端部付近と推定されている。また、同じ文書の中には「東限北廻り、二方市河」の記述もあり、11世紀中頃は「大分川が市河と呼ばれていたこと、この段階にすでに大分川沿いで河原市が立っていたことが想定され、中世「府内」の初源的な姿と考えられている。その後、徳治元年(1306)の万寿寺の創建が起点となって、大分川左岸の沖積地上、現在の元町から長浜にかけて都市的な景観が次第に形成されていくことが発掘調査からも確認されており、室町時代の14世紀後半頃に

方位(N-13°-W)をもつ条里型割など豊後国中枢部の形成にかかわる重要な遺跡が成立している。

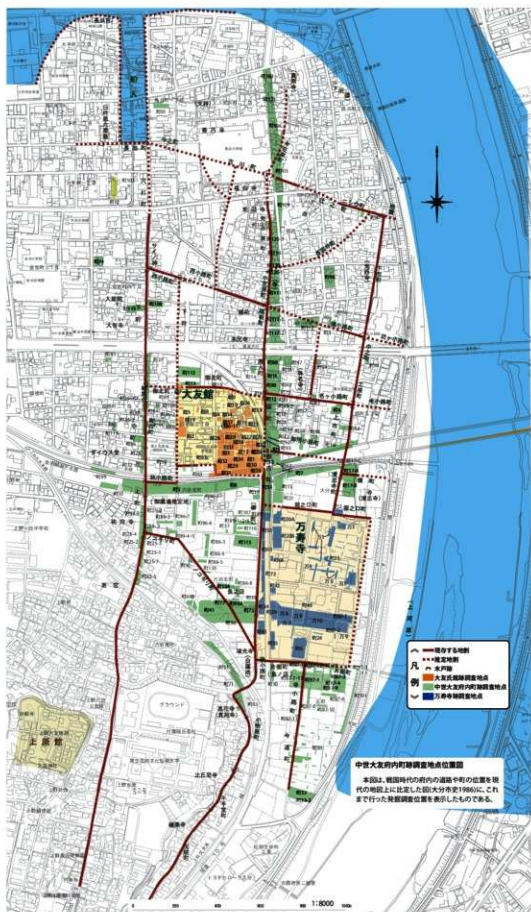
第2節 歴史的環境

歴史的環境については、本市教育委員会が2015年に刊行した『大友氏館跡1』に詳細を記載しており、ここでは簡略化したものを述べる。

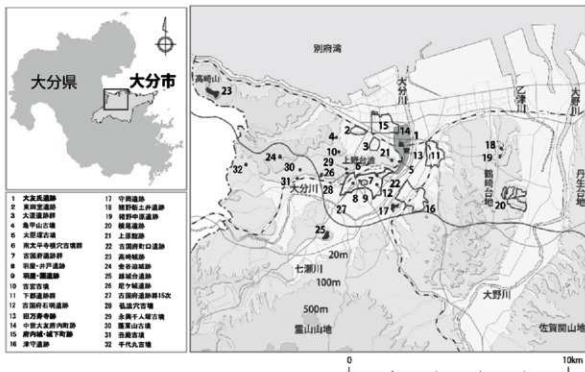
大分川の河口に近い左岸地域では、古くは縄文時代後期や弥生時代の遺跡が多く確認されている。

古墳時代は、4世紀代とされる三角縁神獣鏡が出土したとされる亀甲山古墳、5世紀代は上野台地東端に前方後円墳とされる大臣塚古墳が築造される。

古墳時代後期から7世紀になると、上野台地の周辺には重要な遺跡が集中してみられるようになる。上野台地の南方に位置する永興地区付近では、古墳時代の後半から7世紀にかけて巨石を用いた横穴式石室墳が、集中して形成されている。そのひとつである弘法穴古墳は、当地を治めた大分国造に関わる古墳の可能性が高い。古国府遺跡群の西部では、近年



第4図 大友氏遺跡・中世大友府内町跡調査地点位置図(1/8000)



第5図 大分市内の道路分布図

は顕徳町付近に大友館が設けられ、以後、大友氏が除国されるまでの間、政治・経済・文化・交易に関わる諸機能を備えた、豊後国の中心都市として発展していく。

戦国時代の府内は、遺構・遺物が質・量ともに最大化し、21代大友宗麟の頃、史実に示される南蛮貿易の推進により繁栄した府内の姿へと発展する。「府内古図」に描かれた豊後府内の中心は南北4本、東西5本の道路が整備され、東西0.7km、南北2.1kmの広がりがあったと考えられ、整然と区画された道路に沿って町屋が立ち並び、方二町の大友館内部には巨大庭園が造営されるなど、遺跡の面からも最盛期を迎えることがわかっていく。この頃の府内の町の姿は、武家地と商家が混在する「洛中洛外図屏風」に描かれる戦国時代の京都の町に似たものであったと考えられる。特に豊後府内は、他の戦国都市にはみられない中国・朝鮮半島・東南アジア地域との貿易により繁栄した「国際貿易都市」、「戦国大名の館を中心に発展したまち」という二つの性格を併せ持った特性を有している。また、キリスト教宣教師の報告をはじめとする海外の文献史料が多く残る点も大きな特徴であり、全国に先駆けて東洋文化と西洋文化の出会いの場となり、独特の南蛮文化を育んだ地であることを詳細に窺い知ることができる。

しかし、繁栄を誇った豊後府内は天正14年(1586)の島津軍の豊後侵攻により灰燼に帰し、町は部分的に復興するが、大友館は元の場所に再建されることはなかった。その後、豊臣秀吉により22代当主大友吉統は豊後国を除国され、大友氏による豊後国の統治は終焉を迎えた。その後、中世大友府内町跡の北西に、府内町府内城下町が築城され、1602年頃に新城下町へ都市機能が移転したことで、中世の豊後府内は完全に終焉を迎えた。大分県下最大の商都として繁栄した現在の大分市中心部は、この近世城下町を踏襲したものである。

第4表 大友氏関連年表1

	当主	大友氏・府内 関連事項	国内・国外の出来事
平安時代		11世紀半ば 「藤原」の形成 1053 [文永元] 「高田」市河の呼称 1059 [康平2] 1077 [承保4] 田中寺・市河の記載 1172 [承安2] このころ大友家源流生。	1156 [保元元] 保元の乱 1159 [平治元] 平治の乱 1167 [仁安2] 平清盛 太政大臣となる。 1185 [文治元] 平氏滅亡。
	能直 (初代)	1196 [建久7] 大友能直。豊前・豊後両国守護職。鎮西奉行に任ぜられる。	1192 [建久3] 源頼朝征夷大將軍となる。 1195 [建久6] 東大寺大仏殿再建される。
鎌倉時代	親秀 (2代)	1219 [承久元] 2代親秀。豊前・豊後両国守護職及び鎮西奉行等諸職を兼ね。 1221 [承久3] 承久の乱が起こり、大友親秀、幕府軍に攻め京都に攻め上る。 1223 [貞応2] 能直、京都で幸し。嫡子親秀が継ぐ。	1221 [承久3] 承久の乱。六波羅探題の設置
	頼泰 (3代)	1234 [文應元] 「向中」初見 1236 [嘉祿2] 大友親秀。豊後国守護職。所領を嫡子頼泰に譲る。 1242 [仁治3] 1.15「新編成敗状」 2.18 大友頼泰守護職に任ぜられる。	1232 [貞永元] 御成敗式目制定 1271年 モンゴロ、国号を元とする。 1272 [文永9] 蒙古襲来につき、九州の御家人下向。筑前国に下向。 1274 [文永11] 文永の役
	親時 (4代)	1274 [文永11] 豊後國守。大友親時。豊後國守職を兼ねて戦功博多で戦う。	1279年 元、中国統一
	貞親 (5代)	1285 [弘安8] 大友親時。「豊後國守」を幕府に注進する。 1299 [正安元] 鎮西引渡衆がおかれ、大友貞親は三善となる。 1306 [康治元] 大友貞親。臨濟宗万寿寺を創建し、豊前警役を以て開山とする。	1281 [弘安4] 弘安の役 1297 [永仁5] 幕府、徳政令を發す。
	貞宗 (6代)	1333 [元弘3] 大友貞宗。少弐・島津と共に九州探題北条時宗を攻める。	1324 [正申元] 正中の變 1331 [元弘元] 元弘の變 1333 [元弘3] 鎌倉幕府滅亡
	氏泰 (7代)	6代貞宗。所領諸職 (守護職別五職 (色行職) 並所領等) を7代氏泰に譲り、嫡子幸隆親政に改める。 後醍醐天皇より博多近江評議。	1334 [建武元] 建武の新政
	氏時 (8代)	1335 [建武2] 大友氏時。京都に就いて戦死。 1336 [建武元] 大友氏時。京都に就いて戦死。 豊後、尊氏に就いて九州に下る。 1341 [應永4] 大友氏時が福光寺建立。 1344 [興國3] この頃、大友貞宗の子貞親・貞宗は南朝方、氏泰・氏時は北朝方の両派に分かれるなど内訌合戦状態にある。 1351 [正平6] 大友氏時・田原重忠・竹田津之助ら尊氏に南朝に下るに攻め南朝に入る。 1352 [正平7] 大友氏時ら豊後武士の多くは、尊氏が北朝に帰順するに攻め北朝に入る。 1355 [文和4] 後醍醐王・新田氏豊後府内に入り、大友を下す。 「吉田」初見 1357 [延文2] 大友氏時。高崎城を築く (伝承) これに拠る。 1359 [正平14] 後醍醐王。菊池氏を幸い豊後に入る。 1361 [康安元] 九州探題波島氏経。大友氏時にむかえられ豊後府中に入り高崎城に入る。 1362 [正平17] 菊池武光。豊後府中に入城。 1363 [正平18] 大友氏時。足利直義より筑後国守護職に補任。	1336 [正慶3] 南北朝の対立がはじまる。 1338 [建武元] 足利尊氏が征夷大將軍になる。 1342 [康永元] 室町幕府が山十利を定める。 1348 [正平3] 征西將軍直義氏経。豊後府より肥後國菊池に入る。
	氏継 (9代)	1371 [建徳2] 今川了俊の子義親。豊後國高崎城に入る。 1372 [文中1] 菊池武光。豊後高崎城を攻撃。 この頃、大友氏時は南朝方となり、南朝方は北朝方となる。 1379 [天授5] 足利義満。大友氏時に所領・所職を將軍義満に注進する。 1381 [弘和3] 大友親時。国々散在の所領・所職を將軍義満に注進する。 義満。親時の本領・新田地等を安堵する。 1387 [應永元] 大友時。南朝後醍醐天皇より開かれる。	1368年 明建國 1370 [建徳元] 今川了俊。九州探題となる。
	親世 (10代)	1394 [応永元] 大友親世。豊後守護職を安堵される。 1398 [応永5] 大友親世。大内義隆とともに菊池氏を八代に下し、その功により、のちに鎮西奉行となる。	1397 [応永4] 將軍足利義満が金閣寺をつくる。 1399 [応永6] 応永の乱。大内義隆、幕府に滅ぼされる。

・市川義典 1990 「大友氏関係年表」『豊後大友一族』新人物往来社
・大分県史編纂委員会 1987 「大分市の歴史年表」『大分市史』中巻 等より作成

第5表 大友氏関連年表2

第2章	室町時代	当主 年号は家督継承年 (一部推定含む)	大友氏・府内 関連事項	国内・国外の出来事
第2章	室町時代	1401年 親著 (11代)	1404〔応永11〕大友親著「尊日」部制。 1416〔応永23〕大友親著、豊後国・筑後国の守護職に補任される。 1418〔応永25〕大友親著、府内の前目にて死去。 1423〔応永30〕大友親著、所領所職を大友持直に譲る。 1425〔応永32〕大友親著の子孫、大分郡三角島にて乱をおこす。 1429〔永享元〕朝鮮貿易開始する(7回)。 1431〔永享3〕大友持直、少元直ととも大内盛氏を筑前惣土郎に敗死させる。 1432〔永享4〕大友氏と大内氏の戦い始まる。幕府、持直の守護職を没収。 豊後国守護職には大友親範が任ぜられたといわれる。	1401〔応永前〕自明貿易開始する。
		1431～32年 親綱 (13代)	1439〔永享11〕この頃、大友親範、家督を持直の弟親綱に譲る。 1444〔文安元〕大友親範、豊後国守護職補任。親範、大内政弘と戦う。 1451〔宝徳3〕第11次通判船の6号船として大友船出帆。 1462〔寛正3〕大友政親、府事兼向より豊後国、筑後国の守護職を安堵される。 1465〔寛正6〕大友親範、筑後国守護職に補任される。	1441〔嘉吉元〕嘉吉の乱。将軍足利義満が、赤松満高に殺害される。
		1464年 親綱 (14代)	1465〔文明初〕大友親範、細川勝元の家事に巻き、大内政弘と戦う。 1470〔文明8〕豊前守護。 1484〔文明16〕大友政親、家督を嫡子親綱(材綱・義右)に譲る。 1494〔明応3〕大友材綱、将軍足利義満より編纂「龍」字を許され義右と改称。 1496〔明応5〕大友政親・義右父子、不和により義右殺害される。 政親の弟親治、跡を継ぎ、宗家を再興。	1467〔応仁元〕応仁の乱始まる。 1471〔文明3〕博多統治・大友親東兵衛 6000 余戸 少元親南兵衛 4000 余戸 1477〔文明9〕応仁の乱終わる。
		1496年 親治 (18代)	1501〔文亀元〕幕府、九州探題所在地を大友親綱に与え、大内義興の討伐を命じる。 幕府、親治の謀りにより豊後・豊前・筑後国守護職以下の所領を義興(義右)に没収。 1515〔永正12〕義長の「毒矢」斬断。 1516〔永正13〕杵築郡の反乱。 1518〔永正15〕大友義長、死去。親安(義盛)が跡を継ぐ。杵築郡の乱を収拾する。 1525〔大永5〕大内義興、尼子経久の戦いに、大友義長は義興に援軍を送る。 1527〔大永7〕海防御成敗始まる。海防義武と通じ大友義興に付き、臼杵長原に攻め滅ぼされる。 1534〔天文3〕大友義盛、速見親頼等々大内義隆の軍と戦う。 1536～37〔天文5-6〕堺・三好氏の進軍に巻き込まれる。 1538〔天文7〕大友義盛、大内義隆と和す。 1545〔天文14〕このころ、初めにポルトガル人が府内を訪れる。 大友義盛、彦州館を建造。 1550〔天文19〕二階崩れの家が發生。義盛病死。義興、乱を平定し、跡を継ぐ。 1551〔天文20〕ポルトガル船(ドアルド・マダモス)沖ノ島に上陸。 ザビエル府内訪問。(見聞所は大友親綱) 1552〔天文21〕カゴ神父沖ノ島に上陸。一方田原親相らの反乱。 大友晴英、大内氏を継ぎ義長と改める。 1553〔天文22〕府内教会建立。 1554〔天文23〕大友義興、肥前国守護職に補任。 1555〔弘治元〕ルイス・アルメイダ、府内に普賢院を建て、 1556〔弘治2〕小原康元の乱おこる。 義興、海部郡臼杵に丹生島城を置き、移る。 1555～56〔弘治元-2〕藤原勘(「日本一統」著者 1560年代)来府。 1557〔弘治3〕毛利元就、大内義隆滅ぼす。 ルイス・アルメイダ、府内に普賢院を建て、(義興、合掌を寄進) 義興、府事兼向より豊前・筑前・筑後国守護職に補任され、 1559〔永禄2〕九州北部々地方の守護を兼ねる。九州探題職と大内家家督を得る。 1560〔永禄3〕義興、「左衛門督」に任じられる。 1561〔永禄4〕義興、毛利方の内府城を攻め、大敗す。 1562〔永禄5〕義興新領し、宗廟と号す。 1571〔元龜2〕大友義、赤松親賢にて毛利軍と戦う。 1573〔天正元〕宗廟、家督を子義興に譲る。 1578〔永禄6〕宗廟、日向国に出立。子持親綱を討つ。同年日祥にて洗礼を受ける。 宗廟、日向国高城にて島津重豪と戦い大敗(耳川の合戦)。 「ワシリー・」島津府内に到着。自祥にて日蓮に歸す。 「ワシリー・」日祥に「ワシリー・」(後援)を認所。 1581〔天正9〕府内にコレジオ(学院)開設。 1582〔天正10〕伊東マシヨウ少少使節、長崎を出帆。 1586〔天正14〕宗廟、上坂し豊前吉吉に援軍を求める。 島津軍、日向国。肥後国方面から豊後国に攻め入る。 戸次氏の戦いで、長宗我部親興敗死。島津軍府内に侵入、府内焼失。 秀吉の軍が九州に入り、島津軍退く。 秀吉、義興に豊後国を与える。宗廟には日向国を与えるが、 宗廟辞退。その後宗廟、津久見にて卒す。 1588〔天正16〕大友義、秀吉より「龍」字を受けて吉松に改称。 1592〔文禄元〕大友軍 6000、朝鮮半島へ。 1593〔文禄2〕吉松、朝鮮の役による需を問われ改称。豊後国は秀吉の戦入地へ。 1594〔文禄3〕早川長敏入府。上原館を修築して使用。 1596〔慶長元〕豊後国に大地蔵あり、沖ノ島が海中に没す。 1597〔慶長2〕福原重高入府。 1600〔慶長5〕関ヶ原の戦いおこる。 大友義興は、西暦につき、石垣原にて黒田直高と戦い大敗。 1599～1600〔慶長4-5〕府内城・新館下町建設(福原→早川) 1602～5〔慶長7-9〕竹中重利より府内城完成。→府内町を移転。 1603〔慶安3〕道 初瀬井路の開削。	1501〔天文20〕大内義隆、海防職に補任される。 織田信長家督を継ぐ。 1551〔天文20〕大内義隆、海防職に補任される。 織田信長家督を継ぐ。 1560〔永禄3〕横狭間の戦い。 1567〔天正20〕信長、美濃攻め、岐阜を本拠とする。 宗廟、信長に「普賢院」を建てる。 1568〔天正21〕信長、星加波島を幸じ、上洛。 義興が15代将軍とする。 1571〔元龜2〕毛利元就死去。 1573〔天正元〕室町義興、滅亡する。 1576〔天正3〕信長、安土城を築造する。 1582〔天正10〕信長、本能寺の变にて死去。 1585〔天正13〕豊前吉吉、関白となる。 1587〔天正15〕伏見通放免を出す。 1590〔天正17〕秀吉、全国平定。 1592〔文禄元〕文禄の役。 1593〔文禄3〕太閤様地。 1597〔慶長2〕慶長の役。 1604年 明滅亡。
		1484年 義右 (17代)		
		1496年 親治 (18代)		
		1501年 義長 (19代)		
		1515年 義盛 (20代)		
		1550年 義綱 (21代)		
		1571年 義統 (22代)		
		1593年 大友氏豊後降参		
		江戸時代		

第3節 大友氏館跡の変遷

ここでは、大友氏館跡の遺構変遷を提示するが、本市教育委員会が2015年に刊行した『大友氏館跡1』の第Ⅱ章第3節をほぼ引用している。そのため、本報告書の第Ⅱ章第3節の文中に出てくる「第○章第○節」は、本報告書のものではなく、『大友氏館跡1』のものである。

大友氏館跡はおよそ200年近くの間、同一の地点で連続して遺構が展開することから、遺構の形成自体も非常に流動的なものである。これらの流動的な遺構群を土器変遷に照らして検討する方法が一般的であるが、土器変化の画期と館内部の構造変化が必ずしも連動しているとも限らない。よって遺跡の変遷については、第Ⅲ章2節及び第Ⅳ章第1節に示す土器変遷案を根拠とするやや時期幅を持たせた「遺構の様相変化」を基準に大きく「Ⅰ～Ⅵ期」に区分している。また、遺物の分類名についても大友氏館跡1第Ⅲ章第2節で示したものに依拠している。

以下の変遷の概要は、『大分市市内遺跡確認調査概報2012年度』において述べたものをベースに（大分市教育委員会2012）、館28次調査の成果及び第Ⅳ章に示す基準資料の検討結果を反映させ若干加筆修正したものである。説明の都合上、各時期の遺構の分布位置については、方二町（約200m四方）の大友館（Ⅴ期）の範囲を基準に記述する。また、変遷図には大友氏館跡に近接する中世大友府内町跡の調査成果（大分県教育庁埋文センター2005～2010）も加えた。なお、既存の概報で示した遺構種別の内、いくつかについては種別を改めたものがある。対象表は『大友氏館跡1』第Ⅳ章第2節表に記しているので参照いただきたい。

Ⅰ期：14世紀後半～15世紀前葉（第6・7図）

館南東部：12・21次周辺では、「灰褐色土」とする面的な整地が行われ、この上面より7尺基準で造られた主軸を約3°東に振る規格性の高い掘立柱建物（12SB035・145・050）が配置される。また、6m北側では8尺基準で造られた主軸を5°東に振る掘立柱建物（21SB140）が形成される。建物の周囲には多重の土師器を廃棄した溝跡（12SD030・060）や土師器廃棄土坑（25SK030・050）を確認できる。また、館南東隅部にも掘立柱建物や、土師器廃棄土坑（28SK070）が形成される。なお、上記の建物や溝が埋没後、約2°度東に振る掘立柱建物（12SB045）や東西方向の柵（12SA165）、南北方向の柵（12SA150）が形成される（第7図）。

館南東端部：町52次のSX073は門の可能性が指摘される遺構で、方形土坑内に1.8mの間隔で柱穴が1対確認されている。



第6図 Ⅰ期（14世紀後半～15世紀前葉）の遺構（1/2000）



第7図 館12・21・25次1期の建物遺構変遷(1/1000)

る。もしくは、周囲の都市設計の基準となる街路側溝などの施設の可能性がある。

館南側：建物群より50～60m南側の町8次では、幅2.6～3.8m、深さ0.9～1.8mで断面「V」字に掘削された東西方向の溝（町8SD101）が50m以上にわたって掘削されており、防衛性の高い区画施設と考えられる。掘立柱建物群とは主軸を異にするが、建物群の南限を考える上で重要な遺構である。

II期：15世紀中葉～15世紀後葉（第8図）

館中央部～東側：20・17・16次にかけて「暗灰黒色土」とした広範な盛土整地が行われ、この上面には礎盤石を伴う掘立柱建物跡や土器集中遺構が形成される。断片的な調査のため建物配置は不明であるが、整地範囲は、東西30m以上、南北65m以上、厚さは0.7m以上となる大規模なものである。この整地土中には、第III期第4段階頃の東播系片口鉢や中世4期の備前焼播鉢、象灰青磁碗、大内Ⅱ式の特徴を有する大内A式土師器などが含まれている。

III期以降の整地も、基本的にはこの整地の範囲内で行われており、盛土整地の範囲は、明治時代の地籍図に残る2つの方形地割に重複する可能性がある。その後の遺構形成に影響を与える地業として、館変遷上の大きな画期といえる。

館中央部の北東部分：13次調査地点において7+αm規模の掘り込み地業（13SX048・SX050）が形成される。13SX050には大内Ⅱ式の大内A式土師器が含まれている。

館の東側では土器集中遺構が多く確認できる（20SX205・290、17SX090、23SX020、16SX001・002・15SX005）。これらの遺構の分布域はこの段階の整地範囲に重なるものも多いため整地時の祭祀などに伴うものと考えられる。

館南東部：幅2.6～3.8m、深さ約0.9mで断面逆台形に掘削された東西方向の溝（町28SD005）が60m以上にわたって確認される。埋土からは大内A式土師器が出土しており当該期に埋没したと考えられる。当該期の施設を囲む南外郭と考えられる。

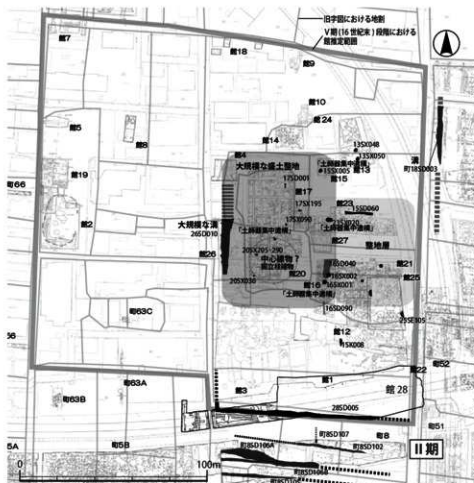
III-1期：15世紀末葉～16世紀初葉（第9図）

北東部：13次で土師器廃棄土坑が形成される（13SK010・SK025など）。近接する14次では1°～3°東に振る掘立柱建物（14SB030・SB040）や東西方向の柵（14SA035）が形成される。

館中心部：17・20次調査地点では、II期の整地層上面を浅く掘り込む整地が行われたようで、周囲には廃棄土坑（20SK055）祭祀的な大型土坑（17SK190）が展開する。この段階もトレンチ内での調査のため、明確な

館北西部：建物群の北西方向にある町18次西区では、幅1.6～2.7m、深さ1.0～1.2mの多数の瓦が出土する南北溝SD001や、この溝を切って幅1.8～2.6m、深さ2.0～2.2mの断面V字形の南北溝SD003が存在する。

これらの南北方向の溝の機能は不明であるが、規模や溝の方向性から、上記の建物群を区画す



第8図 II期(15世紀中葉～後葉)の遺構(1/2000)

建物は不明であるが、20次調査地点では、礎盤石をもつ柱穴や礎石の可能性のある方形の石材を確認している。

掘り込み整地中心部では土坑等の遺構が確認出来ないことから、掘り込み整地中央部には中心的な建物が展開した可能性が高い。この掘り込み整地の東側では、東西17m、南北1.8～2.2m、深さ0.8m以上的大型土坑(23SK005)が形成される。

館中央南側：3次調査地点では、大きな掘り込みを伴う池状遺構が確認されるが、この段階の池状遺構の規模等の詳細は不明である。

また、庭園想定部分南側では東西溝(28SD025)が形成される。

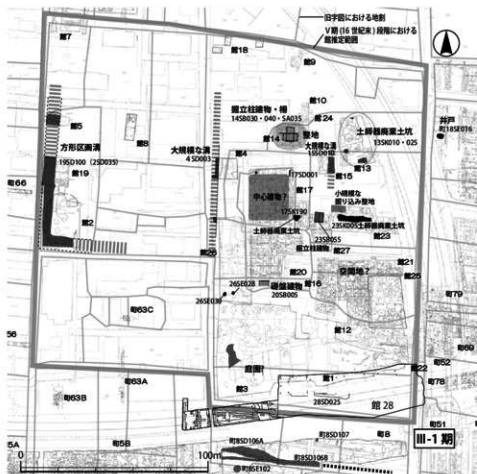
館西側：2・5・19次調査地点では、この時期に幅約6.2m、深さ1.4mの断面台形状に掘削された「L」字に曲がる大規模な方形区画溝(19SD100=2SD035)や、館中央の4次調査では、幅4m+ α 、深さ2mの南北溝(4SD003)や、幅3.5m、深さ2.3mの断面V字状の南北溝(15SD010)が掘削されたと考えられ、規模の大きい複数の溝が廻る景観へと大きく変化する。これらの溝の分布から、館の北西地区や東側において溝に囲まれた方形の空間を想定できる。

III-2期：16世紀前葉(第10図)

館西部：III-1期に構築された大規模な方形区画溝(19SD100=2SD035)は土師器皿Cを含む層により埋没し、上部には東西溝(2SD030)が形成される。埋没した溝の内側には土師器の埋納遺構(19SX040)などが確認されている。

館中央部：南北溝(4SD003)もこの頃に埋没したと考えられるが、次段階にかけて再び幅0.6m+ α 、深さ0.7mの南北方向の溝の可能性のある遺構(4SD006)が掘削されている。同じく50m東側に位置する南北溝(15SD010)もこの時期に掘り直しを行っている。

館中心部：中心部東側の23次では、幅1m程度、深さ1.1mほどの南北方向の区画溝(23SD025 古段階)が新たに形成され、中心部の20次南側では、幅1.8m、深さ1.1mほどの断面逆台形状の東西溝(20SD195)が形成される。溝は、中心部を取り巻くように廻っている可能性があり、館中央部の南北溝(4SD006)や南側の東西溝(26SD004)と共に館中心部を囲む新たな区画溝となると考えられる。なおIII-1期と同様、中心部の整



第9図 III-1期(15世紀末葉～16世紀初葉)の遺構(1/2000)

館全体を区画する東外郭となる可能性がある。この溝の東側には、V期の南北道路の前身となる道の存在が想定されている。

館中央南側：3次調査地点では、III-1期から継続して園池を伴う庭園遺構が存在した可能性があるが実態は不明である。

空間利用としては前段階とは大きな景観的な変化は認められないようであるが、館中心部を囲む区画溝及び備前焼大甕埋置遺構の存在や庭園と建物との関係など館内部の空間構成については検討が必要である。総じて見ると次段階へつながる遺構の形成が各所で見られ、III-1期の様相からIV期の様相への過渡的段階といえる。

IV期：16世紀中葉（第11図）

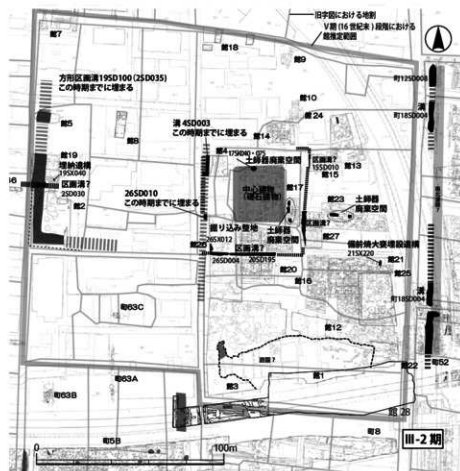
館中央北側：10次B地点・24次付近に皿Cを主体とした土師器多量廃棄空間が形成され（24SK040・030）その後大規模な掘り込み整地（24SX010）が行われる。中心部北側の場の性格の変化が想定される。

館中心部：17次地点ではこの頃までに「掘り込み整地①」が行われ、この上面で根締石の列が検出できる。この段階において大型の礎石を据えた中心的大型建物（以下、中心建物）の実態が明確となる。礎石建物が存在する可能性については、根締石の存在と、根締石列の検出地点より約20m東で調査した15次のSE018の井戸枠内最下層から、礎石と考えられる頂部を平に加工した大型の石が3点出土している点から推測される。井戸跡から出土した礎石の1点目は、長辺 $0.7 \times$ 短辺 0.5m 、厚さ $0.25 \sim 0.3\text{m}$ の円形を意識した石材、2点目は、長辺 0.5m 、短辺 0.4m 程、厚さ 0.2m 程の平面五角形状の石材、3点目は、長辺 0.7m 、短辺 0.5m の六角形状の石材であり、3点目の石材には中央を少しはずれた地点に $0.27 \times 0.27\text{m}$ の方形のアタリ痕が確認できる。このような大型の礎石がまとまって出土する事例は、中世府内町跡の調査を含めてもこの地点のみであることから、こ

地を浅く掘り込み整地が行われていた可能性があり、周囲には廃棄土坑（17SK040・075・085・210）が展開する。

館東端部：備前焼大甕埋置遺構（21SX220）が形成されている。甕の型式や遺構の切り合い状況からIV期まで機能していた可能性がある。

館北東部：町18次西区及び町12次では幅 $2.6 \sim 3.2\text{m}$ 、深さ $1.6 \sim 2.0\text{m}$ の断面V字溝（町18SD004＝町12SD008）が形成される。滞水状況が確認されているが、IV期中には人工的に埋め戻されている。溝の規模や位置から、前述した館中心部を囲む区画溝にたいして、



第10図 III-2期(16世紀前葉)の遺構(1/2000)

造られる。

館北西部：7次調査地点ではV期の北外郭となる溝と切り合って、同一の規模をもつ2条の溝に挟まれた積み土状遺構が形成されている。また、館中央北端の18次調査地点でもV期の外郭と考えられる溝に切られる溝と積み土状遺構のセットが確認されている。出土遺物が小片のため時期認定が難しいが、V期との連続性を考えると、これらの溝がV期段階の北外郭線を形成していた可能性も考えられる。

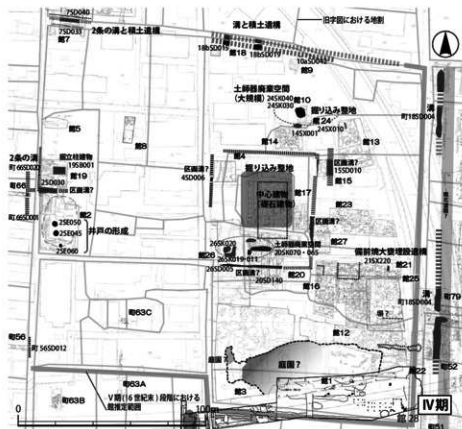
館北東方向：南北溝（町18SD004）は、この時期に幅2.4m、深さ1mの断面U字型の溝として掘り直されるが、Ⅴ期までに埋められている。前段階と同様に、館の東外郭の可能性がある。

Ⅳ期は、中心建物の存在が明確となり次段階に顕在化する館の外郭線の整備や庭園の改変などⅤ期への萌芽的要素が多く見られる。

V期：16世紀後葉～1586年頃（第12図）

館が方二町に拡張整備される。館東側の南北道路〔第2南北街路〕やその東側に広がる町屋〔「桜町」〕等もほぼ同じ時期に整備されていることが明らかとなっている。遺物組成や文献史料との対比などから1570年頃から1586年という年代が想定されており（大分市教委 2006）、「府内古図」に描かれた段階の友友館はこの時期に相当する。この段階では、外郭施設・庭園跡・中心部の調査が比較的進んでいる。

外郭構造：これまでの調査により、北外郭・西外郭・南外郭の構造が判明している。詳細は本報告書中に明らかにしているが、これらの調査所見を総合すると、外郭の構造は幅 1.5 ～ 2.0m の平行する 2 本の溝とこれに挟まれた幅約 4.0 ～ 4.5m の空間に粘質土と砂質土を交互に積み上げたものであり、これらの溝の中からは焼けた土壁片が検出されることから、館の周囲には、積み土により土台を築いた上に土壁づくりの扉をもつ施設の存在



第11図 IV期(16世紀中葉)の遺構(1/2000)

が1ヶ所ずつ確認される。景石は、凝灰岩、安山岩が主体である。これらの景石は、館廃絶後に抜き取られたもの、位置を動かされたもの、破砕し投棄されたものなどがあり改変された状況が確認されている。園池の掘り込み斜面には学大の川原石による護岸が行われていた部分もあることがわかっている。築山については考古学的所見を得られていないが、特に園池南側の多くの部分は、同時期の遺構が皆無であり築山等の存在が想定される。庭園周辺では石英の1cm大の玉砂利が大量に検出されており、園池の周囲は玉砂利敷き空間が広がっていたと考えられる。

中心部の構造：現在、IV・V期の中心建物と考えられている遺構は、前段階の礎盤石をもちいた「掘立柱建物」とは異なる「礎石建物」であることが判明している。その構造は、直径約1.2m程度、深さ0.3m～1.0mに掘削した穴に挙程度～人頭大の石を詰め、土と小石を敷き、最後に礎石を設置するものと考えられるが、おそらく江戸時代に畠として利用される頃にすべての礎石が抜き取られている。これらの根締石は、北列のみが明瞭に把握できるが、西列・東列については、後世の改変のため極めて不明瞭である。また、遺存している北列についても根締石の並びが不安定で、柱間も2.0～4.0mと幅が大きい。したがって、複数の建物が並ぶ可能性もあるが、建物自体は、IV期からV期にかけて、継続的に改修されながら使用されたと考えられており、根締石の全てが同時に使用されたと考え、全体の規模は南北で約29m、東西は現状で約15mとなる。なお、中心建物跡周辺では瓦の出土は微量であり、板葺等が想定される。中心建物の具体的な立体像については大きな課題である。

館中央北側：18次c区では、幅2.6m以上、深さ0.8m程の断面「逆台形状」の南北溝(18SD010)が形成されている。また、館中心部東側ではIV期の23SD025新段階の溝と重複して新たに23SD090とする南北溝が形成されている。これらの溝が館内部の区画溝と考えられるが、溝の行方と性格付けが重要となる。

その他の施設：中心建物東側の15次調査地点で検出した井戸跡(15SE018)は、桶組の枠をもつ井戸である。井戸廃絶時には井筒内に礎石と考えられる巨石を3つ投げ込んでおり、最終埋没後の窪地に牛もしくは馬の頭骸骨を埋置したと推測される土坑状のプランが確認されている。

が想定されている。館の東外郭については、22次において調査が行われたが、調査区内は攪乱が多く実態は明らかではない。しかしながらその他の地点のような対の溝をもった施設ではなかったようであり、他の外郭構造とは異なる。例えば築地塀などの別構造が考えられる。

庭園構造：当該期に相当する庭園遺構は最大規模となり、東西67m、南北30mの園池跡を伴う。園池跡は、地表面を約2m掘り下げ、最深部付近に巨石を設置し、一部では護岸石組を行う。東側を中心に巨大な景石を配置しながら、東側と中央にそれぞれ中島

館南東部の庭園に近接する地点で井戸跡（12SE026）が形成される。砂と粘土を混ぜてつくられた漆喰状の井戸枠を伴うもので、「唐人町」推定地である町14次以外では類例の少ないものである。この井戸枠内からは、菊花双鳥文鏡が出土しており、出土層位から井戸廃棄時の祭祀に用いられた可能性がある。12SE026は、特異な井戸構造や丁寧な祭祀痕跡を遺している点で注目されるが、出土遺物から館V期もしくはVI期に相当するもののどちらの時期に属するかは今後の課題である。

庭園は1586年以后、庭園としての機能は停止しているが、完全には埋没せず溜池状の施設として存続している。なお、館の中心部には町屋の遺構は展開せず、館焼失後は、空閑地となる。



第 13 図 VI 期 (1586 年以降) の遺構 (1/2000)

今後の課題

Ⅰ～Ⅲ期については、整地層下の遺構群が多く、館中心部ではサブトレンチというわずかな隙間から垣間見たにすぎないが、今回の25次調査でも追認したようにⅠ期の14世紀後半から連続と面的に遺構が展開しており、継続して行われる掘り込み整地や、規格性の高い掘立柱建物跡群（基本的に礎盤石を用いた建物）、大量の土師器の出土など、周辺での遺構のあり方と比較しても特異な様相を示している。Ⅴ期になって顕在化する外郭施設がⅠ期からⅣ期にはどのような構造であったのか、今後は26次で新たに検出したⅡ期の南北溝 SDO10 の範囲の特定や、Ⅲ・Ⅰ期にみられる館西側の方形区画溝の規模確認などが当該期の遺跡空間の性格を読み解くうえで重要となる。

Ⅲ-2期～Ⅳ期では、26次の26SD004・005として確認したように中心建物の周辺には区画溝が存在し、これらが位置を微妙に変えながらⅤ期頃まで踏襲されている点を確認した。今後はⅤ期段階の区画溝がどのように変化したかが課題となる。

V期においては中心建物構造の把握が急務であるが、友友館前面の「板町」で検出された礎石建物跡は、6尺5寸で建てられたことが判明している（大分県埋蔵文化財センター 2006）ように、今後は、中心建物及び館内部の空間配置がいかなる尺度によって設計されていたか、尺度論のからの検討も必要となろう。庭園構造については、池への給排水路の確認や、薬山の位置、観賞点の位置などの究明が課題である。（以上『友友氏館跡 1』第2章第3節一部改変）

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 庭園域の調査概要

庭園域は、大友氏館跡の南東部にあたり、今回報告する対象面積は約8000㎡である。庭園域は館3次調査において、15世紀後葉頃の園池跡と推定される掘り込みと、景石や玉石等が検出されており、改修を行いながら、16世紀後半の、大規模な園池やそれに付随する庭園関連遺構が存在するエリアとして捉えられている。しかしながら、このエリアには、庭園造成前の遺構や庭園との関係性が不明な遺構等も存在し、これら遺構も今回の詳細報告で述べていく。

庭園域では、中世の遺構が大部分を占めるが、一部古代に該当するような遺構も数少ないが存在するため、古代から順に詳細報告をした後で、中世の詳細を述べていく。

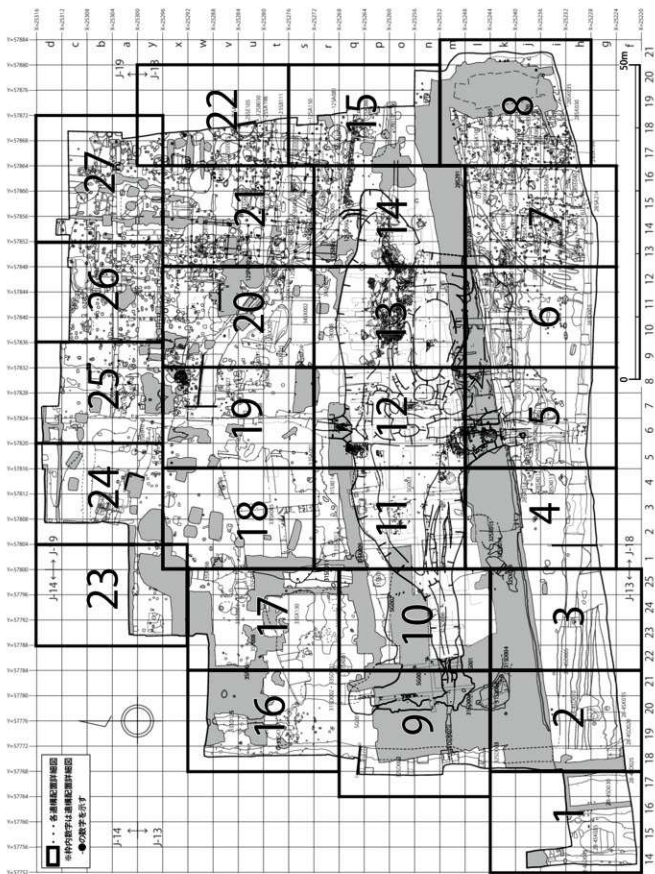
古代の遺構は、中世の整地層の直下より、大型の掘り方をもつ掘立柱建物跡の一部と考えられる遺構が検出され、さらにその西側では、井戸跡と推定される遺構も確認されている。一部土層断面観察では、古代の整地層とも考えられる層が報告範囲の東側から北側にかけて展開している。以前の発掘調査においても、中世遺構から古代の土師器や須恵器、さらに中国越州窯系の青磁片なども出土することがわかっている。

中世は、第Ⅱ章第3節で示した館変遷の館ⅠからⅡ期に該当する遺構として、掘立柱建物跡群等が、報告範囲の東側で検出されており、その建物跡周辺からはかわらけの一括廃棄土坑等も検出されており、建物規模やかわらけの廃棄土坑からも館として機能していたことがうかがえる。また溝跡も確認されており、調査区南側で、東西方向に延び、西側で北方向に90度ほど屈曲する溝跡が確認されており、館の外郭施設の一部と考えられるものである。さらに溝跡は、調査区南から西側にかけても多く検出されている。館Ⅲ期に入ると、園池跡が調査区西側で検出され、規模などは館Ⅳ～Ⅴ期の園池跡に削平されるため不明であるが、このころが大友館の庭園導入時期と考えられる。この園池跡に関連する遺構として、植栽痕と推定される遺構や、一部関連する建物跡が調査区北西で検出されている。また土坑や井戸跡なども検出されている。さらに掘立柱建物群が調査区南東付近で数棟確認される。出土遺物は、在地系土師器であるA系、ロクロ目痕を強く残すB系土師器や薄手の京都系土師器皿等が出土する。

館Ⅳ期になると、園池が改修されるが、規模は館Ⅲ期と大差はないようである。その後、館Ⅳ～Ⅴ期にかけて、園池が大改修され、東西67m、南北30mの規模となる。またこの園池跡には、溝が4条接続している。園池跡内は中央の西側と東側では景観に大きな違いがある。園池跡東側と南側には同時期の植栽痕が検出されている。建物等に伴うと考えられる掘り込み整地跡が園池跡の北西部と北東部で確認されている。また当該期の外郭の大溝と推定される遺構が、調査区西側から南西側で東西方向に3条検出されており、園池跡西端から調査区西側へ東西方向に延びる溝はこの大溝と接していることが確認された。また園池跡南側には溝や植栽痕以外の遺構は認められない。

1587年以降の館が廃絶した後に該当する館Ⅵ期の遺構は、調査区東側で井戸跡や廃棄土坑等が検出され、館Ⅴ期の園池はすべては埋まらずに、ため池状に凹む状況で残存していたと考えられる。これらは出土遺物等に動物骨や雑器類が多量にあることから、館ではなく、周辺に町屋があったことを示している。

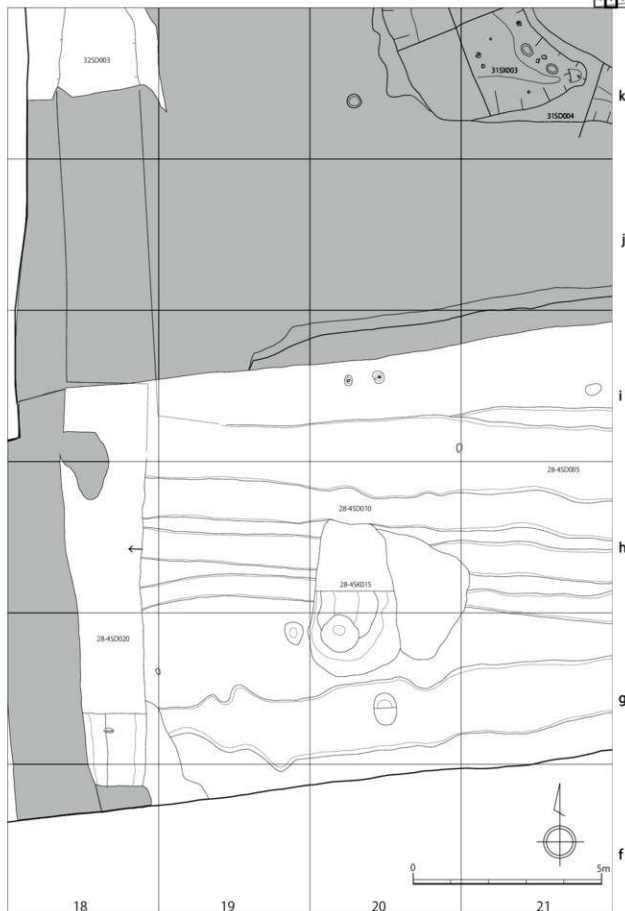
以上のように概略を述べたが、このあと、遺構の詳細と時期変遷等を後述し、特に園池内の意匠や構造についても詳細に述べていくこととする。



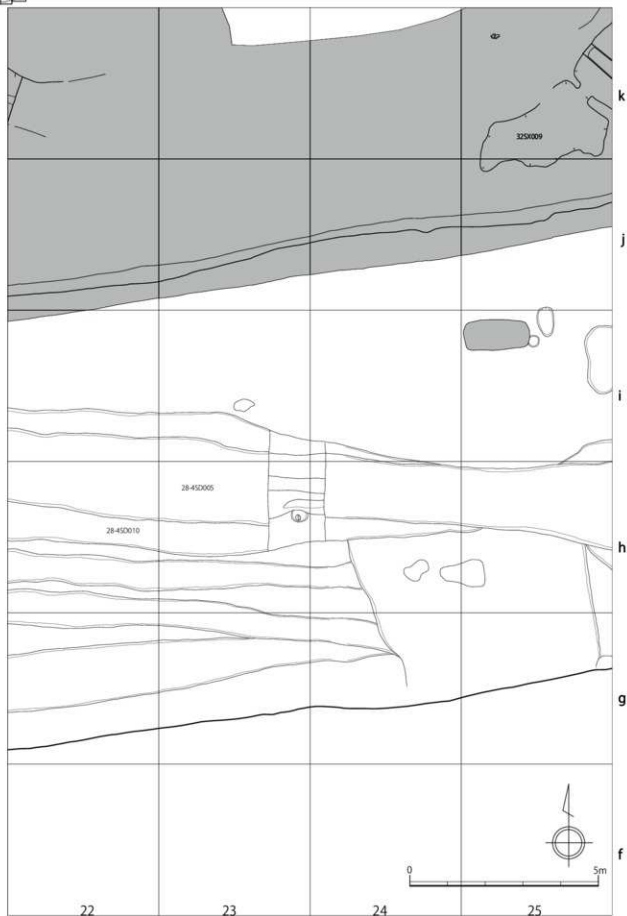
第15図 グリッド図(1・3・12・16・21・28-34 次調査区)(1/600)



第 16 図 遺構配置詳細図-1(1/100)



第 17 圖 遠構配置詳細圖 -2(1/100)



第 18 圖 遺構配置詳細圖 -3(1/100)

26	27	28	29	30
16	17	18	19	20
6	7	8	9	10
2	3	4	5	1



第 19 図 遺構配置詳細図-4(1/100)



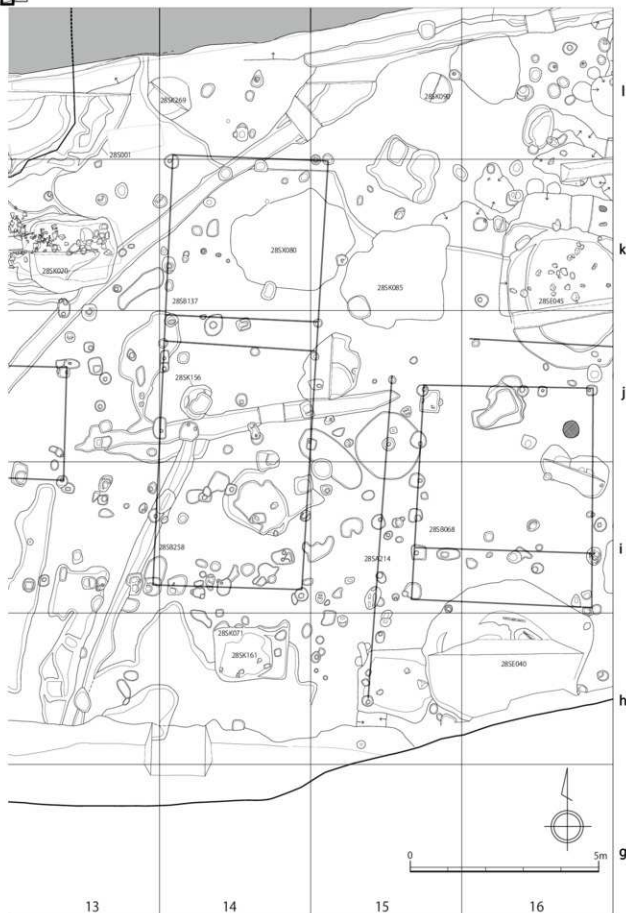
第 III 卷
第 1 冊



第 20 図 遺構配置詳細図-5(1/100)



第 21 圖 遺構配置詳細図-6(1/100)



第 22 図 遺構配置詳細図-7(1/100)



第23図 遺構配置詳細図-8(1/100)



第
III
卷



第 24 図 遺構配置詳細図-9(1/100)



第25圖 遺構配置詳細図-10(1/100)



第 26 圖 遺構配置詳細圖-11(1/100)



第三章
第一節



第27圖 遺構配置詳細圖-12(1/100)



第 28 図 遺構配置詳細図 -13(1/100)

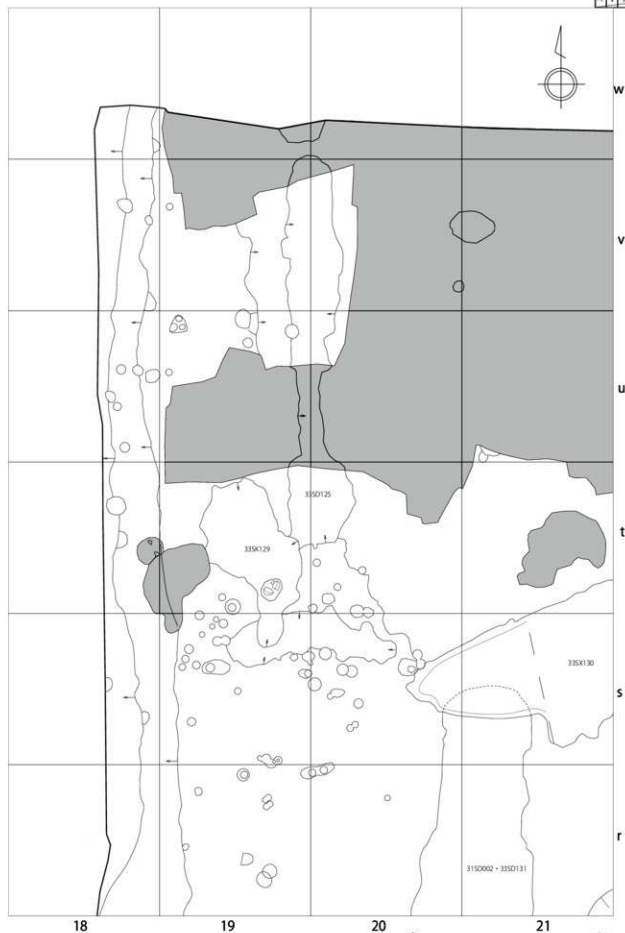


第 29 図 遺構配置詳細図 -14(1/100)

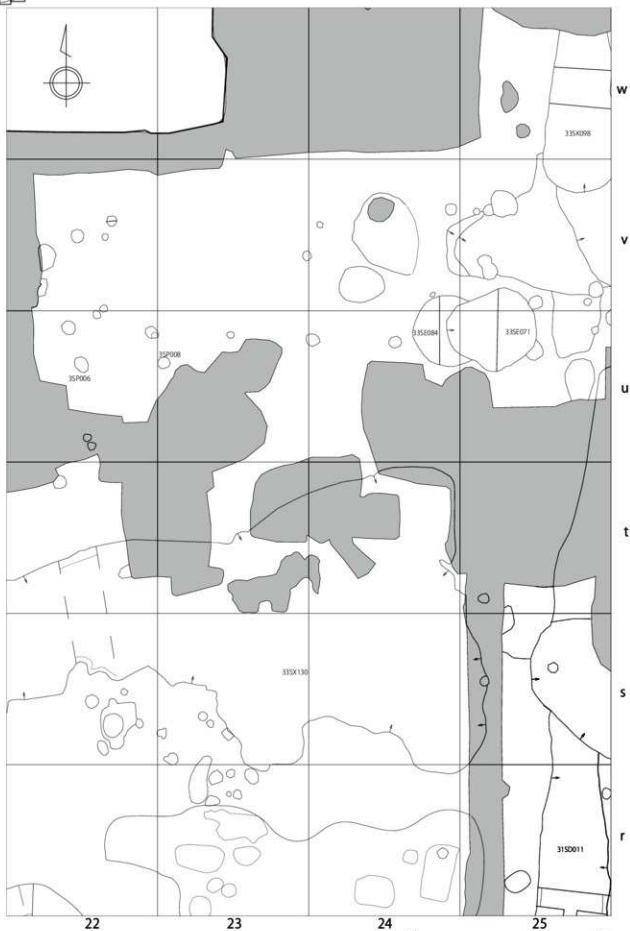
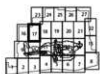


第30図 遺構配置詳細図-15(1/100)

0 5m



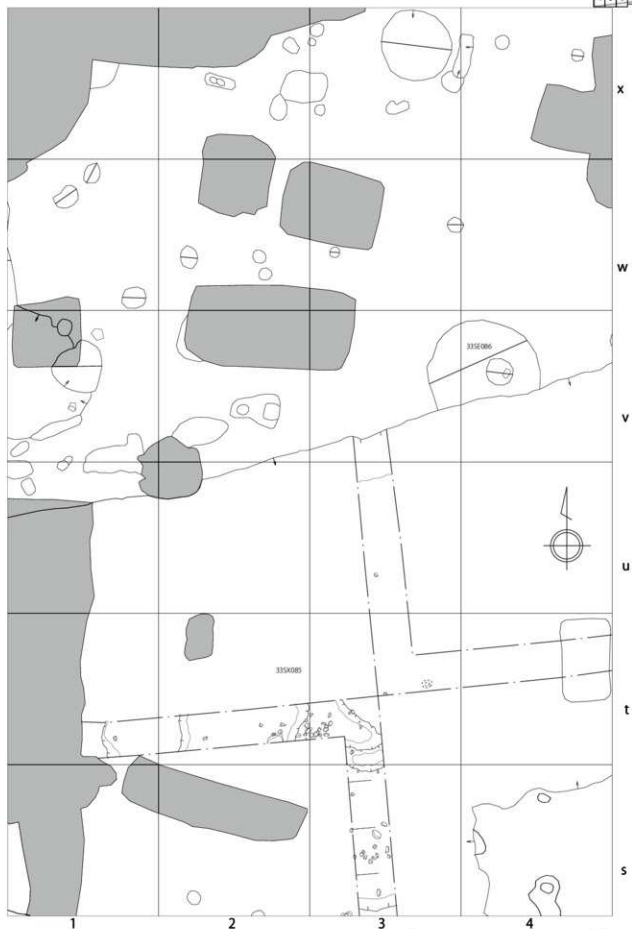
第 31 圖 遺構配置詳細圖 -16(1/100)



第 32 図 遺構配置詳細図 -17(1/100)



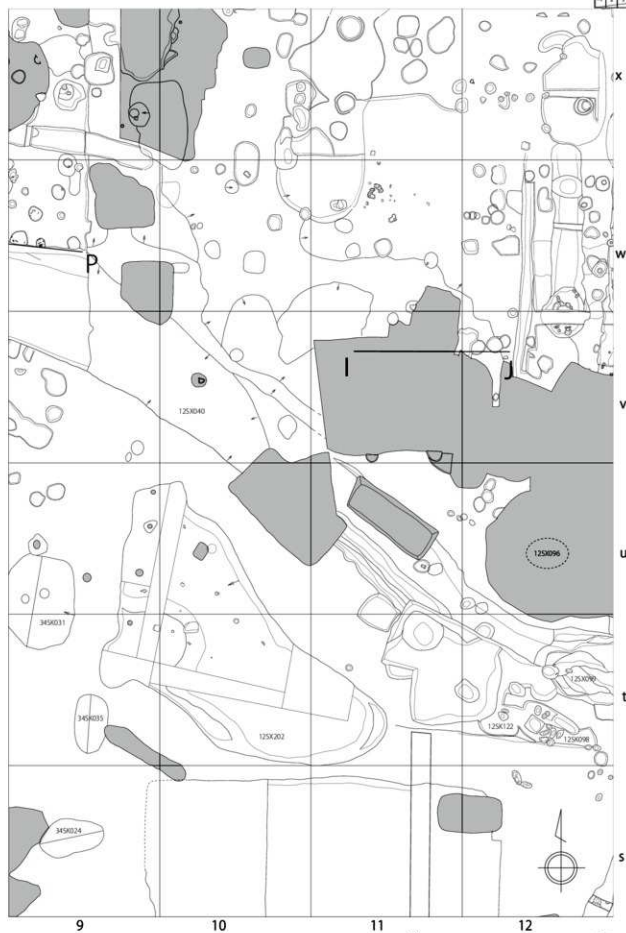
第三章
第一節



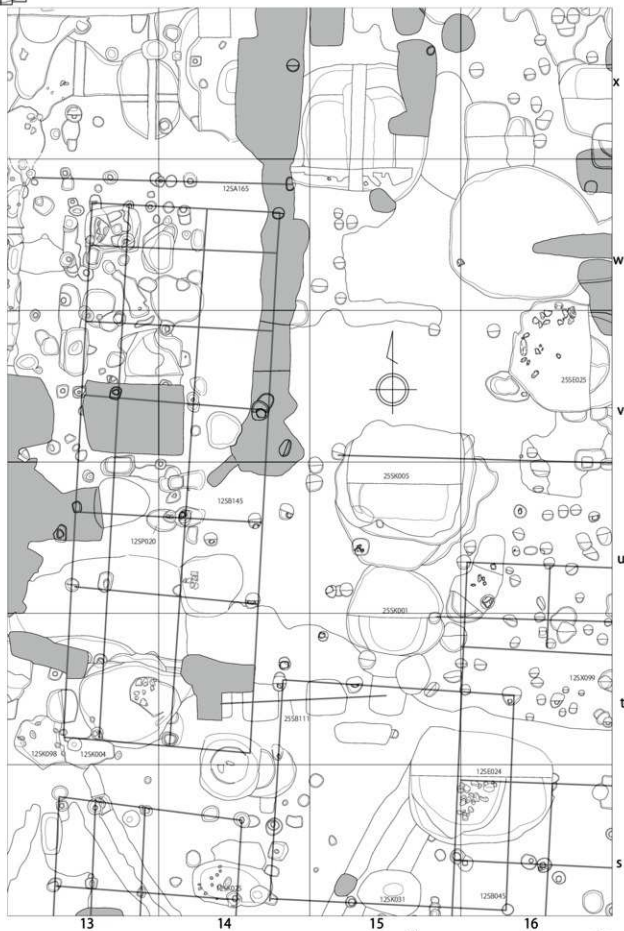
第 33 図 遺構配置詳細図-18(1/100)



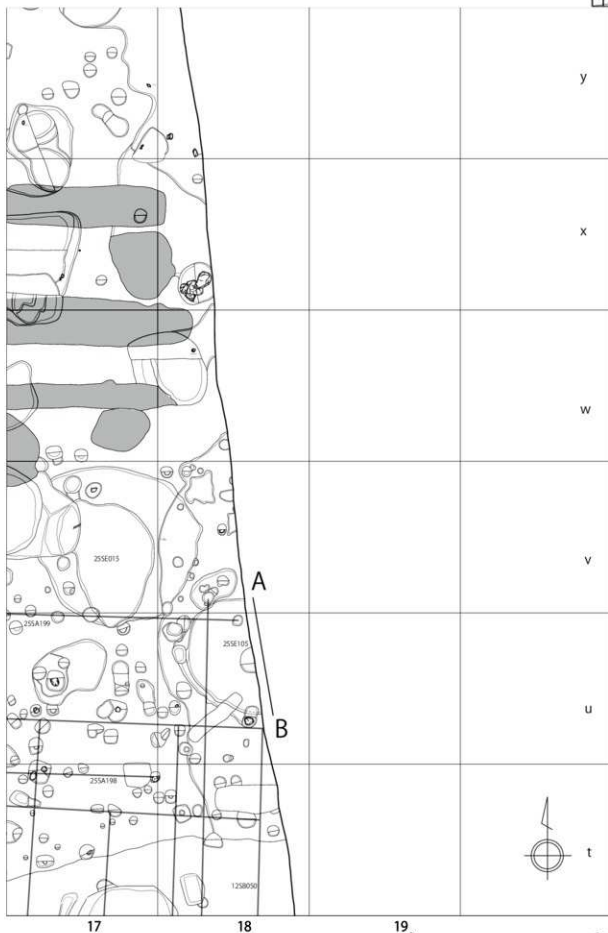
第 34 図 遺構配置詳細図 -19(1/100)



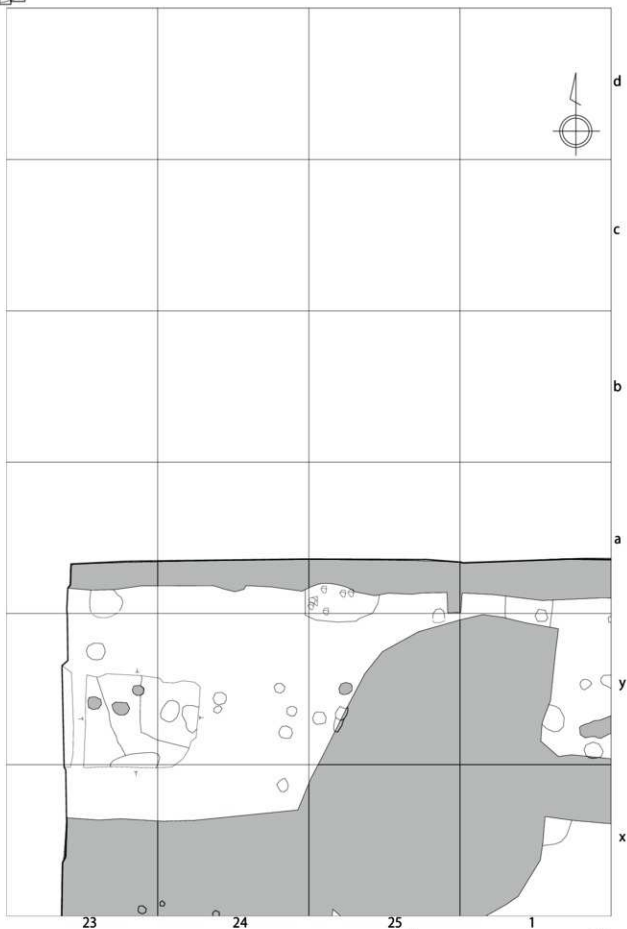
第 35 圖 遺構配置詳細圖-20(1/100)



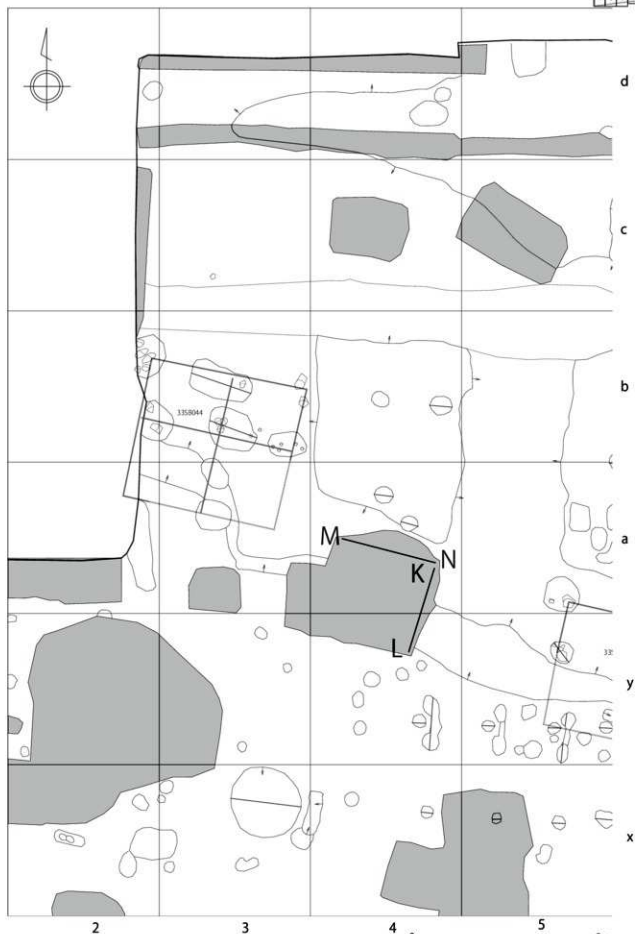
第 36 図 遺構配置詳細図 -21(1/100)



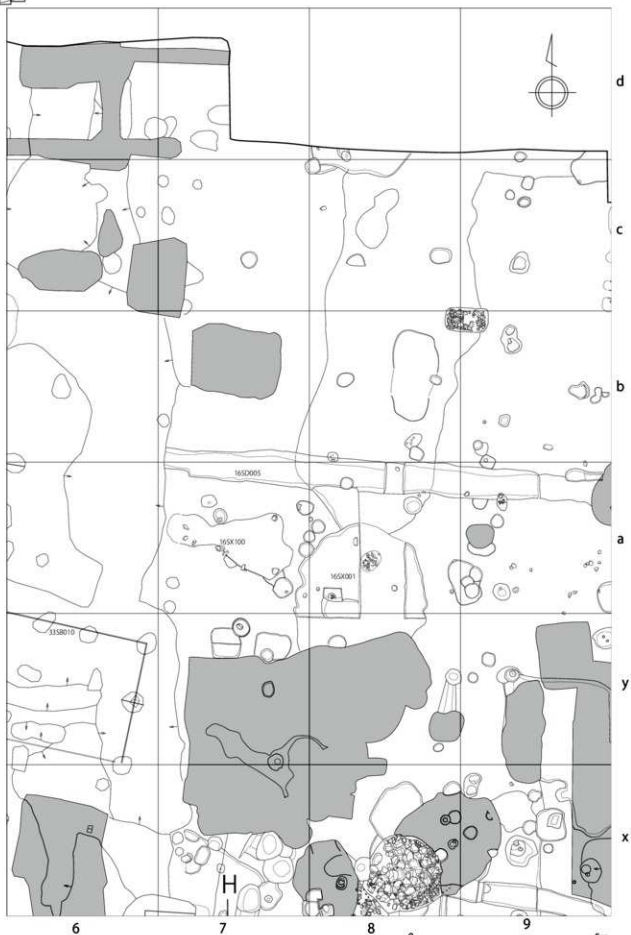
第 37 図 遺構配置詳細図-22(1/100)



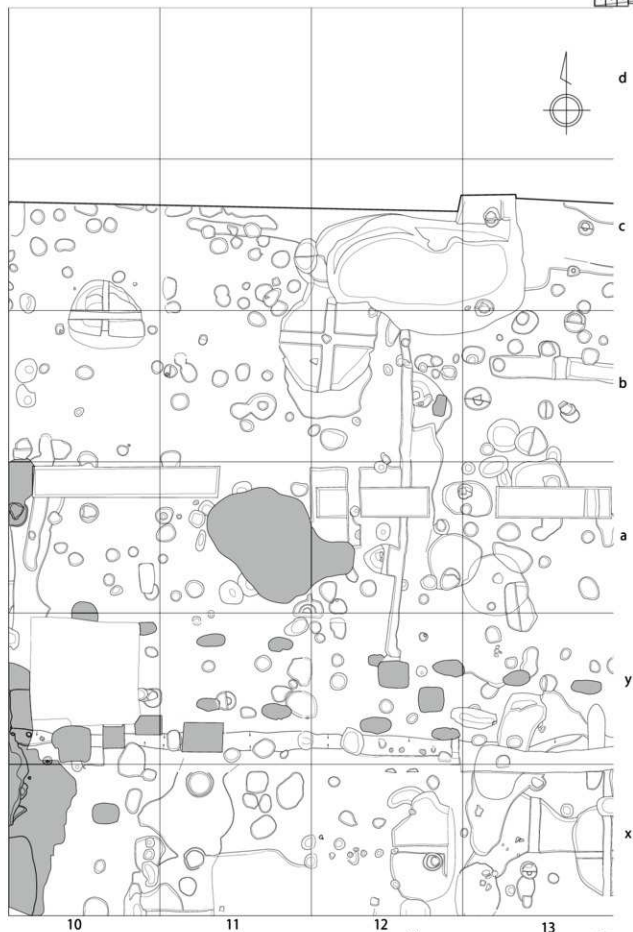
第 38 図 遺構配置詳細図 -23(1/100)



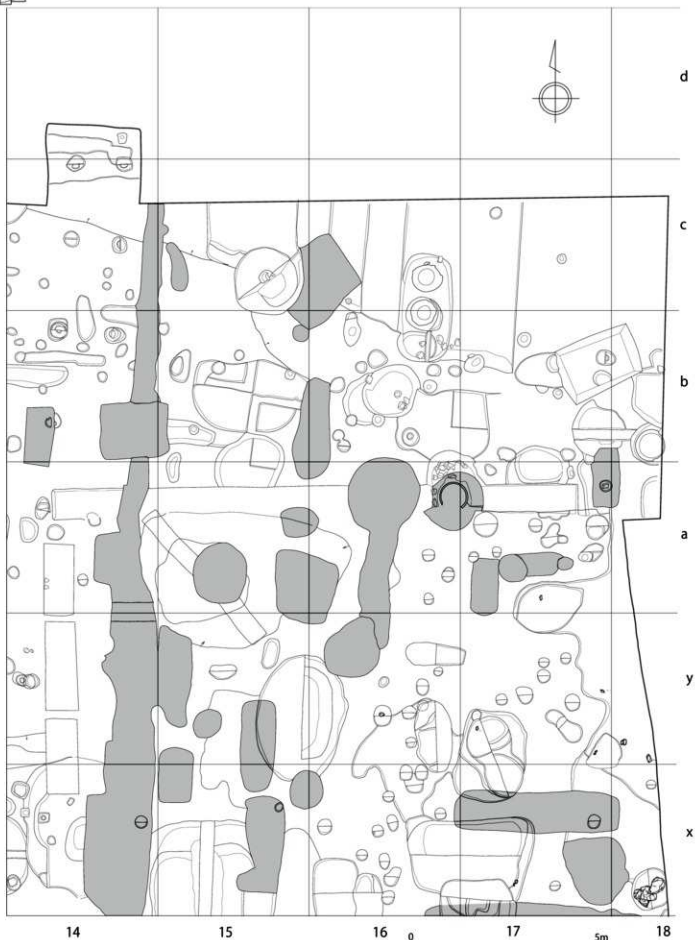
第 39 図 遺構配置詳細図-24(1/100)



第 40 図 遺構配置詳細図-25(1/100)



第41図 遺構配置詳細図-26(1/100)



第 42 図 遺構配置詳細図 -27(1/100)

第2節 調査の方法

中世大友府内町跡のグリッドの設定について

大友氏館跡及び中世大友府内町跡の調査において、従来、調査区ごとに4mメッシュのグリッドを設定して調査を行っていた。しかし、大友氏館跡における確認調査と、中世大友府内町跡で進められていた都市計画道路建設に伴う大規模な発掘調査の計画において、調査区が隣接、または一部重複することから、広域的なグリッドの設定が求められた。そのため、今後の大友氏館跡や旧万寿寺跡などを含めた中世大友府内町跡の調査を想定して、統一グリッドを採用することとした。

統一グリッドの設定にあたっては、これまでの4mメッシュによるグリッド設定を最小単位とした、大中小の三段階によるグリッド設定を行うこととした。

また、位置の基準は、＜東経131°、北緯33°＞を起点とする平面直角座標Ⅱ系（第43図）を使用し、その起点が大分市から南西に位置していることから、グリッド起点も南西に位置するものとして、各グリッド番号の並びを南西から順番に付していくこととした。なお、座標については、現在世界測地系と日本測地系が存在しているが、大友氏館跡を含む中世大友府内町跡の調査においては、従来の日本測地系を統一した座標として使用しているため、今後も中世大友府内町跡については、日本測地系を使用して調査を行っていく。そのため、グリッド座標も日本測地系を基準としている。

【グリッド標記の方法】

- ・中世大友府内町跡の遺跡範囲全体及びその周辺を覆う500mメッシュのグリッドを「大グリッド」として設定し、南西隅から順にA～Qまでの大文字のアルファベットを付していく。（第44図）

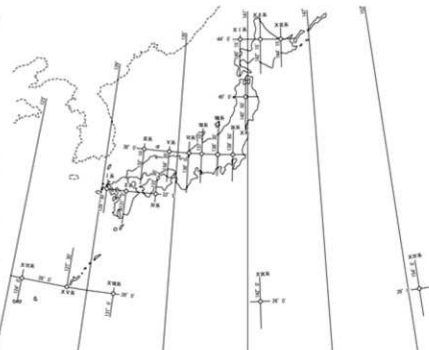
- ・500mメッシュの「大グリッド」内に、さらに100mメッシュの「中グリッド」を設定し、南西隅から並行式に1～25までの番号を付していく。（第45図上側）

- ・100mメッシュの「中グリッド」内に、さらに4mメッシュの「小グリッド」を設定し、南西隅から南北方向に、a～yまで、東西方向に1～25までの番号を付し、その交点を、「大グリッド」「中グリッド」のアルファベット及び番号も含めて、杭番号（例：A-1-a1）とする。

- ・グリッド番号は、南西の杭番号をグリッドの番号として使用する（例：南西の杭番号が「A-1-a1」ならば、その4mグリッド全体の番号も「A-1-a1」となる）。（第45図下側）

発掘調査は、館1次調査以降、ほぼ同様の手法で、バックホーによる表土除去を行ったあと、調査区設定を行う。設定は国土座標第Ⅱ座標系を使用して、前述のとおりに基づき、調査区内に4m方眼のグリッドを設定した。設定したグリッドピンは、図面の作成また、遺物の取り上げ時にも使用している。

遺構検出後は、このグリッドを基準に遺構配置図である全体略測図 1/100を作成し、これ

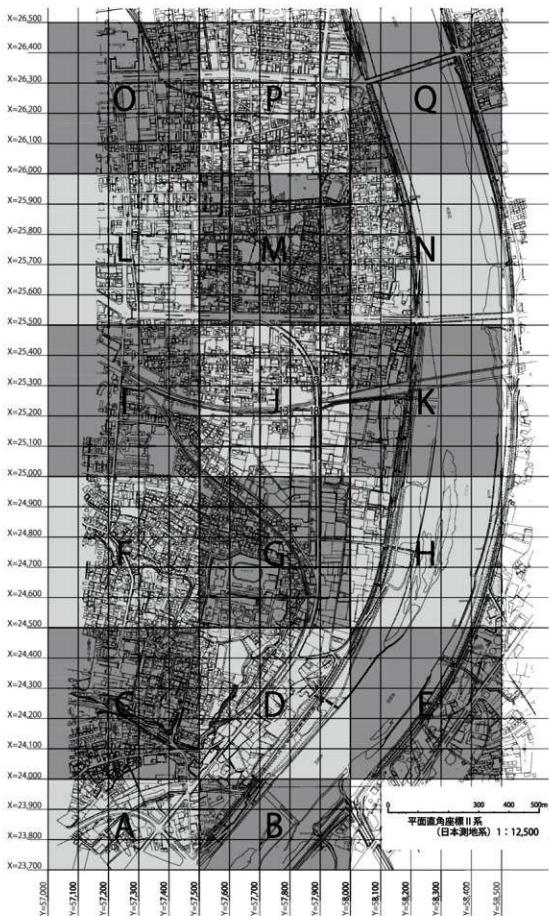


第43図 平面直角座標系

に遺構ごとにS番をふった。出土遺物の注記は、このS番を使用し、例として「館1S-1灰褐色もしくはP1」などとしている。また遺構写真の撮影にも遺構判別ができるようホワイトボードに遺構番号を記した写し込みに使用している。遺構種別は調査終了後の整理作業段階で、SD(溝跡)やSK(土坑)などに分類して、本報告書にはそのように記載している。

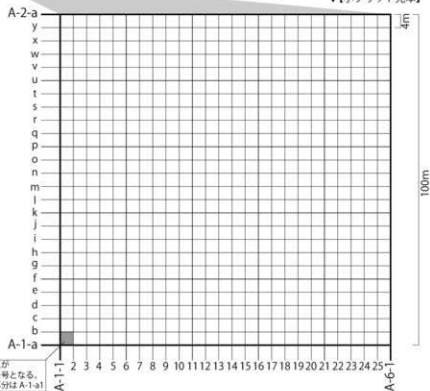
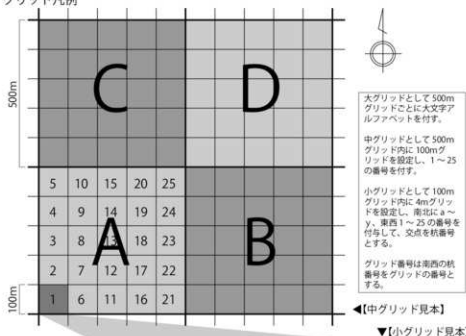
遺構の掘り下げは、遺構が保護・保存される前提であることから、完掘はほとんど行わず、将来において再検証できるように、遺構埋土の半截や遺構全体を3-5cmほど掘り下げて、遺構の性格や時期等が判別できた段階で止めるなどして不必要に掘り下げは行っていない。

遺構掘り下げ後は、手実測による1/20の調査区全体図面を作成し、必要であれば、1/20



第44図 中世大友府内町跡 大グリッド区割図

グリッド凡例



第 45 図 中世大友府内町跡 中・小グリッド凡例図

や 1/10 の個別遺構図や土層断面図等を記録作成し、写真撮影までを行っている。さらに遺跡面積が広大な場合などは、航空写真測量図化などの方法も取り入れるようにしている。

また、園池跡内の土壌などは、花粉分析や珪藻分析などの自然科学分析を行うことによって、当時の植栽や水の環境などの状況把握が追えるように努めた。 今回の庭園域の報告範囲は、第 14 図～第 42 図まで示したとおりで、中世大友府内町跡グリッドでいう J の 13・14・18・19 内に該当する。

また、調査終了後は遺跡保護を目的に、掘り下げを行った箇所には真砂土を充填し、さらに検出面全体の直上に同じく真砂土を 0.3m 厚ほどを入れて保護した後、廃土で埋め戻しを行っている。

第3節 基本層序

今回報告する庭園域範囲の中で、遺構が検出できる標高には、報告範囲の北側と南側とでは、約1mの差が認められる。

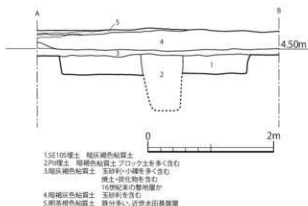
中世の館機能時から館が廃絶する1586年、その後近世から、近代・現代に至るまでの土地利用の状況を、報告範囲の中で数か所取り出して概要を述べる（基本層序位置については第14図参照）。

報告範囲の東地点（第46図1）基本層序A-B（館25次地点）では、遺構検出面が約4.4～4.5mであり、中世の整地層（3層）などが認められる。この整地層上から16世紀代の遺構等が掘り込まれる状況となる。その上層には、第4層があり、その直上の第5層はマンガン等が沈着する、いわゆる水田の様相を示しており、館廃絶以後は最終的に水田化する。しかし館廃絶後、すぐに水田化している様子はなく、島津侵攻以後、館周辺には復興した町屋が展開するようである。水田化は近世城下町が完成した後、この周辺に初瀬井路が造られる17世紀中頃以降であると考えられる。近代・現代は、宅地化がはじまり、盛土のため、約0.5m以上堆積する土砂などが確認される。

西地点（第46図2）基本層序C-D（館32次地点）では、検出面は約4.1mである。その上はマンガンが集中する2層があり、近世の水田耕作痕と考えられ、標高4.1m付近を水田とした可能性が高い。

南地点（第46図3）基本層序E-F（館28次地点）は、上記と同じような内容であるが、近現代は、J R日豊本線の軌道敷きとなる。

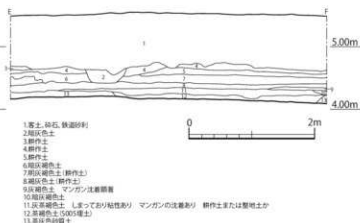
北地点（第47図1）基本層序G-Hは、報告範囲の中心付近を指すが、ここの遺構検出面は、北側と南側では差があり、北側検出面で標高4.8mほどであり、南側では標高4.1mほどの検出面である。北側付近は、水田の様相を示す土層は全体では確認されておらず、地籍図などを参照すると畝であり、遺構面に耕作痕なども残る。一方で南側は水田化され、水を入れる必要があったために低い。当時の地盤



1. 基本層序A-B(1/60)



2. 基本層序C-D(1/60)



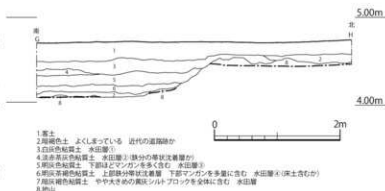
3. 基本層序E-F(1/60)

第46図 各地点基本層序断面実測図①

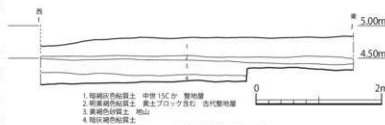
である中世の生活面を多少削平していると考えられる。このように北側と南側で遺構検出レベルに約0.7～0.8mの差があるが、南側の遺構と北側の遺構の深度等を比較してみると、深度に大きな差はないため、今回報告範囲の南側と北側では中世段階から地表面の標高差はあった可能性が高い。

南北地点(第47図2)基本層序I-J(館12次地点)は、遺構検出面4.8mで、第1層は15世紀代の整地層、第2層は第47図3にもある古代と考えられる整地層が確認された。

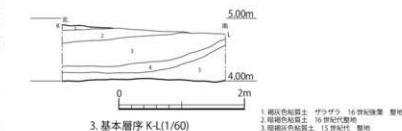
調査区中央北地点の基本層序K-L(第47図3)は南北方向の断面図で基本層序M-N(第47図4)は東西方向の断面図である(ともに館33次地点)。K側が中心建物側となる。1層は、16世紀後葉の掘り込み整地で、中心建物面側に広がる館V期の整地層である。第2層は16世紀代、第3層は15世紀代の厚い整地層である。第4層は基本層序I-Jの第2層と類似するが、基本層序I-Jの方が標高はやや高いところで検出されている。北地点(第47図5)基本層序O-P(館34次地点)は、基本層序I-JとG-Hの間の東西方向の基本土層図である。第1層は15世紀の整地層である。その直下に第3・4層や第12層の遺構がある。また、第1・3・6層などのビットが整地層である1層を掘り込む。



1. 基本層序 G-H(1/60)

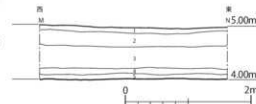


2. 基本層序 I-J(1/60)

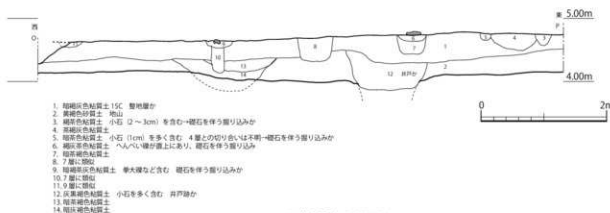


3. 基本層序 K-L(1/60)

※第47図3と4の土層注記は共通である



4. 基本層序 M-N(1/60)



5. 基本層序 O-P(1/60)

第47図 各地点基本層序断面実測図②

第4節 古代の調査

これまでに古代の遺構は、中世大友府内町跡第16次調査などで、8～9世紀代の掘立柱建物跡が検出されており、官衙関連施設の可能性が報告されている。町16次調査の位置は、大友氏館跡の中心から直線距離で約200m東にあり、近距離にあたる。大友氏館跡の確認調査でも、遺構は確認されないが、古代の遺物が中世遺物に混入する状況で出土する。

大友氏館跡の調査では、館25次調査区と館33次調査区で、建物跡1棟、井戸跡1基が検出されたため報告する。小結はこの節の最後にまとめた。

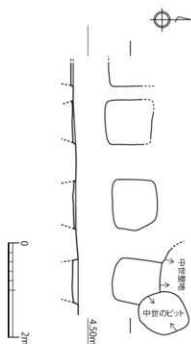
(1) 掘立柱建物跡 (SB)

当該期の掘立柱建物跡は1基のみの確認であり、中世の整地層直下より検出された。

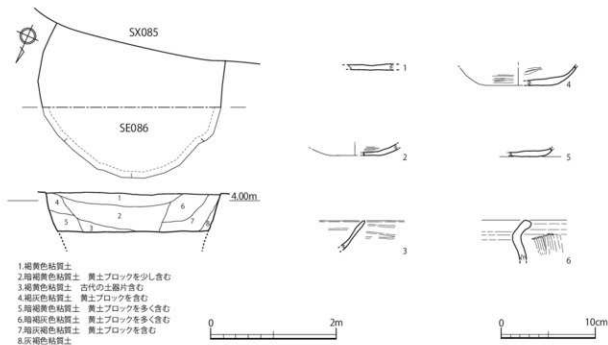
25SB111 (第48図)

J-18-t-14・15区で検出された。切り合いの関係は中世整地層の直下より検出され、一番東側の柱穴が、中世のビットと中世の整地層に切られる。柱穴は4基検出され、どれも平面プランは、一辺約1mの方形の掘り方を呈する。検出された遺構は東西軸で延びると考えられる。一部の検出であるため、梁行、桁行、身舎面積等は不明である。埋土はどれも暗褐色粘質土であり、柱痕は確認できていない。

遺構は最小限の掘り下げにとどめており、完掘していないため、時期が決定できる出土遺物は認められなかった。



第48図 25SB111 実測図 (1/80)



第49図 33SE086 遺構 (1/60) 及び出土遺物 (1/4) 実測図

(2) 井戸跡 (SE)

井戸跡は1基のみ確認された。前述した掘立柱建物跡より直線距離で約30mのところで検出している。

33SE086 (第49図)

J-18-v-3・4区で検出された。切り合いの関係は、33SX085に遺構の南側と中世ビットに切られる。平面プランはほぼ円形状を呈する。規模は長軸で約3mである。埋土は土層図に示すとおりである。ただ、検出面より約0.6m下げたところで、掘り下げを止めたため、底の深さや井筒の構造などは不明であるが、埋土の状況から4～7層にブロック土が多く混入しており、中心部の2・3層はしまりがあまりない層であったため、周辺の調査状況などを加味すると井戸跡の可能性が高いと考えられる。2・3層が井筒部と推定される。

遺物は少量であった。出土遺物の中に1点のみ、中世遺物が含まれていたが、検出面での出土であったのと中世ビットが周辺に少しあるため、古代土器の出土量からすると混入品と判断した。古代土器は掲載点数のほかに小片が少量出土している。遺物を井筒部と掘り方部で分け損ねたが、1～3は上層での出土、4～6は下層での出土である。1～5は土師器坏片である。3や4は内外面に横方向のミガキが施される。6は甕の口縁部であり、胴部外面に粗いカキメ痕を残す。

その他の土器 (第50図)

第50図に示した古代の土器は5点である。出土位置は、第35図に示している12SX096で、古代と推定される整地層(第47図2)から、1ヶ所に集中して土師器坏が確認された。出土土器は口縁部端部をやや外反させ、底部は丸みをもつ。



第50図 12SX096出土遺物実測図(1/4)

(3) 小結

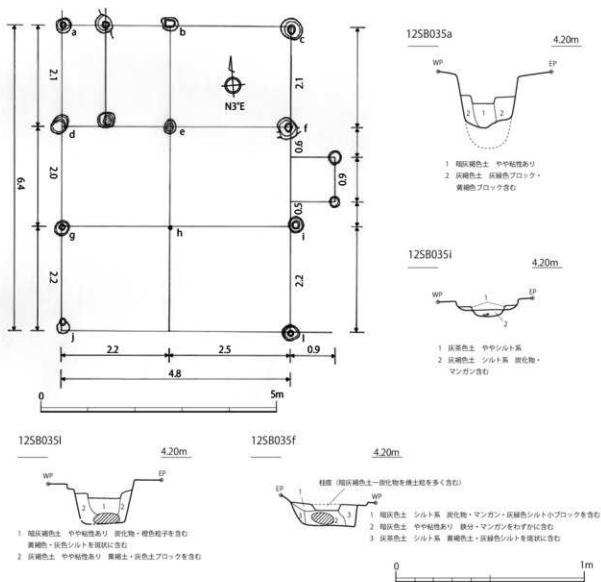
古代の調査は、検出した遺構は少ないものの、少なからず中世の遺構の下位に展開していることが確認されたことは大きな成果であった。検出した遺構は建物跡と推定される柱列一部と井戸跡と考えられるものであった。推定建物跡は柱穴が約1m弱ほどの方形の掘り方をもつものであり、官衙的な様相を示していると考えられる。12SX096とした古代の整地と考えられる層からまとまって出土した土師器は9世紀代であり、重なりながら、まとまって出土したことから、整地の際の地鎮痕跡とも考えられる。ここで掲載はしていないが、園池跡や中世の遺物包含層等からも多くの古代の土器が出土し、中には越州窯系青磁片等も数点認められる。土器の特徴や越州窯系青磁片の出土などを考えると9世紀代中心の遺構群が大友氏館関連の整地層直下に展開している可能性が十分考えられる。町16次調査の成果も併せて考えると、9世紀前後の大友氏館跡周辺域は官衙的な施設が展開している可能性が高くなったといえる。

第5節 中世の調査 (館I期～館VI期を中心とした遺構群)

ここから中世の遺構、主に館I期～館VI期の状況を遺構別に報告する。検出された遺構は、掘立柱建物跡9棟、柵跡8列、井戸跡14基、土坑36基、溝跡12条、地業・整地跡3基、植栽痕を含む不明遺構10基、池状遺構3基、溜め池状遺構1基で、順番に報告する。また、この第5節では小結を各項目の最後に設け、各遺構の時期比定やその性格などについて述べることにする。

(1) 掘立柱建物跡 (SB)・柵跡 (SA)・ピット (SP)

掘立柱建物跡9棟、柵跡8列が確認された。特に庭園エリアの東～南東側で多く検出している。掘立柱建物の中には、柱穴内礎石をもつものもある。また図面は平面図を主体に掲載している。断面図は完掘をしていない柱穴がほとんどのため、掲載していないが、一部柱穴を半載しているものは個別で断面（模式）図として図示している。また遺構ごとに、柱間距離 (m) と建物、柵・柱穴列の軸方位はそれぞれ図に挿入している。



第51図 12SB035平面(1/80)及び断面(1/20)実測図

12SB035(第 51 図)

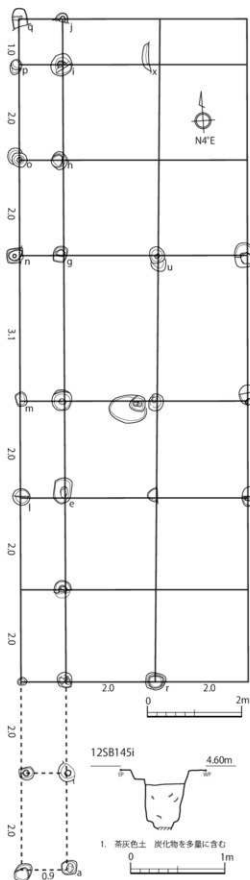
J-18-r・s-13・14 区で検出した。遺構検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は 12SK025 や 12SD090 に切られる。建物プランは南北に長い長方形で、梁行 2 間、桁行 3 間で身舎面積約 30 m² である。柱穴 c1 ラインの東側に 2 つの柱穴がある。入り口などに関連する可能性がある。検出した柱穴はほとんどが直径 0.2 m ほどの円形である。建物主軸方位及び柱間距離は図示している。柱間距離はバラつきがあるが、概ね 2.1 ~ 2.2 m である。また柱穴内には l や f など礎石が確認できるものもある。柱穴埋土は灰色シルト系が主である。またこの遺構は、北側に 12SB145 が展開しており、建物方位もほぼ同じで、当遺構のピット ab 間と de 間にあるピットと ab のピットを北に延長した時に、後述する 12SB145 建物の西側の列とほぼ同軸線上に並ぶため、12SB035 と 12SB145 は関連する可能性が高い。

出土遺物はほとんどない。

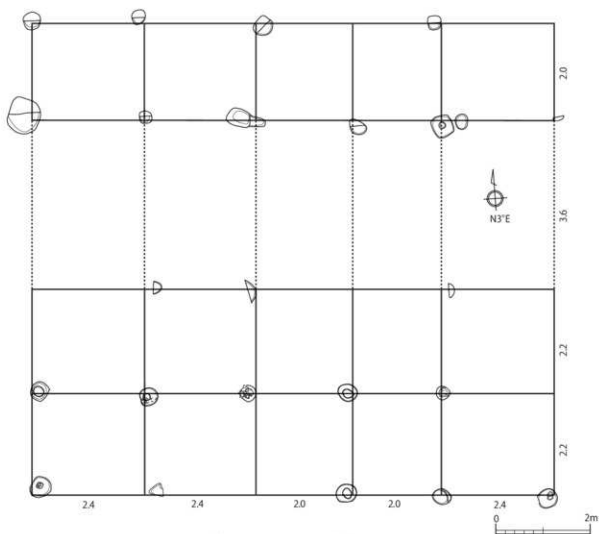
12SB145(第 52 図)

J-18-t・w-13・14 区で検出した。遺構検出標高は北側で 4.6 m、南側で 4.1 m である。切り合いの関係は 12SX093 などに切られる。建物プランは南北に長い長方形で、建物本体の梁行 2 間、桁行 7 間で身舎面積約 56 m² である。西側に 0.9 m 幅の縁もしくは底が取り付くものと推定される。また桁行は北から 4 間目が他よりも少し幅が広くっており、3.1 m を測る。そのほかの柱間距離は 2.0 m 前後(約 7 尺)である。建物主軸方位及び柱間距離は図示している。また縁等が考えられる西側の南北柱穴列には柱穴内礎石はないが、建物本体の柱穴内には礎石が確認される。柱穴が確認されていない箇所は攪乱等の影響で検出されていない。また柱穴埋土は灰色シルト系が主である。建物東側ラインのほとんどは、館 25 次調査で検出している。

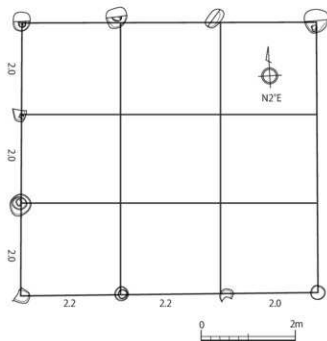
出土遺物は、すべて土師質土器小皿と坏である。1 ~ 3 は小皿、4・5 は坏である。すべて i の pit(S183) より出土した。



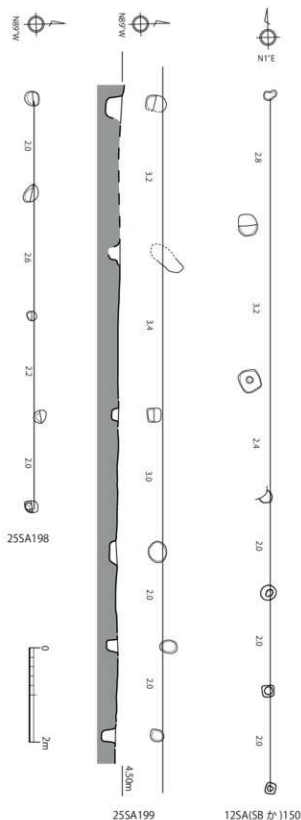
第 52 図 12SB145 平面 (1/80) 及び断面 (1/40) 及び遺物 (1/4) 実測図



第 53 图 125B050 平面实测图 (1/80)



第 54 图 125B045 平面实测图 (1/80)



第55図 25SA198 遺構(1/80)及び25SA199 遺構(1/80)及び12SA(SB)150 遺構(1/80)実測図

12SB050(第53図)

J-18-r ~ u-16 ~ 18 区で検出した。遺構検出標高は北側で4.5 m、南側で4.3 mである。切り合いの関係は12SE024や12SE026、25SK001等に切られる。建物プランはほぼ正方形で、東西5間、南北4間で身舎面積約112 m²である。検出した柱穴はほとんどが直径0.2 mほどの円形である。建物主軸方位及び柱間距離は図示している。柱間距離はバラつきがあるが、概ね2.1 m前後である。また南北軸で北から2間目の柱間幅は広く3.6 m前後を測る。柱穴内には礎盤石が確認できるものもあり、一部は安山岩製砥石を転用して使用しているものもある。一部の礎盤石は検出面に露出しているものもあり、削平をうけていることがわかる。柱穴埋土は灰色シルト系が主である。

出土遺物は良好なものはないが、12SB050に切られる遺構から、龍泉窯系青磁皿I類や白磁碗IX類などが出土している。

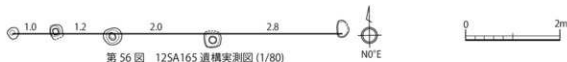
12SB045(第54図)

J-18-s・t-14 ~ 16 区で検出した。遺構検出標高は北側で4.7 m、南側で4.3 mである。切り合いの関係は、ビットや土坑にほとんどが切られ、12SB050と重複する。建物プランは東西がやや長い正方形で、梁行3間、桁行3間の側柱建物跡で、身舎面積約38 m²である。建物東側のライン上に柱穴は確認できなかった。検出した柱穴はほとんどが直径0.2 mほどの円形である。建物主軸方位及び柱間距離は図示している。柱間距離はバラつきがあるが、概ね2.1 mである。柱穴埋土は灰色シルト系が主である。

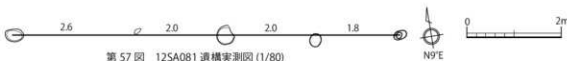
出土遺物は土師質土器小片である。

25SA198(第55図)

J-18-t-15 ~ 18 区で検出した。遺構検出標高は4.5 mである。12SA150の西側で検出され、12SB050と重複する。25SK001に西端のビットが切られる。軸は東西方向に延びる4間である。柱間距離は西側から2間目がやや長い他はほぼ間隔は同じである。この遺構は柱穴を半載しており、検出面から底まで、0.13 ~ 0.19 mの深さを確認している。柱穴埋土は灰茶色粘質土である。この柱穴列は、南北には展開せず、さらに東西には関連する柱穴の延長は確認できなかったことから、現状規模の柵跡と推定



第 56 図 12SA165 遺構実測図 (1/80)



第 57 図 12SA081 遺構実測図 (1/80)

される。

出土遺物はほとんどない。

25SA199(第 55 図)

J-18-u ~ v-15 ~ 18 区で検出した。遺構検出標高は 4.5 m である。切り合いの関係は、25SK005 などの遺構に切られ、25SE015・105 を切る。軸はほぼ真東西となる 5 間である。柱間距離は西側で 3 m を超えておりやや開くが、東側は 2 m ほどである。この遺構は柱穴を半載して掘り下げた。遺構の深さは最も深いもので、検出面より 0.35 m である。柱穴埋土は灰茶色土である。柱痕は明確には検出できなかった。

出土遺物はほとんどない。

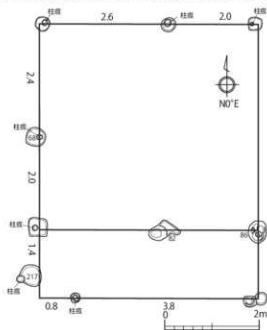
12SA150(第 55 図)

J-18-r ~ v-18 区で検出した。遺構検出標高は 4.3 m である。12SB050 や 25SA199 等と重複関係にあるが、切り合いの詳細は不明である。軸はほぼ真南北に延びる 6 間分である。柱間距離は南側で 2 m ほどであるが、北側はやや広い。この遺構の柱穴は、ほとんどを検出のみで完掘はしていないが、北側のいくつかは半載をして、北から 2 つ目の柱穴は検出面より深さ 0.4 m である。柱穴埋土は灰茶色粘質土主体である。柱痕は北から 3・5・6・7 番目の柱穴で確認された。この遺構は、西側には展開しないため、東側の調査区外に展開する建物跡、もしくは、現状で完結する棚跡であろう。

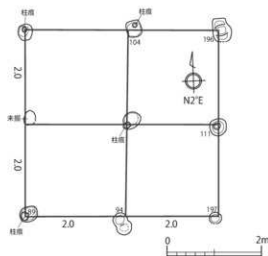
出土遺物はほとんどない。

12SA165(第 56 図)

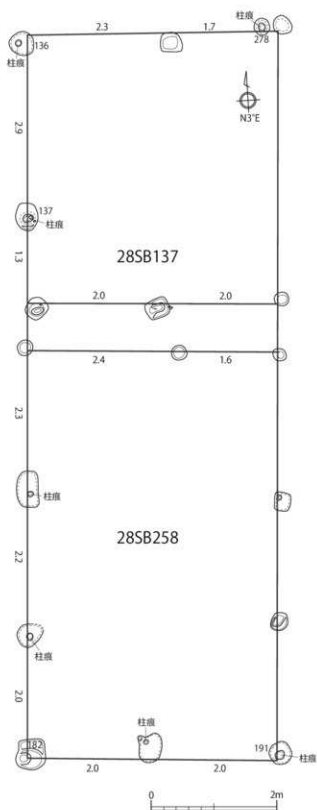
J-18-w-13・14 区で検出した。遺構検出標高は 4.6 m である。12SB145 の北側で検出され、切り合いの関係は、12SD030 を切る。軸は真東西となる 4 間分ある。柱間距離はバラつきがある。この遺構の調査は検出までで留



第 58 図 28SB068 遺構実測図 (1/80)



第 59 図 28SB104 遺構実測図 (1/80)



第60図 28SB137・28SB258 遺構 (1/60)

めた。柱穴埋土は灰茶色粘質土である。この柱穴列は、南北には展開せず、さらに東西には関連する柱穴の延長は確認できなかったので、現状の規模の遺構と推定される。

出土遺物はほとんどない。

12SA081(第57図)

T-18-r-14～16区で検出した。遺構検出標高は4.2mである。12SD090の北側で検出され、切り合いの関係は周辺の土坑ともつ。軸は真東西方向からやや北側に振れて延びる。柱間は4間である。柱間距離は西側がやや広いが、その他は差はない。この遺構は柱穴の検出までで留めている。柱穴埋土は暗灰褐色粘質土が主体である。この柱穴列は、南北には展開せず、さらに東西には関連する柱穴の延長は確認できなかったので、現状の規模の細跡と推定される。

出土遺物はほとんどない。

28SB068(第58図)

J-18-i・j-15・16区で検出した。遺構検出標高は4.1mである。28SA121の南側、28SA214の東側で検出され、切り合いの関係は28SE040に切られていると推定される。建物プランは南北に長い長方形で、梁行2間、桁行3間の側柱建物跡で、南側は1.4mほどの縁もしくは庇が付く。身舎面積約20㎡である。検出した柱穴はほとんどが直径0.2mほどの円形である。柱間距離はややバラつきがある。柱穴埋土は灰褐色シルト系が主である。

出土遺物はほとんどない。

28SB104(第59図)

J-18-i・i-17・18区で検出した。遺構検出標高は4.1mである。28SB068の東側で検出され、切り合いの関係は28SK199及び28SK148に切られていると推定される。建物プランはほぼ正方形で、梁行、桁行ともに2間で、身舎面積約16㎡である。検出した柱穴はほとんどが直径0.2mほどの円形である。柱間距離は約2mで、6尺5寸間と想定される。柱穴埋土は灰褐色シルト系が主である。

出土遺物はほとんどない。

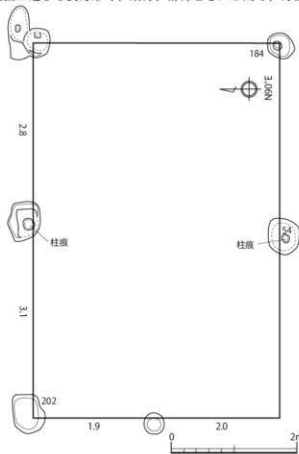
28SB137・258(第60図)

J-18-i・K-14区で検出した。遺構検出標高は北側で4.5m、南側で4.4mである。28SB054の東側で検出され、複数の土坑とビットと、重複関係をもつ。ここで、SB137とSB258はほぼ同軸で、埋土等からも考

えて、ほぼ同時期の遺構である可能性が高く近接しているため、あわせて報告する。まず SB137 建物プランは南北にやや長く、梁行、桁行ともに 2 間で、身舎面積約 17 m²である。柱間距離はややバラつきがある。検出した柱痕はほとんどが直径 0.2 m ほどの円形である。SB258 は SB137 の南辺から 0.8 m 離れている。SB258 の建物プランは南北に長く、梁行 2 間、桁行 3 間で、身舎面積約 26 m²である。柱間距離はややバラつきがある。検出した柱痕はほとんどが直径 0.2 m ほどの円形である。底面まで掘り下げた SP182 で遺構深さは検出面より 0.4 m である。

28SB054(第 61 図)

J-18-i・j-12・13 区で検出した。遺構検出標高は 4.4 m である。28SB258 の西側で検出された。建物プランは東西に延びる長方形で、梁行、桁行ともに 2 間で、身舎面積約 23 m²である。検出した柱痕は直径 0.2 m ほどの円形である。柱間距離はバラつきがある。埋土は茶灰色粘質土である。



第 61 図 28SB054 遺構実測図 (1/60)

出土遺物は SP202 から玉砂利、SP54・184 から土師器小片が出土している。

28SA121(第 62 図)

J-18-j-16 ~ 18 区で検出した。遺構検出標高は 4.5 m である。28SB068 や 28SB104 の北側で検出され、切り合いの関係は 28SE045 に切られる。軸は東西方向に延びる 3-4 間である。柱間距離は西側がやや広いが、遺構に切られているものと推定される。柱痕は約 0.2m の円形である。柱穴埋土は茶灰色埋土である。この柱穴列は、南北には展開せず、さらに東西には関連する柱穴の延長は確認できなかったので、この規模の棚跡と推定される。

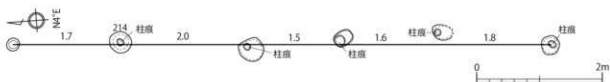
出土遺物はほとんどない。

28SA214(第 63 図)

J-18-h ~ j・14 区で検出した。遺構検出標高は 4.4 m である。28SB068 の西側、28SB258 の東側で検出され、土坑やビットなどと重複関係をもつ。軸は南北方向に 5 間分を確認した。柱間距離はバラつきがある。この遺構は柱穴を検出までで止めたため、断面図は示していない。柱痕は約 0.2m の円形である。柱



第 62 図 28SA121 遺構実測図 (1/60)



第 63 図 28SA214 遺構実測図 (1/60)

穴埋土は茶灰色土である。この柱穴列は、東西には展開せず、さらに南北には関連する柱穴の延長は確認できなかったため、この規模の櫓跡と推定される。

出土遺物は214から京都系土師器と想定されるものもあるが、小片のため断定できない。

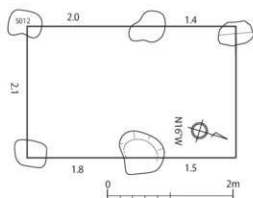
31SB012(第64図)

J-18-q・r-1・2区で検出した。遺構検出標高は4.1mである。切り合いの関係は33SX085に切られる。建物プランは南北に延びる長方形で、梁行1間、桁行2間で、桁行は南か北側へ延びる可能性がある。身舎面積約 $8+\alpha$ ㎡である。柱間距離はバラつきがある。埋土は褐黄色土である。遺構の深さは浅く、検出面より0.3～0.5mほどである。北東側の柱穴は切られており、確認されていない。

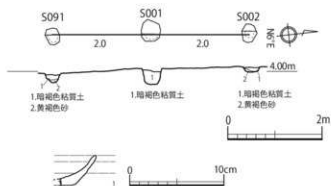
出土遺物は、S012より土師器小片が出土した。

33SA001(第65図)

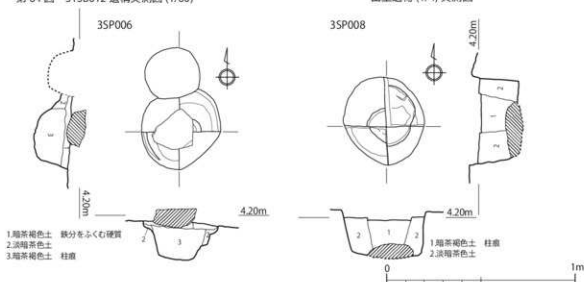
J-18-s・t-5区で検出した。遺構検出標高は4.1mである。33SX085や33SD088の西側で検出され、切り合いの関係は33SX085に切られる。軸は南北方向に2間延びる。柱間距離は約2mで、6尺5寸となる。この遺構はS001の柱穴で、検出面より深さ0.2mである。柱痕は不明であった。柱穴埋土は暗褐色土である。



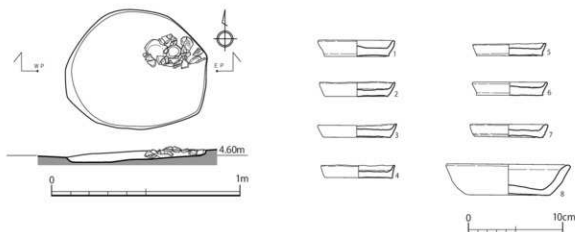
第64図 31SB012 遺構実測図 (1/60)



第65図 33SA001 遺構 (1/80) 及び出土遺物 (1/4) 実測図



第66図 3SP006・3SP008 遺構 (1/20) 及び断面 (1/20) 実測図



第 67 図 12SP020 遺構・断面 (1/20) 及び出土遺物 (1/4) 実測図

出土遺物は、図示の土師器坏片が出土した。

その他のビット

3SP006(第 66 図) は、J-13-u-22 区で検出した。検出標高は 4.3m である。0.3 m ほど掘り込んでいる。上部で礎石と推定される石を検出した。図の第 3 層を柱痕としているが、廃絶時に礎石が動いたのか、もしくは第 3 層が礎石を固定するための粘土とも考えられる。また 3SP008(第 66 図) は、J-13-u-23 区で検出した。検出標高は 4.2m である。第 66 図から第 1 層が柱痕であり、その下に柱穴内礎石を置いている状況である。第 2 層は裏込めと推定される。SP006 と SP008 は検出位置が近く、埋土が暗茶褐色土と類似するため、関連する遺構の可能性が高い。

12SP020(第 67 図) は、J-18-u-13～14 区で検出した。検出標高は 4.5m で、平面プランは楕円形で、長径 0.8m となる。SB145 を構成するビットを切っている。1ヶ所から土師器がまとめて出土した。遺構埋土は淡茶灰土、遺物集中箇所は灰褐色土である。

出土遺物の 1～7 は土師器小皿で、8 は坏である。

【小結】

建物跡、柵跡関連の遺構として建物跡と柵跡で 17 基を詳細報告した。ここでそれぞれの遺構の時期を述べる。まずそれぞれの建物跡からの出土遺物は少ないため、すべての遺構を土器により時期判別することは難しいため、遺構の切り合い等による分類をし、検討する。

まず館 I 期に該当する遺構として、12SB035、12SB145、12SB050 などが挙げられる。これらは方位軸なども類似しており、遺構の配置状況から、同時期の建物跡として捉えたい。建物跡は柱穴内に礎石をもつ構造で類似し、柱痕も 0.1～0.2m ほどの角柱との所見がある(大分市教委 2002『大分市市内遺跡確認調査概報』)。さらに、今回は詳細報告をしていないが、25SK030 や同 178 等はかわらけの一括廃棄土坑としても考えられ(大分市教委 2012『大分市市内遺跡確認調査概報』)、22SK031 や同 034 など(大分市教委 2011『大分市市内遺跡確認調査概報』)も類似遺構と考えられる。これら建物跡と廃棄土坑の時期は館 I 期段階に相当し、建物跡群とかわらけ廃棄土坑の関連性があると推定される。

また前述した建物跡群の北西には 12SD030 や同 060 の遺構は、雨落ち溝等と考えられ、建物跡との関連が指摘されている(大分市教委 2002)。

さらに 12SA165 の柵跡も方位軸等の関係からこれら建物跡との関係性もあると推定されるが、この 12SA165 は 12SD030 と切り合いをもち、前者が後者を切ることがわかっているため、近接する時期のものと考えられる。

12SB045 については、12SB050 と重複するため、新旧関係があるが、埋土や構造等から館Ⅰ期～Ⅱ期の範疇で捉えられると思われる。12SA150 に関しては、出土遺物からの時期比定は難しいが、館Ⅰ～Ⅱ期の 12SB045 と方位軸が直交することから、同時期であると理解されている（大分市教委 2012）。ただこの遺構は調査区の端での検出であることから、櫓跡の他に、東側に展開する掘立柱建物跡の可能性も含めて考えておきたい。

また、述べてきた館Ⅰ期段階の建物の柱穴埋土は焼土や炭化物などが多量に含まれており、一部建物の柱穴内の礎石も被熱が認められるため、これら建物群は火災などによる廃絶が推定される。

南東で検出された 28SB068、28SB104、28SB137、28SB258、28SB054 さらに、28SA121 や 28SA214 等は、重複関係はなく、方位軸がそれぞれ類似し、その他遺構の切り合い等から、15 世紀代中葉～後葉の館Ⅱ期～Ⅲ期段階の建物跡と推定される。

25SA199 は、それぞれピットから良好な遺物は出土していないが、その他の遺構との 15 世紀後葉の遺構を切り、16 世紀末葉の遺構に切られるため、館Ⅳ～Ⅴ期の時期であろう。また 25SA198 もほぼ同じ方位軸を示すことから、関連する可能性がある。

31SB012 は他のピットと比べて、遺構埋土が極端に浅いため、掘立柱建物跡のほかに、礎石等の抜き取りの可能性も含めて考えておきたい。時期比定は難しいが、後述する館Ⅴ期段階の 33SX085 に切られるため、館Ⅳ期を含めて以前のものであろう。33SA001 は、3 つのピットから構成されるが、出土遺物から 15 世紀後葉～16 世紀前葉の範疇と考えられ、館Ⅲ期段階であろう。3SP006 や同 008 の柱穴内礎石の時期は不明としていたが（大分市教委 2000『大分市埋蔵文化財調査年報』）、その構造から館Ⅰ～Ⅲ期の時期幅で考えておきたい。

12SA081 も良好な出土遺物はないが、方位軸等から後述する館Ⅴ期段階の 12SX070 と類似するため、館Ⅴ期段階に位置づけられよう。

以上が時期別変遷であるが、館Ⅴ期段階の庭園跡と関連する遺構を挙げるとすれば、25SA199、25SA198、12SA081 等であろう。

(2) 井戸跡

井戸跡は今回の報告範囲の中で、14 基が検出されている。井戸の設置位置は、時期や空間利用により異なるが、庭園に関係する井戸跡も配置状況から存在する。また館内東側には、館が廃絶した後の館Ⅵ期とされる町屋が復興する段階の井戸跡も検出されている。各井戸跡の時期等は小結で述べる。

12SE024(第 68 図)

J-18-s・t-15・16 区で検出した。検出標高は 4.3m である。切り合いの関係は 12SB045 や 12SB050 を切る。平面は楕円形を呈すが、北側は未掘である。規模は長軸 3.8m、短軸 1.6m、深さ 2.9+αm を測る。

出土遺物は、土師器や陶器、銅銭などが出土している。1～3 は京都系土師器皿片、4 は朝鮮産褐釉陶器皿、5 は白磁皿、6 は陶器片、7 は備前焼花入、8 は備前焼掃鉢、9 は土師質土器鉢片、10 は銅銭である。5 は 12SK025 や 12SE080 の資料と同一個体と考えられるものがある。また 12SK025 の出土遺物の瓦質土器鉢片なども、当遺構出土遺物と同一個体と考えられる。さらに 9 は 12SK085 出土資料（第 85 図 2）と同一個体とも捉えられる。

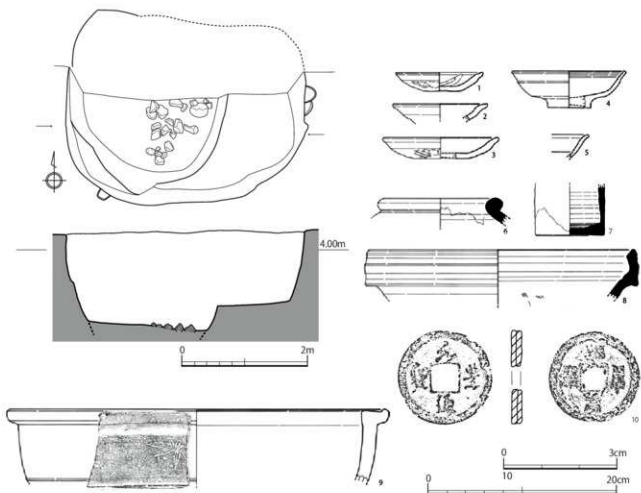
12SE026(第 69 図)

J-18-s-17 区で検出した。検出標高は 4.3m である。切り合いの関係は 12SB050 等を切る。平面形状は円形を呈す。規模は、長軸 3.2m、短軸 3.0m、深さ 2.0m を測る。井戸底部は標高約 2.2 m で、土層図第 4 層が水分を

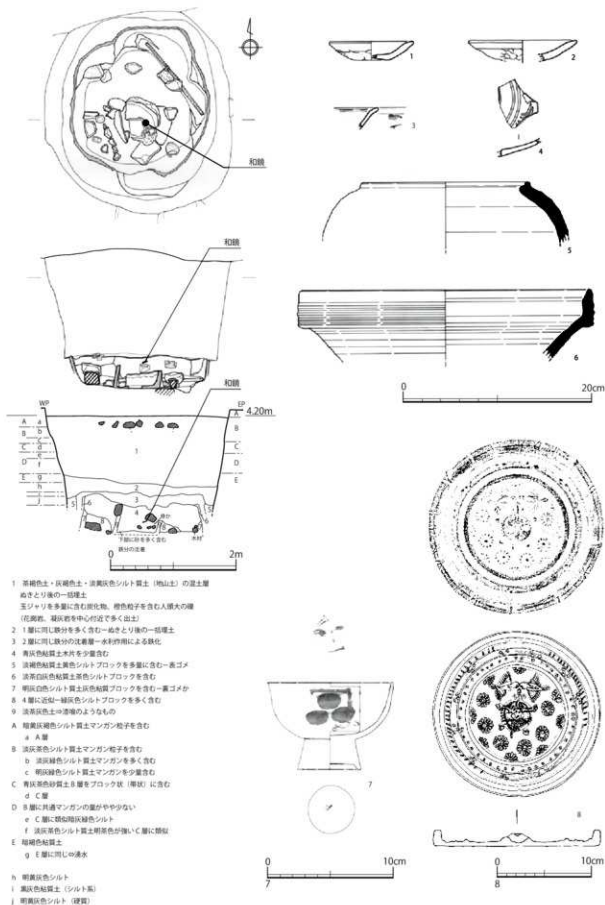
多く含むシルト質土であり、この状況から、標高 2.6～2.7 m くらいまで当時の井戸水の水面があったものと考えられる。検出面から約 1.6m のところで、平面プラン形状の井戸枠が確認できる。井戸枠は砂と粘土を混ぜて互層にしてつくられた漆喰状のもので、当初、枠としての板材が抜き取られた所に鉄分が固着して井戸枠状になったものと考えていたが、中央に同様の素材で作られた箱状の水溜め部が確認され、同じ素材で井戸枠も構築されていることがわかった。井戸枠の内側には、礫や木材などが確認でき、井戸枠を固定したものと考えられる。水溜め部分の周囲と下部にも礫が確認でき、水溜め部の固定と土台として置かれたものと考えられる。こうした構造の井戸跡としては、中世大友府内町跡の推定唐人町に比定されている調査地点（町 14 次調査）でも確認されている。

埋没状況は、井戸枠検出面から一気に埋め戻されており、その埋土の下部は漸次的に鉄分の沈着が認められる。この最下部では完全に鉄分が固着した層となり、厚いところでは 20cm を測る。この鉄分層の下には、グライ化した青灰色粘質土が堆積し、ここから漆器椀・下駄をはじめとする木製品や木片が出土している。さらに井戸枠中央付近からは和鏡（菊花双鳥文鏡）が出土している。周囲には小形の曲物が確認できるが、鏡との関係は不明である。しかしながら青灰色粘質土の上部で鏡を検出していることから、この鏡は井戸廃棄時の祭祀に用いられた可能性がある。

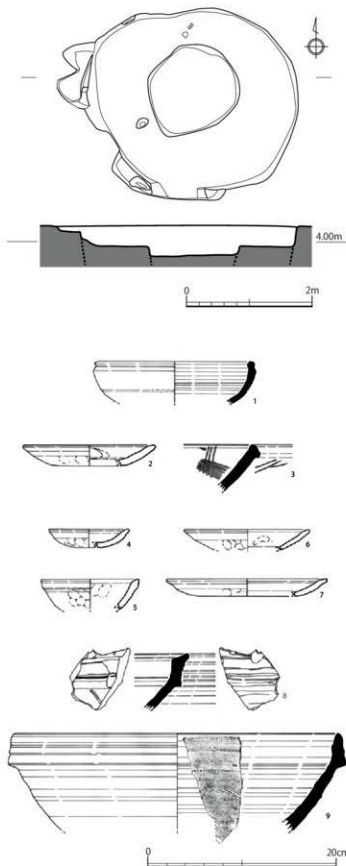
出土遺物は、土師器や陶器、和鏡などが出土している。1・2 は京都系土師器片、3・4 は中国染付皿片か、5 は備前焼水屋裏、6 は備前焼播鉢、7 は漆器椀である。土器以外の出土遺物に、12SE026 青灰色粘質土から出土



第 68 図 12SE024 遺構 (1/60) 及び出土遺物 (1/1・1/4) 実測図



第69図 125E026遺構(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図



第70図 12SE080 遺構(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図

した和鏡「菊花双鳥文鏡」(第69図8)がある。直径8.9cm、厚みは0.2cmを測る。周縁の高さは0.85cm、幅は約0.5cmを測り、外区・内区とも約1.5cmを測る。鈕座は亀形鈕で表面には六角形の花亀甲文が描かれ、1つの亀甲文の中には花文が退化したと考えられる珠文がわずかにみられる。内区には、亀の上方に2羽の鳥が互いのくちばしと亀の頭を接するようにして配置されている。その周りに菊文が均等に散りばめられている。外区は3重になっており、外側に退化した幅縁文帯、中央には3つの点で構成された文様が一部つぶれているが、12等分するように均等に配置される。内側は珠文帯となる。このような外区を幅広くとり、珠文帯などを重ねてめぐらすといった、中国・漢代の鏡を模した和漢折衷様式の鏡は「擬漢式鏡」と言われ、14世紀から16世紀頃までみられるものである。内区の花亀甲文や散らし文、鈕上方で向かい合って飛ぶ双鳥文なども14世紀に一般化する意匠であるが、当資料の場合、各文様はかなり退化しており、こうした和鏡の中でも新しく位置付けられ、16世紀代のものと考えられる。

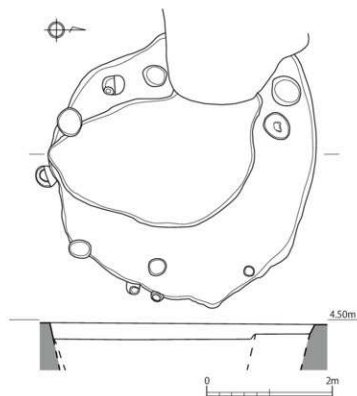
12SE080(第70図)

J-18-q・r-17・18区で検出した。検出標高は4.3mである。切り合いの関係は12SX070等を切る。平面は円形を呈し、掘り下げはしていない。規模は、長軸3.8m、短軸3.0m、深さ0.8+αmを測る。

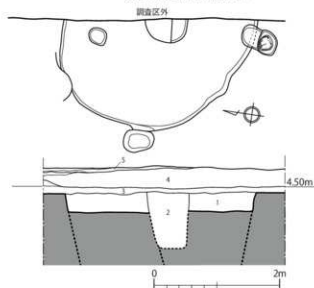
出土遺物は、土師質土器や国産陶器などが出土している。1は備前焼鉢片、2・4～7は京都系土師器で、2・6・7は皿、4は小皿、5は椀で、3は須恵質土器擂鉢、8・9は備前焼擂鉢片である。特に、当遺構の最終埋没土からの出土遺物と12SK025出土遺物(第82図4)と遺構間接合している。

25SE015(第71図)

J-18-v-17・18区で検出した。検出標高は4.4mである。切り合いの関係は25SE025や25SA199に掘り込まれる。完

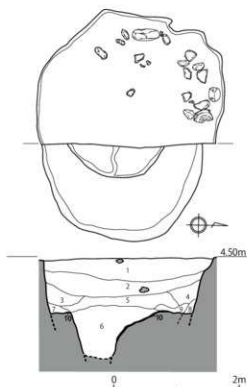


第71図 25SE015 遺構(1/60)
及び出土遺物(1/4)実測図



1. SE105埋土 暗灰褐色粘質土
2. 内埋土 暗褐色粘質土・ブロック土を多く含む
3. 暗灰褐色粘質土 玉砂利・小礫を多く含む
焼土・炭化物を含む
16世紀末の整地層か
4. 暗褐色粘質土 玉砂利を含む
5. 明茶褐色粘質土 鉄分多い・近世水田基盤層

第73図 25SE105 遺構実測図(1/60)



1. 茶灰色粘質土 しまり強い 小礫・玉砂利を多く含む
黄土ブロックを含む
2. 灰茶色粘質土 しまり強い 礫・玉砂利を多く含む
黄土ブロックを含む
3. 明茶褐色粘質土 しまり強い 玉砂利を含む
4. 3層に類似
5. 黄茶色粘質土 ガチガチに固い 鉄分を多く含む
6. 暗灰褐色粘質土 玉砂利少し含む
7. 暗茶灰色粘質土 玉砂利少し含む
8. 褐灰色粘質土 玉砂利少し含む
9. 明灰色粘質土 玉砂利少し含む
10. 5層に類似

第72図 25SE025 遺構実測図(1/60)

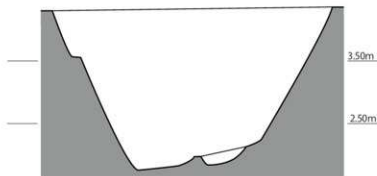
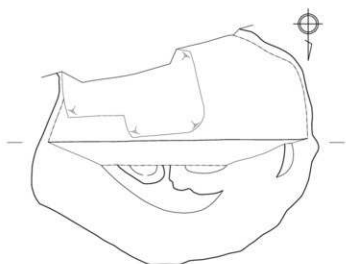
掘はしていないが、規模、平面プラン、埋土の状況から井戸跡と判断した。平面はやや不定形な隅丸方形状を呈している。規模は、長軸 4.1m、短軸 4.0m、深さ 1.0+αm を測る。

出土遺物は、1 は土師質土器鉢、2 は龍泉窯系青磁碗である。

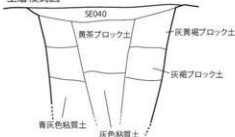
25SE025(第72図)

J-18-u-18 区で検出した。検出標高は 4.5m である。切り合いの関係は 25SE015 より新しく位置づけられる。遺構の東側半分を検出面より 1.6 m 下まで掘り下げた段階で止め、完掘はしていない。平面形状は長方形形状を呈す。規模は東西軸 4.1m、南北軸 2.8m、深さ 1.6+αm を測る。遺構埋土は図示のとおりであり、上層から玉砂利が多く出土している。井筒部の検出標高は約 3.6m である。構造は最下部まで掘り下げていないため不明である。

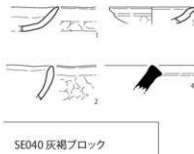
出土遺物は、図示していないが京都系土師器血片



土層模式図



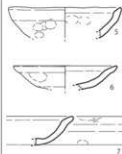
SE040



SE040 灰褐ブロック



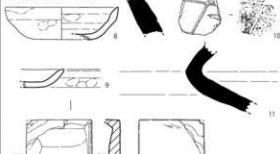
SE040 灰黄褐色ブロック



SE040 灰色粘質土



SE040 黄茶ブロック



第74図 28SE040 遺構(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図

や瓦片が多く出土している。

25SE105(第73図)

J-18-v-17・18区で検出した。検出標高は4.4mである。切り合いの関係は25SA199に切られ、16世紀後半の整地層(第3層)に覆われる。平面は東側が調査区外のため未掘であるが、おそらく円形状を呈す。規模は南北軸3.1m、東西軸1.8+am、深さ1.3+amを測る。

出土遺物は、在地系土師器小片(坏A)や鉄釘片等がある。

28SE040(第74図)

J-18-j・k-16・17区で検出した。検出標高は4.4mである。遺構の南側は調査区外である。切り合いの関係としては、一部攪乱に切られ、ビット等と重複関係がある。埋土は、井筒部が黄茶色粘質土でブロック土を含み、裏込め部もブロック土を多く含んでいる。平面は円形状を呈すと思われる。規模は、東西軸4.6m、南北軸3.2+am、深さ2.7+amを測る。

出土遺物は、土師質土器や瓦質土器、国産陶器などが出土した。1・3・5・9は土師器で、1・5・9は京都系土師器皿、2は京都系土師器碗、3は灯明皿か。4・10・11・13は備前焼で、4は鉢片か。10・11・13は裏、14は瓦質土器揃鉢、12は石製品で、赤間石製硯であり使用痕がある。

28SE045(第 75 図)

J-18-j・k-16・17区で検出した。検出標高は4.4mである。切り合いの関係は28SA121と重複し、28SA121のビット列が当遺構の箇所では確認できないため、当遺構が28SA121を切っていると推定される。そのほか、ビット等を切ったり、切られたりする。埋土は、井筒部が黄茶色粘質土でブロック土を含み、裏込めは灰黄褐色粘質土でブロック土を含む。調査ではトレンチを入れたのみで、完掘はしていないため、井筒部の下部構成は不明である。平面は円形を呈す。規模は、長軸3.9m、深さ0.4+αmを測る。

出土遺物は、土師質土器や中国青花などが出土している。1～4は土師器で、1～3は在地系土師器皿、4は京都系土師器皿、5は土師質土器鍋か。6は漳州窯系青花皿である。1～3はSE045を含む周辺地点の遺構検出時に確認した資料で、SE045検出ラインと接する場所で、全て口縁部を上に向けて置かれたような状態で出土した。したがって、本遺構には直接帰属しない可能性もある。

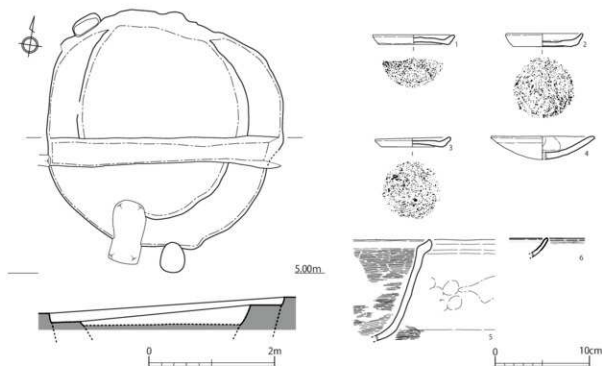
28SE095(第 76 図)

J-18-k・l-18区で検出した。検出標高は4.5mである。切り合いの関係は28SX100を切り、ビット等に掘り込まれる。平面は、東側が攪乱のため不明であるが、おそらく円形状を呈す。埋土は暗褐色粘質土で、直径5～40cm程の礫を多く含み、石塔の台座や笠等も含む。規模は、南北軸3.0m、東西軸1.5+αm、深さ0.5+αmを測り、完掘はしていない。

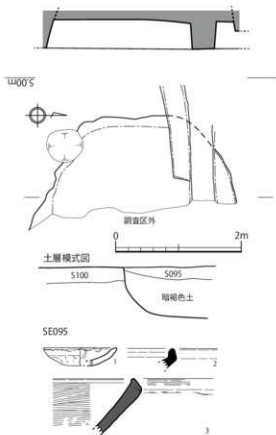
出土遺物は、土師質土器や瓦質土器、陶器などが出土している。1・4・5は京都系土師器皿で、6は在地系土師器、2は瀬戸美濃産鉢、3・8は瓦質土器鉢、7は土師質土器鍋、9は中国産白磁碗、10は中国産白磁皿、11は丸瓦である。

31SE010(第 77 図)

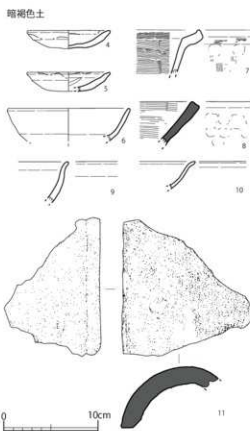
J-13-p-25区で検出した。検出標高は4.0mである。切り合いの関係はない。平面は円形を呈す。規模は、長軸2.0m、深さは井筒部の底部で、標高2.1mを測り、第77図土層第10層は、水分を含むシルト質であり、これが当時の井戸水の深さを示していると考えられることから、井戸水上面は標高約2.6mであったと推定され



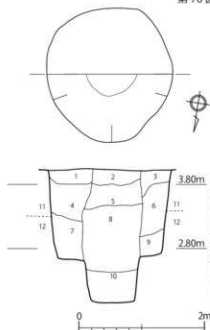
第 75 図 28SE045 遺構 (1/60) 及び出土遺物 (1/4) 実測図



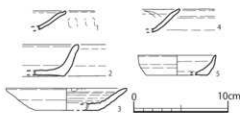
第76図 28SE095 遺構(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図



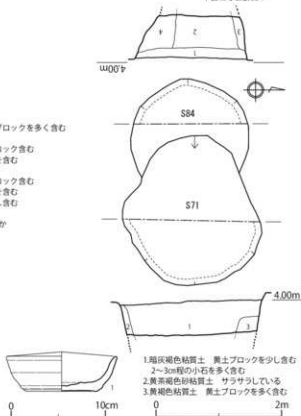
1 暗褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
2 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
3 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
4 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
5 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
6 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
7 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
8 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
9 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
10 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む
11 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む



1. 暗褐色粘質・砂質土 砂ブロックを多く含む
2. 黄褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土 黄土ブロックを含む
4. 暗褐色粘質土 ブロックを含む
5. 黄褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土 黄土ブロックを含む
7. 暗褐色粘質土 黄土ブロックを含む
8. 暗褐色粘質土 小礫少し含む
9. 6層に類似 やや暗い
10. 明灰茶色粘質土 水成堆積か
11. 地山粘砂
12. 地山砂



第77図 31SE010 遺構(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図



1. 暗褐色粘質土 黄土ブロックを少し含む
2~3cm程度の小石を多く含む
2. 黄褐色砂粘質土 サラサラしている
3. 黄褐色粘質土 黄土ブロックを多く含む

第78図 33SE071・33SE084 遺構(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図

る。埋土は図示のとおりである。

出土遺物は、土師器が出土している。1・4は京都系土師器皿片、2・3・5は在地系土師器環で、3は特にクロ目痕を強く残す。

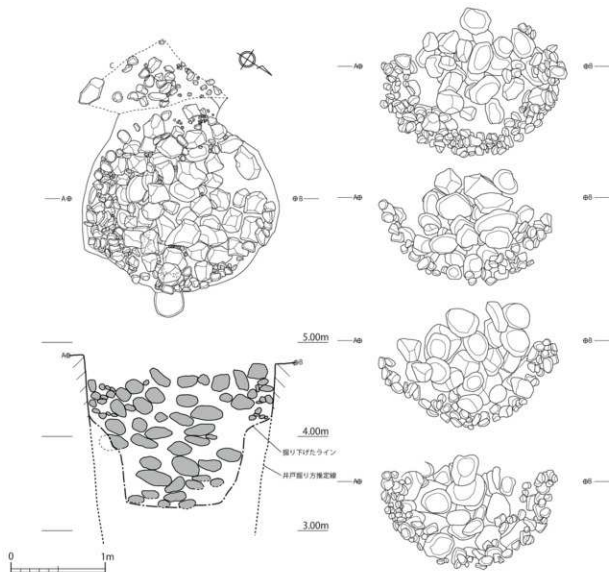
33SE071・33SE084(第78図)

J-13-u・v-24・25区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係は、33SE071が33SE084及びピット等を切る。どちらも完掘はしていないため、井筒部の下部構造などは不明であるが、埋土等の状況から井戸跡と判断した。まず、33SE071平面は楕円形状を呈す。規模は、長軸2.4m、短軸2.2m、深さ0.5+αmを測る。33SE084の平面は、円形を呈すと考えられ、規模は、南北軸1.8m、深さ0.7+αmを測る。

出土遺物は、33SE084から玉砂利が多くあり、土師器小片等もある。1は33SE084からの出土である。

34SE001(16SX075)(第79図)

J-18-x-8区で検出した。検出標高は4.8mである。切り合いの関係は周辺の整地層等を掘り込む。検出状況で人頭大の礫が中心付近に集中していた状況である。平面プランはほぼ円形であり、直径約2mである。掘り下げは遺構東側を半載して行った。検出面から約2m掘り下げたところで安全管理上中止した。図示のとおり、人頭大の礫は充填しているように見えるが、全ての石が組んでいる状況ではなく、石と石の間に土や小礫などを



第79図 34SE001遺構及び断面実測図(1/40)

挟みながら、廃棄した状況である。また井戸跡内の壁面近くには小礫が多く、集中している。またこの井戸跡の西側に小礫が貼っている箇所が認められた。

出土遺物は、京都系土師器皿が出土し、一部瓦片や埴などの破片も含んでいる。

【小結】

以上のように井戸跡は 14 基報告した。まず時期から見ていく。井戸跡は出土遺物等から時期を判定することが多くの遺構で可能であった。しかし、完掘できていない井戸跡もあり、下部構造まで確認できなかった井戸跡も数基ある。館内では、石組みの井戸跡は検出されていない。

12SE024、12SE080、25SE025、28SE040、28SE045、28SE095 等の井戸跡は切り合いの関係や、厚手の京都系土師器皿等、雄器類が埋土に混入している状況等から、天正 14 年以降の館廃絶後の可能性が高い。またこれら井戸跡は館内東側に集中しており、周辺には復興後の町屋建物跡等も確認されることから、これらの町屋に關係する井戸跡と考えられる。これらの井戸跡の中で、12SE026 は厚手の京都系土師器等が出土するが、井戸下部構造の材として漆喰状のものを使用し、井戸機能時もしくは廃絶時に菊花双鳥文鏡を埋置している。時期については、鏡を埋置するような丁寧な状況がみられることから、館機能時の可能性もあり、12SE026 の上限で館Ⅴ期の新段階までと考える。

31SE010 は報告範囲の西側で検出されており、出土土器は少ないながらも薄手の京都系土師器等の出土から、16 世紀前葉～中葉頃の館Ⅲ 2～Ⅳ期段階と位置づけられる。

また 33SE071・084 の切り合いを持つ井戸跡は下部構造を検出できていないが、埋土等の状況から井戸跡の可能性が高いと判断した。33SE084 の出土土器から 15 世紀後半頃に位置づけられる。

34SE001 について、出土遺物はほとんどないが、切り合いの関係等から、16 世紀中葉～後葉頃と判断される。この井戸跡からは人頭大礫と拳大の礫が多量に出土しているが、石を組んでいる状況は見られず、間に埋め土などを挟んでいる状況が確認できるため、石組み井戸ではなく、石のほとんどが廃棄時のものと判断される。また井戸跡の西側一部には整地土上面に拳大の小礫を貼っているような箇所があり、34SE001 と同時期と判断される。周辺は攪乱等によって壊されているが、井戸内から出土した多くの小礫は、34SE001 の周囲に貼られていたものとも考えられる。人頭大の礫については扁平なものが多く、周辺の柱の礎石として用いられた可能性もある。

これら井戸跡の中で館Ⅴ期に關係する可能性が高いものは、12SE026 や 34SE001 と考えられる。特に、12SE026 は館Ⅴ期段階の園池跡の東側から延びる溝跡 12SD090 の近くであり、この溝跡との関連が考えられるが詳細は第Ⅴ章第 2 節で述べる。また 34SE001 も 33SD088 の溝跡の付近にあたり、この溝跡との関連性が窺える。これについても詳細は後述する。

さらに井戸跡について、下部まで掘り下げた井戸底に注目すると、概ね井戸底の標高 2.0 m 付近であり、その直上には水分を多く含むシルト質の灰色層が 0.5～0.6m ほど堆積している。こうした状況から、当時の井戸水の水位が標高 2.5～2.6 m であったことが考えられ、当時の井戸水位の復元を行うに当たり、参考となる。

(3) 土坑

今回の報告において、土坑は数多く確認されているが、ここで詳細に取り上げるのは36基である。館1次調査から順に述べていき、遺構の詳細時期等は小結でまとめる。

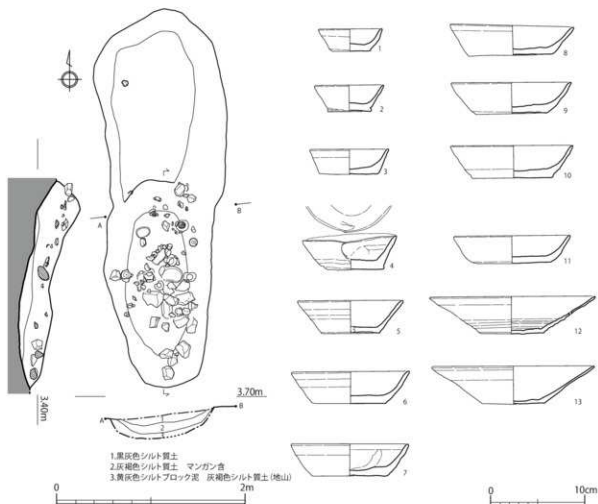
15K008 (第80図)

J18-q～r-10区で検出した。検出標高は北側で4.0m、南側で3.3mである。切り合いの関係はSG003に遺構の南側を切られる。平面プランは、南北に長い楕円形状を呈し、長軸で4.0m、東西土層断面軸で1.1mを測る。また土坑内の真ん中あたりで、段差があり、遺構底面は北側が一段高くなり、北側と南側の底面レベルの最大差は約0.4mである。埋土は図示のとおりで、レンズ状に堆積する。土坑内の南側で遺物が多量に出土している。

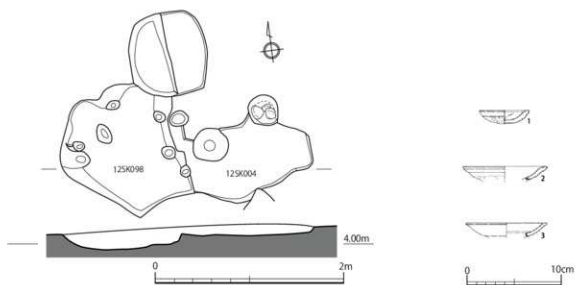
出土遺物は1～14を図示しており、すべて土師質土器である。1～3は在地系の小坏、4～11は在地系坏、12～14は胎土が白色を呈するもので、器壁は薄く、内外面に工具痕を螺旋状に残す、いわゆる大内系の白色系土師質土器である。

12SK004・12SK098(第81図)

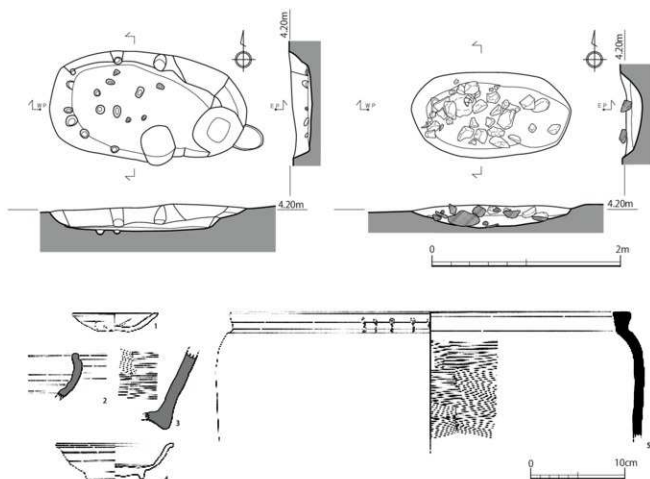
J-18-t-13区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係は、12SD005や12SB145を切る。また、12SK004と12SK098との関係は両方合わせた検出面で12SK004の大部分がみえ、0.1m下げたところで



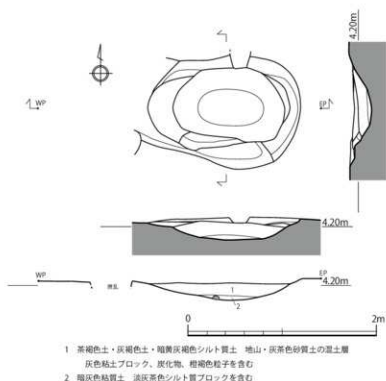
第80図 15K008遺構・土層断面(1/40)及び出土遺物(1/4)実測図



第 81 図 12SK004 遺構 (1/40) 及び 12SK098 遺構 (1/40) 及び出土遺物 (1/4) 実測図



第 82 図 12SK025 遺構 (1/40) 及び出土遺物 (1/4) 実測図



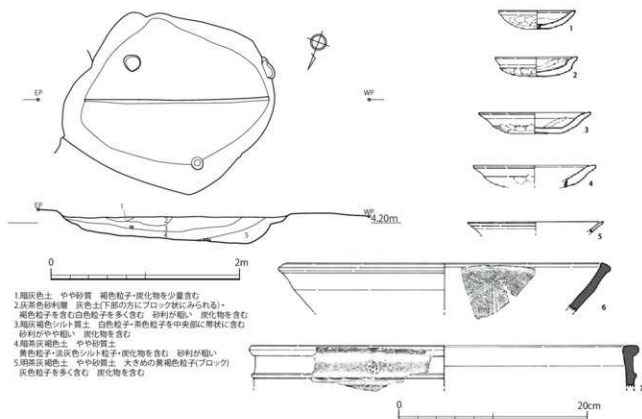
第 83 図 12SK031 遺構実測図 (1/40)

12SK098 が検出された。12SK004 の平面は東西に長いやや不定形な楕円形形状を呈す。規模は、東西軸 1.4m、東側南北軸 0.8m、深さ 0.1m を測る。底面はフラットな形状である。また、12SK098 は不定形であり、規模は、東西軸 1.6m、南北軸 1.2m、深さ 0.2m を測る。埋土は淡灰色土であり、底面はレンズ状に凹み小ビット状のものが複数確認される。

出土遺物は少量である。1・2 は京都系土師器皿、3 は産地不明陶器皿である。

12SK025 (第 82 図)

J-18-s-14 区で検出した。検出標高は 4.2 m である。切り合いの関係は、12SB035 の柱穴を切る。平面は楕円形を呈す。規模は、長軸 2.1m、短軸 1.1m、深さ 0.3m を測る。埋土は暗灰褐色土で、2 次被熱の礫を多く含む。底面はフラット



第 84 図 12SK065 遺構 (1/40) 及び出土遺物 (1/4) 実測図

トで小ピットが確認される。

出土遺物は、土師質土器や白磁、国産陶器などが出土している。1は京都系土師器皿、2は白磁碗で口縁端部を大きく外反させる。3は備前焼鉢片、4・5は瓦質火鉢である。5は口縁部がやや内湾し、口縁上面はフラットである。内面はヨコ方向にハケ状工具で調整を行っている。

12SK031 (第83図)

J-18-s-15区で検出した。検出標高は4.2mである。切り合いの関係は溝状遺構等を切る。平面は楕円形を呈す。規模は、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.4mを測る。埋土は図示のとおりである。底面は中心が深く、レンズ状に凹む。中段に部分的にテラスが付く。

出土遺物は図示できるものはないが、京都系土師器皿小片が出土している。

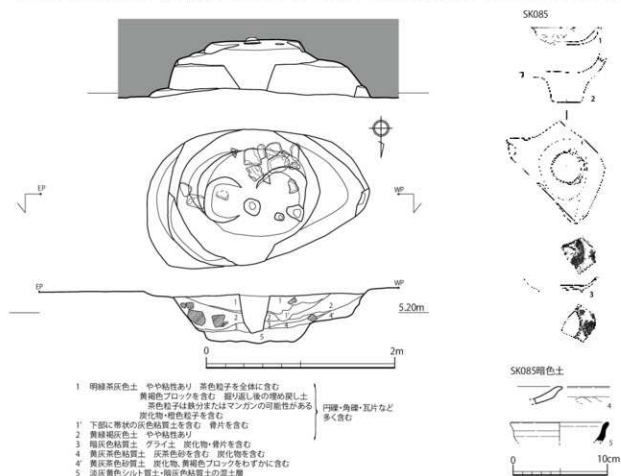
12SK065 (第84図)

J-18-r-16区で検出した。検出標高は4.3mである。切り合いの関係は12S069や12S075を切る。平面は不定形な隅丸形状を呈す。規模は、東西軸2.2m、南北軸1.9m、深さ0.4mを測る。埋土は図示のとおりで、底面は西側が深くなる。

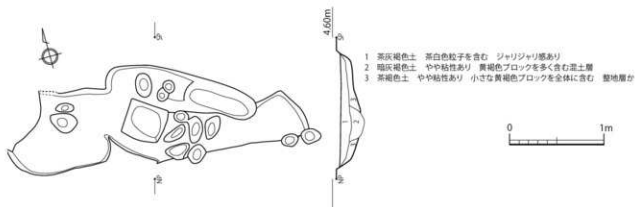
出土遺物は、土師質土器や瓦質土器、白磁などが出土している。1～4は京都系土師器皿で、2などの器壁は厚い。5は中国産白磁片、6は瓦質土器鉢鉢、7は瓦質土器火鉢で、口縁外面に2条の突帯間に花文スタンプを施す。

12SK085 (第85図)

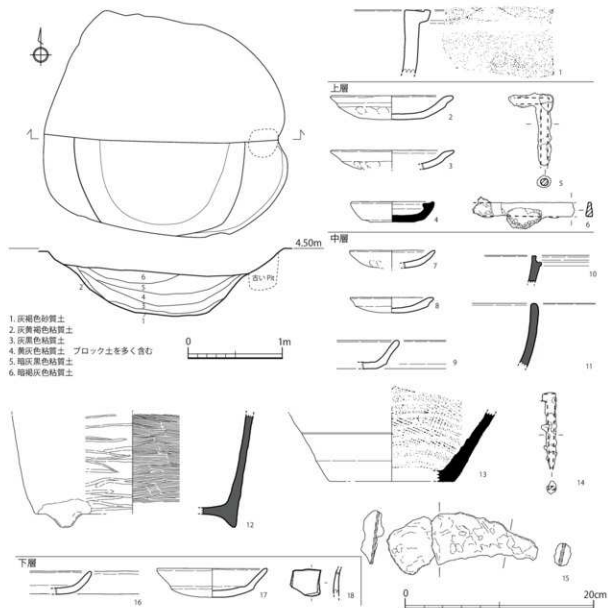
J-18-r-15区で検出した。検出標高は4.2mである。切り合いの関係は溝状遺構や12S072などを切り、中心



第85図 12SK085 遺構(1/40)及び出土遺物(1/4) 実測図



第 86 図 12SK122 遺構実測図 (1/40)



第 87 図 25SK001 遺構 (1/40) 及び出土遺物 (1/4) 実測図

付近をビットに切られる。平面形状は楕円形を呈す。規模は、長軸 2.4m、短軸 1.4m、深さ 0.5m を測る。埋土は図示のとおりで、レンズ状に堆積し礫を多く含む。土坑内西側と東側にはテラスが付く。最深部は土坑中央部で底面はフラットである。

出土遺物は、土師質土器や磁器などが出土している。1・4 は京都系土師器皿片、2 は土師質土器鉢の脚付底部、3 は景德鎮窯系染付皿、5 は瀬戸美濃産天目茶碗片である。その他に瓦片なども出土している。

12SK122 (第 86 図)

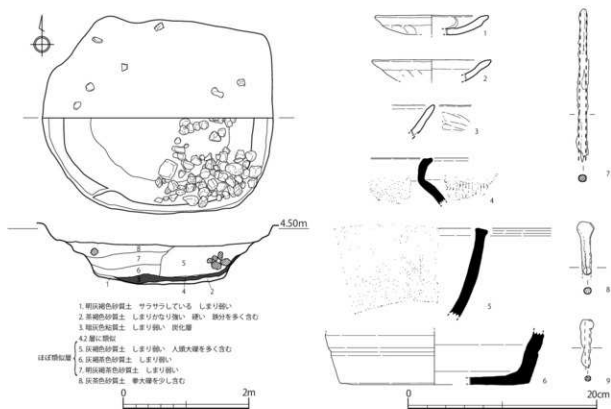
J-18-t-12 区で検出した。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係はない。平面形状は不定形な楕円形状である。規模は、長軸 3.2m、短軸 1.0m、深さ 0.4m を測る。埋土は図示のとおりで、底面は中央部がやや凹む。底面から小ビットがいくつか検出されている。

出土遺物はないが、京都系土師器皿小片が出土している。

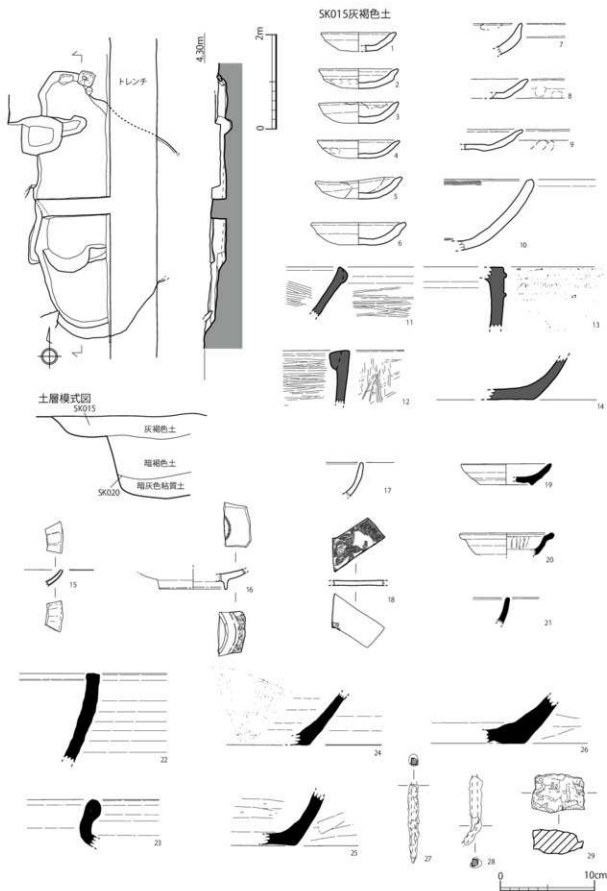
25SK001 (第 87 図)

J-18-t-u-15 区で検出した。検出標高は 4.5 m である。切り合いの関係は 25SK005、25SA198、25SB050 などと切る。平面形状はやや不定形な円形を呈す。規模は、南北軸 2.3 m、東西軸 2.5 m、最大深度 0.7 m で、底面はレンズ状に凹む。埋土は図示のとおりである。

出土遺物は、1 は土師質土器火鉢片で、外面上部に花文スタンプを残す。第 5・6 層からの出土遺物には、2・3 の京都系土師器皿、4 の陶磁器片、5・6 の鉄製品等がある。第 4 層からは、7・8 の京都系土師器皿片、9 は在地系土師器環片か、10～12 の瓦質土器片、13 の備前焼交叉堀り目の鉢片、14 鉄釘、15 鉄製鎌片などが出土した。また第 1・3 層より、16・17 の土師質土器片のほか、第 3 層より 18 のガラス片が出土している。ガラス片に関しては、第 IV 章第 4 節に分析結果を掲載した。

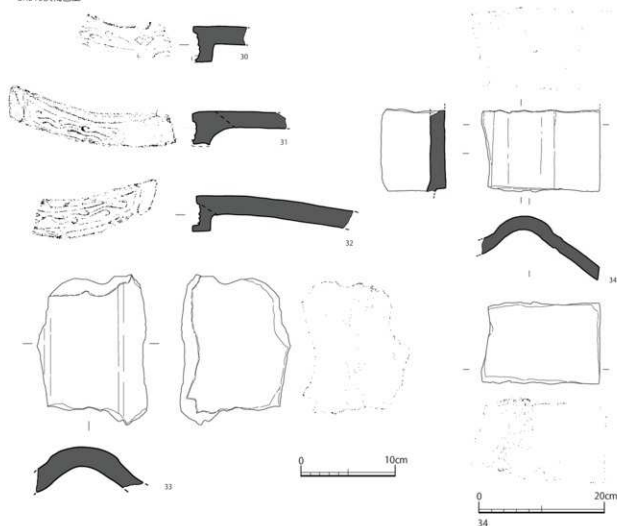


第 88 図 25SK005 遺構 (1/60) 及び出土遺物 (1/4) 実測図



第89図 28SK015遺構(1/80)及び出土遺物①(1/4)実測図

SK015灰褐色土



第90図 28SK015出土遺物②実測図 (1/4・1/6)

25SK005 (第88図)

J-18-u・v-15区で検出した。検出標高は4.6mである。切り合いの関係は25SA199を切り、25SK001に切られる。平面形状はやや不定形な隅丸方形を呈す。規模は、東西軸3.7m、南北軸3.0m、最大深度1.0mを測る。遺構の東側には拳大～人頭大の礫が多く出土し、第1～3層が堆積したあと、礫を多く含む第4・5層、直後に第6～8層が堆積したと考えられる。

出土遺物は、土師器や国産陶器、釘などが出土している。1・2は京都系土師器皿、3は京都系土師器碗か。4は中世須恵質土器甕、5は備前焼掘鉢、6は備前焼甕か甕の底部片、7～9は鉄製の釘である。

28SK015 (第89・90図)

J-18-k-12区で検出した。検出標高は4.3mである。28SK015が28SK020及び28S001を切る。平面形状は不定形を呈す。規模は、南北軸5.6m、東西軸3.2m、深さ0.4mを測る。埋土は灰褐色土で、径3～15cmの礫や瓦を多量に含んでおり、後述する28SK020出土の礫と比較すると小型のものが多く。遺構の中央が凹み、南側と北側にテラスが1段付く。本遺構の南側は、円形プランを呈する別遺構の可能性があり、周辺の景石等の配置状況から抜きとり痕とも考えられる。

出土遺物は、土師質土器や瓦質土器、陶器などが出土している。1～9は京都系土師器皿片、10は土師質土器鉢、11・14は瓦質土器鉢、12は瓦質土器浅鉢形火鉢B1、13は瓦質土器火鉢、15は龍泉窯系青磁小皿、16・17は景徳鎮窯系青磁碗、18は景徳鎮窯系青花皿、19・20は瀬戸美濃産小皿、21は瀬戸美濃産天目碗片、

22は備前焼甕または鉢、24は備前焼鉢、25・26は備前焼甕、23は常滑産の可能性のある甕、27・28は鉄製釘、29は鉄滓、30～32は軒平瓦・33・34は雁振瓦である。

28SK020(第91・92図)

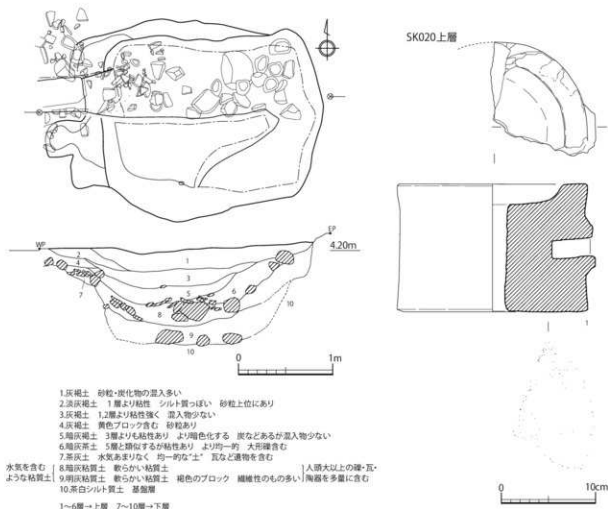
J-18-k-13区で検出した。検出標高は4.2mである。切り合いの関係は28SK015に切られる。平面は隅丸形状を呈す。規模は、東西軸2.5m、南北軸2.1m、深さ1.0mを測る。埋土は図示のとおりで、レンズ状に堆積している。第6・7層より下層に径5～40cmの礫と瓦片を多量に含んでいる。また、第8～9層は第1～7層と比べ、灰色が濃く粘性が強い土であった。

出土遺物は、土師質土器や陶器、瓦などが出土しており、上層(1～6層)と下層(7～9層)で分けて掲載する。上層について、1は凝灰岩製の石臼(上臼)、2～4は京都系土師器皿片、5は土師質土器鉢、6～9は備前焼鉢、10は備前焼甕または鉢、11は軒丸瓦、12は平瓦、16は瓦質土器火鉢、17は中国産白磁碗、18は瀬戸美濃産小皿である。下層について、13～15は京都系土師器皿片、19は備前焼短頸甕で、肩部に横長の耳が付く。

28SK030(第93図)

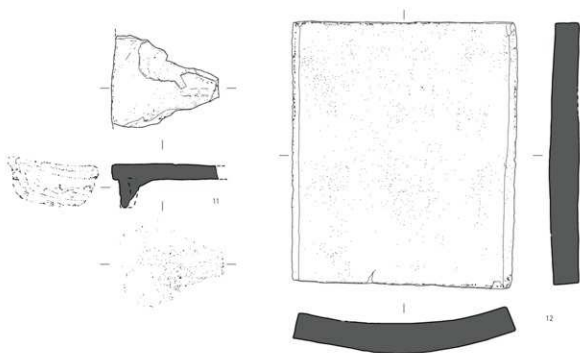
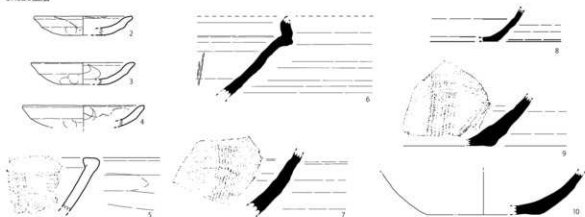
J-18-i-18区で検出した。検出標高は4.4mである。切り合いの関係は、部分的に攪乱とビットに切られる。平面は楕円形を呈す。規模は、長軸2.2m、短軸1.4m、深さ0.1mを測る。埋土は灰茶色土で、底面はほぼフラットである。

出土遺物は、土師質土器や国産陶器などが出土している。1・2は在地系土師器小皿、3・5は在地系土師器

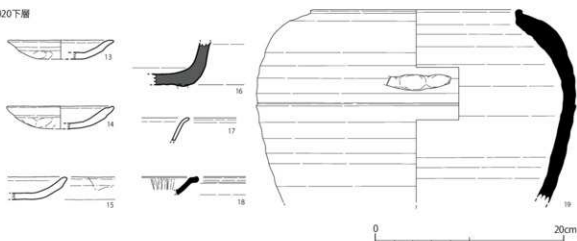


第91図 28SK020遺構(1/40)及び出土遺物①(1/4)実測図

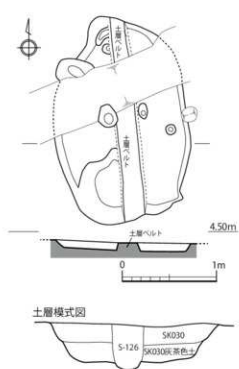
SK020上層



SK020下層



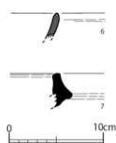
第92図 28SK020出土遺物②実測図(1/4)



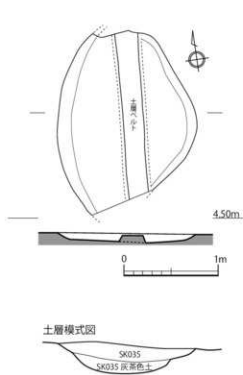
SK030



SK030 灰茶色土



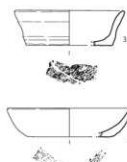
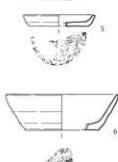
第93図 28SK030道構(1/40)及び出土遺物(1/4)実測図



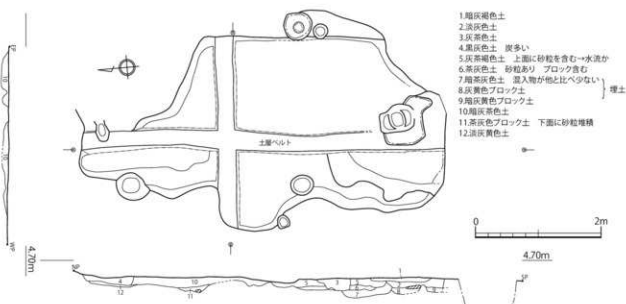
SK035



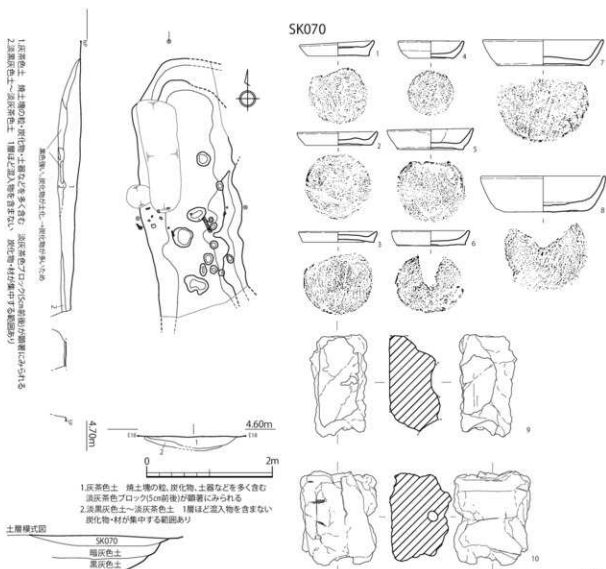
SK035 灰茶色土



第94図 28SK035道構(1/40)及び出土遺物(1/4)実測図

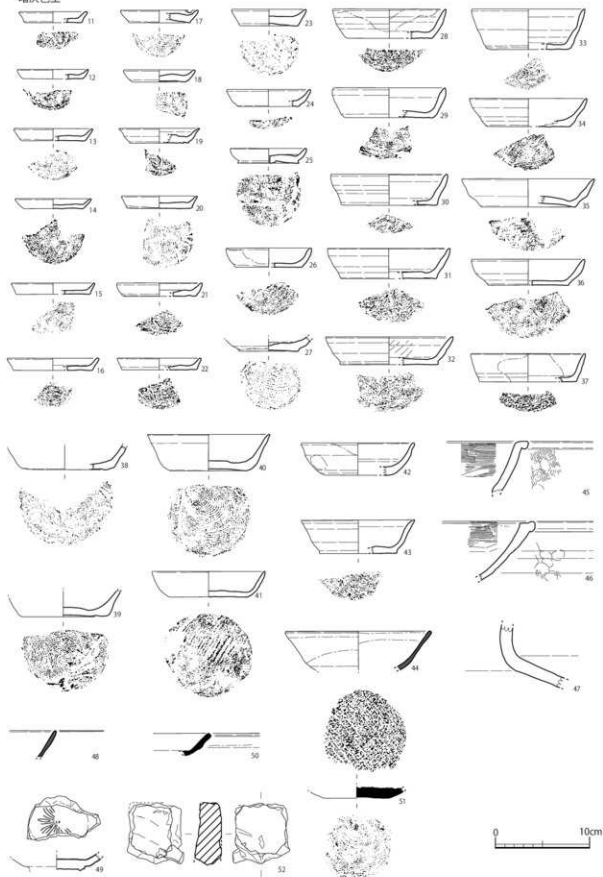


第95図 28SK065遺構実測図(1/60)

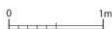
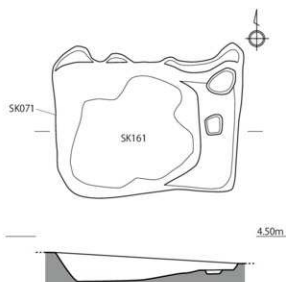


第96図 28SK070遺構(1/60)及び出土遺物①(1/4)実測図

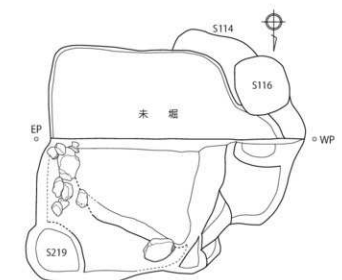
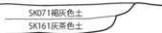
暗灰色土



第97図 28SK070出土遺物②実測図(1/4)



土層模式図



- | | | | |
|-------------|-----|-------------|-------|
| 1. 赤灰ブロック土 | 埋戻土 | 10. 灰茶ブロック土 | |
| 2. 暗灰茶土 | | 11. 灰茶ブロック | |
| 3. 暗灰土 pitか | | 12. 灰茶土 | |
| 4. 黄灰茶ブロック土 | 埋戻土 | 13. 赤灰土 | |
| 5. 黄灰茶ブロック土 | 埋戻土 | 14. 灰黄褐土 | 別遺構埋土 |
| 6. 灰茶ブロック土 | | 15. 淡黄灰土 | |
| 7. 灰褐土 | | 16. 黄灰土 | |
| 8. 暗灰褐土 | 埋戻土 | | |
| 9. 灰褐土 | | | |



SK071 褐灰色土



SK161 灰茶色土



4~6層

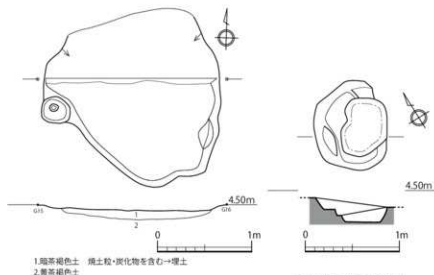


その他の層

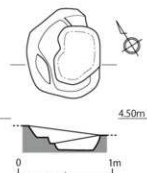


第98図 28SK071遺構(1/40)及び出土遺物(1/4)・28SK161遺構(1/40)及び出土遺物(1/4)実測図

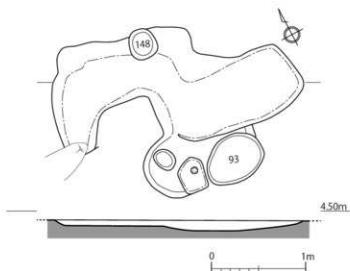
第99図 28SK085遺構(1/40)及び出土遺物(1/4)実測図



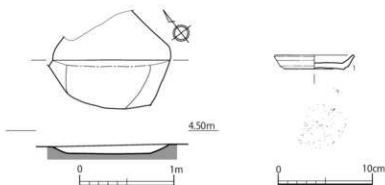
第100図 28SK090遺構実測図(1/40)



第101図 28SK156遺構
実測図(1/40)



第102図 28SK199遺構実測図(1/40)



第103図 28SK269遺構(1/40)及び出土遺物(1/4)実測図

坏、4は瀬戸産卸し皿、6は瓦器土器椀か、7は備前焼播鉢である。

28SK035(第94図)

J-18-I-18・19区で検出した。検出標高は4.3mである。切り合いの関係は一部28S128に切られる。平面は南側が一部調査区外となるが、楕円形状と推定される。規模は長軸1.9m、短軸1.4m、深さ0.1mを測る。埋土は灰茶色土で底面は中央付近がやや凹む。

出土遺物は、土師器や鉄製品が出土している。1～6は在地系土師器で、1・3は小皿、2は小坏か、4～6は坏である。7は鉄製品で小刀である。

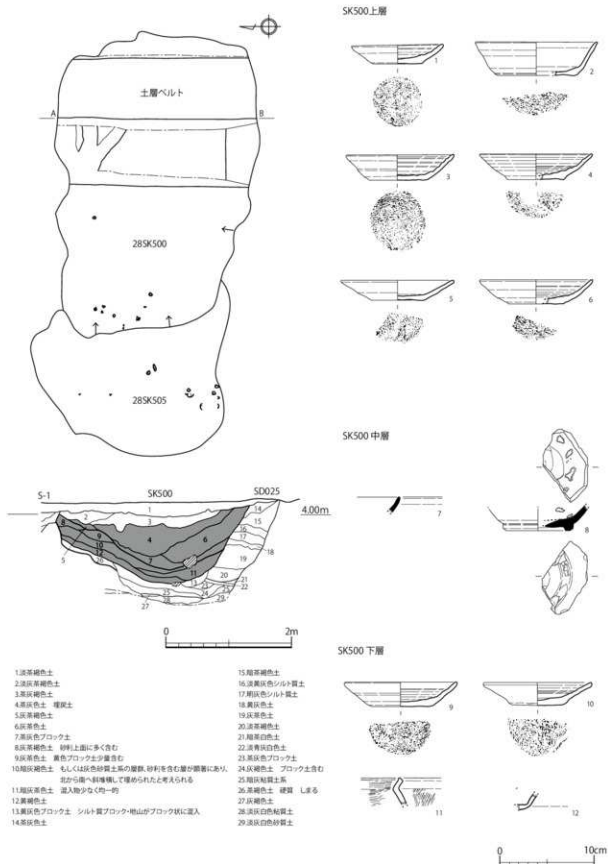
28SK065(第95図)

J-18-I・J-18区で検出した。検出標高は4.5mである。切り合いの関係は28S272に切られ、いくつかのビットと切り合いがある。平面は南北に長く不定形である。規模は長軸5.8m、短軸3.0m、深さ0.3mを測る。埋土は図示しているとおりが、第1～5層は土層観察時に判明した別遺構の堆積土である。底面はやや凹凸がある。

出土遺物は図示していないが、在地系土師器坏、土師質銅片、中国龍泉窯系青磁(太宰府分類Ⅱ類)等が出土している。

28SK070(第96・97図)

J-18-J-18・19区で検出した。検出標高は4.5mである。切り合いの関係はいくつか攪乱に切られる。平面は南北に長方形である。規模は南北軸4.0m、東西軸1.6m、深さ0.4mを測る。埋土は図示しているとおりが



第104図 28SK500遺構(1/60)及び28SK505遺構(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図

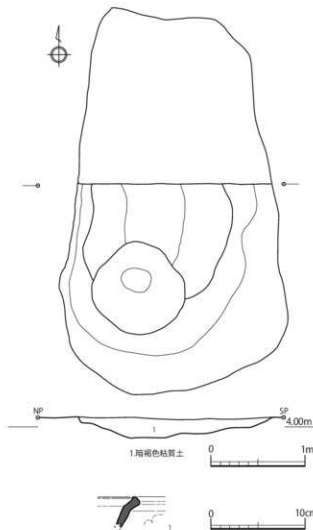
で、炭化物や炭片、焼土塊が顕著であった。底面や壁面は焼けた痕跡はなく、廃棄土坑と考えられる。底面は北側が深く、南側は浅くなり、ビットがいくつか検出される。

出土遺物は、土師器が第1層より大量に出土している。1～8・11～44は在地系土師器で、1～3・6・11～23・25、4・5・24・26は小皿、7・8・43は杯、44は椀、45・46は土師質銅、47は土師質壺か、48は瓦器椀片、49は中国龍泉窯系青磁碗、50・51は瀬戸産鉦皿、52は壁土である。

28SK071・28SK161(第98図)

J-18-h-14区で検出した。検出標高は4.3mである。切り合いの関係は28S033などを切り、いくつかのビットと切り合いをもつ。S071とS161との関係は当初、S071が検出面で確認され、10cmほど掘り下げた後、西側でS161が検出された。別遺構としたが、関連する可能性がある。28SK071について、平面は東西にやや長い長方形で、北辺にテラスが付く。規模は長軸1.9m、短軸1.4m、深さ0.1mを測る。底面はほぼフラットである。28SK161は平面はほぼ正方形で、一辺1.5mほどで、深さ0.3mを測る。底面は西側が深くなり、傾斜する。埋土は土層図で示した。

28SK071の出土遺物は、1・2は京都系土師器皿、3は中国景德鎮窯系磁器碗である。28SK161の出土遺物は、4・5は京都系土師器皿、6は土師質鉢である。



第105図 28SK015遺構(1/40)及び出土遺物(1/4)実測図

28SK085(第99図)

J-18-k-15区で検出した。検出標高は4.4mである。切り合いの関係は28S116や28S219に切られ、28S114を切る。平面形は不定形である。規模は東西軸2.7m、南北軸2.3m、深さ0.8mを測る。掘り下げは遺構の北半分を行い、他は未掘である。埋土は図示のとおりである。遺構西側には、ビット状の別遺構があり、当遺構が切っているものと推定される。特に遺構東側壁面沿いに礫等が集中している。

出土遺物は、土師器や磁器が出土している。1～3は土師器で、1・2は京都系土師器皿、3は手づくね製の燭台、4は漳州窯系青花皿である。

28SK090(第100図)

J-18-l-16区で検出した。検出標高は4.6mである。切り合いの関係は28S291に切られる。平面形は不定形な円形状である。規模は南北軸1.9m、東西軸1.8m、深さ0.1mを測る。埋土は図示しているとおりでである。

出土遺物は図示していないが、在地系土師器杯、小皿片、中国龍泉窯系青磁碗片(太宰府分類Ⅱ類)、瓦質すり鉢片等が出土している。

28SK156(第101図)

J-18-j-14区で検出した。検出標高は4.4mである。切り合いの関係は28S52及び攪乱に切られる。平面形はやや不定形である。規模は長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.3mを測る。遺構掘り下げを行った結果、一部古い遺構と推定される埋土が下層より円形状に検出された。

出土遺物は図示していないが、古代土師器の蓋片、須恵器裏片、中国青花片等が出土している。

28SK199(第102図)

J-18-I-17区で検出した。検出標高は4.4mである。切り合いの関係は28S093、28S148等に切られ、28S086やいくつかのピットを切る。平面は不定形である。規模は長軸2.7m、短軸0.7m、深さ0.1mを測る。埋土にはSK030・035・070同様、炭化物が顕著であった。遺構の底面は西側に比べて東側の方がやや低く、西側はフラットであるが、東側はレンズ状に凹む。

出土遺物は図示していないが、在地系土師器環片、国産陶器鉢片等が出土している。

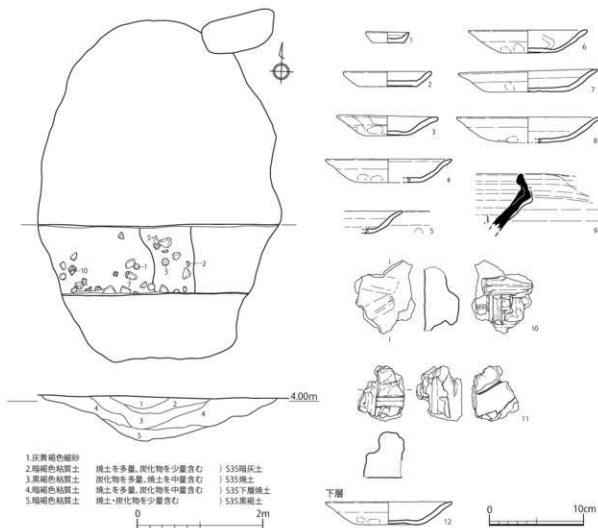
28SK269(第103図)

J-18-I-14区で検出した。検出標高は4.4mである。切り合いの関係は攪乱に切られる。平面は丸形である。長軸1.2m、深さ0.1mを測る。遺構底面はフラットである。

出土遺物は、在地系土師器小皿が出土している。

28SK500・505(第104図)

J-18-j・k-10・11区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係は28SK500がSK505を切る。また両遺構とも28SD025を切り、SG001に切られる。28SK500について、平面は東西に長い長方形で、規模は長軸4.7m、短軸3.1m、深さ1.2mを測る。埋土は図示のとおりで、第4～12層が該当する。埋土はレンズ状に堆積しており、在地系土師器を包含する。28SK505は平面が東西に長いやや不定形な長方形で、規模



第106図 28-4SK035遺構(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図

は南北軸 3.0m、深さは不明である。この遺構の断面は、図示の断面計測ラインでは検出できていない。また出土遺物も確認されていない。その他の埋土は 28SD025 に該当するものと考えられる。

SK500 の出土遺物は、土師器や陶器などが出土している。上層では第 4 層を中心に 1～6 の在地系土師器が出土し、ロクロ目痕を残すものが多い。5 は、ロクロ目痕はないが、底部から大きく開き直線的に伸びる土師器で、在地系環 A の系統を引くものと考えられる。中層は第 6・7 層を中心に 7 は朝鮮陶器皿か、8 は越州窯系青磁碗片などが出土した。下層は 9・10 が在地系土師質土器で、ロクロ目痕を残す。11 は土師質土器裏、12 は青磁碗片である。

28-4SK015(第 105 図)

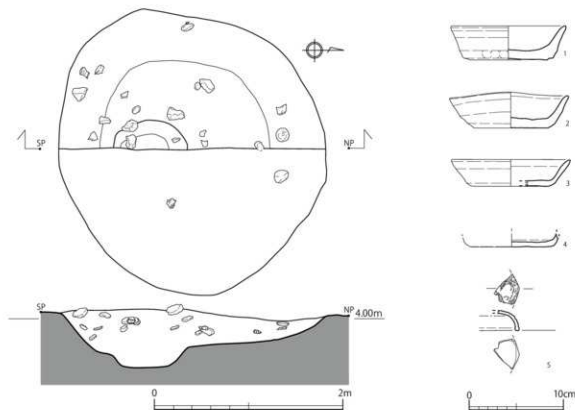
J-13-g・h-20 区で検出した。検出標高は 4.2 m である。切り合いの関係は溝状遺構を切り、28-4SD010 に切られる。平面は南北に長い長方形である。規模は長軸 4.1m、短軸 2.1m、深さ 0.3m を測る。遺構の南半分を完掘し、北半分は未掘である。埋土は単一層で、図示のとおりである。遺構中段にテラスが 1 段付く。南側にピット状の掘り込みがある。

出土遺物は、瓦質土器銅片が出土している。

28-4SK035(第 106 図)

J-13-g・h-14・15 区で検出した。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は 28-4S228 に切られ、28-4S40 を切る。平面は南北に長い楕円形である。規模は長軸 5.3m、短軸 3.9m、深さ 0.7m を測る。埋土は図示のとおりである。レンズ状に堆積しており、焼土や炭化物、拳大の礫を多量に含む。遺構底面は中心部が凹状になっている。

出土遺物は、土師器や土製品などが出土している。1～8・12 は土師器で、1・2 は在地系皿片、特に 2 は極小である。3～8・12 は京都系土師器皿片で、9 は備前焼鉢鉢、10・11 は壁土である。1・3 は第 2 層、7 は第 3 層、2・10 は第 4 層、5・6・12 は第 5 層より出土した。



第107図 31SK001遺構(1/40)及び出土遺物(1/4)実測図

31SK001(第 107 図)

J-13-q・r-21・22 区で検出した。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係はない。平面は円形である。規模は長軸 2.9m、深さ 0.7m を測る。埋土は暗褐色粘質土である。拳大の礫や土器を上層に多く含む。底面は中心に向けてやや低くなり、南側に深さ 20cm ほどの落ち込みがある。

出土遺物は、土師器などが出土している。1～4 は在地系土師器坏、5 は中国産青白磁子(蓋)である。

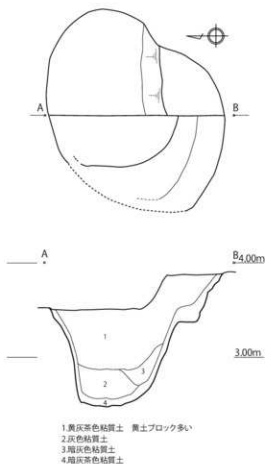
31SK009(第 108 図)

J-18-q-1 区で検出した。検出標高は 3.9 m である。切り合いの関係はない。平面は楕円形である。規模は長軸 2.2m、深さ 1.4m を測る。底面レベルは標高 2.5 m である。遺構壁面には図に示すとおり第 4 層が貼り付いており、機能時のものと推定される。第 1～3 層は埋没土である。第 1 層は黄土ブロック土を多く含む。この遺構は井戸跡の可能性もあるが、埋土の状況や最下層に井筒構造の確認ができなかったため、土坑として報告する。

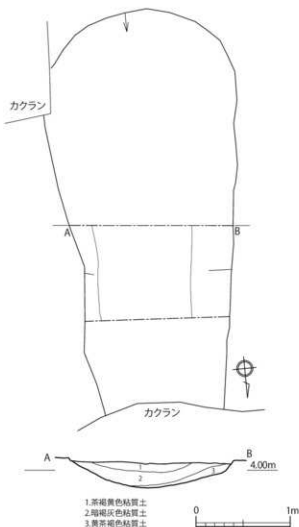
出土遺物は在地系土師器小片がある。

33SK098(第 109 図)

J-13-w-25 区で検出した。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は一部攪乱に切られ、南側の遺構を切る。平面は南北に長い不定形状である。規模は長軸 4.2m、短軸 1.7m、深さ 0.3m を測る。遺構の真ん中にトレンチを入れて掘り下げを行ったほかは、未掘である。埋土は図示のとおりである。埋土は 1～3 層で、レンズ状に



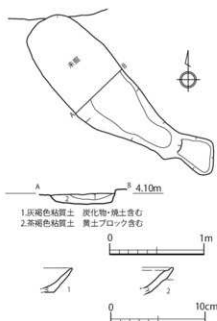
第108図 31SK009遺構実測図(1/40)



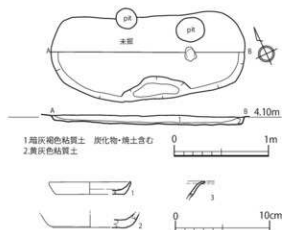
第109図 33SK098遺構実測図(1/40)



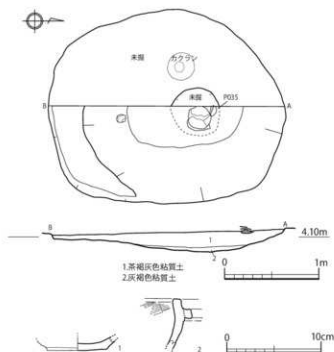
第110図 34SK024遺構実測図(1/40)



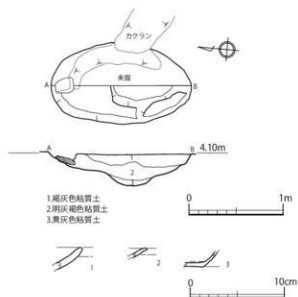
第111図 34SK028遺構(1/40)
及び出土遺物(1/4)実測図



第112図 34SK029遺構(1/40)
及び出土遺物(1/4)実測図



第113図 34SK031遺構(1/40)
及び出土遺物(1/4)実測図



第114図 34SK035遺構(1/40)
及び出土遺物(1/4)実測図



第115図 12SK086出土遺物実測図(1/4)

堆積する。底面もレンズ状に凹む。

出土遺物は古代の土師器片・緑釉陶器片や壁土片等がある。

34SK024(第110図)

J-18-s-9区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係はない。平面プランは東西に長い楕円形状である。規模は長軸1.7m、短軸0.7m、深さ0.1mを測る。遺構の北半分は未掘である。埋土は図示のとおりである。底面はほぼフラットである。

出土遺物は土器小片のみである。

34SK028(第111図)

J-18-r-12区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係は34SX002を切る。平面プランは不定形な楕円形状である。規模は長軸2.4m、短軸0.7m、深さ0.15mを測る。遺構の北半分は未掘である。埋土は図示のとおりであるが、上層に焼土や炭化物を含んでいる。底面はほぼフラットであるが、南側に一段テラスが付く。

出土遺物は土器小片のみであったが、やや厚手の京都系土師器皿片が出土している。

34SK029(第112図)

J-18-t-u-8区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係は一部ビットに切られる。平面プランは東西方向に長い楕円形状である。規模は長軸2.1m、短軸0.9m、深さ0.1mを測る。遺構の北半分は未掘である。埋土は図示のとおりであるが、焼土や炭化物を多く含む特徴がある。底面はほぼフラットであり、南側中央付近がやや凹んでいる。また拳大よりやや大きい礫が出土している。さらに埋土からは赤漆の小破片が出土した。

出土遺物は、1は在地系土師器小皿、2は坏底部片、3は中国産白磁碗片。

34SK031(第113図)

J-18-t-u-9区で検出した。検出標高は4.2mである。切り合いの関係は一部、34SP037等のビットに切られる。平面プランは南北方向にやや長い楕円形状である。規模は長軸2.5m、短軸2.1m、深さ0.2mを測る。遺構の西半分は未掘である。埋土は図示のとおりである。底面は、南側に一段テラスが付、そのテラスの北側は緩やかに凹んでいる。

出土遺物は土師質土器片が出土した。1は在地系土師器坏底部片、2は土師質土器羽釜の胴部片である。

34SK035(第114図)

J-18-s-9区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係は攪乱に一部壊されている。平面プランは南北方向に長い楕円形状である。規模は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.35mを測る。遺構の東半分は未掘である。埋土は図示のとおりである。遺構内は、テラスが付き、中央やや南側が最大に深くなる。また遺構内北側で扁平な凝灰岩が出土している。

出土遺物は、1・2は京都系土師器小片、3は在地系土師器坏の破片である。

12SK086(第115図)

J-18-p-q-18・19区で検出した。館12次調査区の端で確認された。個別遺構図がないため、第30図を参照して頂きたい。この土坑からは、1～3の在地系土師器の坏が出土し、体部は底部よりやや外反するものの垂直気味に立ち上がる。

[小 結]

36基の土坑を報告した。ここでそれぞれ遺構の時期について述べておきたい。

館Ⅰ期段階の14世紀後葉～15世紀前葉頃までは、今回の詳細報告した遺構の中では、12SK086が該当する可能性がある。

館Ⅱ期のものほとんどないと思われるが、28SK269等が上限年代によっては、Ⅱ期のものである可能性がある。館Ⅱ期になると、報告範囲の西側に31SK001の土坑を1基のみ検出している。報告範囲の南東に位置す

る 28SK030 や同 035 はこの時期の可能性がある。これら土坑は周辺に展開する 28SB104 等の建物群ともほぼ同時期と推定され、建物群との関連も想定されよう。また 28SK065 や同 070 もお互いが切り合いの関係をもつがⅢ期のものと考えられる。

館Ⅲ～Ⅳ期段階は、1SK008、28SK500・505、34SK031 が該当する。1SK008 からは白色系土師器が出土し、在地系土師器はロクロ目痕を残さないやや胴部が外反する坏などが見られる。白色系土師器の大内館跡での編年観（大友氏館 1 参照）やまだ在地系土師器にロクロ目痕を残さない土師器が主体であることから、15 世紀中葉から後葉の範疇で捉えられる。またロクロ目痕を残す在地系土師器が多く出土している遺構などは、15 世紀後葉～16 世紀前葉くらいと考えられる。第 104 図 5 のようにロクロ目痕を残さずに底部から一気に直線的に外反する在地系土師器は、坏 A の系統を引くものと考えられ、館Ⅲ 2～Ⅳ期の範疇で捉えても良いと思われる。

館Ⅴ期段階の土坑はほとんど無かった。しかし、12SK004 や 12SK098、12SK122、12SK025 等は同じ埋土で、厚手の京都系土師器を含むが、遺構底面は凸凹している。埋土は館Ⅵ期のものと思われる。

館Ⅵ期は、12SK030、12SK065、12SK085、25SK001、25SK005、28SK071、28SK071・161、28SK085、34SK028 等、厚手の京都系土師器皿・碗、雑器や瓦類などが出土し、これらは町屋段階のもので、付近には井戸跡や掘立柱建物跡等も検出されており、同時期のものとして関連づけることができる。

この他に 28SK015・020・090・156・199、31SK009、33SK098 等は明確な時期が不明である。

(4) 溝跡

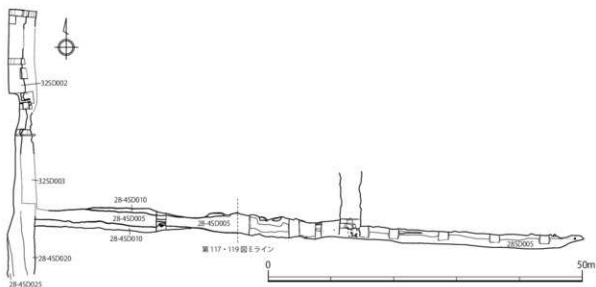
調査区内で、溝跡は12条以上が確認されており、ここでは12条ほどを詳細に述べる。また溝跡のなかで、園池跡と接続している東溝(12SD090)、北溝(33SD088)、南溝(28SD010)、西溝(31SD006・007)の4条は、ここで取り扱わず、園池跡の報告で関連して述べている。特に溝跡の性格は区画溝と思われるものが多く検出され、時期によっては、館の外郭溝に関連しそうな遺構や館内の区画溝で使用しているもの等がある。また詳細報告はしないが、調査区南西側で、28-4SK015等に切られる浅い溝が平行して東西に延びているものなどが検出されている。

28次調査の溝跡から順に報告していき、詳細な時期は、小結で述べることにする。

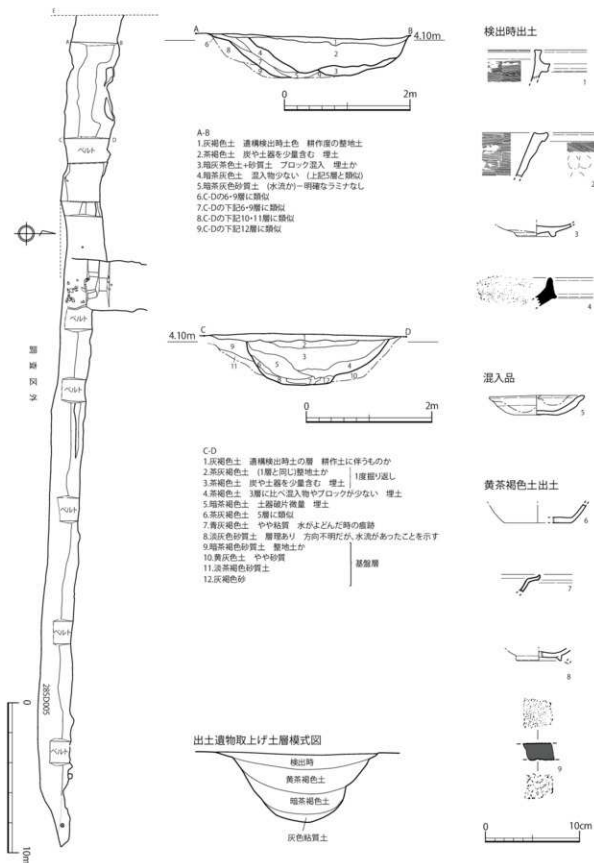
28SD005(第116・117・118図)

J-18g～h-2～15区で検出した。検出標高は溝の東側で4.4m、西側で4.1mである。切り合いの関係は溝中央付近を園池跡から延びる28SD010及び溝西側を28-4SD020(32SD002との関連)に切られる。また28-4SK135を切る。溝の平面プランは、東西方向に直線的に確認され、さらに溝の西側では、その北側で検出された32SD003と埋土の類似や出土遺物から、同一の溝の可能性が高い。この溝と32SD003の関連性を考えた場合、この東西方向の溝は西側で南北方向に北方向へ屈曲し延びると推定されるが、ちょうど屈曲部周辺に攪乱があるため確認できない。溝の幅は約2.0m、東西部分の長さは全長55.2+αmを測り、深さは約0.8mで、溝底西側標高3.4m、溝底東側標高3.5mで大差はない。溝は部分的にベルトを残しながら掘り下げ、断面図も作成した。溝断面形態は、溝底はほぼ平らで、斜面は北側でやや急勾配であり、南斜面は北側よりも緩やかである。土層観察から部分的に水流があったことを示す痕跡も確認されている。

出土遺物は、土師器や陶磁器類などが出土している。出土した層は図に明示している。1・2は土師器で、羽釜及び銅片である。3は白磁皿片、4は備前焼襦袢片である。5は京都系土師器皿片で、詳細は後述している。6は古備系と推定される研磨土師器碗、7は中国龍泉窯系青磁片で、口縁端部を直角気味に曲げる。8は中国白磁皿

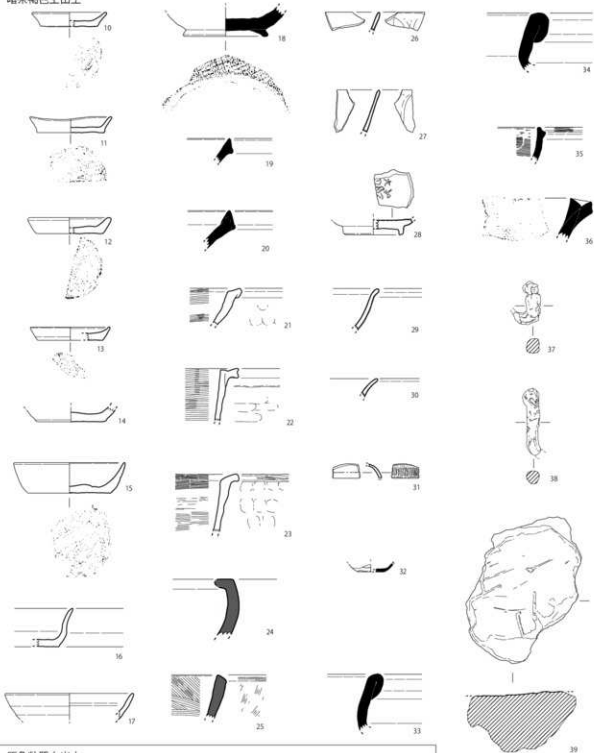


第116図 28SD005・28-4SD005・28-4SD010・32SD002・32SD003遺構実測図(1/600)

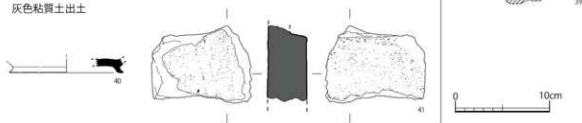


第117図 28SD005拡大遺構平面図(1/250)・断面図(1/60)及び出土土物①(1/4)実測図

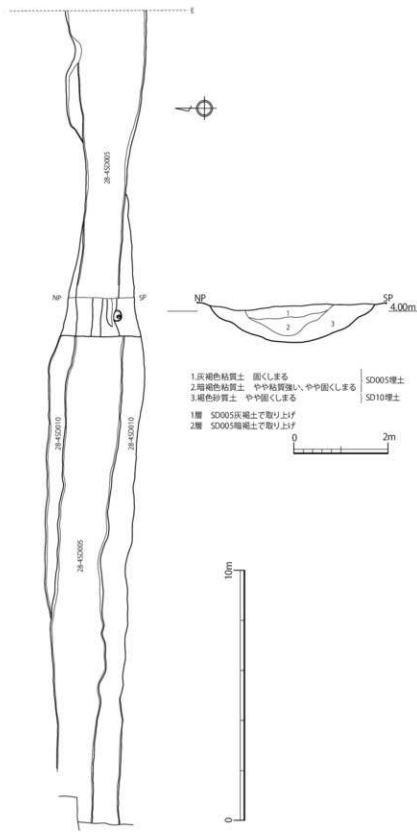
暗茶褐色土出土



灰色粘質土出土



第118図 28SD005出土遺物②実測図(1/4)



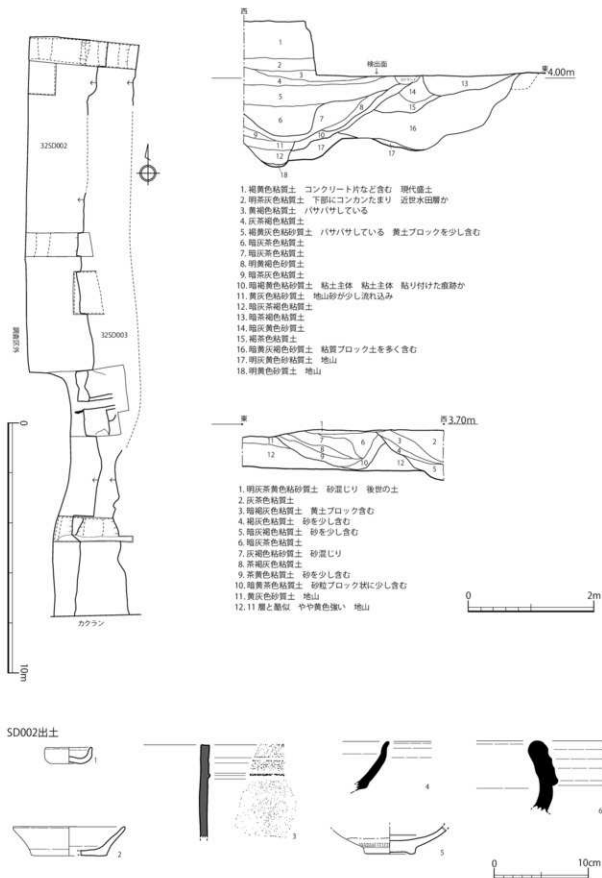
第119図 28-4SD005・28-4SD010道構平面図(1/150)
及び土層(1/80)実測図

片、9は古代の瓦片。10～17は
在地土土師質土器皿及び坏で、
16はやや丸味を持ちながら外反
している。18は古代の東播系須
恵器椀片。19・20は須恵質土器
の鉢片。21～23は土師質土器銅
片である。24・25は瓦質土器片、
26～30は中国龍泉窯系青磁片
で、26・27は外面に連弁文を施す。
31は中国産白磁片、32は中国産
陶器で、茶入れか。33～36は備
前焼片、37・38は鉄製釘片、39
は壁土である。40は古代の須恵器
椀片、41は古代平瓦片で朱が付
着している。このなかで、第117
図5は京都系土師器であるが、同
じ遺構から出土した遺物の様相は
これよりも古く、京都系土師器は
この1点であるため、混入品の可
能性が高い。

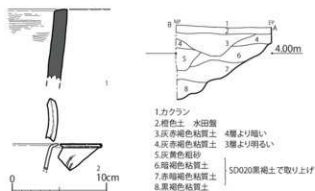
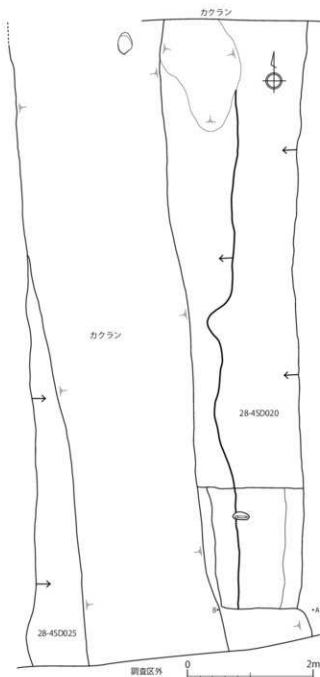
28-4SD005・28-4SD010 (第119図)

J-13-h・I-19～25区で検出し
た。検出標高は4.1mである。切
り合いの関係は28-4SD005に切
られる状況である。調査区南西側
で検出し、東西方向に延びる。溝
の幅は約3.5m、東西部分の長さ
は25+αmを測り、深さは0.6m
である。道構の掘り下げはトレ
ンチを1つ入れただけに留めた。埋
土は褐色砂質土の単一層であり、
断面形状は丸みを帯びている。
28-4SD005に切られる状況であ
るが、28-4SD005と類似する埋
土であり、28-4SD001の掘り返し
で、28-4SD005が機能したと考え
られる。

出土遺物は土器小片のみであっ
た。



第120図 32SD002・32SD003拡大遺構図(1/150)及び土層(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図



第121図 28-4SD020 遺構 (1/60) 及び出土遺物 (1/4)
及び 28-4SD025 遺構 (1/60) 実測図

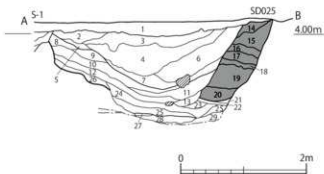
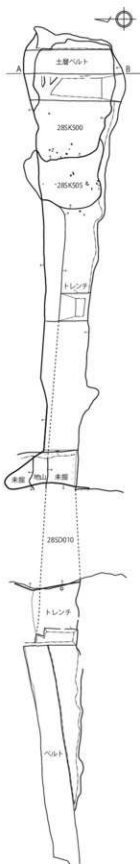
32SD003(第120図)

J-13-I ~ q-18 区で検出した。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は 32SD002 や溝の北側でビットなどに切られる。調査区西側で検出し、南北に延びる。溝の掘り下げは 3つのトレンチを入れて確認したのみである。溝の幅は $2.7+a$ m、南北部分の長さは $26+a$ m を測り、深さは溝北側トレンチ 3 で、溝底標高 2.9 m、溝南側トレンチ 2 で溝底標高 3.0 m である。溝底はフラットではなく、凹凸がある。溝の東側斜面は直線的ではない。また断面形状は溝西側を 32SD002 により切られているため不明である。また流水があるような痕跡は見当たらなかった。この溝は前述したように、28SD005 や 28-4SD005 と同一遺構の可能性が高い。そのため、32SD003 がこの時期の館の西側外郭になる可能性もある。

出土遺物は土師器小破片のみである。

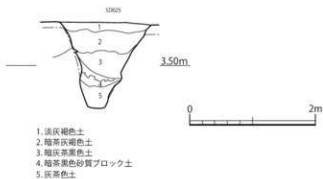
32SD002(第116・120図)、28-4SD020・025(第116・121図)

J-13-I ~ q-18 区で検出した。この溝は 32 次調査では 32SD002 として検出したが、32 S D 002 南側に大きな掘乱坑があり、この掘乱の南で、28-4SD020・025 を確認している。この 3 条は同一遺構の可能性が高いことから、同じ遺構として報告する。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は 32SD003・28-4SD005 等を切る (第116図参照)。またこの溝の中央付近で、SG003 園池跡から延びてくる 31SD007 が溝の東辺に接続する。32SD002、28-4SD020・同 025 は南北に延びる溝で、部分的にトレンチを入れて掘り下げを行った。溝の幅は、溝の南側で 4.2 m、南北部分の長さは $48+a$ m を測り、深さは溝北側トレンチ 3 で、溝底標高 2.6 m、溝南側トレンチ 2 で溝底標高 $2.8+a$ m である。この溝の埋土は図の 32SD002 トレンチ 3 で第 3 ~ 12 層、同トレンチ 2 で第 2 ~ 5 層



- | | |
|---|-------------------|
| 1. 淡茶褐色土 | 15. 暗茶褐色土 |
| 2. 淡灰茶褐色土 | 16. 淡黄灰色シルト質土 |
| 3. 茶灰褐色土 | 17. 明灰褐色シルト質土 |
| 4. 茶灰色土 埋戻土 | 18. 黄灰色土 |
| 5. 灰茶褐色土 | 19. 灰茶褐色土 |
| 6. 灰茶色土 | 20. 淡茶褐色土 |
| 7. 茶灰色ブロック土 | 21. 暗茶白色土 |
| 8. 灰茶褐色土 砂利上面に多く含む | 22. 淡青灰白色土 |
| 9. 灰茶色土 ブロック少量 | 23. 茶灰色ブロック土 |
| 10. 暗灰褐色土 もしくは灰褐色土系の層群、砂利を含む層が顕著にあり、北から南へ斜増積して埋められたと考えられる | 24. 灰褐色土 ブロック土を含む |
| 11. 暗灰茶色土 混入物少なく均一的 | 25. 暗灰粘質土系 |
| 12. 黄褐色土 | 26. 茶褐色土 硬質 しまる |
| 13. 黄灰色ブロック土 シルト質ブロック、地山がブロック状に混入 | 27. 灰褐色土 |
| 14. 茶灰色土 | 28. 淡灰白色粘質土 |
| | 29. 淡灰白色砂質土 |

※21～29層は、平面プラン不明の別途構埋土。



- | |
|----------------|
| 1. 淡灰褐色土 |
| 2. 暗茶灰褐色土 |
| 3. 暗灰茶褐色土 |
| 4. 暗茶黒色砂質ブロック土 |
| 5. 灰茶色土 |

第122図 28SD025遺構(1/150)及び土層(1/60)実測図

である。溝底の幅は狭い。溝の東側斜面はほぼ直線的ではあるが緩やかである。また断面形状は溝西側が調査区外のため不明である。この溝はさらに南側の町5B次調査でも確認されており、同一遺構と考えられる。本溝の埋土を珪藻分析しているため、第IV章第1節を参照されたい。32SD002はさらに西側の28-4SD030ともほぼ平行する。ただし検出面での切り合いはないが、その位置関係が接近していることから、新旧関係はあるものと推定される。

出土遺物は、32SD002については、少量であるが1～6の遺物が出土している。1・2は土師質土器で、1は京都系土師器の小皿片、2は坏である。3は瓦質土器火鉢片、4は瀬戸美濃産天目碗、5は中国景德鎮窯系青磁片か、6は備前焼裏片である。

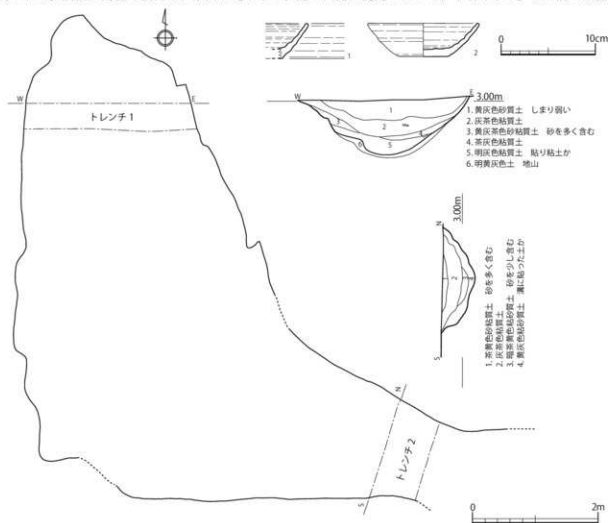
28-4SD020・28-4SD025(第121図)

J-13-17～18-f～h区で検出した。検出標高は4.1mである。28-4SD020・28-4SD025ともに掘乱に切られている。調査区西側で検出し、南北に延びる。28-4SD020の幅は1.7+αm、南北部分の長さは9.3+αmを測り、深さは1.2mである。また、28-4SD025の幅は1.0+αm、南北部分は6.5+αm、深さは検出幅が狭いため、0.1+αmである。

28-4SD020からは、1は瓦質土器鉢、2は中国景德鎮窯系小坏である。

28SD025(第122図)

J-18-j・k-2～11区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係はSG003、28-4SD020・025に切られる。調査区南側で検出し、東西に延びるが、溝の西側は掘乱によって、不明である。また溝の東側も



第123図 31SD004遺構平面・断面図(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図

28SK500・505などに切られるが、この土坑よりも東では延長部は確認されていない。遺構の掘り下げは東側にトレンチを入れたのみである。溝の幅は中央付近で約1.7+αm、東西部分の長さは31+αmを測り、トレンチ内での溝の深さは1.7mである。溝の埋土は図の第122図の14～20層である。

溝の南斜面より北側斜面のほうが緩やかである。

出土遺物は確認できていない。

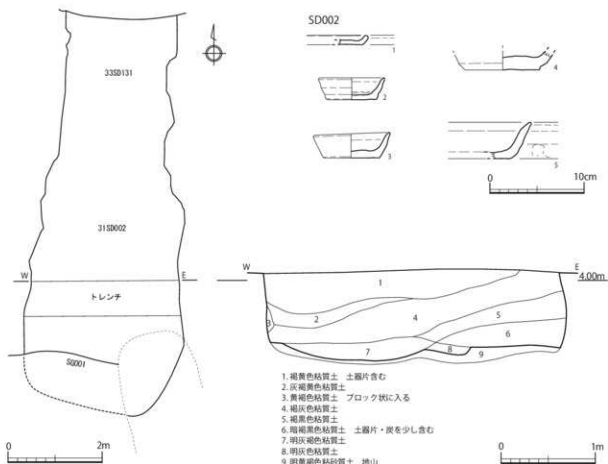
31SD004(第123図)

J-13-k・l-20～22区で検出した。検出標高は3.4mである。切り合いの関係は32SK003に切られ、北側をSG001に切られる。調査区南西側で検出し、プランから南北方向と東西方向に延びる溝の屈曲部周辺と推定される。掘り下げはトレンチを2本入れたのみである。溝の幅は北側で2.7m、南側で1.7mを測り、深さはトレンチ1で0.5m（溝底標高2.8m）、トレンチ2で0.9m（溝底標高2.1m）である。溝の断面形態は丸みを帯びている。この溝は東西に延ばすと、前述した28SD025と軸が同じになることから、同一遺構の可能性も考えられる。

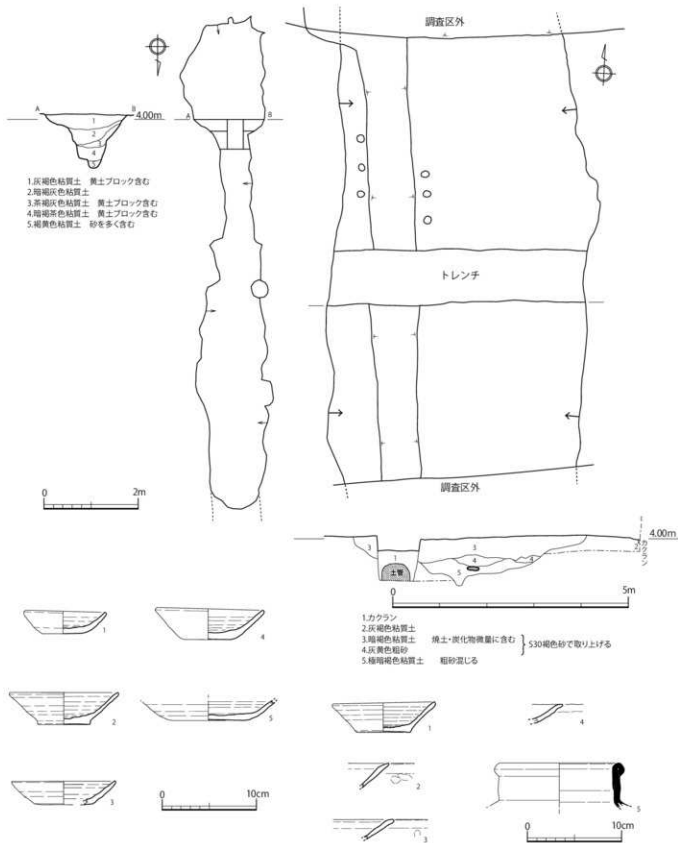
出土遺物は、1・2の土師器環が出土している。1・2ともにロクロ目痕を残すが、ロクロを回しながらヘラ状工具を当てただけで、その痕は深くない。ロクロ目を棒状のような工具で強く当て深い痕を残すロクロ目とは少し違いがある。

31SD002・33SD131(第124図)

J-13-q～s-20・21区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係は溝の南側をSG001に切られ、北側を33SX130に切られる。調査区西側で検出し、南北に延びる。溝の掘り下げはトレンチを1箇所入れたの

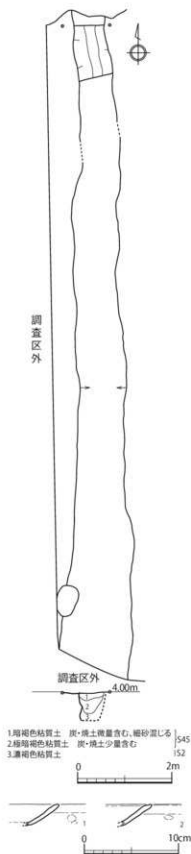


第124図 31SD002 遺構 (1/80) 及び断面 (1/40) 及び出土遺物 (1/4) 及び 33SD131 遺構 (1/80) 実測図

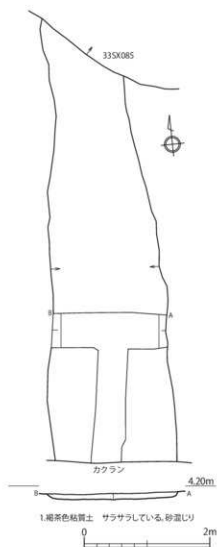


第125図 335D125遺構(1/80) 及び出土遺物(1/4)実測図

第126図 28-45D030 遺構(1/80) 及び 出土遺物(1/4) 実測図



第 127 図 28-45D045 遺構 (1/80)
及び出土遺物 (1/4) 実測図



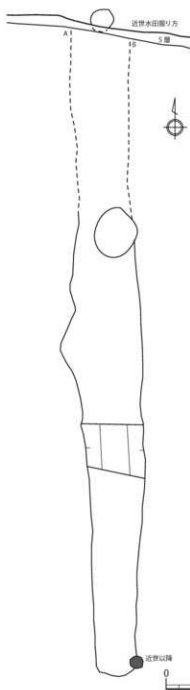
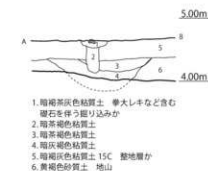
第 128 図 31SD011 遺構実測図 (1/60)

みである。31SD002 の幅は南側で約 3.0m、南北部分の長さは 8.4+m を測り、深さは 1.0m である。溝の南側は SG001 の底面で確認もされたが、図示しているより南には延びないことが確認された。また北側も 33SX130 の底面で確認されており、これを考えると全長は約 9 m と考えられる。溝断面は箱型であり、底面はフラットではなく、やや凹凸がある。壁は垂直に立ち上がる。

出土遺物は、土師器が出土している。1 は小皿、2・3 は小杯、4・5 は杯であろう。

33SD125(第 125 図)

J-13-t ~ v-19 ~ 20 区で検出した。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は 33SK129 に切られる。この溝は今回の報告外である館 26 次調査でも関連すると推定



第129図 34SD027遺構及び断面実測図(1/60)

される遺構が確認されており、26SK030に切られる26S045がそれに当たる(第245図参照)。溝の北側では25SK030に切られている。遺構は調査区北西側で検出し、南北に伸びる。溝の幅は約1.5m、南北部分の長さは10.5+αmを測り、深さは1.1m(溝底標高3.0m)である。溝底幅は狭く、断面はややV字状になる。

出土遺物は、土師器が出土している。1は小坏、2～5は坏である。2は底部から胴部に伸びる屈曲部が、垂直に立ち上がって外反して伸びている。

28-4SD030(第126図)

J-13-f～h-16・17区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係はいくつかの小ビットに切られるのと溝の西側を攪乱である土管が埋まっていた。調査区南西側で検出し、南北に延びる。溝の幅は約5.6m、南北長さは9.2+αmを測り、深さは1.0mである。溝埋土は上層である第3層に焼土と炭化物等が多量に入っている。溝斜面は西側が東側よりもやや緩やかである。32SD002とほぼ平行関係であるが、新旧関係はあると思われる。またこの溝は南側の町5B次調査区でも同一遺構と推定される遺構が検出されている。

出土遺物は、土師器などが出土している。1～4は土師器で、1は坏、2～4は京都系土師器皿、5は備前焼壺の口縁部であろう。

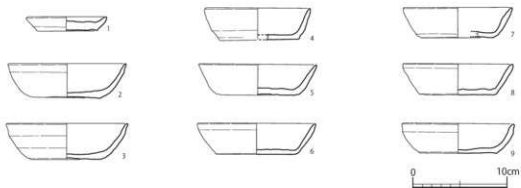
28-4SD045(第127図)

J-13-f～i-14区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係はない。調査区南西隅で検出し、南北に伸びる。掘り下げは溝の北側にトレンチをいれたのみである。溝の幅は中央付近で約1.6m、長さは14.2+αmを測り、深さは0.6mである。溝断面はほぼ箱型状である。埋土は図に示すとおりである。

出土遺物は、土師器が出土しており、1・2は京都系土師器皿である。

31SD011(第128図)

J-13-q～s-25区で検出した。検出標高は4.1mである。切り合いの関係は溝の北側を33SX085に切られる。調査区中央やや西側で検出し、南北に延びる。溝の幅は約1.8m、南北部分の長さは7.0+αmを測り、深さは0.1mである。南側は攪乱で切られるが、この攪乱坑より南には延びていない。この溝は極端に浅いのが特徴であり、溝で報告をしたが、整地痕などの



第130図 1SD019出土遺物実測図(1/4)

遺構の性格も可能性があると思われる。

出土遺物は、土師器小破片のみで、図示していない。

34SD027 (第129図)

J-18-s ~ w-8 区で検出した。16 次調査でも確認されている。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は溝の北側を近世の水田開発に伴う削平や攪乱に切られ、また土層断面の 5 層 (15 世紀整地層) に覆われる。調査区東側で検出し、ほぼ真南北に伸びる。溝の幅は約 1.3m、南北部分の長さは 10+αm を測り、深さは 0.4m である。溝の南限は確認できたが、北側は 15 世紀整地層下へ延びそうである。

出土遺物はほとんど確認できなかった。

1SD019 (第30・130図)

J-18-o-17 ~ 19 区で検出した。詳細図面は掲載していない。切り合いの関係は攪乱に切られ、一部ビット等にも切られる。プランは真東西方向に延びる溝で、幅約 0.7 m、深さ 0.3 m、検出された長さは 5.4+αm である。埋土中からは多くの在地系土師器が出土している。

出土遺物は第 130 図に示すとおりで、すべて在地系土師器で、1 は小皿、それ以外は器壁のやや薄い坏である。

[小 結]

12 条の溝跡の詳細報告を行った。これら溝跡を時期別に見ていく。

館Ⅰ期に該当する溝跡は検出されていないが、それよりも遡ると考えられる 1SD019 が確認されたことは特筆される。東西方向に延びる溝跡であるが、大友館に関係する溝かどうかは、その構造や配置からは不明であるが、溝内から 14 世紀代の在地系土師器が出土していることは注目される。また 34SD027 は、出土遺物からは判断できないが、館Ⅰ～Ⅱ期にあたと推定される。

館Ⅱ～Ⅲ期については、28SD005 (28-4SD005 は同一遺構)、32SD003 は出土遺物や遺構の切り合いの関係から館Ⅱ期段階と考えられる。28SD005 は 32SD002 に切られるが、その西側には展開しないため、32SD002 付近で止まるか、南か北に屈曲するものと考えられる。状況からすると、28SD005 と 32SD003 は同一遺構としての可能性が高いと推定される。またこれら溝は遺構規模から館Ⅱ期段階の大規模な区画溝になる可能性も高いと推定される。この溝の南側と東側には、坏 B を出土する 28SK500 等に切られる 28SD025 や 31SD004 がある。31SD004 は 28SD025 から西へむかった延長部にあたる。その全体形状から 31SD004 はちょうど屈曲部で、SG001 に切られているが、北へ屈曲し、それ程延びずに終わりそうである。ただ 31SD004 からはロクロ目土師器が出土しており、やや 31SD004 は館Ⅱ期新段階～館ⅢⅠ期段階くらいと推定される。

館ⅢⅠ期段階の遺構は坏 B が出土している 33-1SD125 があげられる。またやや輪はズれるが 31SD004 も同時期の範疇でも構わない。

館Ⅳ期は報告範囲の南西側の南北に延びる 28-4SD030 や 28-4SD045 が挙げられる。これら遺構からは薄手の京都系土師器皿等が出土しており、配置状況を見ると平行していることから、関連する可能性が高い。これら溝の間には 28-4SK135 があるが、この土坑もほぼ同時期に埋まったと思われる。28-4SD030 は北側はどこまで延びるか現在のところ不明であるが、町 5B 次調査でも確認されており、さらに南へと延長する。また規模が大きいため、28-4SD030 は館Ⅳ期段階の外郭溝の関連も想定される。

館Ⅴ期は、まず SG003 には東西南北に 4 つの溝が接続しているが、ここでは触れず、庭園跡で詳細は報告する。そのほかの溝としては、32SD002・28-4SD020・025 がある。これら溝は埋土の状況や位置関係から同一遺構と考えられる。今回の調査からは出土遺物が殆どみられないが、出土遺物はこの溝の埋土にはほとんど含まないため、さらに調査地の南側の町 5B 次調査において同一遺構と判断されるものが検出されているが、この地点でも出土遺物は極端に少ないため詳細な時期比定は困難である。また本溝検出範囲の中心付近で、SG003 の西端から延びてくる東西溝 31SD006・007 が接続する 32SD002 はその規模の大きさから館Ⅴ期段階の外郭溝としての可能性も考えられる。

そのほかの溝跡として、31SD011 がある。この溝跡は出土遺物が土師器の小片のため時期比定が困難であり、切り合いの関係は 33SX085 に掘り込まれるのみであるため、館Ⅳ期以前としかいえない。プランは南北に延びるが、遺構の深さは 10cm あまりで、他の溝跡と比べても極端に浅い。このことからすると整地等、区画溝以外の可能性も考慮しておく必要があろう。

(5) 地業・整地跡

地業・整地跡は、報告対象域で最低 3 基検出されており、庭園遺構に関わるであろう遺構を報告する。これまでの調査で館Ⅴ期段階の礎石建物跡は、今回、詳細報告を行わない中心建物跡や館 33SB010 や同 044 で確認されており、これら建物跡は建物単位ごとに掘り込み整地を行っている痕跡が判明している。また、町跡で確認されている礎石建物跡も同様の状況がある。これらの状況から、礎石が後世に除去されていても、その直下には掘り込みを行った整地痕が残存している様相が一部で確認されている。

ここでは、園池跡北側で確認された 3カ所 (33SX085、33SX130、34SX002) を報告する。

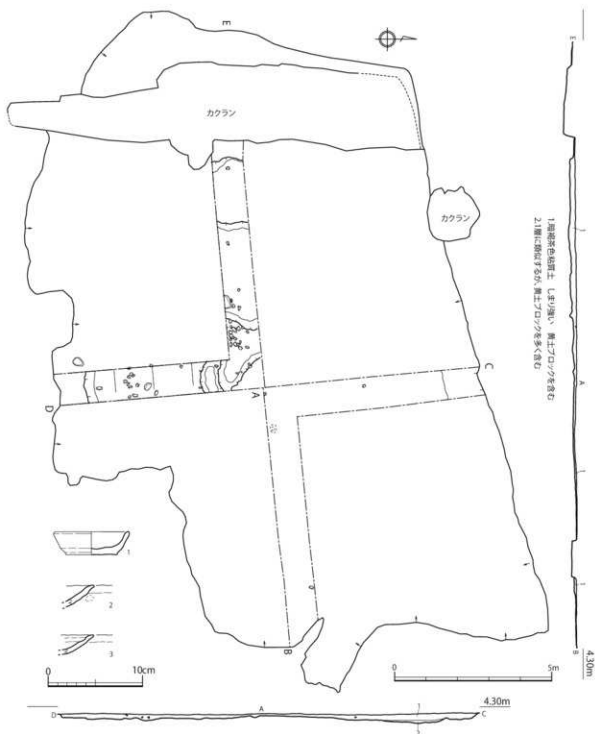
33SX085 (第 131 園)

J-13・18-r ~ v-25・1 ~ 5 区、池状遺構 3 の北西側で検出した。切り合いの関係は、33SE086 などを切る。平面プランは一部攪乱による削平を受けるが、東、南、西のラインは直線的ではなく、不定形な状況であるが、北ラインに関しては、直線的な掘り方が残る。検出標高は 4.1m である。規模は東西方向の B-E ラインで 19.5m、南北方向の C-D ラインで 13.5m を測る。深さは検出面より最深部で 0.3m である。遺構中心部が深い。掘り方周辺にかけては、浅くなる傾向であり、深さは一律同じではない。遺構断面図は図に示すとおりであるが、埋土はほぼ暗褐色茶色粘質土単一層である。しまりは強い。最下部は黄土ブロックが多く入る層が部分的に残存する。遺構の底面はフラットではなく、凹凸が多く見受けられる。また第 1 層には、人頭大の礫少々、拳大の礫が多く、さらに径 1cm ほどの玉砂利をかなり多く含んでいる。

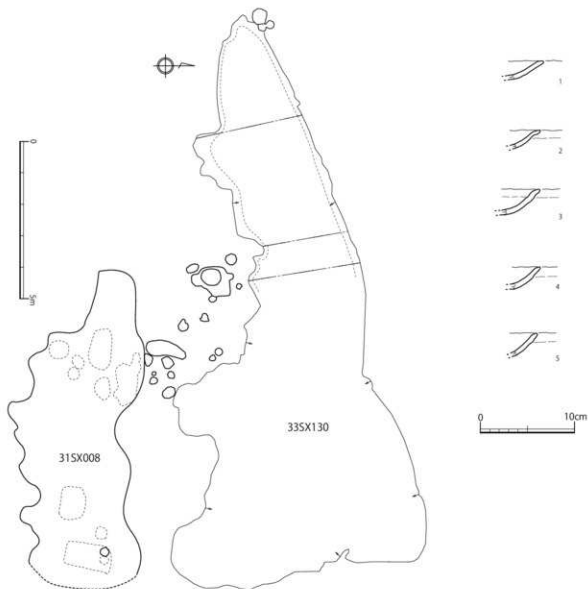
出土遺物は、玉砂利のほか、土師器片等が第 1 層より出土した。図示しているものは 3 点で、1 は在地系土師器小坏である。2・3 は京都系土師器皿片であり、2 は口縁部の器壁は厚い傾向を示す。

31SX008・33SX130 (第132図)

J-13-q～t-20～25区、33SX085の西側に近接して検出した。切り合いの関係は31SD002を切るが、33SX085との切り合いの関係はない。平面プランの上端南ラインは、直線的ではないが、東・北ラインはほぼ直線的であり、特に北ラインと33SX085の北ラインは、ほぼ同一直線上にのる状況である。規模は東西の最大長で17.5m、南北の最大長で8mを測る。深さは遺構西側一部を掘り下げており、遺構深さは5cmほどで浅い。ただ東ラインの攪乱部分を見ると、0.3mほど西側よりは深いようである。埋土は暗褐色粘質土であり、



第131図 33SX085遺構(1/120)及び出土遺物(1/4)実測図



第 132 図 31SX008・33SX130 遺構 (1/120) 及び出土遺物 (1/4) 実測図

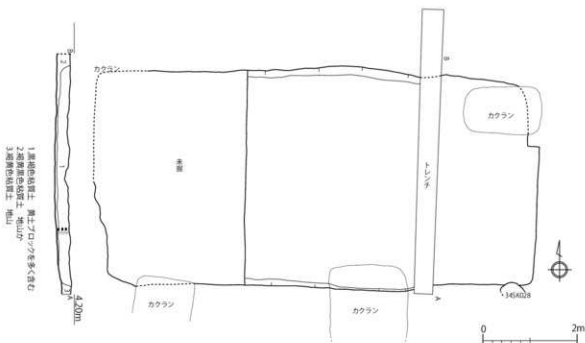
り、玉砂利を多く含む。また 33SX130 の南側に近接して 31SX008 が検出された。31SX008 の残存状況は不良であるが、東西軸で 10+α m、南北軸 3.4 m、深さ約 0.1 m であり、底面は凸凹している。埋土からは拳大の円礫が多量に出土している（巻末写真図版 10 参照）。出土遺物は図示していないが、33SX130 と類似する京都系土師器皿片が出土している。

出土遺物は 5 点図示した。33SX130 からの出土で、1～5 は京都系土師器皿片である。器壁は厚い傾向を示している。

34SX002 (第 133 図)

J-18-r～9-s～12 区で検出した。検出標高 4.1 m である。切り合いの関係は 34SK028 に切られる。平面プランは長方形形状を呈し、北西ラインは攪乱等の影響と遺構残存状況が不良であったため、検出できなかった。ラインは直線的である。規模は東西の最大長で 9.4m、南北の最大長で 4.6m を測る。深さは遺構の東側の掘り下げを行っており、遺構最深部で検出面から約 0.3 m 下である。埋土は暗褐色色粘質土単一層であり、黄土ブロックを含み、前述した遺構に見られた玉砂利はほとんど出土しなかった。

出土遺物は鉄滓片、土師器片のみで、図示できるものがない。



第133図 34SX002遺構実測図(1/80)

【小結】

本項では3基の遺構について報告した。まずそれぞれの時期について述べる。33SX085は、大規模な整地跡と考えられ、この埋土から京都系土師器片が出土しており、館V期段階の構築であろう。また33SX130もまた、京都系土師器皿片が出土しており、館V期の構築であろう。34SX002については、ほとんど時期の判別できる土器が出土しなかったため、時期の詳細は確定できないが、この34SX002を切る34SK028からは、厚手の土師質土器が出土しており、この土器が下限となる。ただ、この遺構を切る遺構が存在せず、この遺構自体から良好な遺物が出土していないため、上限は不明である。ただ、この遺構周辺から館IV期の遺構は全く確認できないため、34SX003等との配置状況からすると、館V期の可能性が高いと推定される。

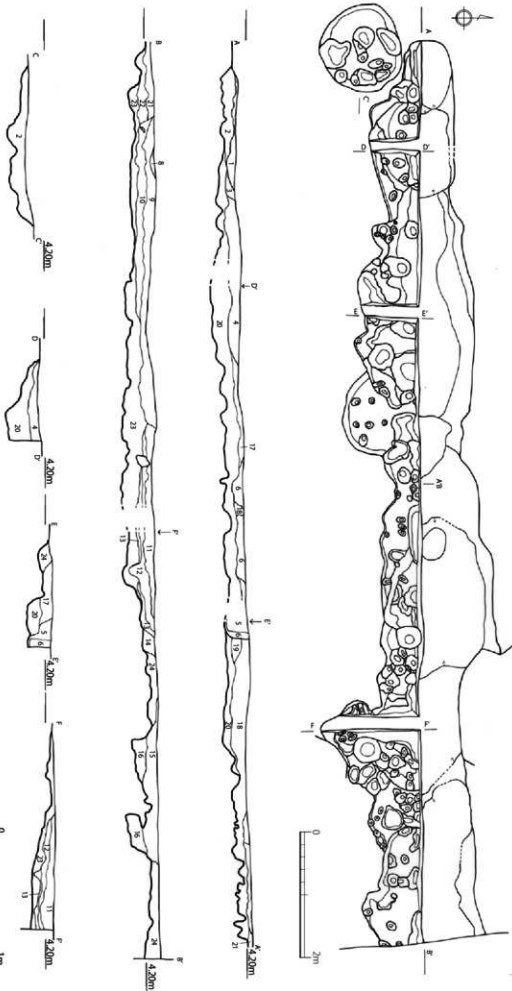
33SX085と33SX130については、埋土に玉砂利を多く含む特徴が挙げられる。掘り込み整地は、第33次調査区北側から第20次調査でも検出されており、整地土に多く玉砂利を含みながら、礎石を設けた箇所がある。中心建物跡も含めて、大友氏館跡内の建物は、建物単体ごとに掘り込み整地を行っている状況が散見される。このことから、この2遺構は、礎石建物跡に伴う整地跡とも考えられる。一方で、この2遺構の北側ラインは直線的であるため、この整地跡の北側ライン周辺に建物跡の存在が推定され、その建物前に玉砂利を敷いた空間を造成した可能性もある。また、33SX130南に位置する31SX008から華大の円礫が多く出土したため、華大礫を貼り付けた空間が33SX130の南側に展開した可能性がある。

34SX002については、前述2遺構と埋土の様相は違い、玉砂利はほとんど入っていない。ただ埋土は固く締まっており、33SX085等と同じような深さからすると、現状では建物跡等を伴う整地痕の可能性を指摘しておきたい。

- 1 赤褐色土 黒灰色シルト・フロンを多量に含む
- 2 黒褐色粘質土 黒灰色シルト・フロンを散在に含む
- 3 黒褐色粘質土 黒灰色シルト・フロンを散在に含む
- 4 赤褐色土 やや粘質
- 5 黒褐色粘質土
- 6 明灰色シルト質土 周囲は粘土固結
- 7 灰白色砂質土 白砂散子を多く含む
- 8 明灰色赤土
- 9 黒褐色粘質土 白色砂子・細い砂粒を多く含む

- 10 明灰色赤土 やや粘質
- 11 赤褐色粘質土 細い黒灰色シルト・フロンを散在に含む やや粘質
- 12 灰白色シルト質土 ぎめ細い砂粒を多く含む
- 13 赤褐色シルト質土
- 14 赤褐色粘質土 黒灰色シルトをわずかに含む
- 15 黒褐色粘質土 白色砂子・砂粒を多く含む
- 16 黒褐色粘質土 黒灰色シルト・フロンを多く含む
- 17 赤褐色土 やや粘質 細い砂粒・黒灰色シルト・フロンを含む

- 18 明灰色赤土 やや粘質あり 赤褐色粘土を含む
- 19 明褐色土 黒灰色シルト・フロンを多量に含む
- 20 明褐色粘質土 大ぎめの黒灰色シルト・フロンを含む
- 21 明褐色粘質土 やや粘質あり 小さい黒灰色シルト・フロンを含む
- 22 灰褐色粘質土 小さい黒灰色シルト・フロンを多く含む
- 23 灰褐色粘質土 黒灰色シルト・フロンを多く含む 4層に灰化
- 24 灰褐色土 やや粘質あり



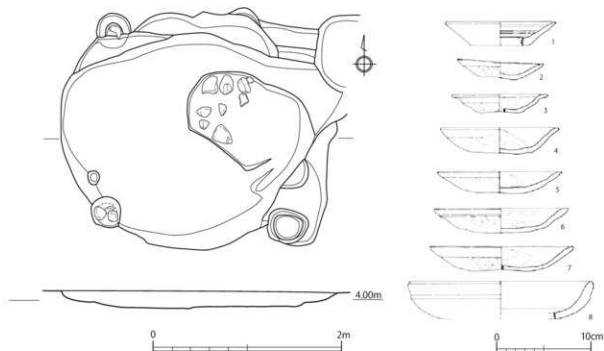
第134図 125X070道横(1/60)及び土層(1/30)実測図

(6) その他性格等不明遺構 (SX)

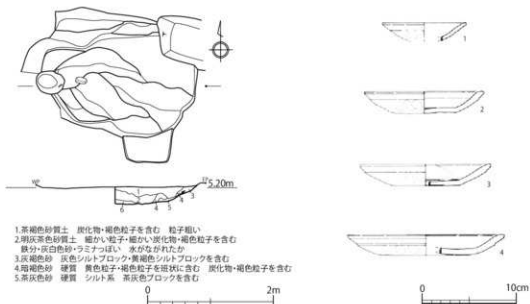
ここでは、遺構の性格が明確に認識できないものや削平を大きく受けていると想定される遺構を取り上げる。中には、植栽痕と考えられる遺構や後述する池状遺構と考えられる可能性の高い遺構もここで報告する。第12次調査から順に報告していく。

12SX070(第134 図)

J-18-q-15 ~ 18 区で検出した。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は 12SE080 等に切られる。庭園跡東端で確認された 12SX070 は、平面では、東西に延びる連続した土坑状のプランが確認でき、基底部も凸凹が



第135図 12SX093 遺構 (1/40) 及び出土遺物 (1/4) 実測図



第136図 12SX099 遺構 (1/60) 及び出土遺物 (1/4) 実測図

激しいことから通常の溝跡とは相違する様相を示す。規模は、長軸 14.3m、短軸 2.0m、深さ 0.2m を測る。埋土の状況は、砂質の強い埋土がみられ、下部にはブロック土を多く含んだしまりのない埋土がみられる。当遺構の性格については、状況からみて樹木が植えられていた植栽痕の可能性が指摘できる。また、この北側には 12SA081 の柵跡もみられ、この 2 つの遺構は庭園跡の東側を遮へいするような機能をはたしていたと考えられる。

出土遺物は京都系土師器皿小片や瓦片等がある。

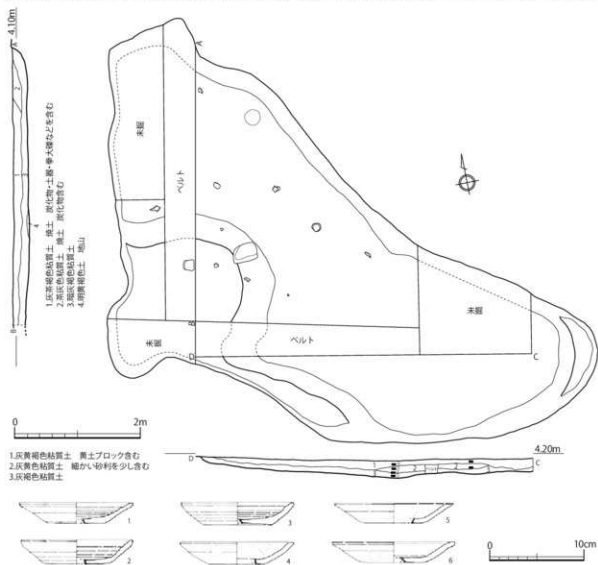
12SX093(第 135 図)

J-18-t-13 区で検出した。検出標高は 4.3 m である。切り合いの関係は 12SB145 と重複し、この建物跡より新しい。平面プランは不定形な円形形状で、規模は長軸 2.9m、短軸 2.4m、深さ 0.2m を測る。粗い砂質の埋土をもつ大形の不定形土坑で、埋土の状況は 12SX099・202 等と類似する。中央やや東側に、20 cm ほどの礫が集中している。

出土遺物は、土師器が出土している。1 は在地系土師器、2～8 は京都系土師器で、2・3 は小皿であり、2～8 は全て指押さえの痕がある。8 は特に碗形になるものであろう。

12SX099(第 136 図)

J-18-t-12 区で検出した。検出標高は 4.0 m である。切り合いの関係はない。平面プランはやや不定形で、規



第 137 図 12SX202 及び 34SX003 遺構 (1/60) 及び出土遺物 (1/4) 実測図

模は長軸 2.6m、短軸 2.0m、深さ 0.2m を測る。粗い砂質の埋土をもち、埋土の状況は 12SX093・202 等と類似する。下層はシルト質の粘土である。

出土遺物は、土師質土器が出土している。1～4 は全て京都系土師器である。4 は器壁が厚い。

12SX202・34SX003(第 137 図)

J-18-t-10～11 区で検出した。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係はほとんどない。平面プランは三日月形状を呈す。規模は長軸 9.2m、深さ 0.4m を測る。上層には粗い砂質の埋土をもち、下層は第 137 図の 3 層の灰色シルト質粘土で覆われている。土壌分析を行った結果、滞水している状況が確認された。

出土遺物は、土師器が出土している。1～3 は在地系土師器で、内面にクロロ目痕を強く残す。4～6 は京都系土師器皿である。

28SX012・28SX013・28SX014(第 138 図)

J-18-t-4～J-4 区で検出した。検出標高は 4.2 m である。切り合いの関係は 28SD025 と若干重複関係をもつが、当遺構が切る状況である。また、これら遺構も便宜上細かく S 番を分けているが、同時期の遺構として捉える。全体平面プランは南北にやや長い不定形状を呈し、規模は長軸 5.7m、短軸 3.7m、深さ 0.1m を測る。掘り下げは 28SX013 の南側以外を完掘し、底面は特に 28SX013 等凹凸が激しく、全体的に歪の状況である。

出土遺物としては、土師質土器や陶器などが出土している。1～3 は京都系土師器で、1 は焼成後穿孔がある。4 は不明土師質土器、5 は龍泉窯系青磁碗、6 は備前焼鉢である。

28SX073(第 139 図)

J-18-j-5 区で検出した。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は、28SD025 を切り、28SD010 に切られているが、28SD010 とはほぼ同時期と考えられる。平面プランは東西に長い不定形状を呈す。規模は長軸 4.0m、短軸 1.4m、最大深度 0.6m を測る。調査時は、この遺構をさらに細かく S 番を分けていたが、ほぼ同時期の関連する一連の遺構と捉え、若い S 番で示した。底面は、28SX013 等の状況ほど細かくはないが、フラットではなく、大きく凹凸がある状況で、埋土も 28SX013 等と類似するため、同じような性格の遺構と推定される。埋土はブロック土を多く含み、人為的に埋められた可能性があり、調査中、植物根と推定されるものが状態悪く出土したりしている。

出土遺物は、在地系土師器片、土師、中国青花片等がある。

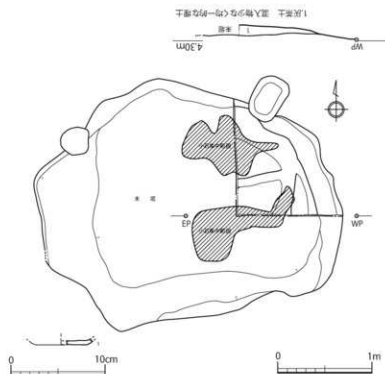
28SX080(第 140 図)

J-18-k-14～15 区で検出した。検出標高は 4.3 m である。平面は不定隅丸方形を呈す。規模は長軸 3.2m、短軸 2.6m、深さ 0.1m を測る。図の斜線部に小腰が集まっている箇所がある。掘り下げは北東部の一部しか行っていないため、底面状況は不明である。

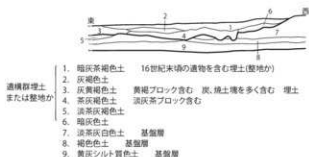
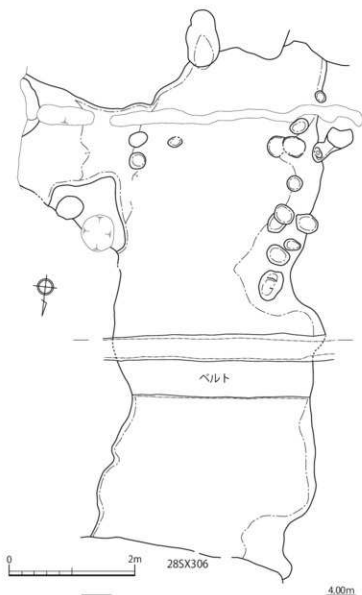
出土遺物としては、板状圧痕がみられる在地系土師器が出土している。

28SX100(第 141 図)

J-18-k-1・17～18 区で検出した。検出標高は 4.6 m である。切り合いの関係は、28SX306 に切られている。平面プランは南北に長い不定形状を呈す。規模は長軸 8.5m、短軸 3.4m、深さ 0.5m を測る。



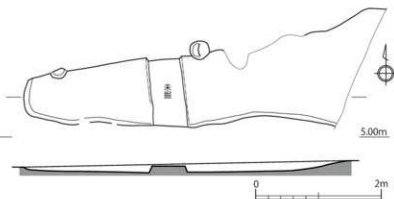
第140図 28SX080遺構(1/40)及び出土遺物(1/4)実測図



第141図 28SX100遺構実測図(1/60)

1. 暗灰茶褐色土 16世紀末頃の遺物を含む埋土(壁地か)
2. 灰褐色土
3. 灰黄褐色土 黄褐ブロック含む 灰、焼土塊を多く含む 埋土
4. 茶灰褐色土 淡灰茶ブロック含む
5. 淡茶灰褐色土
6. 暗灰褐色土
7. 淡茶灰白色土 基礎層
8. 褐色土 基礎層
9. 黄灰シルト質土 基礎層

遺構群埋土
または整地か



第142図 28SX306遺構実測図(1/60)

掘り下げは一部しか行っていない。土層の堆積状況から、整地もしくは溝状遺構の可能性が考えられる。

出土遺物は図示していないが、京都系土師器皿片、瀬戸美濃産陶器片、備前焼裏片等がある。

28SX306(第142図)

J-18-k ~ I-17 ~ 18区で検出した。検出標高は4.5 mである。切り合いの関係は、28SX100を切る。平面プランは、北側を掘乱により削平を受けているため、遺構の大半は不明であるが、東西に長い不定長方形形状を呈すと思われる。規模は長軸5.8+am、短軸2.9+am、深さ0.1+amを測る。

出土遺物は図示していないが、在地系土師器の坏・皿片、中国青花小碗等がある。

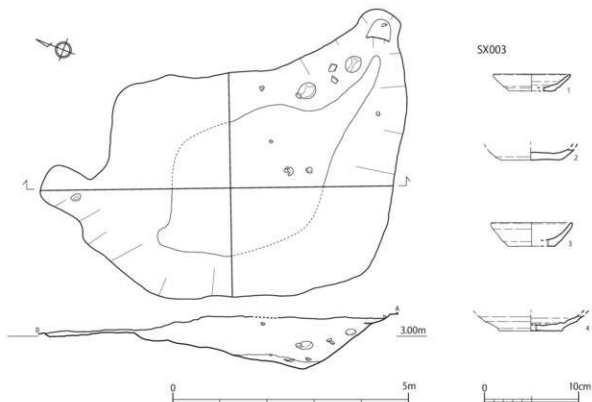
31SX003(第143図)

J-13-k ~ I-20 ~ 21区で検出した。検出標高3.3 mである。切り合いの関係は32SD004を切る。平面プランは不定形であり、南北断面軸で7.4 m、東西断面軸で4.8 mを測る。最深部は検出面から1.2 mである。遺構底面はフラットではない。斜面に貼り付くように、人頭大から拳大の礫が検出されている。埋土は灰褐色粘質土で、SG001・002と類似している。

出土遺物は1~4まで土師器であり、1は小皿、3は小坏、他は坏であろう。4などは内面にロクロ目痕を残す。

32SX009・014・015(第144図)

J-13・18-k ~ I-25・1 ~ 3区で検出した。埋土の関係からこれらは同時期の関連する遺構と考えられる。ただ掘乱により大きく削平を受けていると考えられる。検出標高2.9 mである。切り合いの関係はSG003に切られる。32SX009は長軸で7 m、AB断面軸で2 mを測る。トレンチを1本入れたところ、深度は浅く0.2 m(底部標高2.6 m)である。埋



第143図 31SX003遺構(1/80)及び出土遺物(1/4)実測図

土は図示のとおり、灰褐色粘質土であり、特徴として、多量の白い玉砂利を含む。32SX004 や 32SX005 の埋土も 32SX009 と類似するが、残存状況は非常に悪い。また東西方向の北壁断面を観察すると、第1層は埋め土であるがその直下の層である第3層は白い玉砂利で充填したように検出され、第4層は硬くしまり、第3層が第4層を掘りこんでいるため、意図的な整地とも考えられる。また第3層と第2層の直上には拳大～やや大きめの礫が多く、2・3層上面が一時期のプライマリーな面であるならば、当時の地表面としていた可能性がある。さらに北側で、SG001 の埋土の下から斜面にかけて人頭大ほどの礫が貼りついて第152図のように検出されている。これらの状況から SX009・014・015 は SG002・003 と関連する遺構と考えられる。

出土遺物はほとんどなかった。

31SX014 (第14・26・27図)

J-18-q ~ r-2 ~ 6区で検出した。検出標高 4.0 m である。切り合いの関係は 33SD088 に切られる。個別図では図示していない。規模は東西方向の長軸で $11+a$ m、短軸で $2+a$ m で、深さは 0.1 m である。遺構は南側を大きな攪乱により切られている。掘り下げは、この遺構の西端から 1 m の幅で部分的に掘り下げた。結果、底面は凸凹が著しく、この状況は底面全体に広がっていると考えられる。

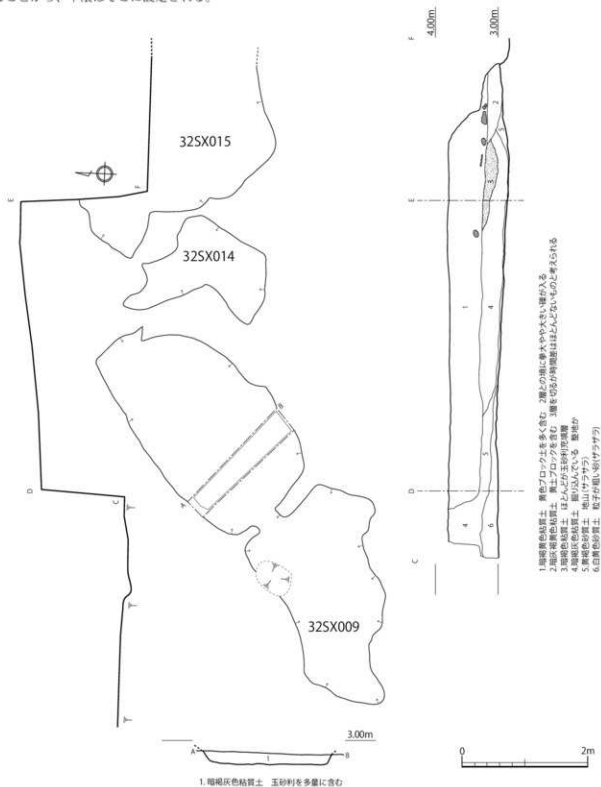
出土遺物はほとんどなかった。

【小結】

性格不明遺構として 10 遺構取り上げた。これらのうち、凸凹の底面を有す遺構として、12SX070、28SX012・013・014・073・(080)、31SX003 等が挙げられ、植栽痕としての可能性が考えられる。時期は、遺構の切り合いから 31SX014 は、館Ⅲ～Ⅳ期と推定され、その他の植栽痕と考えられる遺構は出土遺物や新旧関係から館Ⅴ期と考えられる。また、埋土が類似する 12SX093・099・202 は、個別の土坑状を呈すが、関連している可能性が高い。時期は出土遺物から館Ⅴと考えられる。32SX009・014・015 もまた同時期の関連遺構として考えられる。これらは後述する SG001 もしくは同 002 との関連する可能性が高く、出土遺物は少ないが SG001 に

切られる切り合いの関係から、館Ⅲ～Ⅳ期段階と考えられる。31SX014は、その埋土の状況や出土遺物より、館Ⅲ～Ⅳ期段階に機能したと考えられ、埋土や灰色粘土が確認された状況から、SG002や同003と関連があると考えられる。

その他、28SX100や同306は出土遺物等少ないが、16世紀末頃に廃棄された、28SE095に掘り込まれていることから、下限はそこに設定される。



第144図 32SX009-014-015遺構実測図(1/60)

(7) 庭園関連遺構

大友氏館跡庭園遺構は、館南東部で検出されている。

内容は池状遺構の切り合いの関係も含めて、3基あり、植栽痕や溝跡、不明遺構を含めての庭園の関連遺構と推定されるものも展開している。

庭園関連遺構としては、館Ⅲ期から確認される池状遺構1の報告と併せて、この池状遺構と切り合いの関係をもち重複する池状遺構2の報告、館Ⅳ～Ⅴ期の池状遺構3の報告を平面図、断面図を用いながら説明する。

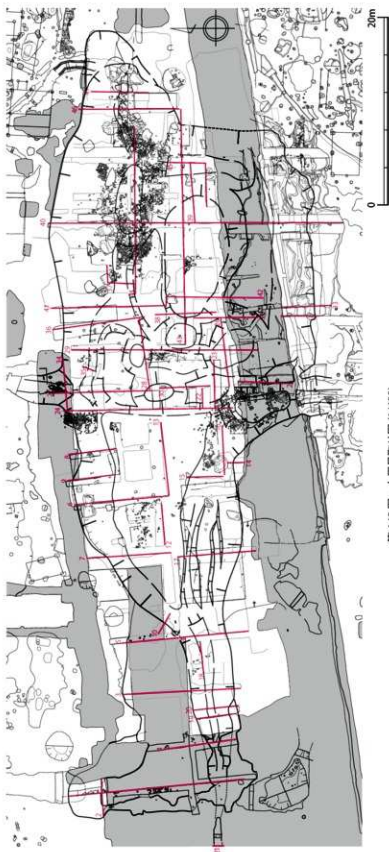
また植栽痕や溝状遺構、その他関連遺構もそれぞれ池状遺構と併せて報告する。本文中において、池状遺構の構築時に伴う土に対し、成形土や造成土という語句を用いている。また、土層報告文中の土層番号は、該当図版の番号と一致する。

① 池状遺構 SG001・SG002 (第145・146図)

SG001・002は調査区西側で検出した。検出標高4.1mである。切り合いの関係はSG001がSG002に切られる。

SG001は32SD002や32SD004を切り、SG003から延びる西溝(31SD006・007)に切られる。この遺構の掘り下げは館3次調査でトレンチを数箇所入れたのみで、その後の調査では一部を除いて、ほとんど掘り下げは行っていない。SG001の規模は東西軸で6.7+ α m、南北軸は土層2ラインで18.8+ α mである。掘り方の深さは検出標高4.1mより1.9m下(標高2.2m)である。

SG002はSG001を切り、SG002の南側ラインはSG003から延びる西溝に切られており、その西溝とほぼ重複していると推定されるため、ほとんど不明である。またSG003にSG002東側の大部分が削平を受けており、特に南側ラインは



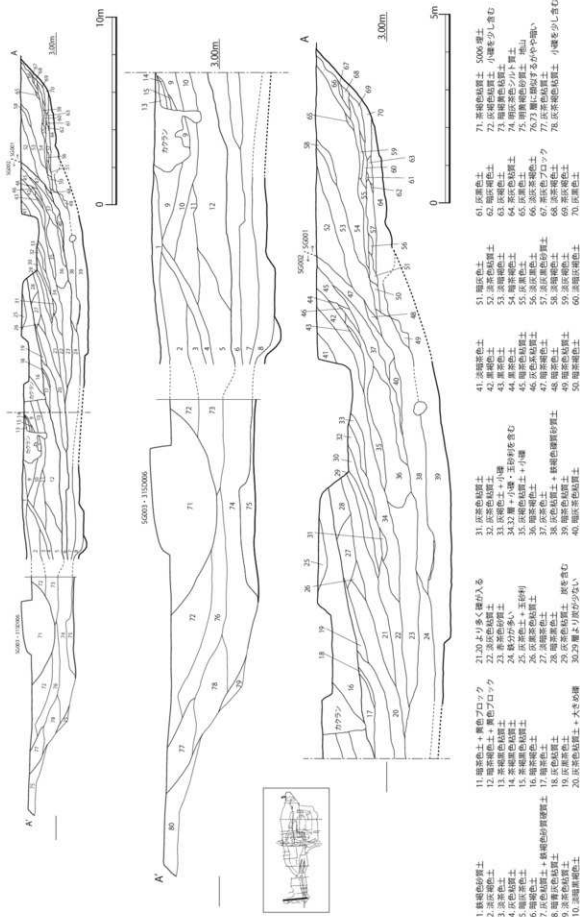
第145図 土層記取図(1/400)

SG003から延びる31SD006により削平されている。SG002の規模は東西軸で $17+\alpha$ m、南北軸は土層1ラインで $12.5+\alpha$ mである。掘り方の深さは検出標高4.1 mより1.5 m下(標高2.6 m)ほどである。SG001・002の関連遺構として、31SX003や32SX009・014・015等があげられるが、SG001と002のどちらに関連するかは不明である。

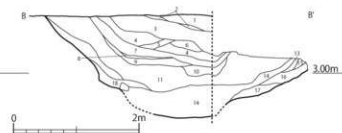
後述する土層からは、SG001が一度意図的に埋められた後、SG002造成のために、掘り返しが行われてい



第146図 SG001・SG002実測図(1/200)

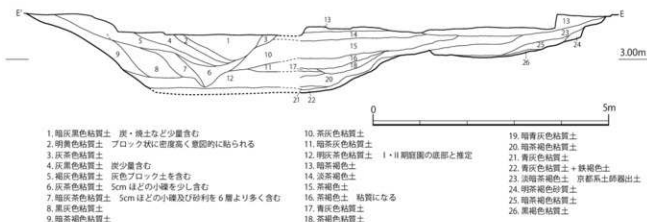


第 147 図 土層 1 全体 (1/200) 及び拡大 (1/100) 実測図



1. 淡褐色土
2. 灰黒褐色土
3. 淡褐色土+小礫玉砂利
4. 黒褐色玉砂利少
5. 褐色土+黒色ブロック
6. 黒褐色玉砂利少
7. 淡褐色土
8. 黄褐色粘質土
9. 黄褐色粘質土+淡黒色ブロック
10. 暗茶褐色土
11. 灰褐色土
12. 暗茶褐色土
13. 暗茶褐色土
14. 灰色粘質土
15. 赤灰色砂質土
16. 暗黒色土
17. 灰黒色粘質土
18. 灰色粘土+暗褐色土

第148図 土層2実測図(1/60)



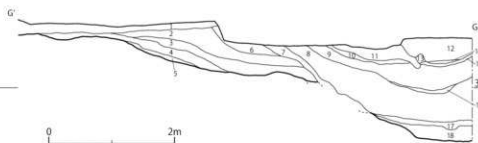
1. 暗黒色粘質土 炭・機土など少量含む
2. 明黄色粘質土 ブロック状に密度高く意図的に貼られる
3. 灰褐色粘質土
4. 灰褐色粘質土 炭少量含む
5. 暗褐色粘質土 灰色ブロック土を含む
6. 灰褐色粘質土 5cmほどの小礫を少し含む
7. 暗茶褐色粘質土 5cmほどの小礫及び砂利を6層より多く含む
8. 黒灰色粘質土
9. 暗茶褐色粘質土
10. 茶灰色粘質土
11. 暗茶褐色粘質土
12. 暗茶褐色粘質土
13. 暗茶褐色土
14. 淡茶褐色土
15. 茶褐色土
16. 茶褐色土 粘質になる
17. 青灰色粘質土
18. 茶褐色粘質土
19. 暗青灰色粘質土
20. 暗茶褐色粘質土
21. 青灰色粘質土
22. 青灰色粘質土+鉄褐色土
23. 淡暗茶褐色土 京都系土師器出土
24. 暗茶褐色砂質土
25. 暗茶褐色粘質土
26. 黒褐色粘質土

第149図 土層3実測図(1/80)



1. 暗茶褐色土
2. 暗茶褐色土
3. 茶褐色土+青灰色粘質土
4. 茶褐色系粘質土
5. 暗茶褐色土
6. 粘質系+鉄色
7. 鉄灰褐色粘質土+鉄褐色砂質土
8. 粘質土系
9. 粘質土系
10. 暗青灰色粘質土軟質 めき取りか
11. 暗茶褐色土
12. 暗茶褐色粘質土
13. 鉄褐色+灰色粘質土
14. 暗茶褐色粘質土に中礫を含む
15. 鉄灰褐色粘質土
16. 淡灰色粘質土
17. 灰色粘質土
18. 灰色粘質土やや鉄褐色
19. 灰褐色粘質土
20. 2022層よりやや粘質
21. 鉄灰褐色粘質土
22. 鉄褐色粘質土
23. 淡褐色土
24. 暗茶褐色土
25. 暗茶褐色粘質土
26. 淡暗茶褐色土
27. 淡茶褐色土
28. 鉄灰褐色粘質土
29. 灰褐色粘質土+鉄褐色土
30. 淡暗茶褐色土
31. 灰褐色粘質土
32. 鉄褐色土
33. 暗茶褐色土
34. 淡黄灰色土

第150図 土層4実測図(1/60)

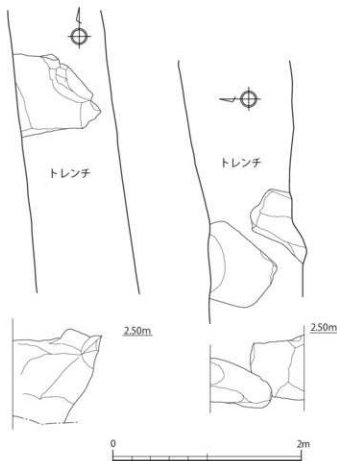


1. 鉄褐色粘土層
2. 暗茶褐色土
3. 暗茶褐色土より暗い
4. より暗黄色が強い
5. 淡暗茶褐色土
6. 淡暗茶褐色土
7. 青灰色粘質土
8. 暗黄褐色土
9. 暗茶褐色土
10. 青灰色粘質土
11. 暗茶褐色土
12. 暗茶褐色土
13. 茶褐色ブロック
14. 鉄褐色土
15. 青灰色粘質土
16. 青灰色粘質土
17. 鉄褐色粘質土礫質
18. 暗青灰色粘質土

第151図 土層5実測図(1/60)



第152図 土層17南側出土確実測図(1/60)



第153図 3次トレンチ4遺構実測図(1/40)

る。SG002はSG003よりも西側で特にひと回り小さくなる。遺構の北側ラインは攪乱などで不明な部分が多く、SG002は南側ラインが31SD006に切られ、不明である。そのため全体の遺構プランは分らない。

SG001とSG002を土層断面図からみていく。

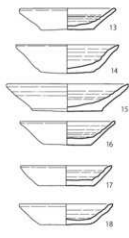
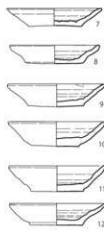
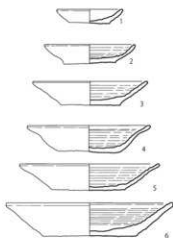
土層1 (第147図)はSG002・003を南北軸で切ったものである。図示のとおり、52層他がSG001の埋土である。北側斜面の土層の細かい箇所が55・60層と70・64層の間であるが、これらの層と24・38・39層は掘削後、地山が砂のため、成形した粘土層と考えられる。また斜面の方は細かく貼り、底面のフラットに近い箇所は大まかに貼っていると考えられる。またこれらの層には鉄分を多く含むため、滞水していた可能性が高い。またSG001が52～54層で一度埋没した後、23・36・40・47層より上層及び南側がSG002の構成土であり、40・47、23・36層などは、一度掘り込んだ後の表面を成形した成形土と考えられ、在地系土師器などが多量に出土する。また37層等は親指ほどの小礫が多く貼ってある状況であり、ここがSG002機能時の面と考えられる。SG001及び002とも、埋土はブロック土を多く含むことから、自然埋没というよりは、意図的に埋め戻された可能性が高い。

土層2 (第148図)は11層より下層がSG001の埋土であり、それより上層がSG002の埋土である。この周辺には7・10層あたりから多量のかわけ廃棄が見つかっており、この層はSG002の成形土と推定されることから、何らかの祭祀を行っている可能性が高い。また14層などは、SG001の成形土であろう。

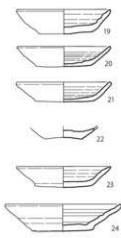
土層3 (第149図)は、ほとんどがSG002・003の埋土と考えられる。1～9層は31SD006の埋土であるが、その他はSG002の埋土であろう。特に12・20層は成形土と考えられる。SG002成形土である23・25層から多くの土器が出土した。

土層4 (第150図)は、1～3層は31SD006の埋土でありSG002・003よりも新しい。その他はSG002・003の埋土であり、15層付近

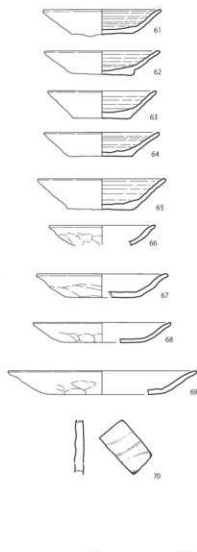
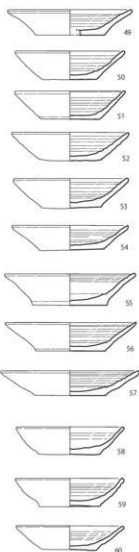
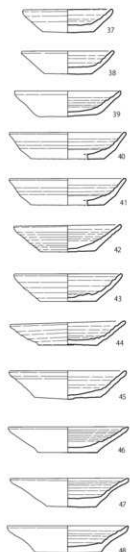
SG001埋土



SG002成形土

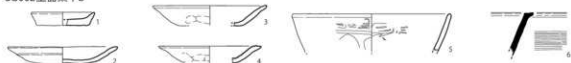


SG002埋土

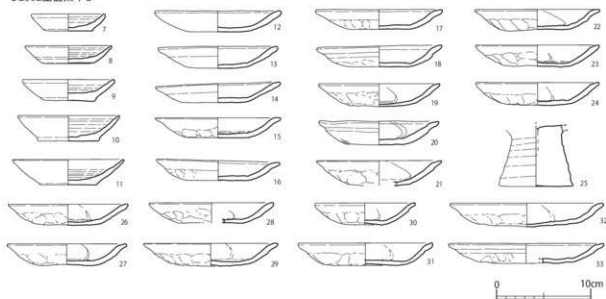


第154図 SG001・SG002成形土及び埋土出土遺物実測図(1/4)

SG002土器集中B



SG002土器集中C



第155図 SG002出土遺物実測図(1/4)

は灰色粘土であり、成形土と考えられる。

土層 5 (第 151 図) は、18 層が灰色粘土であり、SG002 に伴う成形土と推定される。また 2 ～ 5 層も SG002 に関連する造成土の可能性がある。6 ～ 16 層までは SG002 の埋土か。土層南側の G ラインは土層 11 の V ラインとほぼ同じ箇所である。土層 5 の 18 層は土層 11 の 14 層、土層 5 の 8 層は土層 11 の 13 層くらいが類似層になる。また 2 層から集中的に第 155 図 26 ～ 33 に示す京都系土師器皿が出土している。

第 152 図は、土層 17 でも示すとおり、SG003 に削平されている形で検出した。また南側に傾斜する斜面を持ち、その斜面には人頭大よりやや小ぶりの礫が貼られている状態で出土した。これは付近の第 144 図の 31SX009 ほかも関連する遺構の可能性がある。

第 153 図は、SG001・002 の下層より出土した大きな石である。トレンチ調査であるので、全体的な配置の状況はわからないが、成形土に伴って、意図的に設置していると考えられる。また出土レベルから SG001 に伴うと推定される。

出土遺物は、SG001 埋土である第 147 図 52・53 層から、第 154 図 1 ～ 18 の土師器が出土した。内面にロクロ目痕を残すもので、胴部は直線的に底部から直接伸びる 2 や 14、また 3 や 9 など底部で段をつけて直線的に延びるものがある。SG002 は、成形土である土層 1 の 40・47、23・36 層や土層 2 の 7 ～ 10 層から第 154 図 19 ～ 24 が出土した。22 は小坏で、19 ～ 21・23・24 は内面にロクロ目痕を顕著に残す。SG002 埋土の出土遺物は、第 154 図 25 ～ 70 である。26 ～ 65 は内面にロクロ目痕を残す土師器である。また 66 ～ 69 の薄手の京都系土師器皿が出土している。70 は中国磁州窯系壺片であろう。さらに第 155 図 1 ～ 6 の遺物も SG002 埋土出土と考えられ、京都系土師器皿のほか、在地系土師器小皿、龍泉窯系青磁碗なども出土している。また SG002 の北斜面には、土層 3 の 23 層より第 155 図 7 ～ 25 のロクロ目痕を残す土師器や京都系土師器皿、25 は土製燭台などが標高約 3.1 m 付近で集中的に出土しており、さらに第 155 図 26 ～ 33 も第 151 図土層 5 の 2 層から集中的に出土した京都系土師器皿である。

【小結】

以上のことから SG001 と SG002 は、掘り方の表面に粘土を貼り付けるなどの状況が看取され、さらに鉄分などを多く含むため、滞水していた可能性が指摘される。また径約 1 m の石などの存在や、SG002 は斜面上に小礫を貼り付けている状況がある。また出土土器は SG001 の埋土や SG002 の成形土からロクロ目土師器（B 系土師器）が出土しており、この土器が SG001 の下限を示すものと考えられ、SG001 の構築年代は 15 世紀後葉頃の館Ⅱ期末から館Ⅲ -1 期と考えたい。また SG002 は 16 世紀初葉から前葉頃の館Ⅲ期構築と推定し、下限は SG002 埋土から薄手の京都系土師器Ⅲが出土するため、16 世紀中葉頃と捉えておきたい。

また 31SX003 や 32SX009・014・015 の遺構であるが、埋土の状況が SG001・002 と比較すると類似し、特



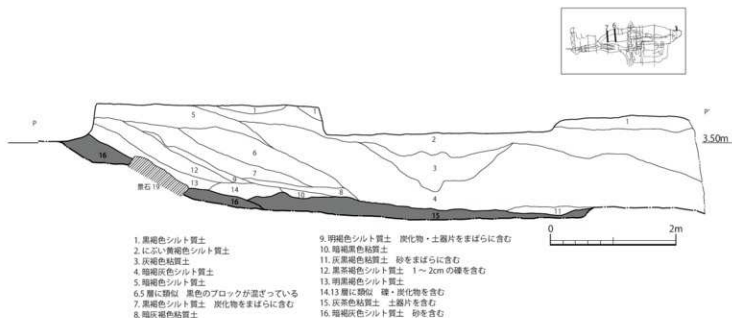
第 156 図 SG003Ⅲ期西側拡大図 (1/200)

に SG003 に切られたりしている状況から、出土土器も参考にすると SG001 や SG002 と同一遺構と捉えることもできる。特に 31SX003 はその位置関係や出土土器から、SG001 と関連する可能性が高いと推定される。また 31SX014 は良好な出土遺物はないが、遺構の切り合いから、SG001・002 と同時期の可能性があり、底面の凸凹の状況から植栽痕などの性格が考えられる。

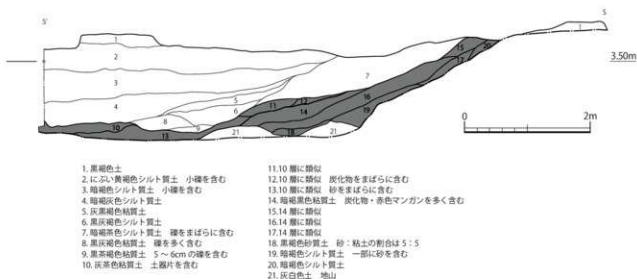
②池状遺構 SG003 (第 145 図)

J-13 m ~ o-25、j-18 k ~ r-1 ~ 15 区で検出した。検出標高は西側で 4.1 m、北側で 3.8 m、東側 4.2 m、南側 4.1 m である。全体プランは東西に長い楕円形状を呈し、この遺構の東西南北辺にはそれぞれ溝が接続している。これら溝を除く SG001 の規模は、東西の長軸で 67 m、南北で 30 m を測る。最深部は中央付近の推定湧水点付近で標高 2.2 m であり、検出標高から約 2 m 下がる。4 つの溝はこの SG003 との切り合いの関係はないことから同時期と考えられ、詳細は後述する。

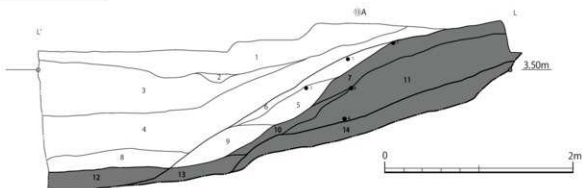
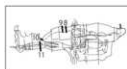
SG003 は規模が大きいため、まず土層図でこの遺構のそれぞれ各箇所の造成時・機能時・廃絶時の状況を見



第 157 図 土層 6 実測図 (1/60)

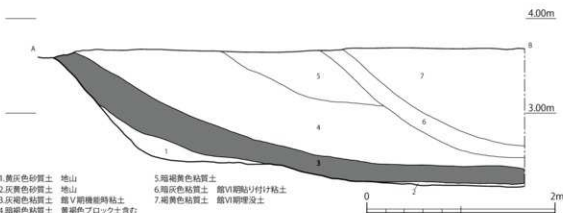


第 158 図 土層 7 実測図 (1/60)



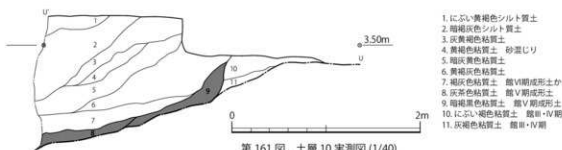
1. 黒褐色シルト質
2. 灰黄色シルト質土 砂を多く含む
3. にぶい黄褐色シルト質土
4. 暗褐色粘質土 礫・土礫片を含む
5. 灰褐色シルト質土 砂を多く含む 館VI期造成土か
6. 灰褐色粘質土 砂を多く含む 館VI期造成土か
7. 灰黒褐色粘質土 炭化物をまばらに含む
8. 赤灰色粘質土 炭化物をまばらに含む 館VI期造成土か
- 9.5 層に類似 土礫片・礫・炭化物を含む 館VI期造成土か
10. 灰褐色粘質土 7層に類似
11. 黒褐色シルト質土 土礫片を含む 館V期造成土
12. 灰褐色粘質土 砂・土礫片を少量含む 館V期造成土
13. 灰黒褐色粘質土
14. 暗褐色シルト質土 砂を含む

第159図 土層 8 実測図 (1/40)



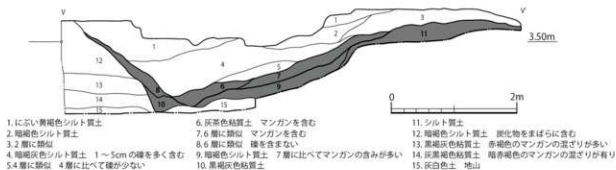
1. 黄灰色砂質土 地山
2. 灰黄色砂質土 地山
3. 灰褐色粘質土 館V期機能時粘土
4. 暗褐色粘質土 黄褐色ブロック土含む
5. 暗褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土 館VI期貼り付け粘土
7. 暗褐色粘質土 館VI期埋没土

第160図 土層 9 実測図 (1/40)



1. にぶい黄褐色シルト質土
2. 暗褐色シルト質土
3. 灰黄色粘質土
4. 黄褐色粘質土 砂混じり
5. 暗褐色粘質土
6. 黄褐色粘質土
7. 暗褐色粘質土 館VI期造成土か
8. 灰褐色粘質土 館V期造成土
9. 暗褐色粘質土 館V期造成土
10. にぶい褐色粘質土 館III・IV期
11. 灰褐色粘質土 館III・IV期

第161図 土層 10 実測図 (1/40)



1. にぶい黄褐色シルト質土
2. 暗褐色シルト質土
3. 2層に類似
4. 暗褐色シルト質土 1~5cmの礫を多く含む
5. 4層に類似 4層に比べて礫が少ない
6. 灰褐色粘質土 マンガンを含む
7. 6層に類似 マンガンを含む
8. 6層に類似 礫を含まない
9. 暗褐色シルト質土 7層に比べてマンガンの含みが多い
10. 暗褐色粘質土
11. シルト質土
12. 暗褐色シルト質土 炭化物をまばらに含む
13. 暗褐色粘質土 赤褐色のマンガンの置きざりが多い
14. 灰褐色粘質土 暗褐色のマンガンの置きざりが多い
15. 灰白色土 地山

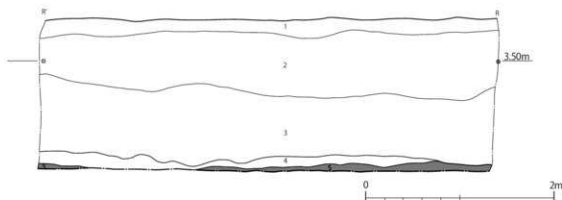
第162図 土層 11(1/60) 実測図

ていき、それから、この内部で検出できた細かい遺構について述べていきたい。

まず土層図からであるが、SG003の西側から中央付近、東側にかけて述べていく。またそれぞれ土層図ごとにアミカケをしている箇所があるが、これは地山である砂層の上に、SG003全体を灰色系の粘土層が意図的に覆っているのが確認されているため、これら灰色粘土層を指す意味で示した。本文では灰色系粘土土という語句を便宜的に用いている。また景石+番号は、第206図に示す景石について番号を付しており、それと同じ番号を指している。土層図中「■」等箇所は、土壌サンプリングしたところで詳細は第IV章第1節で述べる。

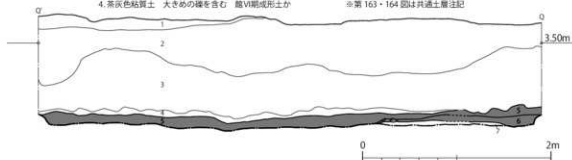
SG003 西側

土層6 (第157図) は、西側の北斜面の図である。景石3・19の付近である。景石19は地山と接するようで、景石3・19の配置と同時に灰色粘土を貼っている。その後、10→12→13→14層で覆われたあと、5～8層でさらに埋没するが、5・6・8層と4層に差があり、また5・6・8層は多くのブロック土が入るため、意図的に土を入れた可能性がある。5・6・8層は館VI期段階と考えられる。その後、4→3→2→1層の順に埋没していったと考えられる。

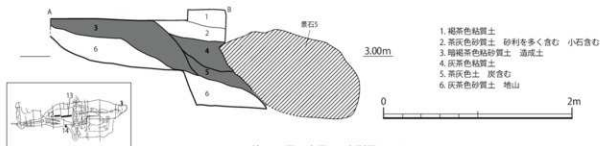


第163図 土層12実測図 (1/40)

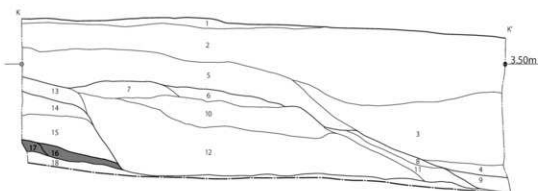
- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| 1. 黒褐色シルト質土 | 5. 灰茶色粘質土 館V期成形土 |
| 2. にぶい黄褐色シルト質土 1～2cmの小礫を含む | 6. 5層に類似 |
| 3. 黄褐色シルト質土 7～8cmの礫をまばらに含む | 7. 灰白色砂質土 地山 |
| 4. 茶灰色粘質土 大きめの礫を含む 館VI期成形土か | ※第163・164図は共通土層注記 |



第164図 土層13実測図 (1/60)

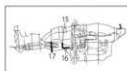


第165図 土層14実測図 (1/40)

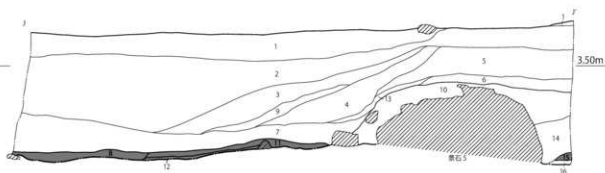


1. 黒褐色シルト質土
2. にぶい黄褐色シルト質土
3. 暗褐色シルト質土 礫を多く含む
4. 茶灰色シルト質土 龍VI期成層土
5. 暗褐色シルト質土 炭化物をまばらに含む
6. 茶灰色土 細い砂を多く含む 龍VI期成層土
7. 6層に類似
8. 暗灰色粘質土 土器・炭化物をまばらに含む
9. 4層に類似
10. 6層に類似 まばらにマンガン沈着あり

11. 黒褐色砂質土 全体に粘土をまばらに含む
12. 暗灰色粘質土 ブロック状に砂を含む
13. 暗褐色シルト質土 マンガン沈着 龍VI期成層土
14. 13層に類似
15. 黒灰色粘質土 砂を多く含む
16. 灰褐色粘質土 龍VI期成層土
17. 16層に類似
18. 灰白色砂質土 地山



第166図 土層15実測図(1/40)

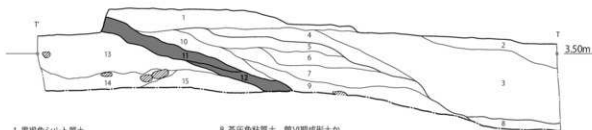


1. 黒褐色シルト質土 炭化物をまばらに含む 黒色ブロックを含む
2. にぶい黄褐色シルト質土 1~2cmの小礫を含む
3. 暗褐色シルト質土 礫を含む
4. 黒褐色シルト質土
5. 暗褐色シルト質土 炭化物をまばらに含む
6. 暗褐色シルト質土 細い砂を多く含む
7. 暗褐色粘質土 5mmの礫を含む
8. 灰褐色粘質土 龍VI期成層土

9. 黒褐色シルト質土
10. 6層に類似
11. 8層に類似
12. 8層に類似
13. 5層に類似 砂を含む
14. 黒灰色粘質土 砂を多く含む
15. 8層に類似
16. 灰白色砂質土 地山



第167図 土層16実測図(1/40)

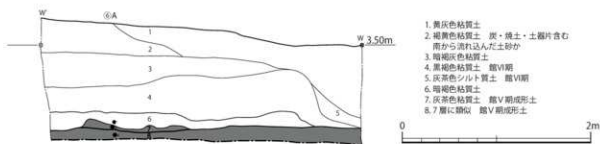


1. 黒褐色シルト質土
2. にぶい黄褐色シルト質土
3. 暗褐色シルト質土 礫を含む
4. 暗褐色シルト質土 炭化物を多くまばらに含む
5. 暗褐色シルト質土 龍VI期成層土
6. 5層に類似 炭化物を含む
7. 5層に類似

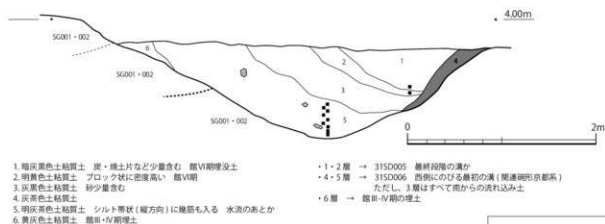
8. 茶灰色粘質土 龍VI期成層土
9. 5層に類似
10. 5層に類似
11. 暗褐色シルト質土 小礫・土器片を含む
12. 11層に類似
13. 暗褐色シルト質土 土器片・炭化物をまばらに含む 龍III-IV期埋土
14. 黒褐色シルト質土 砂を多く含む 龍III-IV期埋土
15. 地山砂



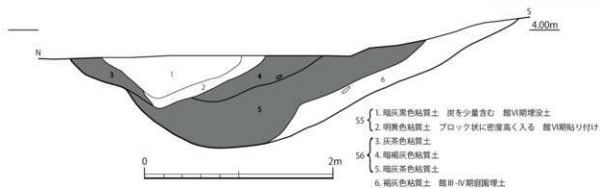
第168図 土層17実測図(1/60)



第169図 土層18実測図(1/40)



第170図 土層19実測図(1/40)



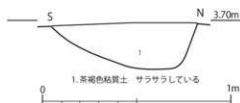
第171図 土層20実測図(1/40)

土層7(第158図)は、西側の北斜面である。地山の上に灰色系粘土を貼っている。その後、館VI期段階と考えられる5～9層が1つの単位で埋まり、その後、もう一つの単位の1～4層で埋まる。

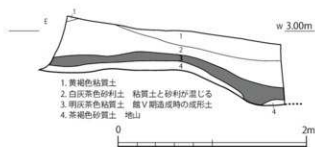
土層8(第159図)は、西側北斜面である。地山の上に灰色系粘土を貼っている。その後館VI期段階と考えられる5・6・8・9層が1つの単位で埋まり、さらにその後1～4層で完全に埋まる。

土層9(第160図)は、西側北斜面である。3層が地山に接する粘土を貼り付けた状況である。その後、4・5層で埋め、6層はまた灰色系の粘土を貼っている状況が認められた。4・5・6層は一連で、館VI期段階と考えられる。その後7層で完全に埋没する。

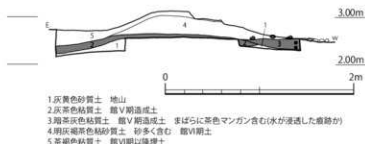
土層10(第161図)は、西側北斜面で、31SD006との接続付近である。10・11層はSG002の埋土と推定される。また地山に接して8・9層の灰色系粘土を貼り付けており、その後、館VI期段階と推定される7層を貼り付けた後、1～6層で埋まる。



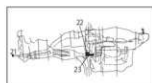
第172図 土層21実測図(1/20)



第173図 土層22実測図(1/40)



第174図 土層23実測図(1/40)



土層 11 (第162図) は西側で31SD006との接続部である。12～14層はSG001・002の埋土である。6～11層は粘土を貼った状態で、南斜面より北斜面の方がやや急勾配である。その後埋没した。

土層 12 (第163図) は西側の真ん中付近である。地山砂の上に5層の灰色系粘土を貼った状況が窺える。その後さらに灰色粘土4層が5層の上に覆う形である。この4層も意図的に貼ったような状況で、5層より新しい。

土層 13 (第164図) は西側の中央付近の東西軸で測ったものであり、土層12の東にあたる。状況や層番号などは土層12と同じであり、土層12を参照して頂きたい。

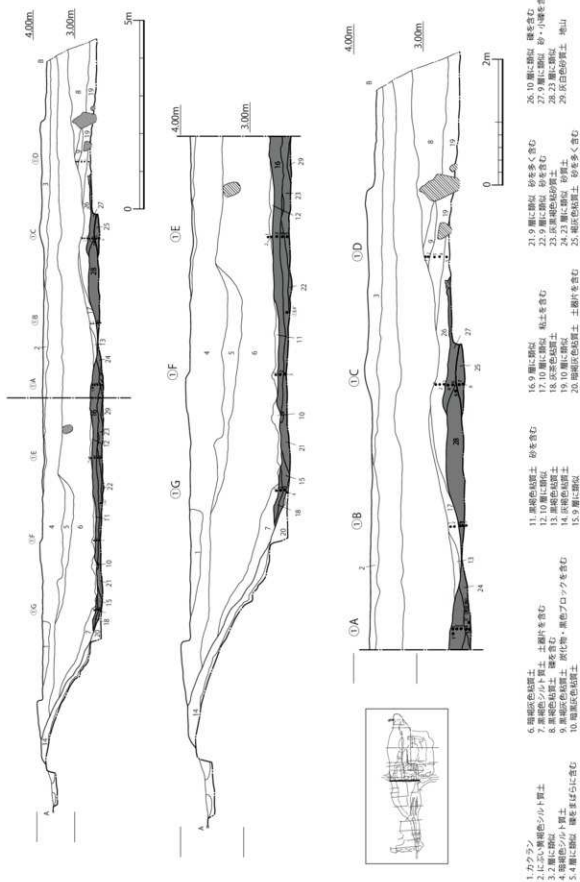
土層 14 (第165図) は、西側南斜面である。景石5の付近である。景石5の下部は地山の砂と接しており、構築時に石を置き、その後3～5層の灰色系粘土で貼った状況である。1～2層は3～5層よりも新しい堆積土であり、土層15の13・14層と類似する。

土層 15 (第166図) は土層14のすぐ西側で測量したものである。16・17層は地山に接する灰色粘土貼り付けである。13～15層は土層14の1・2層とも類似し、一度これらの層の土の単位で景石5が覆われた後、さらに次の単位の6・7・10・11・12層で埋められ、4・8・9・11層等で10～12層の表面に貼られたような状況であり、土層9の6層と同じような意図があるものと考えられる。そして1～3層で完全に埋没した。

土層 16 (第167図) は、西側の南斜面付近で、土層15の東側に接して東西軸方向で測ったものである。6・10・14層は土層15の13～15層と類似する。景石5から東側は8・11・12層のように地山直上に粘土が貼られている。その後、6・10・14層が一つの単位で埋められた後、4・5・7・13層も1つの単位で埋められるが、9層もこれに含まれる可能性がある。最終的に1～3層で埋没する。

土層 17 (第168図) は西側南斜面である。13・14層はSG001・002の埋土であり、人頭ほどの礫を貼っている状況で検出されている。そのSG001・002を切るように、11・12層の灰色系粘土で覆われている。SG003機能停止後、4～10層を1つの単位として埋められ、ほぼ同時に4・8層の粘土を貼り付けている。そして1～3層で埋没した。

土層 18 (第169図) は、31SD006との接続部であり、東西軸で測ったものである。7・8層は構築時の灰色系粘土貼り付けである。その後、4・6層を一つの単位として埋められた。このとき、平面図では31SD005と



第 175 図 土層 24 全体 (1/100) 及び拡大 (1/60) 実測図

した31SD006を切る新しい溝状遺構が土層19の1・2層として確認されている。この新しい溝底が4層の上面になる。そして4層の東側は急勾配で落ち、5層の灰色系粘土は4層ができた時にほぼ同時に貼り付けたものと考える。その後、1～3層で完全に埋没した。

土層19(第170図)は、31SD005・006を南北軸で測ったものである。土層図南側にはSG001・002の埋土があり、6層等を切る状態で、溝が造られている。溝にも灰色系粘土が貼り付けられており、5層の下層くらいが当たる。その後、3層で埋まるが、1・2層の溝が構築される。これが31SD005である。2層は黄土ブロックを多く含むため、南側から流れ込んできた土壌の可能性がある。

土層20(第171図)は、31SD005・6を南北軸で測ったものである。6層はSG002・003の埋土と考えられ、これを切るように、31SD006の埋土である3～5層がある。5層はさらなる分層は難しかったが、下層のくらいで溝は機能していて、埋まっていったと考えられる。3層は粘土貼り付けであろう。4層は31SD006機能停止後の埋没土であろう。そして31SD005が造られ、1・2層が該当する。特に2層は土層19の2層と類似する。

土層21(第172図)は調査区西側にあり、31SD007を南北軸で測ったものである。これは31SD006を延長した部分であり、途中攪乱により削平を受けているが、31SD006と31SD007は同一遺構と考えられる。土層図のとおり、残存状況はあまり良くない。1層であり、周辺地山の砂が多く混入している。この31SD007はさらに西側で32SD002の館の外郭溝と考えられる溝に接続する。

土層22(第173図)は、中央付近の高まり(出島)を東西軸で測ったものである。地山砂の上に灰色系粘土の3層が貼られる。3層表面の東側で標高2.7mであり、西側では落ち込み、標高2.4mを測る。3層東側は廃絶時に削られている可能性を残す。

土層23(第174図)は、中央付近の高まり(出島)を東西軸で測ったものである。2・3層は地山直上の灰色系粘土である。2層の真ん中付近は廃絶時に削られている可能性を残す。また2層上面は東側に落ち込んでいくようである。また3層の粘土上面には拳大の礫が多く、灰色系粘土貼り付けと同時に石の貼り付けも行なったものであろう。

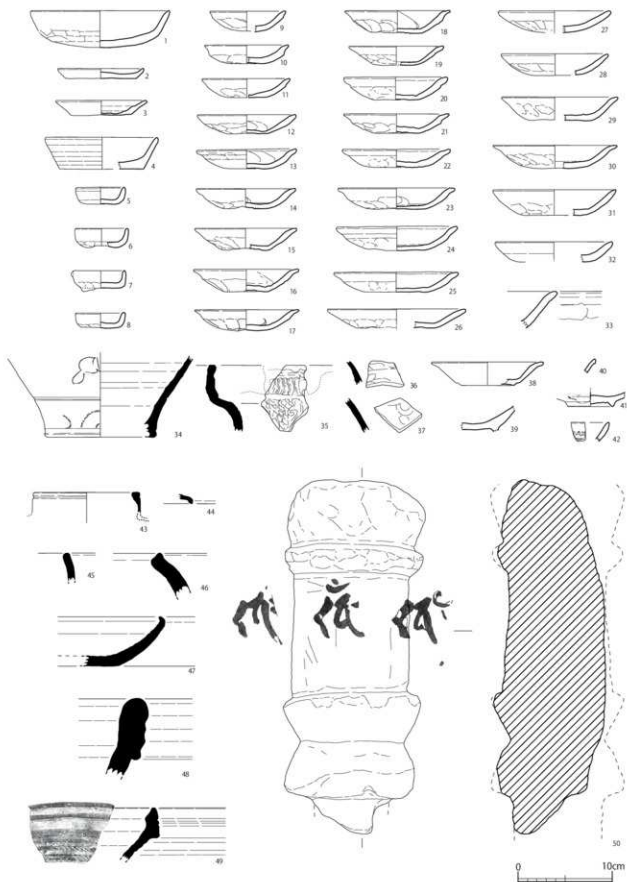
土層24(第175図)は、SG003の中央付近の高まり(出島)西側を南北軸で測ったものである。地山直上に灰色系粘土が細かく貼られる。北側では14層直下周辺で、礫集中1(州浜1)とした拳大礫を貼り付けた斜面がある。その後の段階で、7・14層等、他の土層9などのように、礫集中1を覆うように意図的に貼られるようである。そして、2～6層で完全に埋没した。

以上、SG003西側について、土層断面図を中心に報告してきた。ここでSG003の西側から出土した遺物について、館第3次調査での出土遺物、館31次調査での出土遺物に分けて報告していく。

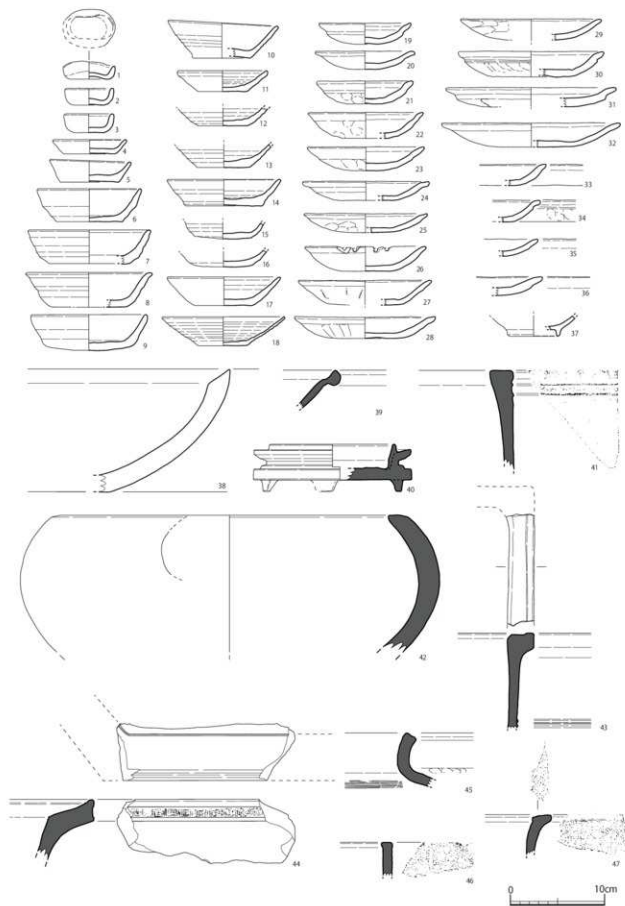
SG003西側 出土遺物

まず第176図に示したものが、SG003西側における館3次調査での出土遺物である。そのほとんどは、土層7や土層12の第2～3層より上の埋没土から出土したものがほとんどで、SG003構築土や灰色粘土直上などの機能時に近いものはほとんどない。1～33は、土師器である。1は8世紀代の環である。2～4は在地系土師器、5～33は京都系土師器皿で、全体的に器壁は厚い。また34～37は華南三彩で、35は鳥形水注片である。38は国産陶器瀬戸・美濃皿、39は越州窯系青磁片、40は中国産白磁片、41は中国漳州窯系青花片、42は朝鮮王朝産粉青沙器片か。43は東南アジア産陶器ベトナム産長胴瓶、44・46～49は備前焼である。46は壺、47は平鉢、48は甕、49は描鉢である。50は凝灰岩製の石塔の一部と考えられる。外面には梵字が墨書で3カ所確認される。50の出土位置は、第209図のFであり、石が集中している箇所の直上で出土しているため、SG003機能時にこの周辺にあったものとも推定される。

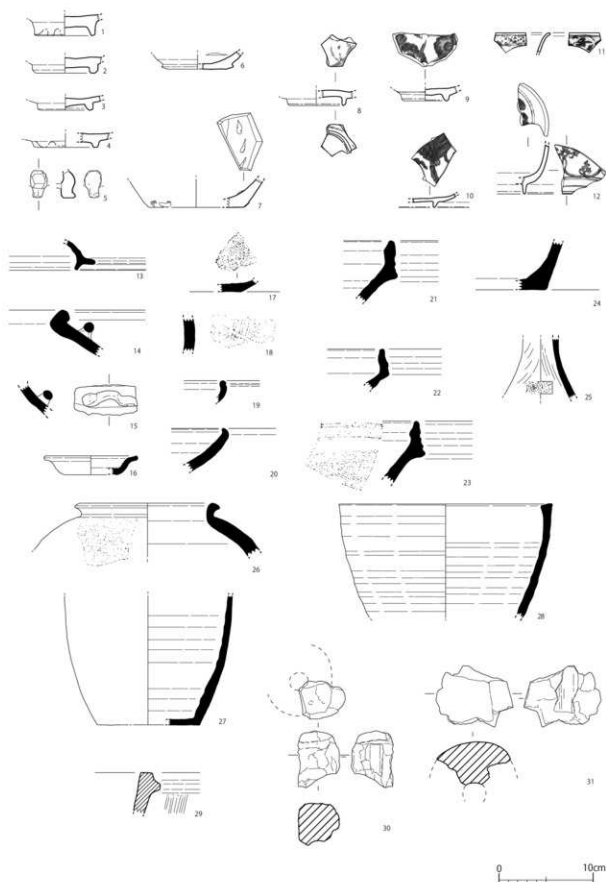
第177・178図は館31次調査での出土遺物である。第176図と同様に、ここで掲載する遺物は、SG003廃絶後の埋土から出土した遺物がほとんどであり、SG003の構築時や機能時の遺物はここではほとんどない。第177図1～37は土師器である。1～3は小皿で、1は耳皿。4～18は在地系土師質土器で、4・5は皿、6～18は坏で、11や12はロクロ目痕を残す。18は大内系の白色系土師器坏である。19～36は京都系土師器皿片



第176図 SG003西側(館3次)出土遺物実測図(1/4)

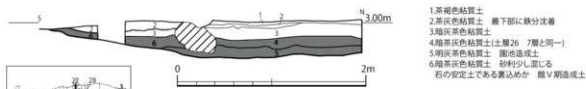


第177図 SG003西側(館31次)出土遺物実測図①(1/4)

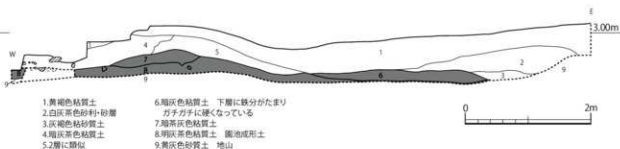


第178図 SG003西側(館31次)出土遺物実測図②(1/4)

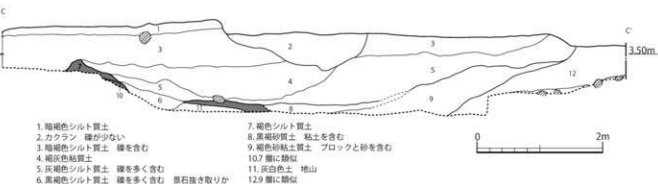
である。37は土師器碗である。38は土師質の風炉である。39～47は瓦質土器である。39は銅片、40は灯火具、41は火鉢片、42は風炉、44は平面形が六角形か八角形になる鉢か。第178図1～5は中国龍泉窯系青磁碗片、6・7は中国越州窯系青磁碗片で、9～10世紀代のものであろう。8～12は中国産染付で、9は漳州窯系、10～12は景德鎮窯系である。13～26・28は陶器である。13は中国産蓋か。14・15は中国産褐釉陶器壺片、16・17は瀬戸美濃産で、16は折縁皿、17は脚皿である。19～26・28は備前焼で、20は平鉢、23は交叉摺り目摺り鉢であろう。25は徳利。27は須恵器壺、29は石銅片、30・31は籬の羽口片である。



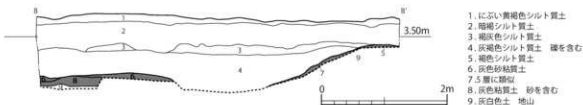
第180図 土層25実測図(1/40)



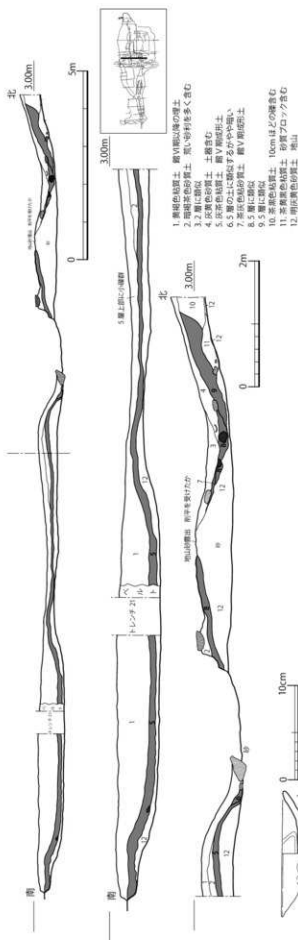
第181図 土層26実測図(1/60)



第182図 土層27実測図(1/60)



第183図 土層28実測図(1/60)



SG003 中央付近（出島）から東側

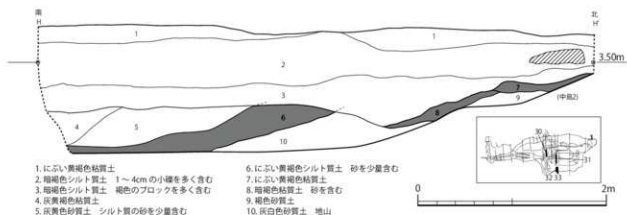
土層 25（第180図）は、中央付近南側で、南北軸で測った。地山がある砂層の直上に灰色系粘土（4～6層）が貼り付けられている。その灰色粘土を景石42に貼り付けるようにして設置している。4層上面で標高2.6mほどである。上面は廃絶時に削られている可能性も有する。また周辺からは拳大の礫が特に西側で多く出土しており、廃絶時に壊されている状況であれば、灰色系粘土上面に貼られていた可能性がある。

土層 26（第181図）は中央付近南側を東西軸で測ったものである。土層25のすぐ北側である。7・8層は地山直上の灰色系粘土であり、土層25の4・5層とも同一と考えられる。7・8層の東側は徐々に上面の標高は下がっていき、6層東側の上面で標高2.4mを測る。7層上面の最高値は標高2.8mである。また西側もやや落ち込み、8層の上面で標高2.4mである。また西側の8層付近は拳大の礫が多いが、8層に貼り付けているものがあることから、もともとは7層や8層の上面、中でも7層西側に貼り付けていた可能性がある。その後、3層等で掘り込まれており、あまり時間を経ずに、1・2・4・5層などで埋没している。

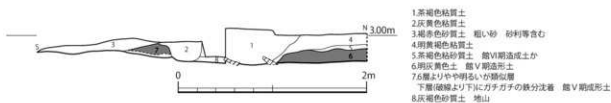
土層 27（第182図）は、中央付近の北側を南北軸で測った。7・10層等は地山砂の直上に貼られる灰色系粘土である。図北側の12層直下の礫は33SD088とSG003との接続部に貼り付けられた礫集中2（州浜状）である。図南側は盛り上がっているっており、地山砂も高く残る。7層上面の標高は3.4mである。また6層は凹むような状況で検出されており、景石などが抜き取られた跡と考えられる。8層直上にもやや拳大よりも大きめの礫が検出されており、その直上の埋土から少量出土している。

土層 28（第183図）は中央付近（中島2周辺）東側を東西軸で測った。5～8層は地山直上の灰色系粘土である。しかし、図の中心付近の6層と7層の間は粘土が確認されない範囲であり、上部から掘り込まれたような痕跡も見られなかったことから、この部分はもともとSG003構築時には、粘土を貼り付けていなかった可能性が高い。図西側では、地山もかなり高くなり（中島2）、5層が薄く堆積して

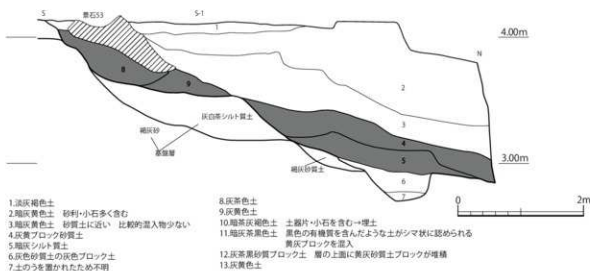
第184図 土層29全体(1/100)及び拡大(1/60)及び出土遺物(1/4) 東測図



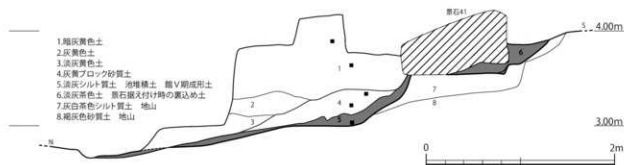
第185図 土層30実測図(1/40)



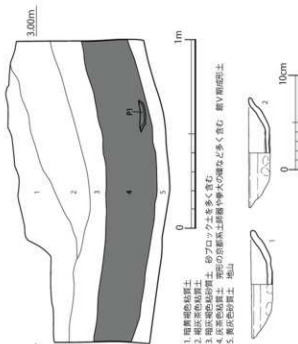
第186図 土層31実測図(1/40)



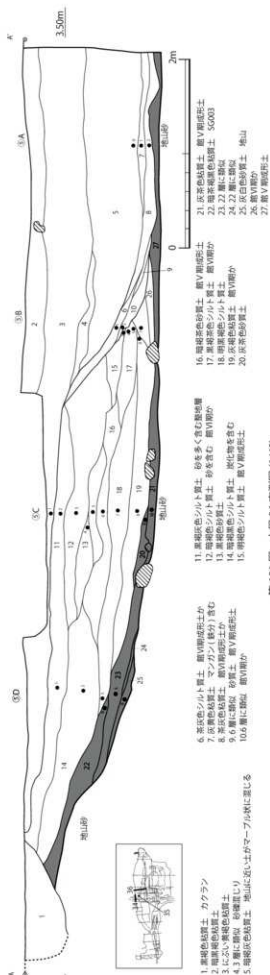
第187図 土層32実測図(1/60)



第188図 土層33実測図(1/40)



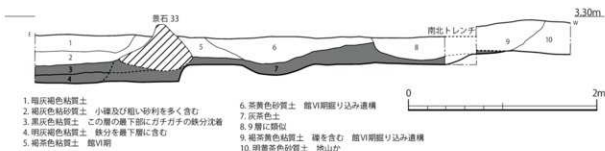
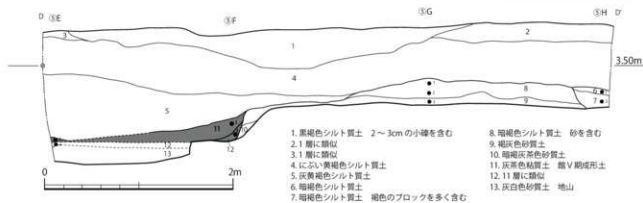
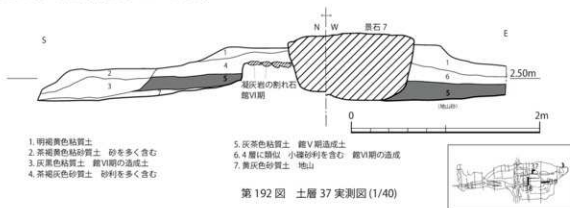
第 189 図 土層 34 東測図 (1/40)

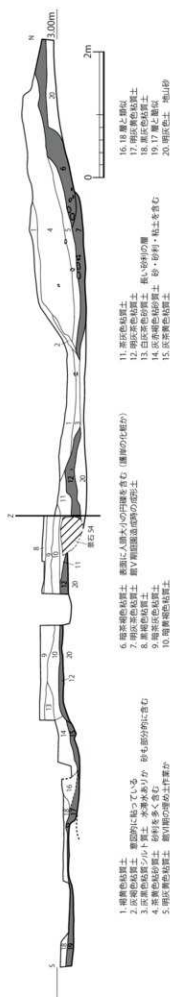


第 191 図 土層 36 東測図 (1/40)

いるが、廃絶時に上部を壊されている可能性が高い。周辺からは割れた石が埋没土に混じる（第185図参照）。その後、4層から1層にかけて層で埋没していく。

土層 29（第184図）は、中央付近（出島東側）を南北に長く測った図である。土層南側では、5層が地山直上の灰色系粘土であり、南側は凹みがあるが、途中からやや盛り上がり、ほぼ水平にいく。また5層の一部表面に親指大ほどの小礫がかなり多く混じっており、5層の貼り付けと同時に、小礫を貼り付けたと考えられる。中央からやや北側では5層は落ち込み、土層28と同じ箇所で、灰色系粘土がない箇所で2mほどあり（標高2.2m）、続く北側で8層としてその凹みからまた北側へ続く。8層は一部で削平を受けて切れているが（標高3.0m）、さらにその北側は7・8・9層とやや凹む状況で灰色系粘土があり、7・10層とその表面は標高が高くなっていく。9層付近では拳大よりやや大きめの礫も多く、灰色系粘土の貼り付けに伴い設置されていると考えられる。また6層のすぐ北にある礫は地山砂に接する状況であり、構築時にこの凹地周辺に意図的に置かれた礫とも考えられる。9層等の凹みは33SD088から接続したすぐ東側の状況であり、33SD088から連続してくるものであろう。9層の上面標高で約2.6mである。





第 196 図 土層 41 東測図 (1/60)



第 197 図 土層 42 東測図 (1/60)

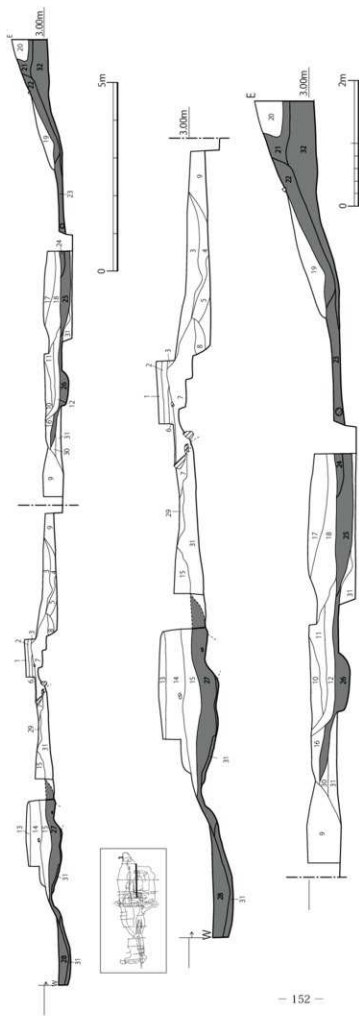
土層 30 (第 185 図) は中央付近東側を南北に測った。4~6 層と 7・8 層は削平により分断されるが、地山直上の灰色系粘土である。1~3 層は埋没土である。北側の方へ高くなる。また北側で石が埋没土の中から出土しているが、1 m 弱ほどの大きさであり、遠くから持ってくる可能性は低いと考えられ、構築時にこの北側の高まり (中島 2) の周辺に持ってきたものの一部とも考えられる。

土層 31 (第 186 図) は中央付近 (中島) 南側やや東で、南北に測った。6・7 層は地山直上の灰色系粘土であり、その後、5 層から 4 層まで埋没した後、1 層とした切り込む遺構がある。

土層 32 (第 187 図) は、東側南斜面の南北軸である。4・5・8・9 層は地山直上の灰色系粘土であり、最初に掘り込んだ後に土を入れ (8 層)、景石 53 を設置する。8・9 層は据え付けを安定させるために入れられた可能性がある。1~3 層は埋没土であるが、玉砂利や小石を多く含み、周辺に貼っていた可能性がある。また 4 層の北側に現位置は保っていないが、拳大よりやや大きめの礫が少量認められるため、そのような礫で周辺斜面などを化粧していた可能性がある。

土層 33 (第 188 図) は、東側南斜面を南北軸で測った。5・6 層は地山直上の灰色系粘土である。景石 41 は 7 層の地山をフラットにした上で置き、5・6 層の粘土で固定している。また 3 層にも拳大礫など少量含むため、5 層上面などに少量葺いていた可能性がある。

土層 34 (第 189 図) は、中央付近北斜面の 33SD088 との接点付近の東西土層である。地山直上に 4 層がありこれが灰色系粘土である。西側には礫集中 1 (洲浜) があり、4 層表面の鞍部状になっているところに拳大の礫を底面に貼り付けている状況である。また 4 層表面の西

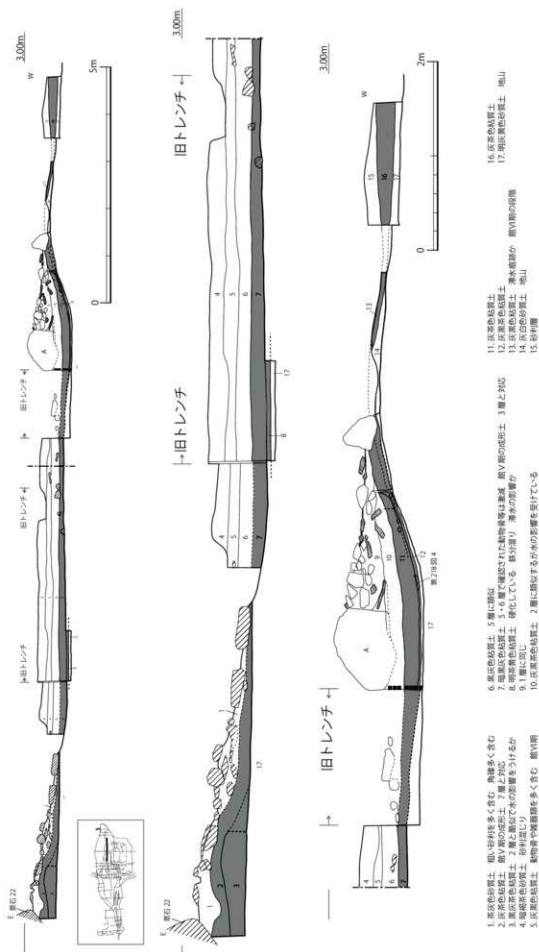


1. 黒褐色粘質土 王砂利・泥・粘土・黒土ブロックを多く含む
2. 灰褐色粘質土 しりしり強い
3. 暗褐色灰砂粘質土 小砂・土層を含む } ⅢV層以降の連続
4. 暗褐色粘質土
5. 灰質土 小砂を含む
6. 暗褐色粘質土 角礫を多く含む
7. 暗褐色粘質土 砂利を多く含む
8. 暗褐色粘質土 砂利を多く含む
9. 暗褐色粘質土 砂利を多く含む } ⅢV層以降の連続
10. 黄褐色粘質土
11. 暗褐色粘質土
12. 暗褐色粘質土

13. 黒褐色粘質土
14. 暗褐色粘質土
15. 暗褐色粘質土
16. 暗褐色粘質土
17. 暗褐色粘質土
18. 暗褐色粘質土
19. 暗褐色粘質土
20. 暗褐色粘質土
21. 暗褐色粘質土
22. 暗褐色粘質土
23. 暗褐色粘質土
24. 暗褐色粘質土

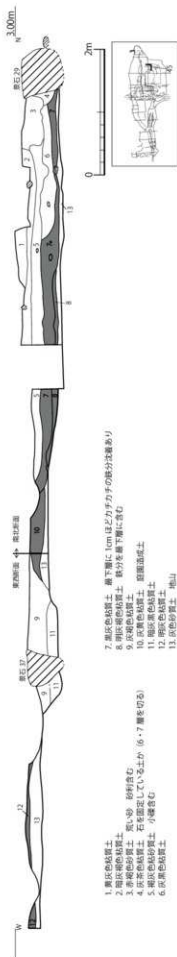
25. 黒褐色粘質シルト質土 下層に 1cm ほどのガサガサの砂分沈着層あり
26. 黄褐色粘質土 ⅢV層の底に 23 層に類似
27. 暗褐色粘質土 23・26 層と類似 ⅢV層の底に
28. 25 層に類似 下層に 1cm ほどのガサガサの砂分沈着層あり ⅢV層の底に
29. 暗褐色粘質土 地山か
30. 暗褐色粘質土
31. 暗褐色粘質土
32. 暗褐色粘質土
33. 暗褐色粘質土

第 198 図 土層 43 全体 (1/100) 及び拡大 (1/60) 実測図



第199図 土層44全体(1/80)及び拡大(1/40)実測図

1. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
2. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
3. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
4. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
5. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
6. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
7. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
8. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
9. 1層に同じ、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
10. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
11. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
12. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
13. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
14. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
15. 砂利層
16. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む
17. 灰白色粘質土、粗い砂利を多く含む、角礫多く含む



第 200 図 土層 45 集測図 (1/60)

傾斜部では部分的に拳大礫が少量であるが 4 層表面に残っており、礫集中 1 (洲浜) から連続して 4 層の鞍部、33SD088 の底面まで、貼っていた可能性が高い。その後 1～3 層で埋まる。また 7～11 層は 33SD088 に切られる。33SD140 の堆積土である。

土層 35 (第 190 図) は、中央付近の北斜面側に南北方向にトレンチを入れた。4 層が地山直上にある灰色系粘土である。また地山と 4 層との境で図中に示す京都系土師器皿がほぼ正位置で出土した。

土層 36 (第 191 図) は中島 2 をはさみ、東側の北斜面の南北方向の土層である。地山の直上に灰色系粘土が貼られている。またその上面には約 20～30cm の円礫が多く確認でき、周辺で多く出土している。SG003 の機能停止後、11～20・26 層等で埋められ、その南斜面の表面には 6～10 層に示すような単位の粘土を貼り付けている。そしてさらにその後、2～5 層で埋められ完全に埋没する。

土層 37 (第 192 図) は、中島 2 をはさみ、東の北斜面で南北へ東西にかけて L 字状の土層である。景石 7 を中心に南北方向は、5 層が地山直上の灰色系粘土を貼り付けた層であろう。5 層直上の 4 層には手のひら状からやや大きめの凝灰岩 (永興石) の破片が多く集中している箇所である。その 4・5 層を切るように SX004 形成に伴って、2・3 層が形成され、ここでも土層 36 の 6 層のように粘土を意図的に貼り付けている状況がある。また景石 7 から東側への東西方向は 5 層が灰色系粘土で地山の直上にあるものである。景石 7 はその下面が地山砂と 5 層に接している状況である。

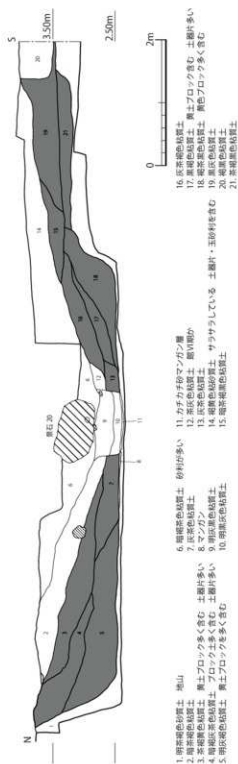
土層 38 (第 193 図) は、SG003 の東側の北斜面よりやや南側を南北方向の土層である。南側はやや高まり状 (中島 1) となっており、その北側で地山の直上に粘土を貼り付けた。11・12 層などがある。10 層は地山と思われるが、8・9 層も本来の地山であり、8 層の上部などは大きく削平を受けている可能性がある。

土層 39 (第 194 図) は、東側の高まり 1 (中島 1) の東側に東西方向の土層である。景石 33 は 3・4・7 層などの地山直上の灰色系粘土に伴い置かれている状況である。10 層は地山であり、景石 33 の西側から西へ向けて、次第に 7 層の上面が高くなっていく。ただ、9 層などの遺構に切られるため、詳細は不明である。

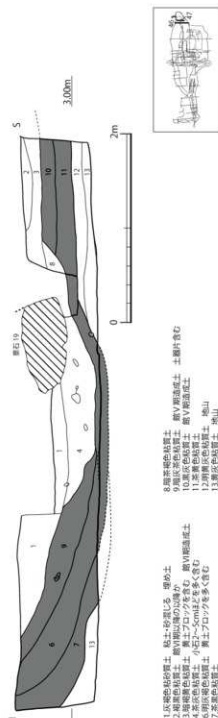
土層 40 (第 195 図) は、東側の南斜面から北斜面までの南北下層である。まず地山の直上に灰色系粘土があり、南斜面はその斜面裾に拳大よりやや大きめの礫が粘土表面に貼り付けている状況である。また攪乱で削平を受けるが、高まり 1 (中島 1) 周辺では粘土は削平を受け残存していないが、その高まり 1 (中島 1) の北側で粘土が表れ、景石集中箇所 (護岸石組) の地点をとり、北斜面に至る。

土層 41 (第 196 図) は園池跡東側のやや中央より南北方向の土層断面図である。地山直上に灰色系粘土を貼っている。北から景石 54 まで 6・7 層上面には土層 29 や土層 36 のようなやや大きめの円礫が多く貼っている状況で出土した。また 6・7 層上面は SG003 の表面となるが、そ

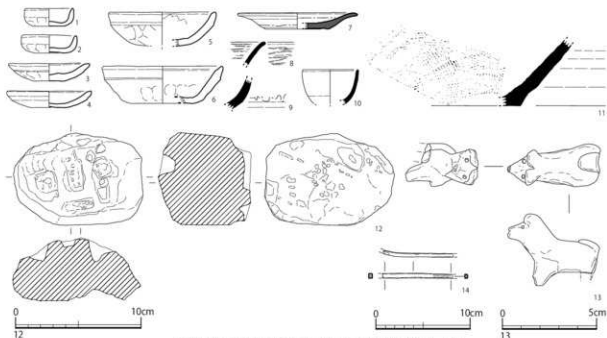
の後、4・5層で造成され、土層36と同様に南斜面に2・3層の粘土などで覆われる状況が1つの単位（SX004）としてある。7層と12層の間は、3層等により切られているため、不明であるが、7層と12層は同一層であり、繋がっていたと考えられる。景石54は12層で固定されるように置かれている。景石54南側の12層上面の標高は約3.0mであり、15層にかけて落ち込む。19層へとつながり、さらに南斜面へと灰色系粘土は上がっていくものと想定される。



第201図 土層46実測図(1/60)



第202図 土層47実測図(1/40)



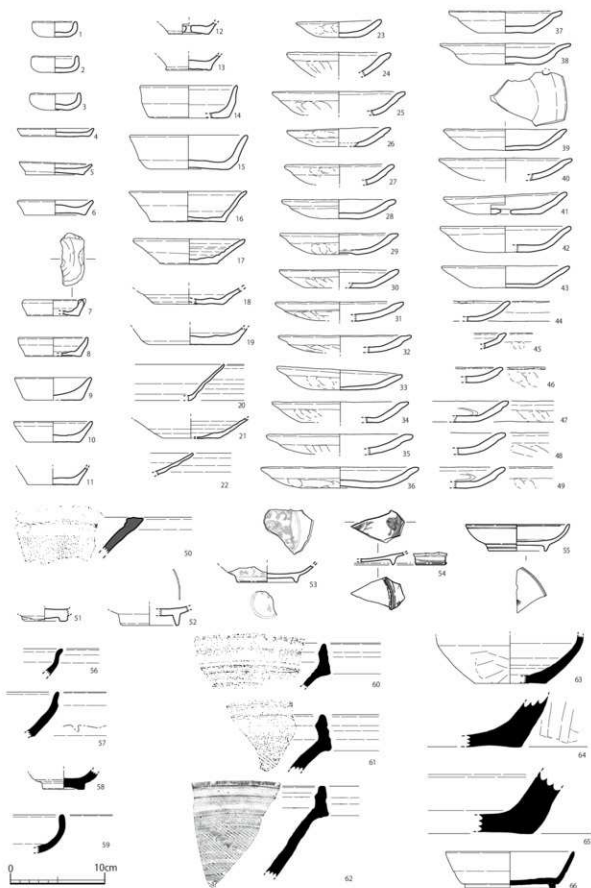
第203図 SG003東側28次調査出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)

土層 42 (第197図) は東側の北斜面から高まり1(中島1)までの南北方向を測った。1・2・4・5・6層は北斜面の地山直上に貼り付けた粘土である。景石14はこれら粘土に固定される。12層・14層は景石集中箇所(護岸石組)から高まり1(中島1)にかけてである。高まり1(中島1)の北斜面は図の通り、拳大状の礫が多くあり、さらにSG003機能停止後に堆積している11層などは礫が多く出土し、SG003機能時の礫として周辺の斜面に貼られていた可能性が高い。また9～11層は水分を多く含むシルト質層であり、特に9・10層では、木器などの木製品や雑器類、動物骨や貝類などが集中して出土している。また9～11層を切るように、SX004機能時に掘り込まれた7・8層がある。

土層 43 (第198図) は、園池東側の東斜面から高まり1(中島1)の西側にかけて東西方向の土層である。SG003東斜面も21・22・23・24・25層等、地山直上に灰色系粘土を貼る。その東斜面の西側は、池底へと傾斜し、西側の高まり1(中島1)の下部にみられる25・26層といった地山の直上に貼られる灰色粘土へとつながり、次第に粘土表層の標高が上がっていく。高まり1(中島1)の上部は削平を受けているため不明である。高まり1(中島1)の西側の27・28層は灰色系粘土であり、28層の上面は落ち込む。高まり1(中島1)の上部である1～8層付近は、7・8層が高まり(中島1)を掘り込む1つの遺構で、この中には手のひらサイズの破片となった凝灰岩(新興石)が多量に出土した。またこの遺構を切るように3・4層を埋土とする遺構が大きく掘られている。凝灰岩は北側の景石集中箇所(護岸石組)にあるような大きな石が割られた一部と考えられ、高まり1(中島1)周辺にもともと置かれていた可能性がある。

土層 44 (第199図) は、東側の景石集中箇所(護岸石組)の中心くらいの東西方向土層である。東側の景石22周辺には多量の凝灰岩の手のひらサイズよりやや大きな破片が集中しており、これが1層にあるものである。また景石22や24などの表面には削られたあとのようなものがある。最深部は7層上面で、標高2.3mである。そして西側にかけて、図中の景石Aの下から粘土層上面の標高は高くなっていく。景石Aの周辺にも凝灰岩の破片が多量に出土している。これら凝灰岩の破片は西側も東側の集中部も地山直上の灰色系粘土上面からはやや現位置を保っておらず、SG003より新しいと考えられる。また7層上面は少量の拳大の礫が接してある程度で、ほとんどは7層上面よりやや上位に離れた地点で、多量に出土している。5・6層は土層42の10・11層と同層である。

土層 45 (第200図) は、東側で高まり1(中島1)と東斜面の間の凹みを南北方向でとり、高まり1(中島1)



第204図 SG003東側31次調査出土遺物実測図(1/4)



第 205 圖 SG003 內詳細結構報告配圖圖 (1/400)

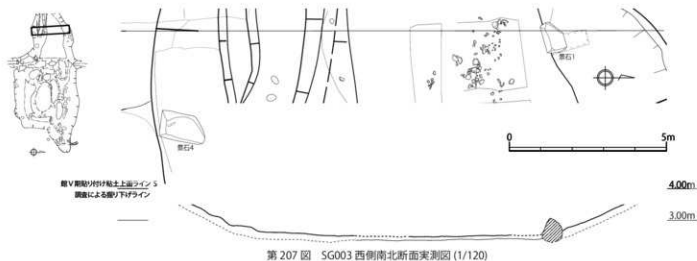


の南東側から南側にむけて東西方向で測った。南北方向は景石 29 がある。この景石 29 の北側は景石集中箇所(護岸石組)である。景石 29 から南側は 7・8・10 層が地山直上の灰色系粘土がある。これら上の層の 5・6 層には拳大の礫が多く含まれており、東斜面や高まり 1 (中島 1) の北東から東側にかけてにあったものと推定される。また東西方向については、景石 37 は廃棄されている状況であった。かろうじて 12 層が地山直上の灰色系粘土がある。しかしこの場所は攪乱により大きく削平を受けているため、残存状況は不良である。

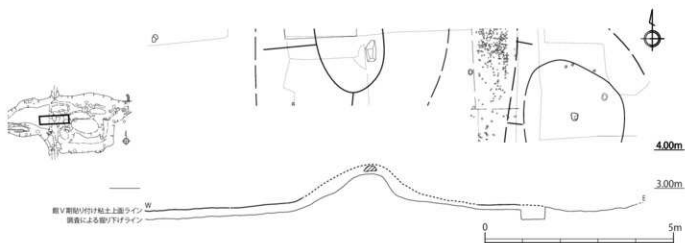
土層 46 (第 201 図) は、園池東側の東斜面で、景石 20 付近を南北方向に測ったものである。この場所では SG003 造成時に大きく掘り込んだ後、3・4・5・7 層や 13・15・16・17・18・19・21 層等で、1 つの単位として形成している。この周辺の造成規模は他の灰色粘土を貼った箇所に比べて大きい。南斜面には一部人頭大よりやや小さい円礫を上面に貼っている。景石 20 は SG003 機能時の造成土より浮いた状況で検出した。9・10 層は掘り込まれたような跡であり、平面プランは楕円形状になる。規模等から景石 20 の抜き取り痕とも考えられる(平面図第 226 図参照)。

土層 47 (第 202 図) は園池東側で土層 46 のさらに東側地点に位置する南北方向の土層である。土層 46 と同様に、この箇所も大きく掘り込んだあとに、第 6・7・9 層等で形成している。またその成形土上面から浮いた状況で景石 19 がある。この断面図(土層 47)の東側にある景石 17 と 18 の間に推定抜き取り痕があることから、この景石(第 225 図)との関連がある可能性が高い。4 層や造成土上面には拳大の円礫等が多く出土することから、この周辺に貼られていた可能性がある。第 2・6・14 層は館Ⅵ期の埋没土である。

以上、SG003 東側について、土層断面を中心に報告した。ここで、SG003 東側で出土した遺物について報告



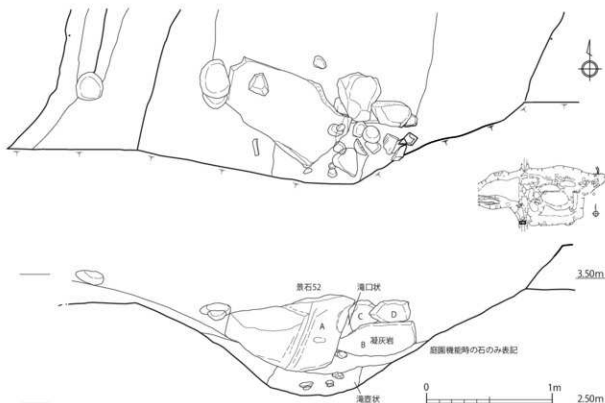
第 207 図 SG003 西側南北断面実測図 (1/120)



第 208 図 SG003 中央高まり部 (中島 2) 周辺東西断面実測図 (1/100)



第209図 景石52(滝2)及び景石43周辺実測図(1/60)



第210図 景石52周辺(溝2)実測図(1/30)

する。ここでは特に館 28・31 次調査で出土した遺物について述べる。また景石集中箇所（護岸石組）内を中心とした出土遺物は別で報告する。

SG003 東側 出土遺物

SG003 東側で出土した遺物は第 203・204 図のとおりである。これら出土遺物は、SG003 の成形土中や貼り付けられた灰色粘土（土層断面アミカケ部）直上からの出土遺物ではなく、SG003 の埋没土、もしくは館VI期段階での後述する SX004 の埋没土に該当する遺物である。

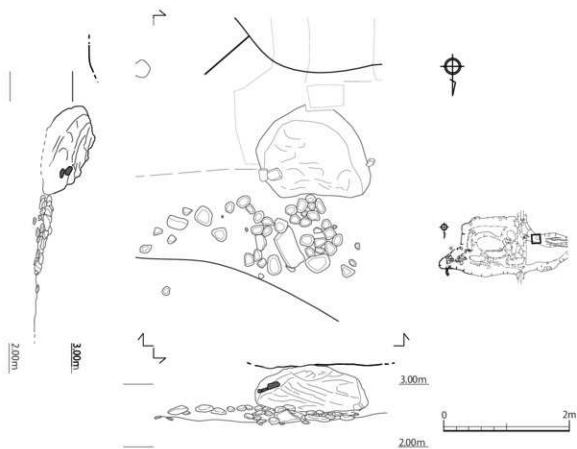
まず館 28 次調査での出土遺物から報告する。第 203 図 1～6 は土師器であり、1・2 は小皿、3～6 は京都系土師器 3・4 は皿、5・6 は椀である。7 は瓦質土器である。8 は緑釉陶器片、9 は唐津焼碗片である。10・11 は備前焼で、10 は小杯である。12 は凝灰岩で凹みのある箇所は加工されている。13 は犬形土製品である。14 は鉄製品釘である。

第 204 図は館 31 次調査での出土遺物である。1～49 は土師器である。1～3 は手づくねの小皿。4～6 はロクロ使用の小皿。7～13 は在地系の小皿などである。12 は底部に穿孔あり。14～19 は在地系環で、17 は内面にロクロ目痕を残す。20～22 は大内系の白色系土師器である。23～49 は京都系土師器皿である。50 は瓦質土器擂鉢片である。51 は中国産白磁片、52 は中国龍泉窯系青磁碗片、53～55 は中国景德鎮窯系青花皿片である。56～58 は瀬戸美濃産天目茶碗片である。59～65 は備前焼で、59 は平鉢片、63 は平鉢底部か。64・65 は大甕の底部片である。66 は 8 世紀代の須恵器高台付杯である。

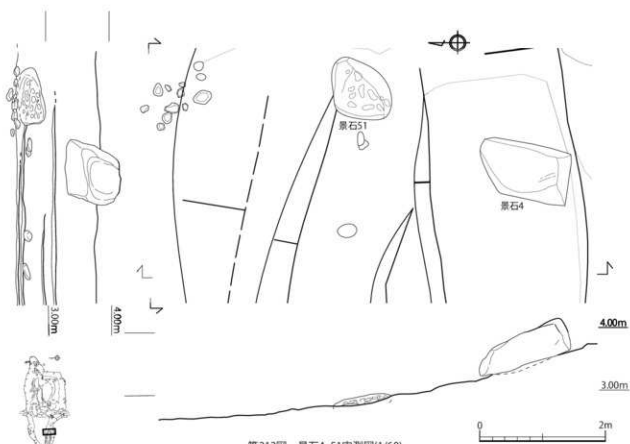
次に SG003 内で検出された各遺構を詳細にみていく。

第 207 図は西側で南北方向に断面を切ったものである。景石 1・4 は灰色系粘土に伴っている。底面には円礫や角礫が出土しているが、現位置を保っていないものと灰色系粘土上面に貼り付いているものがある。浮いているものは周辺斜面特に、北側斜面に近いところが多く、北側斜面に貼っていた可能性がある。また、底面にも多く検出している。

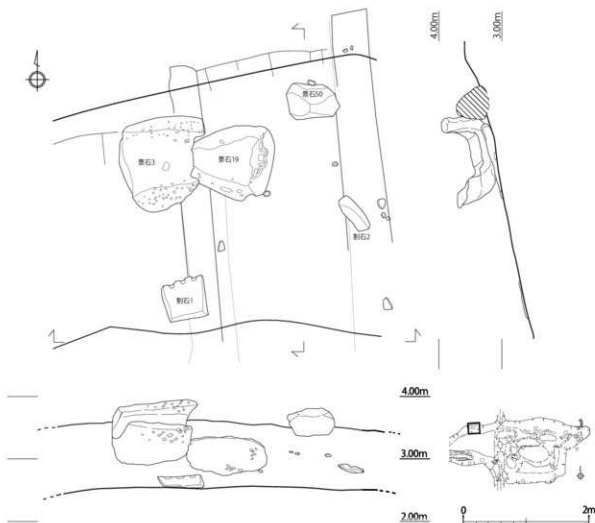
第 208 図は中央付近の高まり 2 (中島 2) 周辺を東西方向に断面を切ったものである。灰色系粘土は高まり 2 (中



第211図 景石5実測図(1/60)



第212図 景石4・51実測図(1/60)



第213図 景石3・19・50・割石1・2実測図(1/60)

島2)の部分ではほとんど残りは良くない。

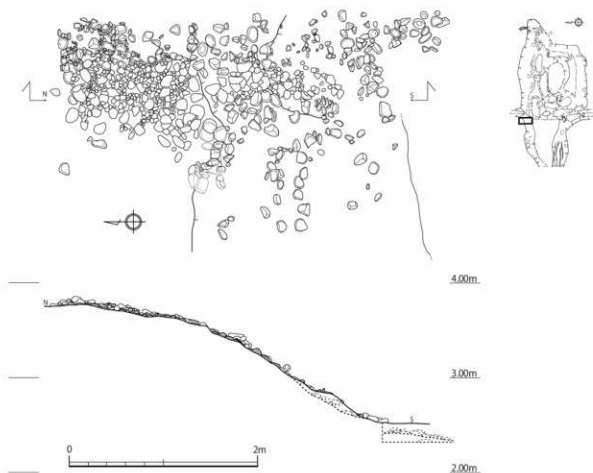
第209図は中央付近南側の28SD010とSG003との接点付近である。接点から北側の状況であるが、五輪塔の転用石や礎のほとんどは、灰色系粘土から若干浮いている状況であり、SG001の廃絶後の状況を示すと思われる。ただ図中のA～Dの石はSG003に伴うもので、景石43から石Aまで礎が大小あるが、灰色粘土に貼り付けた状況で出土している。

第210図は景石52周辺で石を組んでいる状況である(滝2)。東側に大きな石52-1を置き、その横に接するように52-2及び52-3・4で組む。52-1～3の石の接する箇所は三角形に隙間がある(標高約3.1m)。さらにその直下には拳大の円礎が出土している(石上で標高2.6～2.7m)。この箇所はSG003に接する南溝の28SD010との接点にあたる部分である。

第211図はSG003西側の南斜面である。景石5の周辺には拳大からさらに大きめの円礎が灰色系粘土上面に貼り付けられている状況で検出した。

第212図は景石4と景石51が灰色系粘土に伴っており、景石51から西側は緩やかな段差があり、ここの平面は凸凹が激しい。またその凸凹している中に、20～30cmほどの円礎が部分的に出土しているおり、凸凹はこのような円礎の抜き取り痕である可能性も想定される。

第213図は西側北側斜面の景石3・19・50などである。これらも特徴的な石であり、灰色系粘土に伴うものである。景石3の南では、割石1とした幅10cmほどの矢穴痕跡のある石が出土した。この割石1は灰色系粘



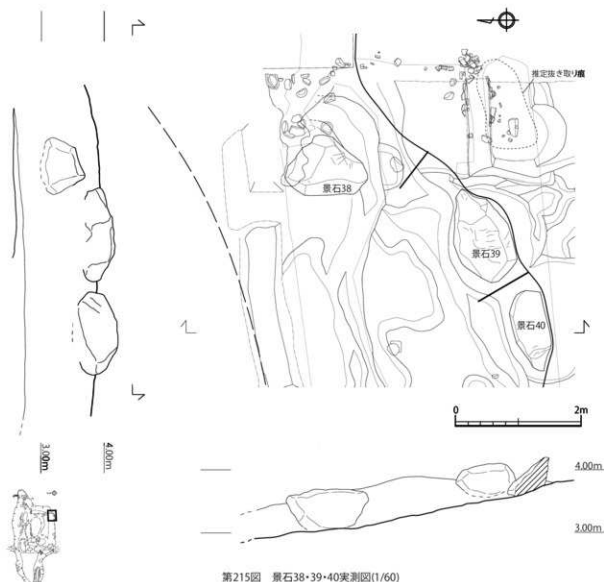
第214図 礫集中1(洲浜1)実測図(1/40)

土上面からはやや浮いている状況で出土した。また割石2についても、矢穴痕跡はないが、灰色系粘土上面からは浮いているため、SG003 機能後のものであるろう。

第 214 図は中央付近の北斜面、33SD088 のすぐ西側にある礫集中 1 (洲浜 1) である。灰色系粘土に伴っており、現状で幅約 2 m、南北長さ 3.5 m を測る。この礫集中箇所すぐ東側に近接する 33SD088 の底部の状況にも類似しており、その出土状況より 33SD088 底部から一体的に円礫を貼っていたと推定される。

第 215 図は SG003 東側の南斜面である。池の底面からやや標高が高くなる箇所に置かれている。景石 38・39・40 は、38 から 40 にかけて徐々に設置標高は高くなり、明確になっている天端で見ると景石 38 で 3.66m、景石 39 で 4.26m、景石 40 で 4.36m である。またこれら景石は園池跡の掘り込み上端ライン際に設置されている。景石 38・39 の東側の礫は SG003 機能停止後に伴うものであるが、景石等の抜き取り痕と推定される箇所もある。

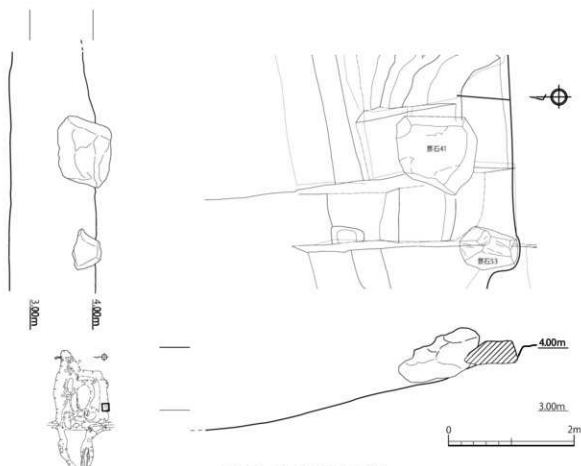
第 216 図は SG003 東側の南斜面である。景石 41・53 は、灰色系粘土に伴って出土した。景石 41・53 の両箇所南北方向の土層断面図をとっている (第 187・188 図)。これら景石周辺の斜面部下には SG003 機能停止後に 20～30cm ほどの円礫が少量出土している。また斜面下には円礫が灰色系粘土に伴って貼り付けている状況が第 195 図などにあり、前述の円礫と類似する。これらからすると、この周辺の斜面には 20～30cm の円礫が疎らに貼られていた可能性がある。景石 41 は平坦面を上に向け、幅が広い方を高くみえるように設置している。また、設置部には石運搬に利用された縄状の植物繊維が見られた。景石 53 は脆く、崩れやすい状態の凝灰岩で本来の形も不明な点が多い。また景石 41・53 と前述した景石 38～40 の間は全く景石が確認できず、抜き取り痕と推定される痕跡もなかった。これら景石 38～40 と景石 41・53 の間の真北には高まり 1 (中島 1) がちょうど位置する関係となる。



第215図 景石38・39・40実測図(1/60)

第217図は、高まり1(中島1)東側からSG003東斜面の間の平面図である。景石33や景石36は高まり1(中島1)の下端周辺になる際に置かれている。また景石26は東斜面に設置している状況であった。景石34や景石35は、灰色系粘土からは浮いており、SG003廃絶後に動かされたと推定されるが、この景石34・35ともに、SG003機能時は、その出土状況の位置関係から園池東側斜面周辺に置かれていたものと推定される。ここでは後述する矢穴の開けられた石を含む遺構31SK020も図示した。この廃棄土坑の中から景石25が出土し、幅10cmほどの矢穴痕跡が確認された。この位置は想定築山としている箇所、出土標高も高い位置で出土しており、また廃棄土坑中から出土していることから、SG003機能時、この景石25は本来この廃棄土坑の東側に接する箇所に設置してあったことが想定される。

第218図は景石集中箇所(護岸石組)の周辺である。図中の一部範囲はさらに詳細に後述する。図中の東端には景石17があり、上面は凹んでいる。これは12SD090と関連があると推定される。景石21や景石22などには表面が斬られた痕跡も残る。また景石15には、検出時、焼けた10～20cmほどの円礫で覆われていた(第219図参照)。Aの箇所も同一の焼けた石である。被熱のある石は、SG003機能停止後、北斜面から流れてきているようで、景石15の北側周辺で機能していたものであろう。凝灰岩の角礫状の破片がBC箇所に集中しているが、第199図の土層断面などを参照するとSG003機能面である灰色系粘土上面より浮いている。C箇所の角礫は下部構造を明らかにするため、一部を取り除いた。詳細は第220図に報告する。またこの景石集中箇所



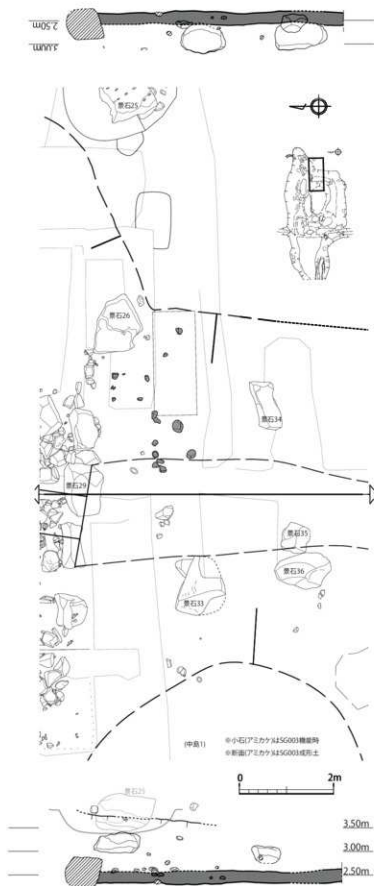
第216図 景石41・53実測図(1/60)

内には、拳大の礫が多量に流れ込んできているが、そのほとんどは SG003 機能停止後のもので、園池北斜面や高まり 1 (中島 1) の南側周辺に貼られていたものと推定される。また図中で、景石 6・8・11・19・20 等は、SG003 成形土である灰色系粘土上面よりやや浮く等、SG003 機能停止に伴い、2 次的に動かされていることがわかる。また景石 17 南や景石 6 北、景石 20 直下には景石抜き取り痕と推定される痕跡がある。景石 17 南は景石 19、景石 20 の直下は景石 20、景石 6 北は景石 6 がそれぞれ SG003 機能時に本来設置されていた箇所と推定される。景石 11 はその下面が景石 10 の上面と接合できたため、景石 10・11 は本来 1 つの景石であったが、SG003 機能停止後に割られたと推定される。なお、この景石集中箇所内の堆積した粘土や SG003 構築時の粘土は水気が多く、花粉などが良好に検出された。この周辺の自然科学分析を行っており、詳細は第 IV 章第 1 節で述べる。

出土遺物として第 218 図に 4 点図示した。4 点とも京都系土師器皿である。第 218 図 1・2 は滝 1 下の造成土から出土した (第 225・226 図参照)。第 218 図 3 は景石 10 の直下である (同図参照)、灰色系粘土下層から出土した。4 は石 A 直下の SG003 構築時の灰色系粘土中から出土している (第 199 図参照)。4 点ともに SG003 構築時に伴う京都系土師器と考えられる。

第 219 図は景石 15 の詳細図である。館 1 次調査での出土状況である。景石 15 を覆うように、被熱の礫が多量に出土した。断面を見ると、景石 15 と被熱礫の間には廃土を挟む状況である。廃土と被熱礫は SG003 機能停止後の状況を示す。

第 220 図は、景石集中箇所 (護岸石組) には東端と西端で、角礫が集中する箇所がある。第 220 図は西側の箇所 (第 218 図の C) で、10～30cm ほどの角礫が 10～20cm の厚さで堆積しており、それらを除去した状況がこの図である。角礫を除去すると 30～50cm ほどの石が 10 個以上出土した。これらの石の外側には故意に削られた痕跡があり、角礫と接合できるものと思われる。また、これらの 30～50cm の石は灰色粘土上面に



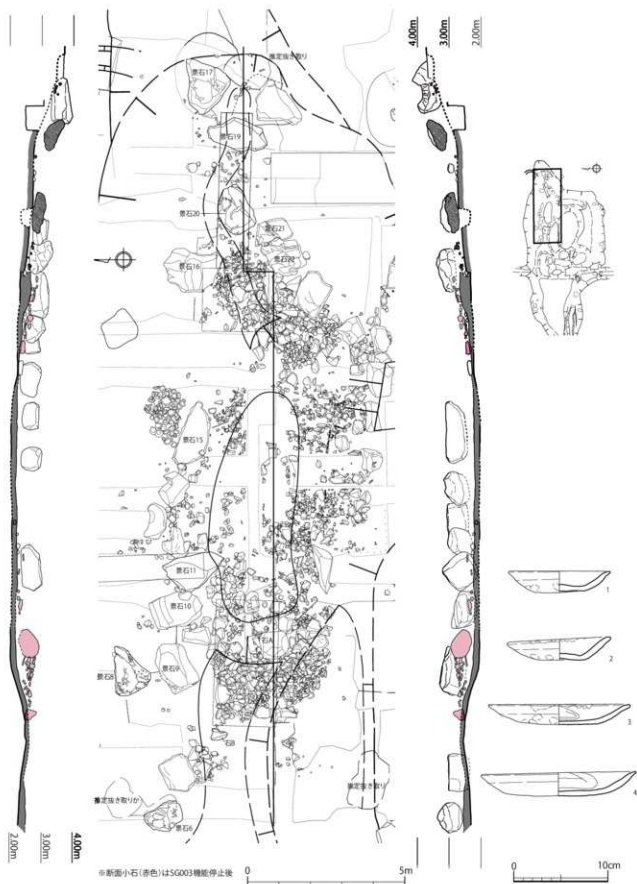
第217図 中島1東側～SG003東側東斜面実測図(1/80)

あるものとやや浮いているものがあるが、角礫などの出土状況を加味すると、SG003機能停止後に周辺にあった景石などを所ったものと考えられる。また角礫を取り除いた後、第220図1・2の2点の京都系土師器皿が出土したが、SG003廃絶直前もしくは直後に伴う可能性が高いと考えられる。

ここで、景石集中箇所(護岸石組)の内部から出土した遺物を報告する。ここで報告する遺物は、第199図4～6層中心に出土したものが中心であり、SG003機能時や構築段階のものではなく、SX004とした遺構が機能した時期、もしくはSX004の廃絶時のものと考えられる。特に後述する館1次調査で出土した遺物はSX004埋没土である可能性が高い。また第221図は館1次調査、第222図は館第30次調査、第223図は館31次調査で出土した遺物である。

第221図は、1～3は京都系土師器皿で、3は特に口径が大きい。4は瓦質土器火鉢片である。5・6はタイ産陶器で、5は鉄絵小壺である。6は華南三彩水注片である。7は唐津焼碗である。8は中国漳州窯系青花皿、9は信楽焼壺、10は中国景德鎮窯系青花片である。11・12、14・15は備前焼で、11は建水、12は平鉢、14は掛花入れである。16は犬形土製品17・18は軒先瓦、19はメダイである。

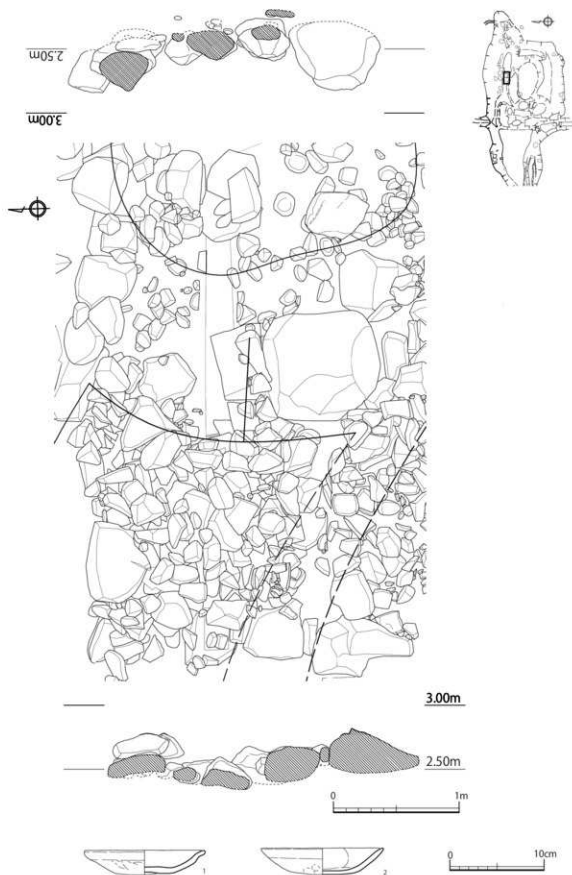
第222図は、1～14は第199図4～6層出土遺物である。1～7は京都系土師器皿、5は碗である。器壁は厚いものが多い。8・9は瓦質土器片である。10は中国景德鎮窯系青花片、11・12は備前焼片、13は木製品で下駄である。14は鉄製品で鍵の一部か。15～31もまた第199図4～6層出土品である。15～24は京都系土師器皿片である。25～29は瓦質土器片である。30は中国景德鎮窯系青花皿片である。32・33



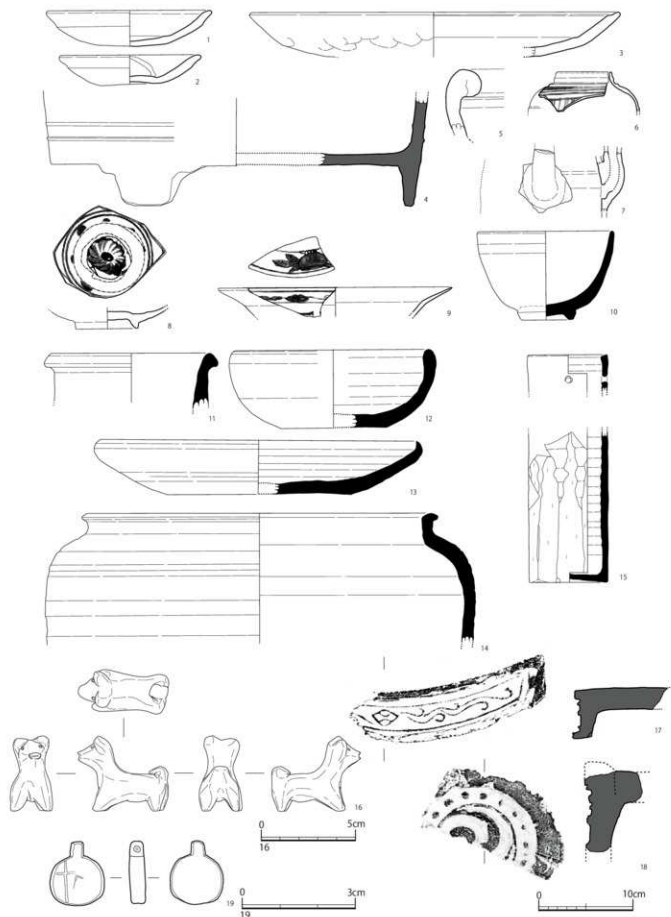
第 218 図 滝 1～滝岸石組 (1/120) 及び出土遺物 (1/4) 実測図



第 219 図 護岸石組内景石 15 実測図 (1/20)

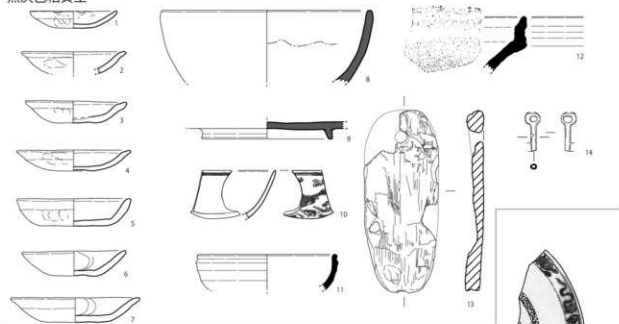


第220図 護岸石組内西側(1/30)及び出土遺物(1/4)実測図

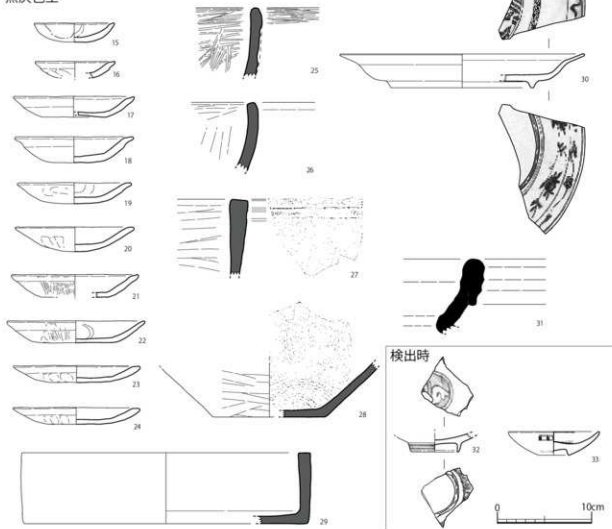


第221図 護岩石組内(館1次調査)出土遺物実測図(1/1・1/2・1/4)

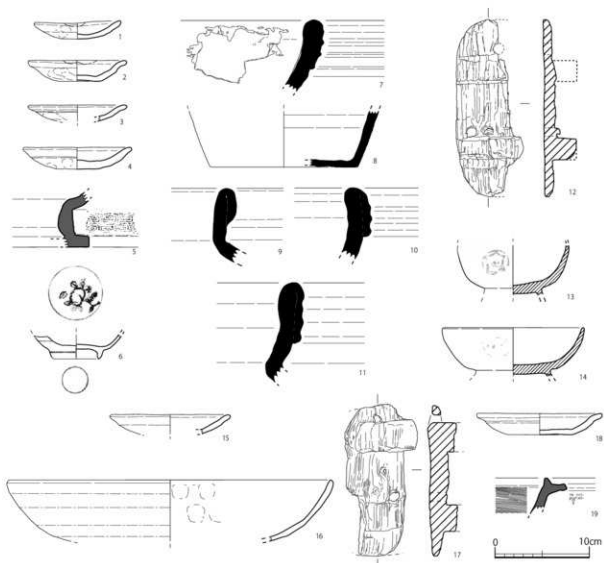
黒灰色粘質土



黒灰色土



第222図 護岸石組内(館30次調査)出土遺物実測図(1/4)



第223図 護岸石組内(館31次調査)出土遺物実測図(1/4)

は検出時の出土で最上層出土と思われる。32は中国景德鎮窯系、33は同漳州窯系である。

第223図は館31次調査出土品である。1～4は特に南東側で出土した京都系土師器血片である。5は瓦質土器片である。6は中国景德鎮窯系青花片、8は国産陶器と推定されるが産地不明である。7・9～11は備前焼片である。12～14は木製品で、下駄、木器碗である。15～19は南西側で出土した。15は京都系土師器血片、16は土師質鉢、17は木製品下駄、18・19は第199図4層出土で、18は京都系土師器血片、19は瓦質土器羽釜片である。

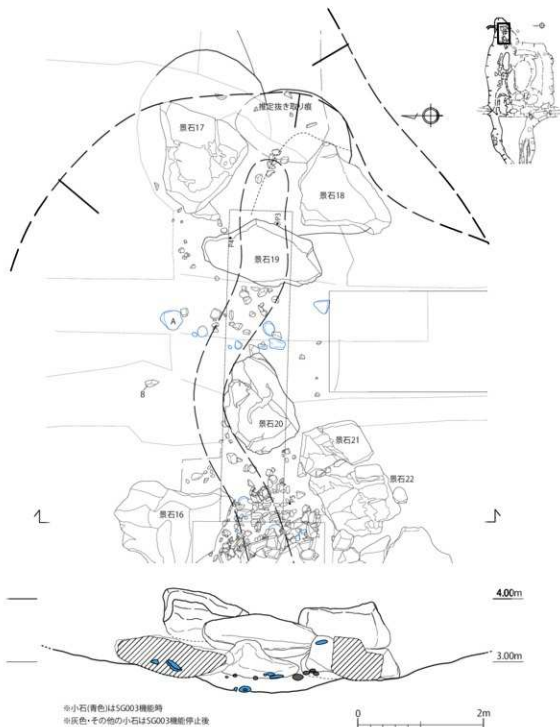
ここまでが景石集中箇所内で出土した遺物であるが、さらに報告しきれない多量の遺物が出土しており、木器類のほか、獣骨片や貝類、木製加工品などが第199図4～6層で出土している。

第224図は東端の景石17などの詳細図で、景石16と景石22の軸から東側へ見通したものである。景石19と景石20はSG003機能停止後に動いていることが判明している。そのほかの景石はSG003構築時に据えられたものである。景石19は推定抜き取り痕1、景石20は推定抜き取り痕2が本来の設置位置と考えられる。また第226図も参照すると、景石17と景石16の間は拳大の円礫が出土しており、SG003成形土である灰色系粘土に貼り付けられたものもいくつかある。図中の石Aや石Bは30～40cmほどと大きい。景石17には、第228図のように、12SD090の溝が接続する状況であり、溝内や景石17と18の間の珪藻分析によると水流が確

認されている。景石 17 上面を通った水は、一度、景石 17 と 18 間の滝壺状に落ち、石 A や石 B の南側を通して、景石 16 と景石 21 の間を抜けて、景石集中箇所に流れ込むと推定される。

出土遺物は、第 225 図の景石 19 近くのトレンチから SG003 構築土内である茶褐色粘質土から第 224 図 P3(第 218 図 1)・P4(第 218 図 2)の京都系土師器皿などが出土している。

第 226 図は、矢穴が開けられた景石 25 が出土した 31SK020 である。その出土状況等から景石 25 を廃棄するための土坑と推定される。景石 25 自体は、この遺構近くの東側周辺にあったと想定され、SG003 廃絶後、土坑を掘って廃棄されている状況であった。



第 224 図 滝 1 実測図 (1/60)

SG003 に接続する溝

SG003 には、東側・南側・北側・西側の 4 方に溝が接している。ここではこれら溝の状況を述べていきたい。

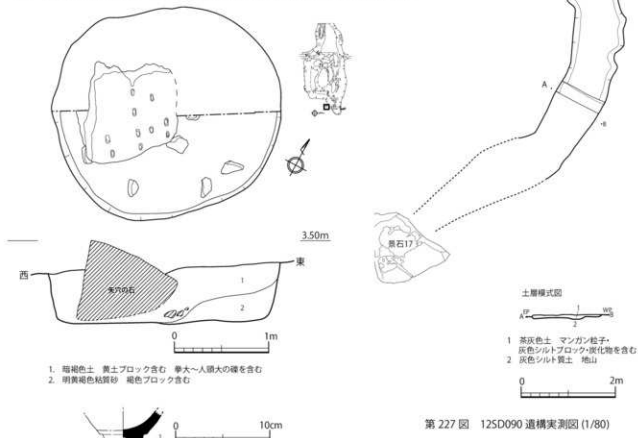
12SD090 (第 227 図)

J-18-q ~ s-13 ~ 15 区で検出された。検出標高は北側の端で 4.3 m と高いが、平均的には 4.1 m である。切り合いの関係は、一部ビットや土坑状遺構に切られる。平面プランは南東から北西に延びる溝であり、上端ラインは曲線を描き、直線的ではなく、歪み、蛇行する。池状遺構 3 の北東部の景石 17 に接続するものと推定され、その接続推定地から検出された溝の北西隅まで直線で 12.7 m を測る。溝幅は断面 AB 間で 1.0 m である。遺構深さは部分的に掘り下げを行ったが残存状況は不良であり、5 cm ほどである。この遺構は珪藻分析を行っており、その結果は後述する。

出土遺物は土器小片のみである。

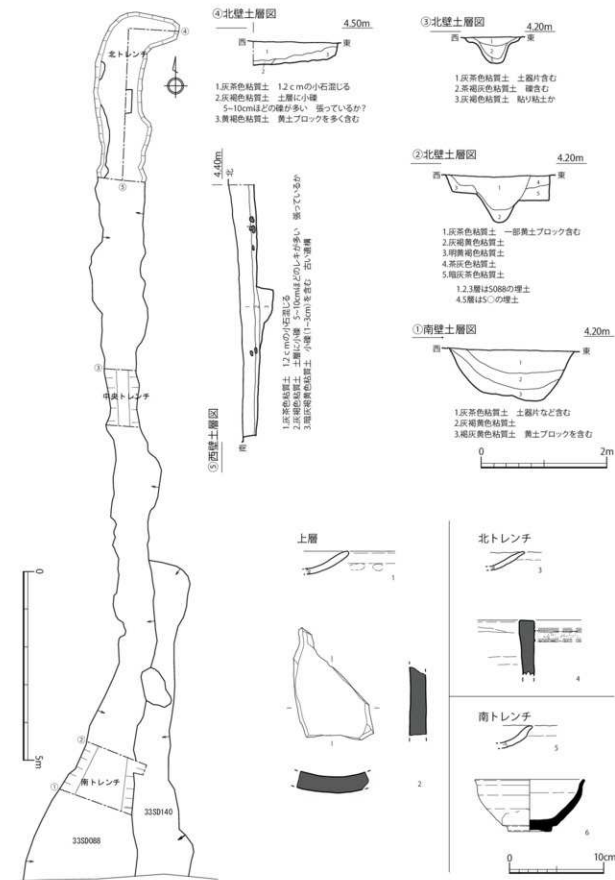
33SD088 (第 228 図)

J-18-q ~ x-6 ~ 7 区で検出された。検出標高は 4.1 m である。切り合いの関係は 33SD140 の西側を切る。平面プランはほぼ真南北に延びる溝で、北端が 1 m ほど東へ直角に曲がる。SG003 の北辺のほぼ中央付近に接続しており、切り合いの関係はなく、SG003 と同時存在していると考えられる。規模は SG003 との接続部から北端まで約 23 m を測る。溝幅は①断面で 2.1 m、③断面で 0.9 m である。溝底には粘土が貼られており、北トレンチの④断面の 2・3 層、⑤断面の 2 層、中央トレンチ③断面の 3 層、南トレンチ②断面の 2・3 層、①断面 3 層などが該当する。溝の深さは、



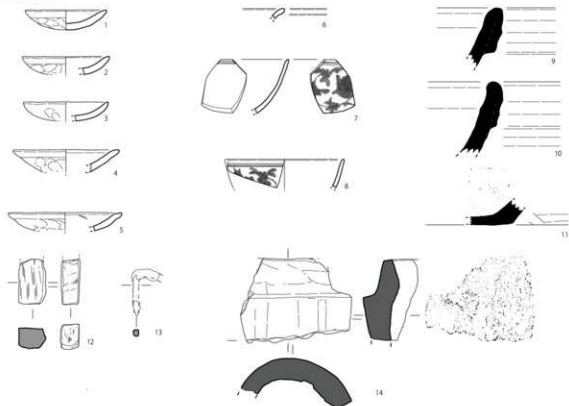
第 226 図 景石 25(1/40) 及び出土遺物(1/4) 実測図

第 227 図 12SD090 遺構実測図 (1/80)

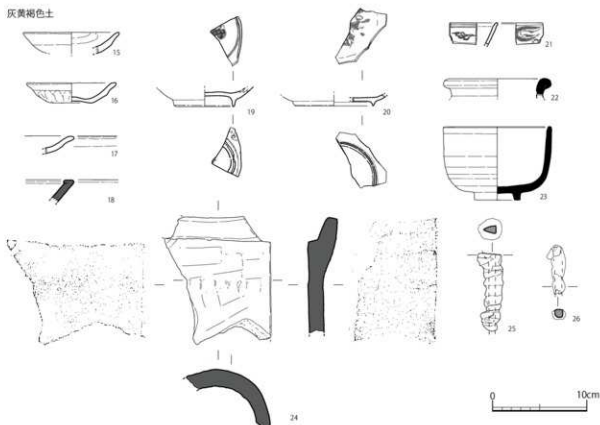


第228図 33SD088遺構(1/100)及び土層(1/60)及び出土遺物(1/4)実測図

暗灰褐色砂質土



灰黃褐色土



第230图 28SD010出土遺物実測図(1/4)

出土遺物は、南トレンチと北トレンチで出土したものを図示した。1～4は北トレンチ1層より出土した。1・3は京都系土師器皿片で、3に比べると1の器壁は厚い。2は平瓦片である。4は瓦質土器火鉢の口縁部片である。5・6は南トレンチで出土した。5の京都系土師器皿片は2層より出土、6は瀬戸美濃産の天目茶碗である。

28SD010 (第229・230図)

J-18-h～k-5～6区で検出された。検出標高は約4.1mである。切り合いの關係をもつ遺構はない。平面プランはほぼ真南北に延びる遺構である。溝北端はSG003と接続している。規模は北側の幅4m、南側で3.6mである。溝底には灰色系粘土を貼っている。また溝は南へさらに延びるようで、町8次調査区でもこの遺構と関連すると推定される町8SD103が確認されており、この溝と同一遺構である場合、SG003との接続部から確認できる南端まで13.2mを測り、この遺構はさらに南へ延びていくが、その先の状況は不明である。この遺構も珪藻分析を行っており、水流があったことが判明している。詳細は後述する。

出土遺物は第230図土層模式図の暗灰褐色土出土が1～14で、灰黄褐色土出土は15～26である。1～5は京都系土師器皿片で、器壁は厚い。6は中国龍泉窯系青磁碗口縁部片、7・8は中国景德鎮窯系青花碗である。9～11は備前焼である。12は石製品で砥石であろう。13は鉄製品で釘か。14は丸瓦片である。15～17は京都系土師器皿片である。18は瓦質土器鉢の口縁部片。19・20は中国景德鎮窯系、21は中国産色絵碗、22は備前焼の壺口縁部であろう。23は陶器碗である。24は丸瓦片、25・26は鉄製品で釘である。

31SD006・007、32SD010 (第231図)

J-13-m～n-18～25区で検出した。検出標高は4.1mである。溝はSG003西端に接続し、東西方向に西へ延び、一部掘削などの影響で途切れるが、32SD002と接続する。規模はSG003側の土層1で溝幅は4.5m、32SD002側で溝幅は0.3mである。SG003と32SD002との距離は約28mである。溝底標高は、SG003側では、底部に粘土を貼り付けているが、その粘土上面で約2.6m、32SD002側では粘土の痕跡はないが、第232図のAB土層をみると、断面は四角形状になり、その下面で標高3.5mである。出土遺物は図示していないが、京都系土師器皿片などが出土している。この溝もまた、SG003機能停止後には、ほぼ埋没すると思われるが、土層19・20の1・2層などでは、SX004とともに一部溝状に残る部分がある。

【小結】

SG003の規模はSG001・002に比べて大きいと考えられ、またSG001・002を切ることから、新しい園池跡と捉えることができる。構築時期と廃絶時期であるが、SG003の構築時に伴い、大きな掘り込みを行い、灰色系粘土をほぼ園池の全面に貼り付けていることが看取された。この灰色系粘土は土層図にアミカケをしたところを指す。この灰色系粘土と地山砂の境に完形の京都系土師器皿が数箇所確認されている(第190・199図等)。これは、SG003構築時に伴い埋置された土器と考えることができ、園池構築時の祭祀を行っている可能性がある。この京都系土師器がいわゆるこのSG003の構築時期を示すものとなる。さらに廃絶時期は後述するSX004がSG003を切る形で検出されており、SX004からは厚手の京都系土師器が多く散見され、また動物骨や雑器類が多く出土する。しかし、1586年の島津氏の豊後国侵攻により、大友館を含む、中世大友府内町跡はそのほとんどが焼失したといわれており、その後島津氏の退却後、大友館はこの場所に復興していないことが調査から確認できるため、SG003の下限は1586年頃ということになる。このSG003の内部の詳細状況については、第V章で述べる。

③ SX004 (第243図)

SG003の廃絶後は、すぐに全て埋まったのではなく、何度か粘土を貼ったりしている部分も見受けられる。たとえば、第160図6層、第166図5・8・11層、第191図6・8層などである。これらのSG003機能停止後の状況を前述した土層図などからまとめると、平面プランは第243図のようになると推定される。ほとんどの景石は破壊を受け、また埋設されている。また景石集中箇所(護岸石組)では、SG003機能面から浮いた状態で、木器類や動物骨などが出土しており、SG003機能時とは遺物の様相が全く違う。SG003機能停止後、一部

は埋め戻されるようであるが、SG003の凹みを再利用して、SX004が機能する。SX004も前述したように、粘土も貼り付けた痕跡があることから、水を溜める目的はあったと思われるが、景石などは機能しているため、SG003と同じ機能はないと考えられる。部分的にSX004とした園池だった凹みを何らかの目的で利用している状況が想定される。

【小結】

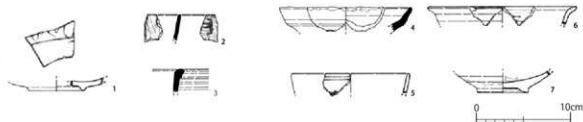
SX004はSG003を切る状況で確認された。SX004の全体図は第243図を参照していただきたい。SX004は第160、166、191図等に見られるとおり、SG003の灰色系粘土が埋まった後、粘土を貼り付けて、成形している状況が数箇所確認されている。この粘土より上部から、厚手の京都系土師器片や動物骨、雑器類が出土するという状況である。また、東側ではSG003に伴う景石を割った破片の可能性が高いものが、集中的に検出されている。この状況は庭園の園池としての機能は停止している。しかし、1587年以降、大友館の復興はなされていないが、町屋は復興しており、前述したとおり、館の東側の敷地まで利用していることがわかっている。この町屋の進出に伴って、園池だった掘り込み部を溜池状に再利用した可能性が高いと思われる。このSX004は、最終的に埋没し、上層から唐津焼片等が出土することから17世紀前葉くらいまでは使われていた可能性がある。周辺では17世紀前半頃に初瀬井路が開通されており、それ以降、大友館周辺の水田開発が行われていくものと考えられる。庭園域の多くは遺構検出面の直上層が正確な時期は不詳であるが、近世水田跡が検出されている。

（8）その他の遺物（第232・233図）

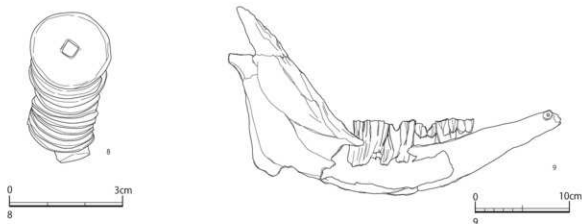
ここでは、全体から特徴的な遺構と遺物を掲げる。

図1～7の遺物は、第12次調査北側の近世水田開発に伴うと考えられる掘り込み遺構（12SX040）から出土した遺物である。1は初期伊万里皿。全体に淡い軸調を呈し、高台には砂が付着している。2は唐津焼碗。外面にはけ目が見られる。3は唐津焼鉢。口縁端部は無軸で内外面に白泥軸が施軸される。4は唐津鉄絵皿。口縁部は輪花風になり、口縁端部内面に厚く鉄軸がかかる。5は陶胎染付碗であり、17世紀前半の開発後に混ざり込んだものと推定される。7は唐津焼皿。見込みに2ヶ所砂目積みの痕跡がみられ、そこには漆が付着している。

SG003東側の中島1南側で出土した遺物で、8は銅銭、9は動物骨である。これらはSG003の埋土中からの出土物である。



第232図 12SX040 出土遺物実測図(1/4)



第233図 28S001 出土遺物実測図(1/1・1/4)

第IV章 自然科学分析

第1節では、奈良教育大学教授金原正明先生による庭園の植栽に係る種子分析や花粉分析、また導水路や排水路の水流、池水等について、報告する。第2節では庭園池内より出土した景石について、京都大学地球熱学研究施設教授の竹村恵二先生や大分県地質学会元会長の野田雅之先生による石材同定及びその産出域についてご指導いただいた内容をまとめた。第3節は、大友氏館跡第12次調査において、各遺構の花粉分析を中心とした土壌分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果を掲載した。第4節は、大友氏館跡第25次調査において、25SK005（本報告書にて詳細報告あり）と25SK110（『市内遺跡確認調査概報』2011）の寄生虫卵分析、25SK030（『市内遺跡確認調査概報』2011）のかわらけ大量廃棄土坑の微細物分析、さらに25SK001出土のガラス片の成分分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果を掲載した。

第1節 史跡大友氏遺跡庭園跡および周辺における植生および環境の復元調査報告

奈良教育大学 金原正明

I. はじめに

史跡大友氏遺跡庭園跡および周辺においては、庭園の復元を念頭において植生および環境の復元を行い、植栽と水利の状況の検討を行った。当初の調査で順次試料採取しながら分析を行ったが、先行して調査が進んだ西側部は植物遺体の残存が悪く、植栽の復元は困難かと思われた。しかし、東側の築山周辺、特に北側のやや深く廃絶後も残存していた池部は比較的多く大型植物遺体が検出され、また築山周辺では花粉などの微細遺体の残存よく、植栽と水利環境の復元も行うことができた。以下、復元検討の要点を記し、分析資料の提示を行う。

I. 復元検討

1. 植栽の検討

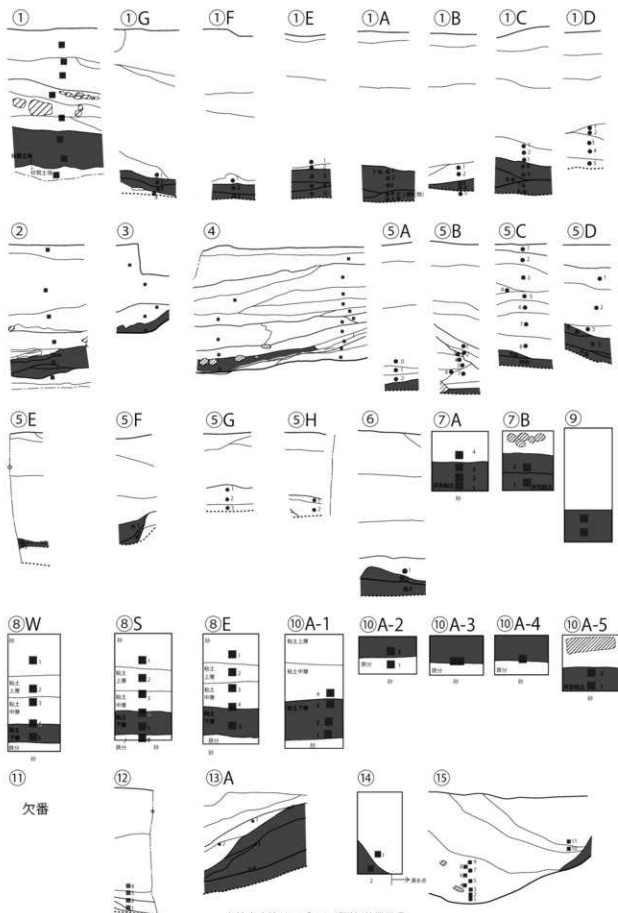
当初花粉分析では、池底の堆積物のかなりの地点で耕耕地とくに水田の環境を示す花粉群集のデータが得られ矛盾があったが、調査が進むにつれ、張底をしてあることがわかり、園池の底に水田土を貼ってあったことが示唆された。花粉分析では、花粉生産量の多い風媒花植物がより反映されるが、マツ属複雄管東亜属（アカマツかクロマツ）とエノキ属—ムクノキが多く、南側の地点ほど多く、園池の南側にそれらが植栽されていたとみなされた。種実遺体ではクロマツの雄果と種子、ムクノキの核が検出され、クロマツとムクノキと限定された。クロマツは15年輪頃から実をつけるため、比較的大きな木が植えられていたとみなされる。また、マツ属単雄管東亜属、いわゆるゴウマツの花粉が少ないながらも検出され、植栽の可能性が示唆される。他に花粉生産量の少ない虫媒花植物は、植栽の可能性があり、ツバキ属、サクラ属、ツゲ、モクセイ科、エゴノキ属、カキノキ属、ツツジ科、クチナシなどの樹木が植栽されていたとみられる。サクラ属はサクラ節の種実が検出されている。他にも種類としては多くの樹木が検出されているが、植栽の可能性はある。また、築山北側の池の残存部から、マダケや小型の竹類が比較的多く出土しているが、植えられていたのか廃絶後に入り込んだのかわからない。草本については、雑草類が多く、マツモなどの水草、またウリなどの栽培植物もあり、ハマオモト属くらいが植栽の可能性がある。

2. 水環境と水利の状況

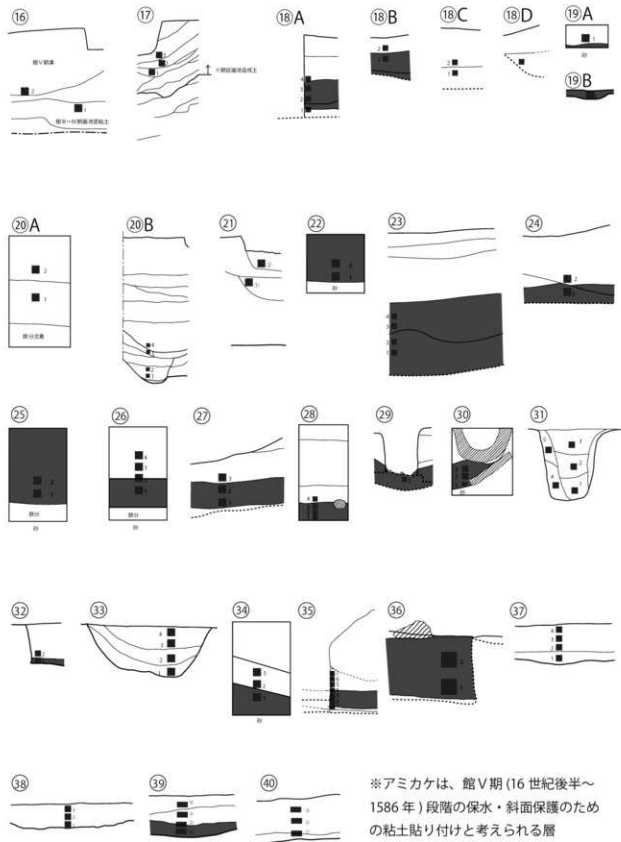
珪藻分析では、各地点で流水性種、止水性種、陸性種が検出され多様な環境が示されるが、園池が機能をもっていた時期は、各地で流水を伴うやや淀んだ水域が示唆された。特に築山北側は流水を伴う安定した水域が示唆される。築山南側ではやや停滞した止水域から湿地あったとみなされる。東側に滝があり、北側中央、南側中央にも取水と考えられる施設があるが、いずれも流水性の珪藻が検出され、水が流れ込んでいたとみなされる。滝

土壌サンプリング位置図 (1/250)





各地点土壌サンプリング詳細位置図①



各地点土壌サンプリング詳細位置図②

および北側中央は、北側の高台部から溝が続いているが、いずれの溝内の分析からも池状水域を示す珪藻が検出され、水を溜める機能も有していたとみなされる。また、高台部の土抗からも同様の状況を示す珪藻が検出された。西側には、館を区画する溝とつながる溝があるが、双方と止水または湿地の環境であったことが示唆され、増水時に排水を行うが、館を区画する溝は流れるような状態ではなかったとみられる。

II. 分析資料

1. 原理と方法

(1) 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。以下の方法で行った。

1) 試料から1 cm3を採量、2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎、3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去、4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置、5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す、6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理、7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

(2) 珪藻分析

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。以下の方法で行った。

1) 試料から1 cm3を採量、2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置、3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5～6回)、4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥、5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製、6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

(3) 種実同定および樹種同定

種実同定は篩を用いて水洗選別し、肉眼および実体顕微鏡で観察を行い同定計数した。樹種同定は木材をカミソリで木口、柃目、板目の切片を採取し、顕微鏡下で同定を行った。

以下、代表的な分析の記載を行う。

A. ①⑤⑥⑩⑫⑬地点の分析

1. 試料

分析試料は、①地点、⑤地点、⑥地点、⑩地点、⑫地点、⑬地点より採取された試料である。

表 1 鹿岸石組内出土大型種子表 (2.00mm 篩)

学名	和名	部位	計	S-5 黒灰層出土													C-17	
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
<i>Pinus thunbergii</i> Parlat.	榲桲木 クロマツ																	
<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ	雄葉	2															
<i>Quercus</i>	コナリ風	種子 (破片)	1															
<i>Aphananthhe aspera</i> Planch.	ムクナギ	種子	1															
<i>Zellera serrata</i> Makino	ケヤキ	雄	6															
<i>Cinnamomum camphora</i> S.	クスノキ	種子 (破片)	1															
<i>Prunus mume</i> (L.) Z.	ウメ	種子 (破片)	1															
<i>Prunus</i> sp. <i>Pseudoceras</i>	サトウ風サクラ類	雄	4															
<i>Zanthoxylum schinifolium</i> S. et Z.	イスギンシヤウ	種子	3															
<i>Melia azadirach</i> L. var. <i>Suberpinata</i> Miq.	センダン	雄	2															
<i>Ficus</i>	ブドウ風	種子 (破片)	1															
<i>Cornus brevipedunculata</i> C.A. Mey.	コナツハナミズキ	種子	1															
<i>Hedera</i>																		
<i>Hedera vulgaris</i> L.	オオムギ	雄化葉実	5															
<i>Hedera asplenium</i> L.	コムギ	雄化葉実	1															
<i>Hedera vulgure</i> L.	ムギ	雄化葉実	4															
<i>Polygonum</i>	タデ	雄化葉実	5															
<i>Rumex</i>	ギンギン風	雄化葉実	6															
<i>Physalis esculenta</i> var. <i>flavescens</i>	ヤマコガリ	雄	1															
<i>Cerastophyllum demersum</i> L.	オシロイバナ	雄	5															
<i>Trapa japonica</i> Flav.	オシロイバナ	雄	4															
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	雄	4															
<i>Trichosanthes bracteata</i> Voigt	オオカサスクリ	雄	3															
<i>Trichosanthes kirilowii</i> Maxim. var. <i>japonica</i> Kitaz.	オオカサスクリ	雄 (破片)	2															
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	雄	1															
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	雄 (破片)	11															
Total	合計		9	6	2	4	16	26	5	5	5	10	3	3	2	4	0	4
Unknown seeds	不明な種子		9	6	2	4	16	26	5	5	5	10	3	3	2	4	0	4
	備考		得2 和1	得1	得1	得1	得1	得1	得1	得1	得1	得1	得1	得1	得1	得1	得1	得1
	日付		2/25	2/27	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28
	2014年		2/25	2/27	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28	2/28

表2 瀧岸石組内出土大型遺体

分類群	部位	個数	分類群	部位	個数
クロマツ	毬果	3	クスノキ科	木材	2
	木材	8	広葉樹	木材	2
スギ	木製品	1	マダケ	桿	3
ヒノキ	木製品	2	タケ亜科(径3cm)	桿	5 +
針葉樹	木材	2	タケ亜科(径2cm)	桿	1 +
ツバキ属	木材	1	タケ亜科	桿	78 +
ヒサカキ属	木材	4	小枝	木材	19
サクラ属	木材	2	未同定	木材	1
モモ	核(内果皮)	2	樹皮	樹皮	1
クスノキ	木材	1	ヒシ	果実	1

2. 花粉分析結果

(1) 結果

分析の結果、⑤、⑥、⑬地点で出現した分類群は、樹木花粉6、草本花粉6、シダ植物胞子2形態の計14である。⑬地点Aでは、樹木花粉27、樹木・草本花粉7、草本花粉23、シダ植物胞子2形態の計59である。⑬地点で出現した分類群は、樹木花粉21、樹木・草本花粉5、草本花粉22、シダ植物胞子2形態の計50である。これらの学名と和名および粒数を表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したところ4分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

イチョウ、マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、シキミ属、カエデ属、ツバキ属、カキノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、イスノキ属

〔樹木・草本花粉〕

クワ科-イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、エノキグサ属、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ネギ属、ハマオモト属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、スベリヒユ属、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ヒシ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、キツネノマゴ、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) ⑤地点、⑥地点、⑬地点

分析の結果、⑤地点のC-10点、D-6点、E-2点、F-2点、G-3点、H-2点のいずれの試料も密度が極めて低く、花粉は検出されないか、検出されても樹木花粉では、マツ属複雑管束亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属、草本花

表3 鹿児島県内輸出種実定結果

学名	和名	部位	サブトレ					南溪口	合計	
			北西下層	北下層	北東下層	南東下層	南西下層			
分群										
樹木										
Arbor										
<i>Pinus thunbergii</i> Parllet	クロマツ	種子	2	21	49	7	3	1	83	
<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ	種子		4	3	1	1		9	
<i>Morus</i>	クワ	核			1				1	
<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>	サクラ風サクラ類	核		1	1				2	
<i>Rubus</i>	キイチゴ風	種子			14	8	3	1	26	
<i>Zanthoxylum piperitum</i> DC.	サンショウ	種子		2					2	
<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>Substriatata</i> Miq.	センダン	核	1		1		1		3	
<i>Mallotus japonicus</i> Muell. et Arg.	アカメカシワ	種子		1					1	
草本										
Herb										
<i>Najas</i>	イバラモ	種子	2	44	104	759	8	234	1	1152
<i>Echinochloa</i>	イヌビエ	類		12						12
<i>Gramineae</i>	イネ科	類		10	4	73	1	7		95
<i>Setaria</i>	ホタルイ	果実		2						2
<i>Cyperus</i>	カヤツリグサ	果実	56	475	214	1615	193	117	5	2675
<i>Carex</i>	スグ	果実		10	4					14
<i>Anellima ketsak</i> Hassk.	イボクサ	種子	9	72	3	55	37	9		185
<i>Polygonum</i>	タデ	果実	41	233	188	853	131	55	4	1505
<i>Rumex</i>	ギンギン	果実	11	30	52	98	14	19	1	225
<i>Chenopodium-amaranthus</i>	アカザ風-ヒユ	種子		4	133					137
<i>Caryophyllaceae</i>	マツシロ科	種子		39	895					934
<i>Ceratophyllum demersum</i> L.	マツモ	果実	2	8		1	1	1		13
<i>Ranunculus</i>	キンポウ	果実	211	1335	1685	2741	473	287	9	6741
<i>Siumonem autumn</i> Rehd. et Wils.	ツツフジ	種子		2						2
<i>Oxalis</i>	カタバミ	種子		2	12					14
<i>Euphorbiaceae</i>	トウダイグサ科	種子	4	49	72	1				126
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科	種子		3	22					25
<i>Apogon</i>	キンランソウ	果実		1						1
<i>Perilla</i>	シソ	果実		39	23					62
<i>Solanaceae</i>	ナス科	種子			6	37	18	3		62
<i>Trichosanthes kirilowii</i> Maxim. var. <i>japonica</i> Kitam	キナラスウリ	種子	1	2						3
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	5	8	4	25	6		1	49
<i>Rhus daurica</i> L.	スルデ	果実		1						1
<i>Eclipta prostrata</i> L.	タカサボロウ	果実	25	294	440	699	46	79	42	1625
<i>Compositae</i>	キク科	果実		1	11					12
Total			370	2707	3891	7017	938	816	71	15810
動物遺体(骨、歯等)			2	11	20					33

表 4 ①⑦⑧⑨地点硅藻分析結果

[illegible]

(イネ属型を含む)、アブラナ科、アカザ科・ヒユ科、ナデシコ科が増加する。樹木花粉では、エノキ属・ムクノキ、マツ属複雑管束亜属が半減し、樹木・草本花粉のクワ科・イラクサ科が増加する。

3. 花粉分析から推定される植生と環境

29)において分析の結果、花粉密度は極めて低く、堆積地は花粉などの有機質遺体分解される乾燥した堆積環境であったが、堆積速度が速かったことが考えられる。わずかながら検出されたツツガ属、マツ属雑草類東亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属、エノキ属ームクノキなどの樹木は、周辺に生育していたとみなされ、遺跡の性格から植栽の可能性も示唆される。また出現した草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科、ヨモギ属は人里植物ないし耕地雑草で陽当たりのよい乾燥した環境を好む種ばかりで、堆積地は乾燥した堆積環境であったとみなされる。

30においては、イネ科にはイネ属型が伴われ、堆積地周辺に水田の分布が示唆され、上部ではアカザ科・ヒユ科、ナデシコ科などの耕地雑草を伴いソバ属、栽培植物を多く含むアブラナ科が増加することから畑も分布していたとみなされる。

4. 珞藻分析結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）106 分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端 2 個につき 1 個と数えた。表に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図 1 に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe(1974) の記載による、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉

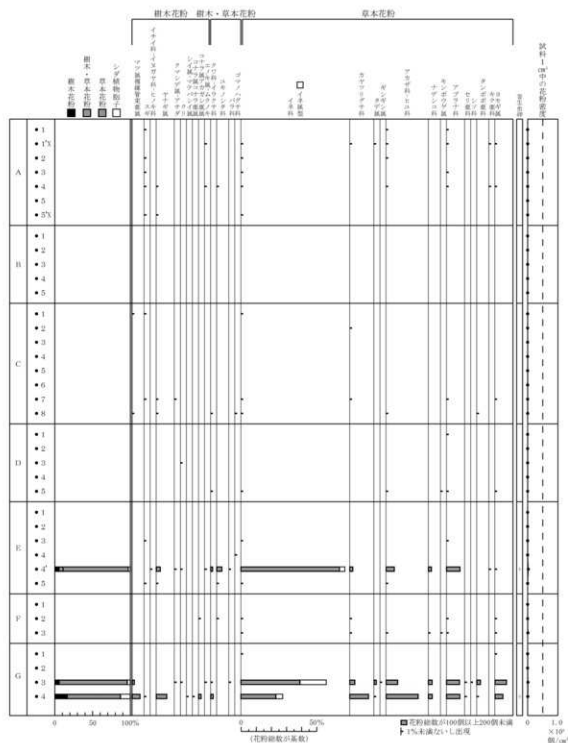


図2 ①地点A B C D E F G花粉分析結果

(1988) により、淡水生種は安藤 (1990) による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes hungarica, *Achnanthes lanceolata*, *Amphora montana*, *Amphora veneta*, *Aulacoseira ambigua*, *Cocconeis placentula*, *Cyclotella bodanica-radiosa*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella tumida*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema acuminatum*, *Gomphonema augur*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema olivaceum*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula*

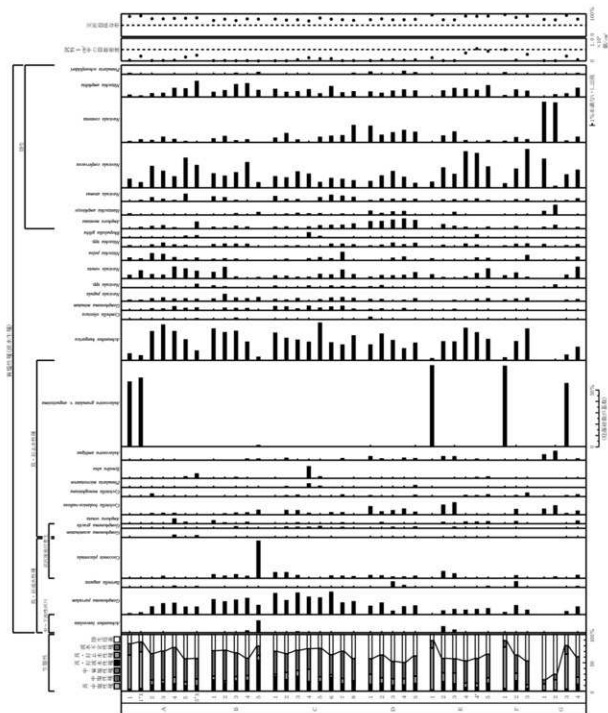


図3 ①地点A B C D E F G珪藻分析結果

と、真・好止水性種の占める割合が増加し、沼沢湿地付着生種の *Aulacoseira ambigua*、*Cocconeis placentula* が増加し、好流水性種の *Gomphonema parvulum* が減少する。A-1 になると真・好止水性種が減少し、流水不定性種の *Achnanthes hungarica*、陸生珪藻の *Navicula confervacea*、*Navicula contenta* が増加する。

3) ⑬地点

A-3 では、流水不定性種が 35%、陸生珪藻が 30%、真・好止水性種が 18%、真・好流水性種が 17% を占める。特に優占する種は認められず、好止水性種の *Gomphonema parvulum*、陸生珪藻の *Navicula confervacea*、*Amphora montana*、流水不定性種の *Achnanthes hungarica*、*Navicula pupula* などが出現する。

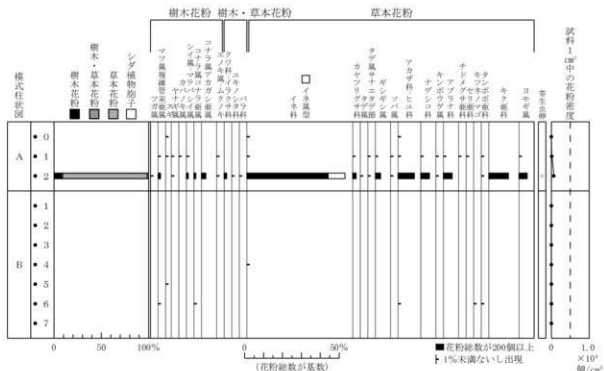


図4 ⑤地点A B花粉分析結果

B-1 では、流水不定性種が 60% を占め *Achnanthes hungarica* が高率に出現し、*Fragilaria capucina*、*Navicula pupula* が伴われる。他に陸生珪藻の *Navicula confervacea*、好流水性種の *Gomphonema parvulum* が出現する。D-1 では、真・好流水性種が 41%、流水不定性種が 27%、真・好流水性種が 21% を占める。真・好流水性種で沼沢湿地付着種の *Aulacoseira ambigua* が優占し、次いで *Cyclotella bodanica-radiosa* が多い。

F-1 では、真・好流水性種、真・好止水性種、陸生珪藻がほぼ同じ割合で出現する。好流水性種で沼沢湿地付着種の *Cocconeis placentula*、好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa* が優占し、陸生珪藻の *Navicula contenta* が比較的多い。

4) ⑩地点

真・好流水性種と流水不定性種がそれぞれ 30% をしめ、真・好止水性種が 20%、陸生珪藻が 20% を占める。好流水性種の *Gomphonema parvulum*、好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa* が優占し、陸生珪藻の *Navicula confervacea*、*Navicula confervacea* が比較的多い。

B. ⑧地点

1. 試料について

大友府内館跡 30 次調査では、庭園部調査の堆積物の植物遺体分析を行い、環境と植生および植栽の分析を行う。試料は、庭園部の最深部の堆積物および出土の以下を対象とした。

花粉分析試料：⑧地点 E-1 ～ 5、W-1 ～ 5、S-1 ～ 6、計 16 点

種実同定試料：⑧地点 E-1 ～ 5、W-1 ～ 5、S-1 ～ 6、計 16 点

珪藻分析試料：⑧地点 S-1 ～ 6、計 6 点

樹種同定試料：⑧地点灰灰粘質土出土 4 点

表7 ⑤地点A B花粉分析結果

学名	分類群	和名	A			B						
			0	1	2	1	2	3	4	5	6	7
Arboreal pollen	樹木花粉											
<i>Tsuga</i>		ツガ属			1							
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxydon</i>		マツ属複雑管束亜属		4	5						1	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	1	1						1		
<i>Salix</i>		ヤナギ属		1	3							
<i>Betula</i>		カバネギ属		1								
<i>Castanopsis-Pasania</i>		シイ属・マデハシイ属		1	4							
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属		1	4							
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属			9						1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属・ムクノキ		1	2							
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉											
Moraceae-Urticaceae		クワ科・イラクサ科			5							
Saxifragaceae		ユキノシタ科			1							
Rosaceae		バラ科			1							
Nonarboreal pollen	草本花粉											
Gramineae		イネ科		59	170				1			
<i>Oryza type</i>		イネ属型	2	10	35							
Cyperaceae		カヤツリグサ科		2	7							
<i>Polygonum</i>		タデ属			3							
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節		1	1							
<i>Rumex</i>		ギンギシ属		1	11							
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属		1	2							
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アザザ科・ヒユ科	1	12	34						1	
Caryophyllaceae		ナデシコ科		4	18							
<i>Ranunculus</i>		キンボウグサ属		1	2							
Cruciferae		アブラナ科		9	18							
Hydrocotylloideae		チドメグサ亜科		1								
Apioidaeae		セリ亜科		1								
<i>Justicia procumbens</i>		キツネノマゴ									1	
Lactucoidae		タンポポ亜科		3	1						1	
Asteroidae		キク亜科			41							
<i>Asteris</i>		ヨモギ属		9	17							
Fern spore	シダ植物胞子											
Monolate type spore	単条溝胞子			3								
Trilate type spore	三条溝胞子			3	6							
Arboreal pollen	樹木花粉		1	9	28					1	2	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				7							
Nonarboreal pollen	草本花粉		3	114	360				1		3	
Total pollen	花粉総数		4	123	395				1	1	5	
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度		1.2	4.5	3.1				0.3	0.3	3.0	
			$\times 10$	$\times 10^2$	$\times 10^3$				$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	
Unknown pollen	未同定花粉			4	12							
Fern spore	シダ植物胞子			6	6							
Helminth eggs	寄生虫卵											
<i>Ascaris(fumbricoides)</i>	回虫卵				6							
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵				10							
Total	計				16							
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度				1.1							
					$\times 10^2$							
Stone cell	石細胞		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかに消化残渣		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片		(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)

表8 ⑤地点CDEFGH、⑥地点、③A地点花粉分析結果

花粉種別	⑤C	⑤D	⑤E	⑤F	⑤G	⑤H	⑥A	⑥B	⑥C	⑥D	⑥E	⑥F	⑥G	⑥H	③A
樹木花粉															
サカキ															
スギ															
カシ															
クヌギ															
コナラ															
アカガシ															
ニレ															
ケヤキ															
エノキ															
アカメカシ															
サンショウ															
トチノキ															
ブドウ															
フトモモ															
ツツジ															
リョウブ															
エゴノキ															
モクセイ															
トネリコ															
イスノキ															
草本花粉															
イネ															
カヤツリグサ															
イボクサ															
ネギ															
タデ															
サナエタデ															
ギシギシ															
ソバ															
アカザ															
ヒユ															
スベリヒユ															
ナデシコ															
キンボウゲ															
カラマツソウ															
アブラナ															
ヒシ															
アリノトウグサ															
フサモ															
チドメグサ															
セリ															
シソ															
ナス															
キツネノマゴ															
オオバコ															
タンポポ															
キク															
ペニバナ															
シダ植物胞子															
単条溝胞子															
三条溝胞子															
寄生虫卵															
回虫卵															
鞭虫卵															
肝吸虫卵															
異形吸虫類卵															
不明虫卵															

2. 花粉分析結果

(1) 結果

出現した分類群は、樹木花粉 33、樹木花粉と草本花粉を含むもの 6、草本花粉 28、シダ植物胞子 2 形態の計 69 である。これらの学名と和名および粒数を表 1 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 1 に示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても検鏡した結果、5 分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

イチョウ、マキ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属—マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—クノキ、アカメカシ、サンショウ属、トチノキ、ブドウ属、ノボドウ、フトモモ科、ツツジ科、リョウブ、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属—ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、スベリヒユ属、ナデシコ科、キンボウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ヒシ属、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ナス科、キツネノマゴ、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ペニバナ

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、異形吸虫類卵、不明虫卵

(2) 花粉群集の特徴

1) ⑧地点 E-1 ~ E-5

花粉構成と花粉組成の変化から、下部と上部に分け特徴を記載する。

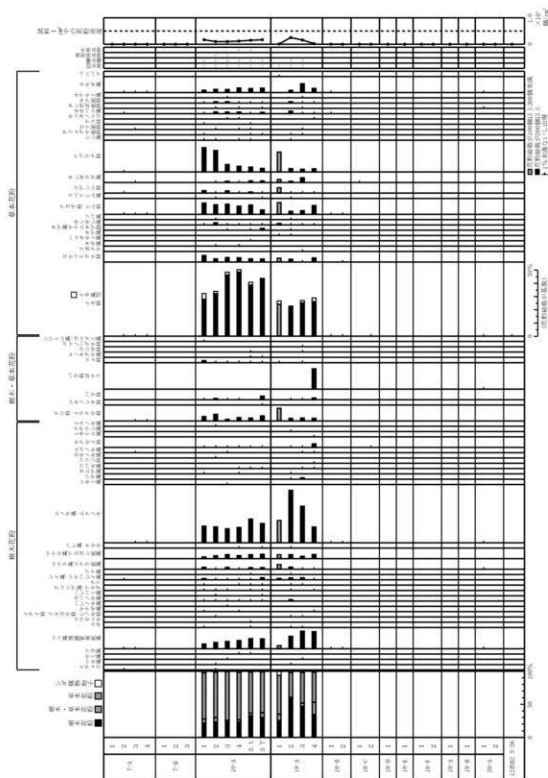


図6 ⑦、⑧、⑨、⑩地点硅藻分析結果

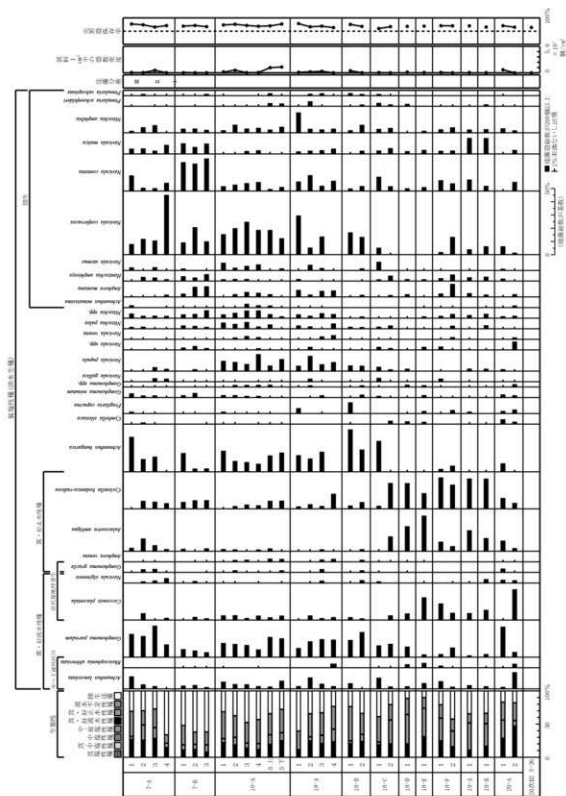


表 10 ⑦、⑩、⑬、⑭、⑯、⑰地点硅藻分析結果

項目	01				02				03				04				05				06				07				08				09				10				11				12				13				14				15				16				17				18				19				20				21				22				23				24				25				26				27				28				29				30				31				32				33				34				35				36				37				38				39				40				41				42				43				44				45				46				47				48				49				50				51				52				53				54				55				56				57				58				59				60				61				62				63				64				65				66				67				68				69				70				71				72				73				74				75				76				77				78				79				80				81				82				83				84				85				86				87				88				89				90				91				92				93				94				95				96				97				98				99				100			
	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
001	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
002	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
003	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
004	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
005	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
006	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
007	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
008	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
009	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
010	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
011	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
012	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
013	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
014	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
015	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
016	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	

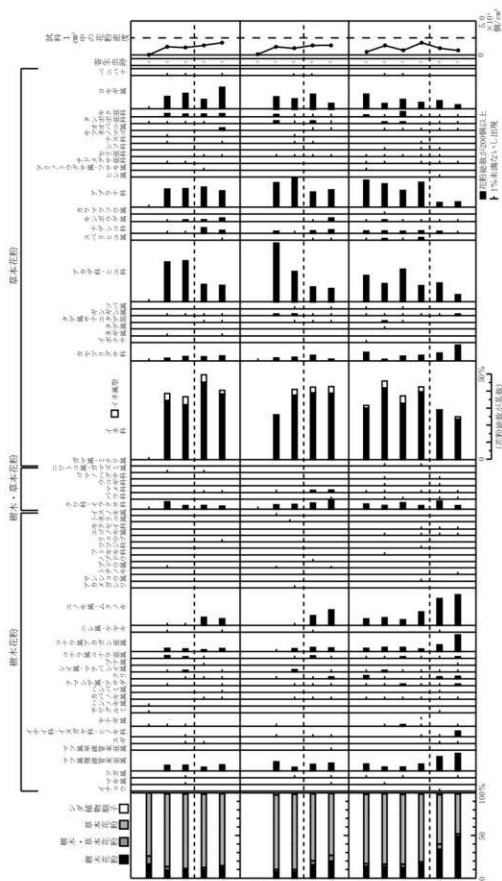


図7 ③EWS地点花粉分析結果

表 11 ⑧ EWS 地点花粉分析結果

種名		1					2					3					4					5				
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
Adiantum pedatum	根生葉																									
Ginkgo biloba	葉																									
Podocarpus	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																									
Pinus nigra	葉																</									

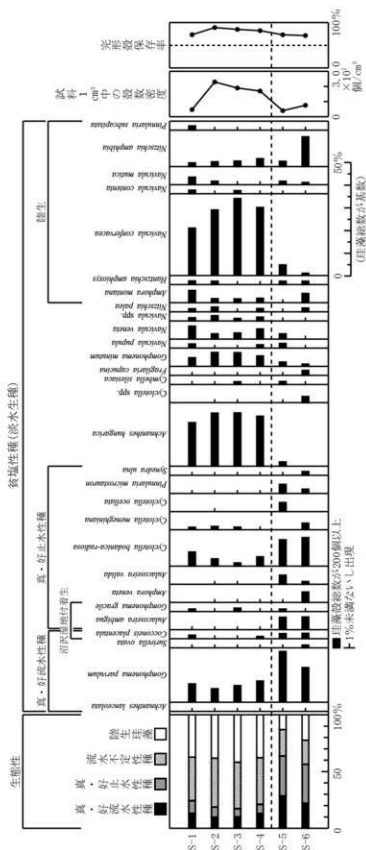


図8 ⑤S地点花粉分析結果

下部 (E-5, E-4)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、85%以上を占める。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、次いでアブラナ科、アカザ科・ヒユ科、ヨモギ属が多く、カヤツリグサ科、ナデシコ科、キク亜科、キンポウゲ属が低率に出現する。樹木花粉では、エノキ属・ムクノキ、マツ属複雑管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、樹木・草本花粉のクワ科・イラクサ科が出現する。E-5では、ベニバナが出現する。回虫卵、鞭虫卵をはじめ肝吸虫卵、異形吸虫類卵が1 cm³中に100～300個以上検出される。

上部 (E-3～E-1)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、85%以上を占める。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）がやや減少し、アカザ科・ヒユ科が増加する。他にアブラナ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、キク亜科が継続して出現する。E-3、E-2では、ベニバナがわずかに出現する。樹木花粉では、エノキ属・ムクノキが減少し、マツ属複雑管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、樹木・草本花粉のクワ科・イラクサ科が低率に出現する。E-1では密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、アカザ科・ヒユ科、アブラナ科などがわずかに出現する。E-3、E-2では、回虫卵、鞭虫卵をはじめ肝吸虫卵、異形吸虫類卵が1 cm³中に500～800個以上検出され、E-1でもわずかに検出される。

2) ⑥地点 W-1～W-5

花粉構成と花粉組成の変化から、下部と上部に分けて特徴を記載する。



1) ⑧地点 E-1 ~ E-5

イネ科（イネ属型を含む）、次いでアブラナ科、アカザ科・ヒユ科、ヨモギ属、そしてカヤツリグサ科、ナデシコ科、キク亜科、キンボウゲ属の草本が多く、周辺にはこれら草本が繁茂していた。いずれも人里ないし耕作地の雑草にあたる草本である。樹木ではエノキ属・ムクノキ、マツ属複雑管束亜属がやや低率に出現し、周囲に生育していた。E5 ではベニバナが検出され利用されている。寄生虫卵が検出されるが最下部の E5 では密度は低く、汚染が低い。

イネ科(イネ属型を含む)とアカザ科・ヒユ科を主に、アブラナ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、キク亜科が、周辺に繁茂する。E3、E2ではペニバナが輸出され利用されている。樹木ではエノキ属・ムクノギが減少する。最上層 E1 では密度が極めて低い。E3、E2 では、寄生虫卵の密度がやや高い。

表 13 ⑧ EWS 地点種実同定結果

学名	科名	部位	S						W						U					
			1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
Herb	草本																			
<i>Najas</i>	イバラヤ属	種子					2					3	6	2	1	3	17	23	1	
		(破片)					2						2				2			
<i>Oxyria sativa</i> L.	イネ	根 (破片)													1	1	2		1	
Gramineae	イネ科	根 (破片)				1	1					5	4		1	1		2		
<i>Carex</i>	スズ属	葉部											1					1		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	葉部	2	6		8	4	1	7	2		4	4	3	2	5	3	2		
<i>Polygonum</i>	タデ属	葉部													2					
		(破片)					2			1	1	1					1		1	
<i>Polygonum sax. Persicaria</i>	タデ属+ナユタデ属	葉部				1	1	1		1						1				
		(破片)				1	2										2			
<i>Rumex</i>	ビロウ属	葉部										4	1				1		1	
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	10	24		10	11	2	6	2		6	4	1	3	4	3			
<i>amaranthus</i>	ヒユ属	種子												2		1	1		1	
<i>Chenopodium-amaranthus</i>	アカザ属+ヒユ属	種子(破片)										2			2	1	1		1	
<i>Mollugo persicifolia</i> L.	ザカソウ科	種子																		
Caryophyllaceae	ナゲシ科	種子	2	11		30	37		4	10	15	15	2	8	16	11	3			
		(破片)	6	6		16	7		5	3	7	10	4	2	9	8	2			
<i>Rumex crispus</i> L.	タデ属	葉部				2	4				1	3	4	1	4	2	3			
<i>Rumex</i>	キンボウグサ属	葉部				3	5				2	1	6	1	1	2				
		(破片)										2			2					
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子				1	1					1	1				1		1	
		(破片)					2					1								
<i>Hydrocotyle</i>	ナドメダサ属	葉部														1			1	
Cruciferae	アブラナ科	種子				1					1	1			1	1			1	
		(破片)																		
<i>Pavetta</i>	シソ属	葉部				1														
<i>Labiate</i>	シソ科	葉部				1														
<i>Solanum nigrum</i> L.	ナス科	種子																		
<i>Eclipta prostrata</i> L.	アサガソウ科	葉部				1	1	4	2						1	3	3	2	1	
<i>Chen</i>	シヤゲタカ属	印部																		
Total	合計		0	35	53	84	82	5	118	30	63	64	21	55	10	72	40	4		

(100 m²×10, 2mm²)

2) ⑧地点 W-1 ~ W-5

花粉構成と花粉組成の変化から、下部と上部に分けて特徴を記載する。

下部 (W-5, W-4)

イネ科 (イネ属型を含む) を中心にアブラナ科、アカザ科・ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ナゲシ科、キンボウグサ属が周辺で分布する。栽培植物としては W-5 でソバ属、W-4 でベニバナが検出され利用されている。樹木ではエノキ属・ムクノギ、マツ属複雑管束亜属が低率であるため周囲で孤立木として生育していた。また、虫媒花植物であるため花粉出現率が低いバラ科やマメ科の樹木の生育も推定される。寄生虫卵は最下部では密度が低く汚染が低い。

上部 (W-3 ~ W-1)

アカザ科・ヒユ科、アブラナ科が増加し乾燥した環境下の雑草類が増加する。樹木ではエノキ属・ムクノギがほぼなくなる。栽培植物では W-3 でソバ属とベニバナが検出され利用されている。最上部 W-1 では花粉密度が低く堆積速度の速いことや分解が推定される。W-3 と W-2 では寄生虫卵密度がやや高く汚染が高い。

3) ⑧地点 S-1 ~ S-6

下部 (S-6, S-5)

下位ほど樹木花粉の占める割合が高く、エノキ属・ムクノギ、マツ属複雑管束亜属、コナラ属アカガシ亜属の樹木が周囲に生育していた。希少なイチョウや花粉生産および散布性の低い虫媒花植物のエゴノキ属やモクセイ科の花粉が検出され、周辺で生育していた。草本ではイネ科 (イネ属型を含む)、カヤツリグサ科、アカザ科・ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属が周囲に生育する。ヒシ属が出現し滞水が示唆される。

上部 (S-4 ~ S-1)

イネ科 (イネ属型を含む) が高率に出現し、アカザ科・ヒユ科、アブラナ科の草本が増加し繁茂する。栽培植物ではソバ属とベニバナが検出され利用されている。寄生虫卵の密度がやや高く汚染がみられる。

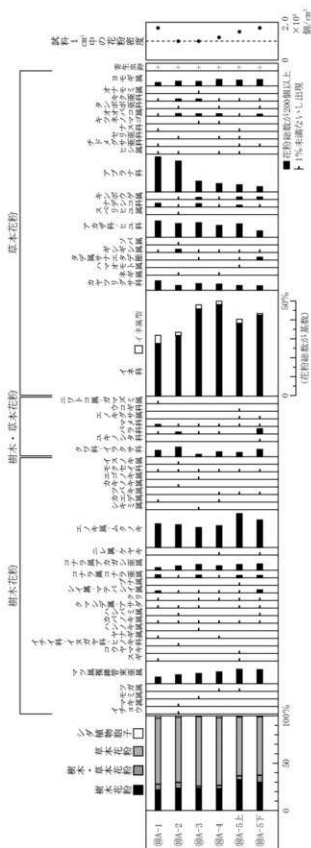


図10 花粉分析結果

3. 種実同定結果

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆植物中に残存する。堆植物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べることで、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

(1) 方法

試料（堆植物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- 1) 試料 50cm3 に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(2) 結果

草本 23 分類群が同定される。学名、和名および粒数を表 3 に示し、主要な分類群を写真に示す。50cm3 中の種実数をダイアグラム（図 2）に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

〔草本〕

イバラモ属 *Najas* 種子（完形・破片）

イバラモ科

黄褐色～灰褐色で長楕円形を呈す。表面には大きい網目模様がある。

イネ *Oryza sativa* L. 穎（破片）

イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものはいなかった。

イネ科 *Gramineae* 穎（完形・破片）

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

表 14 00地点花粉分析結果

学名	分類群	和名	00地点					
			A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6
<i>Ashrafi pollin</i>	樹木花粉	イチョウ		1				
<i>Ginkgo biloba</i>		イチョウ		1				
<i>Podocarpus</i>		マキ属		1				
<i>Abies</i>		モミ属			1			
<i>Tsuga</i>		ツガ属				1	1	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属種群東亜属	16	17	25	29	37	35
<i>Oryzopsis japonica</i>		スギ	1				1	
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ					1	
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae</i>		イチイ科・スギヤ科・ヒノキ科		2				
<i>Salix</i>		ヤナギ属	2			1		
<i>Alnus</i>		ハシナキ属			2			
<i>Betula</i>		カバネキ属	1	1	3	1	2	1
<i>Corylus</i>		ハシバミ属		1			1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシラギ属・アサギ	1	1	3		1	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	1			1	1	1
<i>Castanopsis-Panania</i>		シイ属・マテバシイ属	5	3	1	3	1	8
<i>Fagus</i>		ブナ属					1	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	7	3	7	3	6	6
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	6	8	14	11	15	16
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニホ属・ケヤキ				1	1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属・ムクノキ	56	43	48	53	86	68
<i>Illicium</i>		シキモ属			1			
<i>Acer</i>	カエデ属	カエデ属	1			1	1	1
<i>Camellia</i>		ツバキ属				1	1	1
<i>Diospyros</i>		カキノキ属		1				
<i>Sorax</i>		エゴノキ属			1			
<i>Oleaceae</i>		モクセイ科	2	1	1	1	3	1
<i>Dicranum</i>		イヌスミ属		1				
<i>Asteraceae</i>	樹木・草本花粉	タウチ科・イラクサ科	15	18	6	12	11	18
<i>Saxifragaceae</i>		ユキノシタ科						1
<i>Rosaceae</i>		バラ科	4	4	2	1		13
<i>Leguminosae</i>		マメ科	7	1	2	4	4	3
<i>Aralia</i>		ニホ属・アサギ					3	1
<i>Araliaceae</i>		ウコギ科					3	1
<i>Sambucus-Elaeagnus</i>		ウツロミ属・ガズミ属	1					
<i>Nonarborescent pollen</i>	草本花粉	イネ科	124	114	209	222	185	209
<i>Gramineae</i>		イネ科	19	6	10	8	10	4
<i>Oryza type</i>		イネ属型	22	9	16	15	12	11
<i>Cyperaceae</i>		カヤツリグサ科		1				
<i>Oxalis</i>		オキザリス属				1	1	
<i>Polypodium sect. Persicaria</i>		タゲノコ属・ササゲ科			2		2	7
<i>Rumex</i>		ゴシヤク科	4	6	1	3	3	3
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属		1				
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>		アカザ科・ヒユ科	38	26	35	29	34	16
<i>Portulaca oleracea</i>		スベリヒユ科		1				1
<i>Caryophyllaceae</i>		ナデシコ科	9	1	8	4	5	3
<i>Ranunculaceae</i>		キンポウゲ科		2	5	3	6	6
<i>Cruciferae</i>		アブラナ科	82	58	26	20	18	13
<i>Trapa</i>		ヒシ属	1	1		1	2	
<i>Hydrocotylaceae</i>		オドリ草科	2				1	2
<i>Apiaceae</i>		セリ草科		2		3	2	
<i>Solanaceae</i>		ナス科	1				2	
<i>Justicia procumbens</i>		キツネノマゴ			1	1		
<i>Plantago</i>		オオバコ属	4	5	6	6	1	5
<i>Labiatae</i>		タンポポ科		2			1	
<i>Asteroidaceae</i>		キタキ属	4	4	5	1	2	3
<i>Xanthium</i>		オナモミ属			1			
<i>Asteraceae</i>		ヨモギ属	8	9	11	16	15	16
<i>Fern spore</i>	シダ植物胞子	シダ植物胞子	1	2	2	2	2	3
<i>Monolete type spore</i>		単条溝胞子	9	3	1	6	4	1
<i>Trilete type spore</i>	三条溝胞子	三条溝胞子	99	84	107	107	157	148
<i>Arboreal pollen</i>		樹木花粉	27	23	10	17	21	36
<i>Arboreal + Nonarborescent pollen</i>	樹木・草本花粉	樹木・草本花粉	318	248	336	334	391	291
<i>Nonarborescent pollen</i>		草本花粉	444	355	453	458	479	467
<i>Total pollen</i>	花粉総数	花粉総数	1.7	1.0	1.0	1.2	1.5	1.7
<i>Pollen frequencies of 1cm²</i>		試料1cm ² 中の花粉密度	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$
<i>Unknown pollen</i>	未同定花粉	未同定花粉	9	6	8	12	8	5
<i>Fern spore</i>		シダ植物胞子	10	5	3	8	6	4
<i>Helminth eggs</i>	寄生虫卵	寄生虫卵						
<i>Ascaris (lumbricoides)</i>		回虫卵	3	4	5	11	10	2
<i>Trichostrongylus</i>	線虫卵	線虫卵	8	3	2	9	5	2
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>		異形吸虫卵		5	1			
<i>Unknown eggs</i>	不明虫卵	不明虫卵				2	1	
<i>Total</i>		計	11	12	8	22	16	4
<i>Helminth eggs frequencies of 1cm²</i>	試料1cm ² 中の寄生虫卵密度	試料1cm ² 中の寄生虫卵密度	1.3	1.2	0.6	2.2	1.6	0.4
<i>Stomach cell</i>		胃細胞	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$
<i>Digestion rimet</i>	消化残渣	消化残渣	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
<i>Charcoal + wood fragments</i>		炭素質植物・木屑	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)

表 15 8 A 地点花粉分析結果

分類群		測地点		
学名	和名	A-1	A-2	A-3
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Podocarpus</i>	マキ属	1		
<i>Abies</i>	ヒノキ属			1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	4	43	57
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	1	1	
<i>Betula</i>	カバネキ属	5		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシズメ属-アサダ	2		
<i>Castanea crenata</i>	クリ	2	1	
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属	2	7	7
<i>Fagus</i>	ブナ属	1		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	6	8	3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	5	14	8
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	28	182	119
<i>Buxus</i>	ツゲ属	2	5	
<i>Acax</i>	カエデ属	1		
<i>Camellia</i>	ツバキ属	1		
<i>Syrax</i>	エゴノキ属			1
Olacaceae	モクセイ科	1	1	
<i>Gardenia</i>	クチナシ属	1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	16	9	10
Rosaceae	バラ科		2	4
Leguminosae	マメ科	1		4
Araliaceae	ウコギ科			3
Scrophulariaceae	ゴマノハダサ科			1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	40	100	109
<i>Oryza type</i>	イネ属型	4	4	7
Cyperaceae	カヤツリグサ科	5	10	4
<i>Anellema keiskei</i>	イボクサ			1
<i>Polygonum</i>	タデ属	1	1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		1	
<i>Rumex</i>	ゲンギシ属	2	2	4
<i>Fagopyrum</i>	ツバ属		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	15	11	12
<i>Portulaca oleracea</i>	スベリヒユ属		2	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	7	1	1
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	4	5	16
Cruciferae	アブラナ科	25	12	9
<i>Trapa</i>	ヒシ属		1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		1	2
Apioidae	セリ亜科			1
<i>Plantago</i>	オオバコ属		9	2
Lactucoideae	タンポポグ亜科			3
Asteroidae	キク亜科		5	1
<i>Xanthium</i>	オナモミ属			1
<i>Achillea</i>	ヨモギ属		8	29
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ	1		
Fem spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	6	5	3
Trilate type spore	三条溝胞子	5	5	6
Arboreal pollen	樹木花粉	45	273	206
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	17	11	22
Nonarboreal pollen	草本花粉	104	174	202
Total pollen	花粉総数	166	458	430
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	0.1 ×10 ⁴	2.5 ×10 ⁴	1.6 ×10 ⁴
Unknown pollen	未同定花粉	6	8	8
Fem spore	シダ植物胞子	11	10	9
Helminth eggs	寄生虫卵			
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵	5	6	2
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵		5	7
Total	計	5	11	9
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.3 ×10 ²	0.9 ×10 ²	0.7 ×10 ²
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)

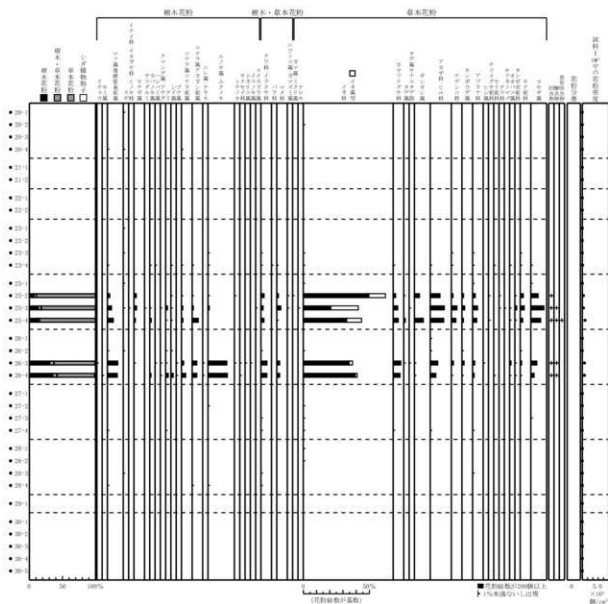


図12 20,21,22,23,24,25,26,27,28,29,30地点花粉分析結果

タガラシ *Ranunculus scleratus* L. 果実 キンボウゲ科

黄褐色、扁平、ややレンズ状。側面にしわはないが、滑らかではない。

キンボウゲ属 *Ranunculus* 果実（完形・破片） キンボウゲ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面はやや粗く、コルク質である。

カタバミ属 *Oxalis* 種子（完形・破片） カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。

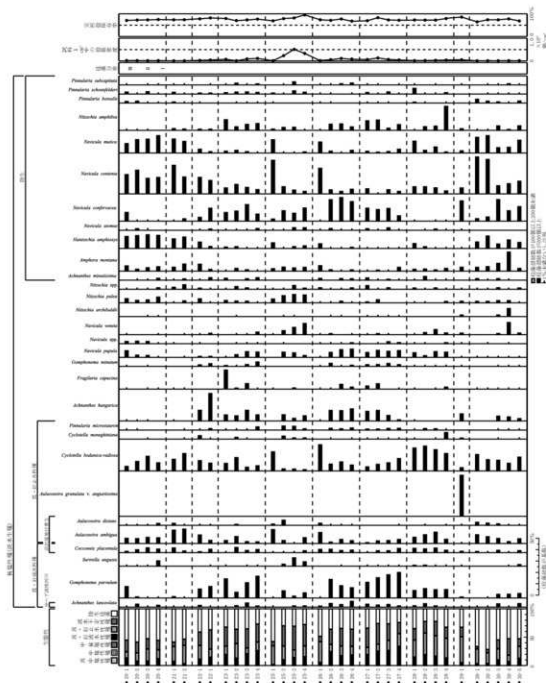
チドメゲサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科

黄褐色～赤褐色で半円形を呈す。隆条は細い線状をなし、背面、側面、縁にそれぞれみられる。

アブラナ科 *Cruciferae* 種子（完形・破片）

茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。

[illegible]



シソ属 *Perilla* 果実 シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。

シソ科 Lamiaceae 果実

倒卵状3稜形を呈し、先端は切形で扇形。着点は扇形で斜切形である。

イヌホウズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

タカサブロウ *Eclipta prostrata* L. 果実 キク科

淡褐色～茶褐色で長楕円形を呈す。上端は円形に突出し、下端は切形となる。表面中央部にいぼ状の突起があ

表 17 ②0、②1、②2、②3、②5、②6、②7、②8、②9、③0 地点珧藻分析結果

[illegible]

表 19 ㉔、㉕、㉖地点における珪藻分析結果

分類群	21				22				23				24			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
異胞性類 (淡水系類)																
<i>Achnanthes cretacea</i>		1		1									5	11	1	5
<i>Achnanthes exigua</i>			4				26		1	3	0					
<i>Achnanthes longicauda</i>	1															
<i>Achnanthes infusa</i>																
<i>Achnanthes lanceolata</i>	2	9	18	5	4	1		2	2				3	12	6	
<i>Achnanthes minutissima</i>	1	2	8	1	1	3	1			1			1	6	3	
<i>Amphora capitata</i>										1				1		
<i>Amphora fontinalis</i>			1													
<i>Amphora montana</i>	4	1	4	3	10	17	4	5	19	4	10		10	1	2	
<i>Amphora ovalis</i>														1		
<i>Amphora venusta</i>			2												1	
<i>Amphora</i> spp.	1		1	1					1							
<i>Adicymbium amplius</i>	17	41		16	30	29	41	9	7	29	4		22	21	39	5
<i>Cocconeis discalis</i>			1													
<i>Cyclotella bodanica-radiosa</i>	16	83	18	52	45	42	36	30	13	42	14		18	26	64	6
<i>Cyclotella meneghiniana</i>							1									
<i>Cymbella minuta</i>																
<i>Cymbella ribicincta</i>					1	1								2		
<i>Cymbella sinuata</i>		1	2				1								1	
<i>Cymbella tendula</i>		1	2													
<i>Cymbella tergalis</i>				2												
<i>Diatoma mesodon</i>				1												1
<i>Diatomeia hafjortiana</i>					1											
<i>Diploneis elliptica</i>													1	1		
<i>Diploneis pseudocylus</i>					1											1
<i>Diploneis yamamotoi</i>					1											
<i>Diploneis</i> spp.									1							
<i>Epithemia adusta</i>		1														
<i>Epithemia minor</i>			1			1										
<i>Epithemia pinnatifida</i>					1								1			
<i>Epithemia praerupta</i>		1			1											
<i>Epithemia</i> spp.		1														
<i>Fragilaria brevistriata</i>		1	2	2			2			1			1			
<i>Fragilaria capucina</i>		2		5							1		2	6	8	4
<i>Fragilaria contracta</i> v. <i>venosa</i>			1			2				1			1			1
<i>Fragilaria exigua</i>			1													
<i>Fragilaria pinnata</i>		2	2		2		1	1	1				2	3	2	
<i>Frustulia vulgaris</i>											1					
<i>Gomphonema albidum</i>				1											1	
<i>Gomphonema gracile</i>															2	1
<i>Gomphonema nitens</i>								1							2	1
<i>Gomphonema silvaticum</i>				1												
<i>Gomphonema silvaticum</i> v. <i>minutissimum</i>																
<i>Gomphonema parvulum</i>			1			1		2		3			3	5	7	3
<i>Gomphonema</i> spp.		2	4	1				1					1	4	1	
<i>Gomphonema</i> spp.																
<i>Hantzschia amphioxys</i>	16	8	4	2	19	8	12	6	5	20	6		12	9	9	1
<i>Meridion circulare</i> v. <i>convolutum</i>			1													
<i>Nitzschia atomus</i>	2	5	1	3	2			4	3	1			2	3	4	
<i>Nitzschia bacillum</i>					2											
<i>Nitzschia charlesi</i>															1	
<i>Nitzschia clunensis</i>				1												
<i>Nitzschia confusum</i>	10		1	2	4	2	43	2	4	8	2		2	5	2	3
<i>Nitzschia contenta</i>	112	73	127	12	88	41	25	73	145	51	129		61	119	83	112
<i>Nitzschia crypanthoides</i>																
<i>Nitzschia elongata</i>	2			1			1				1		1	1	1	
<i>Nitzschia gallica</i>	5	3	5	2	2	1		1	5	1			2	2	1	
<i>Nitzschia ignota</i>	2	3	1	1			1						1	2	1	
<i>Nitzschia lanceolata</i>	1	1	2			2							1	2		
<i>Nitzschia mutica</i>	20	16	11	7	11	12	9	23	13	23	14		21	26	16	15
<i>Nitzschia mutica</i> v. <i>ventricosa</i>									1							
<i>Nitzschia papula</i>			2		1	1					1		2	2	1	
<i>Nitzschia venusta</i>						2					3					
<i>Nitzschia</i> spp.	1	4	4	1	7	3	1	2	1	5	3		5	3	1	3
<i>Nitzschium affine</i>						1										
<i>Nitzschium alpinum</i>	1		1		2											
<i>Nitzschium amphibia</i>	5	1	4	2	2		2	3	5	5	6		5	5	7	13
<i>Nitzschium clausi</i>			2	4	1						1					
<i>Nitzschium debile</i>			2	1		1		1			1		1	6	1	
<i>Nitzschium nana</i>	2		1		1		1								1	1
<i>Nitzschium pulvis</i>	9	1	1				2	1					2		2	2
<i>Nitzschium sinuata</i> v. <i>Tabellei</i>	9															
<i>Nitzschium</i> spp.	10	4	2	1	3	4	4	1	2	1	3		10	7	5	1
<i>Orinotia rostrata</i>																
<i>Pinnularia acrocephala</i> v. <i>tergoides</i>						1										
<i>Pinnularia appendiculata</i>														1		
<i>Pinnularia borealis</i>				1		3							1	1	2	
<i>Pinnularia leptostriata</i>	2	1	2	1	3	1				1	1		2	2	1	
<i>Pinnularia obsoleta</i>	1				1					1	1		1	1	2	
<i>Pinnularia robustior</i>	2			1	3	3			2				1	2	3	
<i>Pinnularia subradiata</i>	1		1										2	2	1	
<i>Pinnularia subspicata</i>				1	2	2							4	2	1	
<i>Pinnularia</i> spp.	2	10	5	1		4	1	2	2	1	3		2	1		
<i>Rhizosolenia abbreviata</i>	1		10	3	2	2	2			2			1	4	2	
<i>Rhizosolenia gibba</i>		3														
<i>Rhizosolenia gibberula</i>				2	1											
<i>Rhizosolenia marginata</i>				2												
<i>Sphaerodictyon carinatum</i>	1		1	1	1		1				1		1			
<i>Sphaerodictyon</i> spp.					1											
<i>Synedra alba</i>				1												
中-異胞性類 (F ₁ -淡水系類)																
中-異胞性類 (F ₁ -淡水系類)																
<i>Achnanthes brevipes</i>					1		1	1	1						1	
低-中-異胞性類 (低-F ₁ -淡水系類)																
<i>Achnanthes delicatula</i>		1	2	1									1	1	1	
高-異胞性類 (淡水系類)																
<i>Cylindrocapsa striatula-auriformis</i>																
合計	248	284	283	190	214	300	228	173	245	309	216		192	284	282	213
水田系	7	8	3	3	7	2	5	6	7	5			4	4	5	2
湖沼系	121	94	84	96	92	83	76	96	87	79	48		96	94	111	85
2001 1 × 10 ⁻³ の数値集中度	1.7	1.2	1.2	1.1	1.4	1.3	2.1	5.1	1.3	1.2	2.4		2.7	1.4	4.6	3.4
	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹		× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹	× 10 ⁻¹
定常態保存率 (%)	47.6	75.6	41.3	47.3	69.3	71.4	75.9	74.5	74.3	72.7	83.4		47.7	75.4	70.1	71.7

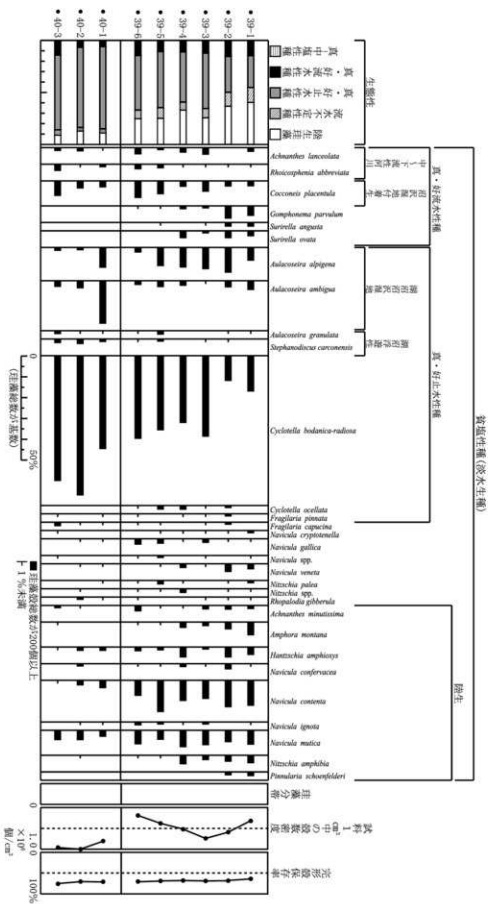


图15 ③、④地点主要硅藻分析结果

藻ダイアグラムを図1に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)の記載により、陸生珪藻は小杉(1986)により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉(1988)により、淡水生種は安藤(1990)による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes exigua, *Achnanthes hungarica*, *Achnanthes lanceolata*, *Amphora montana*, *Amphora veneta*, *Aulacoseira ambigua*, *Aulacoseira valida*, *Cocconeis placentula*, *Cyclotella bodanica-radiosa*, *Cyclotella meneghiniana*, *Cyclotella ocellata*, *Cyclotella* spp., *Cymbella silesiaca*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula contenta*, *Navicula mutica*, *Navicula pupula*, *Navicula veneta*, *Navicula* spp., *Nitzschia amphibia*, *Nitzschia palea*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia subcapitata*, *Surirella ovata*, *Synedra ulna*

(3) 珪藻群集の特徴

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下部と上部に分け特徴を記載する。(図3)

下部 (S-6、S-5)

検出される珪藻は、ほとんど貧塩性種(淡水生種)で、真・好止水性種の占める割合がやや高く、真・好流水性種、流水不定性種、陸生珪藻と続く。優占するのは、好流水性種の *Gomphonema parvulum* で、真・好止水性種では、*Cyclotella bodanica-radiosa* を主に沼沢湿地付着生種でもある *Aulacoseira ambigua* が伴われ、*Amphora veneta*, *Aulacoseira valida*, *Cyclotella ocellata*, *Pinnularia microstauron* などが出現する。陸生珪藻では、*Nitzschia amphibia*, *Amphora montana*, *Navicula confervacea*, *Navicula mutica*, *Hantzschia amphioxys* が低率に出現する。

上部 (S-4 ~ S-1)

流水不定性種、陸生珪藻の占める割合が高くなる。陸生珪藻では、*Navicula confervacea* が高率に出現し、*Amphora montana*, *Nitzschia amphibia* などが伴われる。流水不定性種では *Achnanthes hungarica* を主に *Gomphonema minutum*, *Navicula veneta*, *Navicula pupula* などが出現する。

(4) 珪藻分析から推定される堆積環境

⑧地点下部 (S-6、S-5)

好流水性種の *Gomphonema parvulum*、真・好止水性種では *Cyclotella bodanica-radiosa* を中心に沼沢湿地付着生種でもある *Aulacoseira ambigua* が主に出現し、堆積地は水域を呈するが緩やかに水の動く状況であり、大きくはないが流れ込みがあったとみなされる。流水不定性種および陸生珪藻は出現するものの低率であり、比較的安定した水域が示唆される。

⑧地点上部 (S-4 ~ S-1)

Achnanthes hungarica を主にする流水不定性種と *Navicula confervacea* を主とする陸生珪藻を中心に好流水性種の *Gomphonema parvulum* が伴われ、不安定で流れのある水域と湿った環境が示唆され、堆積地は滞水もするが湿った状態も多い環境であったと推定される。

5. 樹種同定結果

1) 試料1 ⑧地点黒灰粘質土

クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科

仮道管と放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材

である。早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には比較的緩やかな鋸歯状の肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴より、クロマツに同定される。クロマツは本州、四国、九州の海岸沿い砂地に分布する。常緑の高木で高さ35m、径2mに達する。材は耐朽性、保存性が中庸で水湿によく耐え、広く用いられる。

2) 試料2 ⑧地点黒灰粘質土

イヌビワ *Ficus erecta* Thunb. クワ科

道管は散在し、放射方向に2～3個複合する。横断面では同心円状に柔細胞の帯が規則的に配列し本樹種の大きな特徴である。道管は単穿孔である。放射組織は多列の異性放射組織型で、1～5細胞で、部分的な鞘状細胞が認められる。

以上の特徴からイヌビワに同定される。関西以西、四国、九州、沖縄の海岸や沿海の山地に自生し、二次林や林縁にも分布する。高さ3～5mの低木で、木材としては利用されない。

3) 試料3 ⑥地点黒灰粘質土

ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く100を超えるものがある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。二次林にも多い。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

4) 試料4 ⑧地点黒灰粘質土

マダケ *Phyllostachys bambusoides* Sieb. et Zucc. イネ科

基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の特徴よりタケ亜科 *Bambusoideae* の材に同定され、復元径が10cm以上になり、節の部分が2段になっているのでマダケに同定される。マダケは本州、四国、九州、沖縄に分布し、高さ20m、直径5cm以上である。伸縮性が小さいので、物差し、尺八、提灯や傘の骨、熊手などに用いられる。

(3) 所見

同定された樹種はクロマツ、イヌビワ、ヒサカキ属、マダケであり、これらの中で二次林にも多い種類はイヌビワとヒサカキ属であり、庭園廃絶後に生育した可能性がもたれる。クロマツは割材で、庭園廃絶後の利用された可能性がある。マダケは加工されており製品の可能性がある。以上から、クロマツが従来から庭園に植栽され、比較的大きな樹木になっていた可能性がある。

6. 考察

⑧地点の植物遺体分析では、各地点とも花粉、樹種、珪藻の群集に大きく上部と下部で差異があり、また中部の群集が挟まれる地点もある。⑧地点Sでは下部のS-5・6の珪藻群集から、ゆるやかに水の動く安定した水域が示唆され、庭園時の時期とみなされる。各地点とも下部2試料の花粉群集と上部で差異があり、種実群集では下部試料1試料から2試料で上部とは異なり、特に⑧地点W-5、S-6では草本の種実が少なく、雑草の生育しな

い状態であり、これら最下部が庭園時を示すと考えられる。

花粉分析からは、モクセイ科、エゴノキ属、エノキ属—ムクノキ、マツ属複雑管束亜属が近隣に生育していたとみなされ、木材ではマツ属複雑管束亜属はクロマツの種まで分類される。池はゆるやかに水が動き、水量の大きくない流れ込みを伴っていたと推定される。

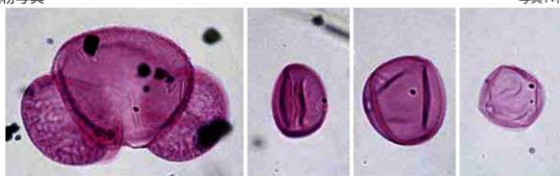
中上部から、庭園は廃絶後、イネ科、アブラナ科、ナデシコ科、ヨモギ属の乾燥を好む雑草が繁茂し、池は不安定に水域になったり湿地になったりする。この時期ではソバ属やベニバナの花粉、寄生虫卵の密度もやや高く、周囲から生活排水が流れ込んだり投棄の場となっていたとみなされる。

7. まとめ

⑧地点の植物遺体分析の結果、庭園にはクロマツ、モクセイ科、エゴノキ属、エノキ属—ムクノキ（ムクノキ）の樹木が植栽されていたと考えられた。⑧地点の池はゆるやかに水が動き、水量の大きくない流れ込みを伴っていたと推定された。庭園は廃絶後は、イネ科、アブラナ科、ナデシコ科、ヨモギ属の乾燥を好む雑草が繁茂し、池は生活排水が流れ込んだり投棄の場となり、水域から湿地の不安定な状態になった。

参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
- 中村純（1967）花粉分析。古今書院、p.82-102。
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として。第四紀研究、13,p.187-193。
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p.21-30。
- 中村純（1980）日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。
- 参考文献
- Hustedt,F.(1937 - 1938)Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol.Suppl.15,p.131 - 506.
- Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh - water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.
- K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae・1 - 4。
- Asai,K.&Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom.10,p.35-47.
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用。東北地理、42、p.73-88。
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌、6、p.23-45。
- 小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—。植生史研究、第1号、植生史研究会、p.29-44。
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究、27、p.1-20。

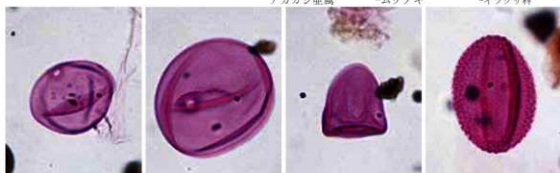


1 マツ属複維管束亜属

2 コナラ属
アカガシ亜属

3 エノキ属
ムクノキ

4 クワ科
イラクサ科



5 イネ科

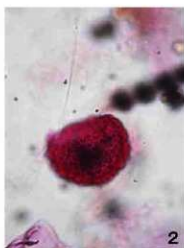
6 イネ属型

7 カヤツリグサ科

8 ソバ属



1



2



3



4



5

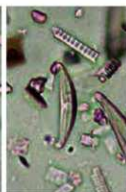
- 1 イチヨウ花粉
- 2 コウヤマキ花粉
- 3 カキノキ属
- 4 ハマオモト属
- 5 ヒシ

珪藻写真

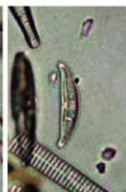
写真2:珪藻



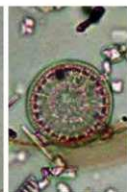
1 *Achnanthes hungarica*



2 *Amphora montana*



3 *Amphora veneta*



4 *Cyclotella bodanica-radiosa*



5 *Cymbella silesiaca*



6 *Gomphonema parvulum*



7 *Hantzschia amphioxys*



8 *Navicula confervacea*



9 *Navicula veneta*



10 *Nitzschia amphibia*



11 *Cymbella tumida*



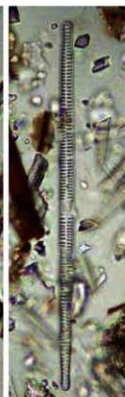
12 *Gomphonema acuminatum*



13 *Gomphonema olivaceum*



14 *Rhopalodia gibba*



15 *Synedra ulna*

— 10 μ m

タケ亜科



大友氏館跡30次の樹木種実 1



1 クロマツ建果

— 5.0mm



2 クロマツ種子

— 1.0mm



3 スギ種子

— 1.0mm



4 ムクノキ核

— 1.0mm



5 ケヤキ果実

— 1.0mm



6 クスノキ種子

— 1.0mm



7 ウメ核 (破片)

— 1.0mm



8 サクラ属サクラ節核

— 1.0mm



9 イヌザンショウ種子

— 1.0mm



10 センダン核

— 1.0mm



11 ブドウ属種子

— 1.0mm



12 クマノミズキ核

— 1.0mm



1 オオムギ炭化果実



2 同左

— 1.0mm



3 オオムギ炭化果実



4 同左

— 1.0mm



5 コムギ炭化果実



6 同左

— 1.0mm



7 タデ属果実

— 0.5mm



8 ギンギン属果実

— 1.0mm



9 ヤマゴボウ種子

— 1.0mm



10 マツモ果実

— 1.0mm



11 キンポウゲ属果実

— 1.0mm



12 ナス種子

— 1.0mm



13 オオカラスウリ種子

— 1.0mm



14 キカラスウリ種子

— 1.0mm



15 ウリ類種子

— 1.0mm



16 ウリ類種子

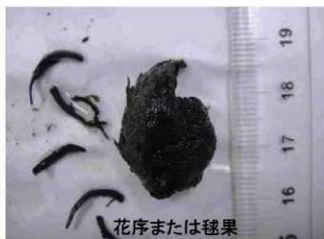
— 1.0mm



クロマツ毬果



クロマツ割材



花序または毬果

第2節 館V期園池出土大型の石材について

館V期のSG003とした園池跡からは1 m以上の大型の石が約50基出土した。石は特に園池跡の東側で多く認められた。これらの石は景石として、庭園の風景の1つの役割を持っているものと考ええる。

ここでは、これら石の石材と産出地を調べることで、大友氏館跡の庭園造成時にどのような石を意図的に用いて、実際、石の調達をどこから持ち込んできたのか、当時の流通経路や石切り場などの手がかりとなるのではないかと考えた。

石材と産出地を調べるにあたり、京都大学地球熱学研究施設教授の竹村恵二先生や大分県地質学会元会長の野田雅之先生にご教示頂いた事を報告する。

まず石材の鑑定を目視で行った。その結果、対象景石49点のうち、安山岩が21点、凝灰岩が28点であった。さらに詳細にみていくと、安山岩は輝石安山岩系と角閃石安山岩系に分けることが出来る。また溶結凝灰岩についても、14点は永興石といわれるものを含む。

これら石材の分布は第235図に示すとおりである。石材によるはっきりとした使い分けはなさそうであるが、東側の護岸石組などは溶結凝灰岩を用いており、特に永興石を多く用いる。また石の中でも巨石となるようなものは、輝石安山岩を用いている。また角閃石安山岩は園池の西側では使用しておらず、東側の南側と北側斜面に使用している状況である。

次に産出地については、第236図に示すとおりである。すべての石は大分川の下流域から中流域にかけての周辺のものであることが判明した。永興石は大分川下流域で産出し、現在でも大分市内永興地区の城南神社の裏などでも岩盤が剥き出しになっている箇所がある。またそのほかの溶結凝灰岩は大分川中流域の南側で、芹川の東側の山地で産出するようである。安山岩は由布市庄内町の大分川中流域の北側で輝石安山岩、南側で角閃石安山岩が産出する。

園池内で出土した大型の石は、すべて大分川流域周辺で採れることがわかった。このことからすると、重くて大きな石は、大分川を利用することで、河口付近まで船で運び、そこから引き上げて、館まで運搬したことが想定される。

また、これら産出地での、中世の石切り場などの所見は得られていないが、今後、踏査などでの分布調査を行うことで、石切り場などの存在も明らかになるかもしれない。

その他、園池内の玉石や拳大の石なども大分川中流域から下流域で採れるものと考えられる。また園池内の西側の一部に使用されている緑泥（結晶）片岩は、大友領である現在の大大分市と臼杵市の境となっている九六位山系で産出しており、ここは中央構造帯が延びている場所でもある。

玉砂利なども白玉砂利が圧倒的に多く、中には黒玉砂利も認められる。これら玉砂利も大友領である大大分市東部地域の佐賀関の海岸で現在でも見ることができる。

このように、大友氏館跡の館V期の使用石材はすべて大友領国内で揃っていたと考えられ、館Ⅲ～Ⅳ期で使用している石材も館V期との類似品がほとんどで、館V期での使用石材と同様の場所から運搬していたと考えられる。



第 234 圖 SG003 出土墓石管理繪圖

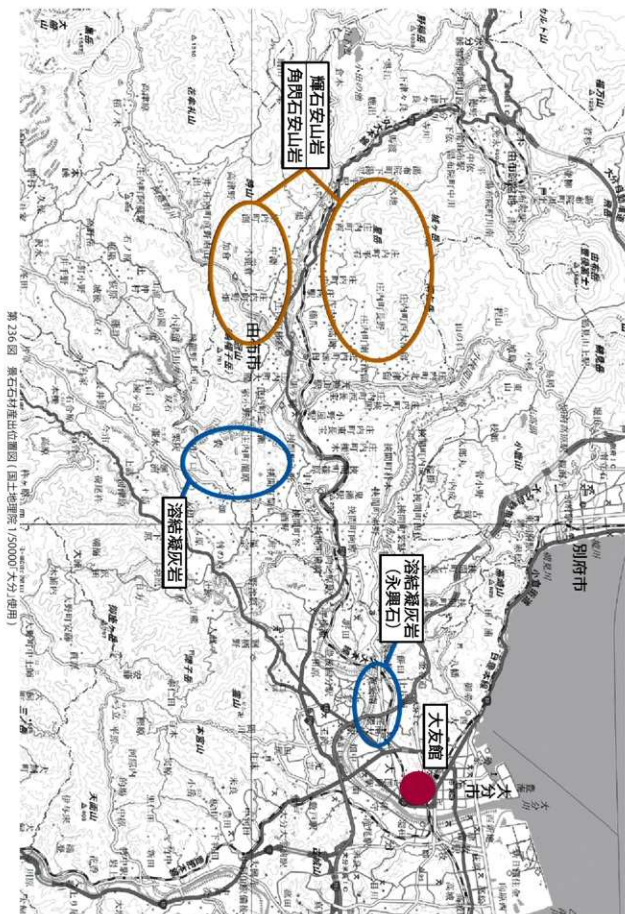
第6表 景石詳細表

景石番号	石 材	備 考
001	溶結凝灰岩（永興石）	SG003西側北斜面に設置。
002	輝石安山岩	SG003機能停止後、割られている石で、幅10cmほどの矢尻痕あり。
003	輝石安山岩	SG003西側の北斜面に設置。断面U字状であるが、周辺に溝などは確認されていない。
004	溶結凝灰岩	SG003西側の南斜面に設置。
005	輝石安山岩	SG003西側南斜面に設置。表面は凸凹激しく、SG003の中でも特徴的な景石。
006	輝石安山岩	SG003機能後、2次的に動かされる。SG003機能時の設置場所判明。景石取上げ済、重量0.8(t)
007	輝石安山岩	護岸石組を形成。
008	輝石安山岩	SG003機能後、2次的に動かされる。頂部ハツられる。SG003機能時の設置場所判明。景石取上げ済、重量1.2(t)
009	輝石安山岩	護岸石組を形成。
010	輝石安山岩	護岸石組を形成。ほぼ正位置を保つ。景石11と同一個体。
011	輝石安山岩	SG003機能後、2次的に動かされる。SG003機能時の設置場所判明。景石取上げ済、重量2.9(t)
012	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。
013	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。上面はフラット。
014	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。
015	溶結凝灰岩	護岸石組を形成。SG003機能停止後、被熱の丸石で覆われていた。
016	角閃石安山岩	護岸石組を形成。
017	輝石安山岩	滝1を形成。断面U字状で、東溝が接続する最初の景石。
018	角閃石安山岩	滝1を形成。
019	溶結凝灰岩	SG003機能後、2次的に動かされる。SG003機能時の設置場所判明。景石取上げ済、重量1.0(t)
020	溶結凝灰岩	SG003機能後、2次的に動かされる。SG003機能時の設置場所判明。景石取上げ済、重量0.7(t)
021	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。表面はハツられた跡あり。
022	輝石安山岩	護岸石組を形成。
023	溶結凝灰岩（永興石）	周辺の景石からハツられた破片か。
024	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。表面はハツられた跡あり。
025	輝石安山岩	SG003機能後、2次的に動かされる。SG003機能時の設置場所判明。景石取上げ済、重量1.6(t)、幅10cmほどの矢尻痕あり。
026	溶結凝灰岩	SG003東側東斜面に設置。周辺には拳大の円礫あり。
027	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。
028	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。
029	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。
030	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。夜泊石状。
031	溶結凝灰岩（永興石）	護岸石組を形成。
032	溶結凝灰岩	護岸石組を形成。
033	溶結凝灰岩（永興石）	中島1東側に設置。
034	溶結凝灰岩	SG003機能後、2次的に動かされるが、SG003機能時の設置場所不明。
035	溶結凝灰岩（永興石）	SG003機能後、2次的に動かされるが、SG003機能時の設置場所不明。
036	溶結凝灰岩（永興石）	中島1東側に設置。
037	輝石安山岩	SG003機能後、2次的に動かされるが、SG003機能時の設置場所不明。中島1周辺に設置か。
038	角閃石安山岩	SG003東側南斜面に設置。
039	角閃石安山岩	SG003東側南斜面に設置。
040	角閃石安山岩	SG003東側南斜面に設置。
041	角閃石安山岩	SG003東側南斜面に設置。
042	溶結凝灰岩（永興石）	
043	輝石安山岩	滝2の北側に設置。水分石。
044	溶結凝灰岩	館VI期段階に設置。五輪塔転用石。
045	溶結凝灰岩	館VI期段階に設置。五輪塔転用石。
046	溶結凝灰岩	館VI期段階に設置。五輪塔転用石。
047	溶結凝灰岩	館VI期段階に設置。五輪塔転用石。
048	溶結凝灰岩	館VI期段階に設置。五輪塔転用石。
049	輝石安山岩	景石3下に設置。（枯状の）水受石か。
050	溶結凝灰岩	SG003西側北斜面に設置。景石3・49等とまとまっている。
051	輝石安山岩	SG003西側南斜面下に設置。表は凸凹している。
052	溶結凝灰岩	複数の石で滝2を構成。52-A石が溶結凝灰岩
053	溶結凝灰岩	SG003東側南斜面に設置。
054	溶結凝灰岩（永興石）	中島1北西側に設置。

※備考欄 重量は、クレーンによる取上時の吊り重量（車両付属の重量表示の読み取り値）



第235圖 SG003出土土石材料色分け図



第236図 磐石村産出位置図(国土地理院 1/50000 大分, 使用)

第3節 その他の自然科学分析

(1) 大友氏館跡第12次調査地点の花粉分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大分県大分市顕徳町に所在する大友氏館跡第12次調査地点は、豊後国守護である大友氏の中世府内町跡の中央に位置する大友氏館跡推定地内にあたり、これまでに実施された調査成果から大規模な庭園跡北側に相当すると考えられている。今回の発掘調査の結果、平安～江戸時代にかけての遺構・遺物が認められ、特に土層の断面観察や遺構の重複状況から15～16世紀の間に規格性の高い掘立柱建物が機能していたと考えられる2時期、他には庭園機能・廃絶時といった合計4時期の両期も確認されている。

本報告では、今回の発掘調査で検出された庭園跡における古環境、特に植生（植栽など）に関する情報を得ることを目的として、発掘調査区内の遺構や地山層から採取した土壌を対象に花粉分析を実施する。

1. 試料

試料は、発掘調査区から検出された池状遺構や樹木痕と考えられる遺構、水溜め遺構や井戸跡の覆土内などから採取された土壌16点（試料番号1～16）である。試料採取を行った遺構は、16世紀を主体としており、試料番号15・16はこれら遺構の基底層あるいは地山層に相当する土壌であり、発掘調査時の所見では9世紀以前の年代観が想定されている。これら試料全点を対象に花粉分析を実施する。各試料の詳細を表1に示す。

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

表1 分析試料表

番号	遺構名など	試料名など	試料の概要	土質など	時期
1	館1 SX001	館1 SX001	池状遺構の下層にみられる 肥後層土		16世紀中～後半
2	館12SX070a	館12 DO S-70aサンプル① 020913	樹木痕と考えられる遺構埋土	暗茶灰色土（黄褐色シルトブロックを塊状に含む）	16世紀中～後半
3	館12SX070b	館12 DO S-70サンプル② 021226	樹木痕と考えられる遺構埋土	茶灰色土（黄褐色シルトブロックを多量に含む）	16世紀中～後半
4	館12SX070g	館12 DO S-70サンプル③ 021226	樹木痕と考えられる遺構埋土	茶褐色土（細かい白色砂子を多く含む）	16世紀中～後半
5	館12SX070	館12 DO S-70サンプル④ 021226	樹木痕と考えられる遺構埋土	明灰色粘質土（黄褐色シルトブロックを多く含む）	16世紀中～後半
6	館12SX070h	館12 DO S-70サンプル⑤ 021226	樹木痕と考えられる遺構埋土	暗灰色土（やや粘性あり、砂粒を含む）	16世紀中～後半
7	館12SX070d	館12 DO S-70サンプル⑥ 021226	樹木痕と考えられる遺構埋土	淡灰白色シルト質粘土（きめ細かい砂粒・セラミカ層）	16世紀中～後半
8	館12SX070	館12 DO S-70サンプル⑦ 021226	樹木痕と考えられる遺構埋土	灰褐色粘質土（黄褐色ブロック、黄褐色シルトブロックを含む）	16世紀中～後半
9	館12SX123	館12 G3 S-123 サンプル② 020120	池状遺構に関係すると考えられる 遺構埋土	灰褐色シルト質粘土	16世紀中～後半
10	館12SX202	館12 I3 南区北蔵30サンプル② 021227	池状遺構に関係すると考えられる 遺構埋土	暗灰色粘質土（粗い砂粒、白色砂子を多く含む）	16世紀中～後半
11	館12SB090	館12 DO S-90サンプル 021227	池状遺構につながる溝状遺構埋土	暗褐色土（黄褐色ブロックを多く含む）	17世紀中～後半
12	館12SX075	館12 B1 S-75サンプル 021227	階段状の水溜め遺構埋土	淡灰色粘質土（黄褐色ブロックを塊状に含む、周囲に砂分混入）	15～16世紀
13	館12SE080	館12 A0 S-80サンプル① 030120	井戸跡廃棄時の埋め戻し土	暗茶灰色土（ブロック土を多量に含む）	16世紀末
14	館12SE026	館12 B2 S-26青灰粘サンプル① 020903	井戸跡でグライ化した土壌	青灰色粘質土	16世紀後半～末
15	館12暗灰色 粘土質土	館12 F0 S-200サンプル① 021227	池状遺構基底部の土壌	暗灰色粘質土一地山	9世紀以前
16	館12暗灰色 粘土質土	館12 H4 カタランBサンプル① 030121	調査区基盤層	暗灰色粘質土一地山	9世紀以前

表2 花粉分析結果

種 類	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
木本花粉																	
ツグ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属雌雄管束亜属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
マツ属雌雄管束亜属	33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-
マツ属 (不明)	53	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	3	3	1
スギ属	5	2	-	-	3	1	-	-	-	2	1	1	-	-	1	1	1
クマシデ属-アサダ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ハンノキ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-
コナラ属アカガシ亜属	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミカン科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
草本花粉																	
ガマ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	539	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	6	-	-
カヤツリグサ科	9	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
タウ科	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ギンギン属	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ササエタデ節-ウナギツカミ節	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	306	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
ナデシコ科	58	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キンボウグ属	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キンボウグ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	85	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
バラ科	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属	30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-
キク亜科	26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
キク亜科 (ベニバナ型)	25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タンポポ科	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉	14	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	-
シダ類胞子																	
ヒカグノカズラ属	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
イノモトソウ属	11	-	-	-	-	3	1	-	6	1	1	-	-	-	-	-	-
他のシダ類胞子	70	-	4	1	4	1	3	6	4	3	3	5	5	6	-	1	-
合 計																	
木本花粉	107	2	1	0	4	1	2	1	2	2	3	1	0	8	7	2	-
草本花粉	1127	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	3	1	12	1	1	-
不明花粉	14	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	0	-
シダ類胞子	81	0	4	1	4	4	5	7	10	4	5	5	5	6	0	1	-
総計 (不明を除く)	1315	2	5	2	8	5	9	8	12	6	8	9	6	26	8	4	-
その他																	
回虫卵	53	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
糞虫卵	44	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
横川吸虫卵	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

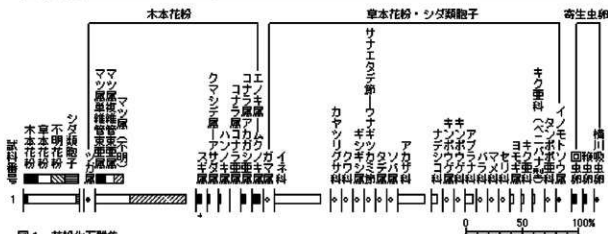


図1 花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉、シダ類胞子、寄生虫卵は総数より

不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総花粉・孢子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

3. 結果

結果を表2、図1に示す。花粉化石やシダ類孢子は、試料番号1を除くとほとんど検出されず、保存状態も悪い。

試料番号1は、草本花粉の割合が高いのが特徴である。草本花粉では、イネ科の割合が高く、アカザ科、アブラナ科も比較的高い。この他に、ソバ属、ヨモギ属、キク亜科なども見られるが、キク亜科の中には金原（1993）に記載されているベニバナに類似するキク亜科花粉も含まれる。一方、木本花粉では、マツ属の割合が高く、スギ属、アカガシ属、エノキ属・ムクノキ属などが検出される。なお、この試料からは、回虫卵、鞭虫卵、横川吸虫卵などの寄生虫卵が検出される。

4. 考察

分析の結果、池状遺構の下層に認められた泥炭（試料番号1）を除くと、花粉化石はほとんど検出されなかった。そのため、今回は9世紀以前の基盤層・地山との植生との比較は行えないことから、池状遺構から検出された花粉化石の産状を中心に考察を行う。

試料番号1を除く試料から花粉化石がほとんど検出されなかった要因として、花粉化石が好氣的条件下での酸化に弱く、風化を受けたため（中村，1967）と考えられる。本遺跡は沖積地に立地しており、本来は氾濫等の影響も受ける地域であるが、本遺跡を含む府内町の発達に伴って治水等の整備も行われたと考えられる。したがって、当該期は地表面が乾いた状態、すなわち好氣的条件となり堆積した花粉化石は風化・消失したことが推測される。一方、池状遺構の底部に認められた堆積物は、水中で堆積したことにより酸化を受けにくく、風化・消失は比較的進まなかったと考えられる。

試料番号1に認められた花粉化石は草本花粉の割合が非常に高い。検出された種類を見ると、開けた場所に草地を作るイネ科、アカザ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科などが認められる。これらは当時の館跡や府内町などにいわゆる「雑草」として生育していたと考えられる。一方、草本花粉と比較して割合の低い木本花粉では、マツ属花粉が非常に多く産出する。マツ属花粉は、九州平野部では弥生時代中期～古墳時代以降増加すると考えられており、これは人為的干渉に起因する植生破壊を意味するものと考えられている（畑中ほか，1998）。また、マツ属は風媒花であるため、花粉生産量が多く飛散能力も優れていることから、花粉化石の産出率よりも実際周辺でみられる植生比率は小さい（Faegri&Iversen,1989）とされる。このことから、今回の発掘調査地点付近は基本的には開けた空間で「雑草」などの草地が形成されており、マツ属は後背山地の二次林や植林、海岸植生としてのマツ林に由来すると推測される。なお、針葉樹ではスギ属も検出されている。塚田（1980）によれば、九州のスギは、古代人によって本州からもたらされたとされており、マツ属と同様に植林や植栽などに由来する可能性がある。

この他に検出された種類のうち、ソバやベニバナは栽培のために渡来した種類である。ソバは食用として、ベニバナは、薬用、染料、搾油原料として有用な植物であることから、本遺跡周辺での栽培・利用が考えられる。また、古くから野菜として利用されていた種類（青葉，2000）とされるアカザ科やアブラナ科、ヨモギ属の花粉化石が多産していることから、これらも同様に採取・利用されていたことが窺われる。なお、アブラナ科は搾油植物であるアブラナを含むが、花粉化石ではアブラナと野生のアブラナ科植物との区別はできない。大阪平野南部では、栽培種であるソバ属、ワタ属、イネ属に伴ってアブラナ科の花粉化石が高率で検出されることから、近世以降にアブラナ栽培が行われていたことが指摘されている（藤田ほか，1991）。

一方、文献史料などからは室町時代の庭園植栽の特色として、針葉樹が多用されるようになったことが推定され

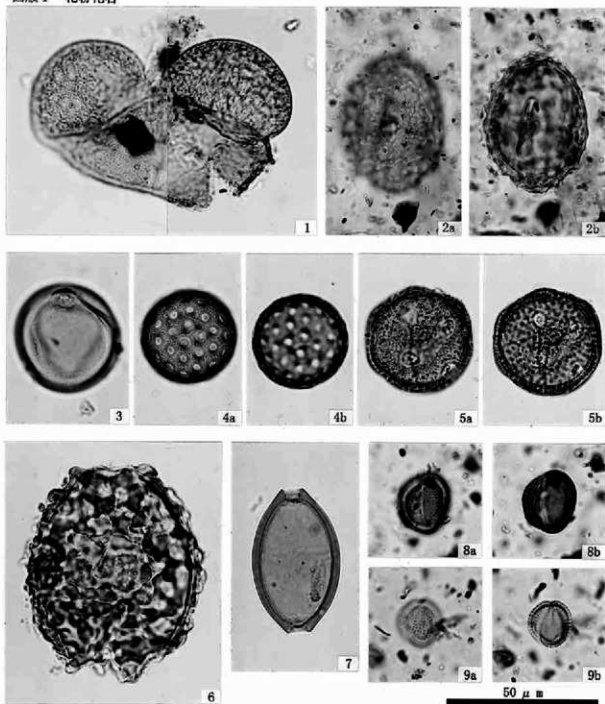
ている（飛田，2002）。今回の分析結果では、上記したようにマツ属の花粉化石が多く検出されることから、マツ属が庭園内や府内町に植栽されていた可能性もある。現段階では、マツ属が庭園や府内町の植栽に由来するか、あるいは周辺植生に由来するかは判断できない。ただし、今後、庭園内や府内町内の池状遺構内に認められた泥炭のような比較的植物遺体等有機物が残存しやすい土壌を対象に、現地性の高い種実同定を実施し、マツの葉や種実、球果などの有無を検証することで、さらに詳細な検討が可能となる。また、今回検出された池状遺構などでは空間的な位置を配慮した試料採取を行い、検出率の偏在性を確認することで植栽場所を推定できる可能性もある。スギ属についても同様な手法を用いることで、周辺植生に由来するものであるか、植栽に由来するものであるか評価できると考えられる。今回検出されたアブラナ科が栽培植物に由来するかについては、現段階では不明である。今後、マツ属やスギ属と同様に本遺跡内における種実遺体の状況や当該期における周辺遺跡の分析調査例などを蓄積し評価する必要がある。

また、試料番号1からは寄生虫卵も検出されている。既存の分析例（金原・金原，1994）によれば、トイレ遺構では1ccあたり数千個を超える寄生虫卵が検出されるが、トイレ遺構以外では百個以下であり、トイレ遺構か汚染等が要因であるか区別がつくとされている。今回の場合、寄生虫卵の定量化を行っておらず正確な数量は不明であるが、検出状況から判断すると1ccあたり100～数百個ほどと推測される。このような少量ではあるがトイレ遺構以外からの寄生虫卵の検出例はいくつかあり（辻本・田中，1997；バリノ・サーヴェイ株式会社，1996など）、遺構内が尿尿などにより汚染されていた可能性もある。ただし、回虫や鞭虫などの寄生虫卵はヒト以外にも存在するため、必ずしも人糞尿による汚染とは断定できない。この点については珪藻分析による水質汚濁の状況の検証や、土壌理化学分析による無機塩類の測定なども合わせて行い検証する必要がある。

〈引用文献〉

- 青葉 高（1991）野菜の日本史，317p，八坂書房。
- 藤田憲司・古谷正和・渡邊正巳（1991）大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉高出現率期について，日本文化財科学会第8回大会研究発表要旨集，p.33-34。
- 畑中健一・野井英明・岩内明子（1998）九州地方の植生史，「図説 日本列島植生史」，安田喜憲・三好教夫編，p.151-161，朝倉書店。
- 金原正明・金原正子（1994）堆積物中の情報の可視化，可視化情報，14，p.9-14。
- 中村 純（1967）「花粉分析」，232p，古今書院。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1996）自然科学分析，「葛飾区遺跡調査会調査報告第35集 上千葉遺跡 葛飾区西亀有1丁目12番地点発掘調査報告書」p.242-275，葛飾区遺跡調査会。
- 飛田範夫（2002）日本庭園の植栽史，435p，京都大学学術出版会。
- 辻本裕也・田中義文（1997）田井中遺跡95-2区・志紀遺跡95-2区における古環境復元，「大阪文化財調査研究センター調査報告書第23集 田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次） 陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書」，p.242-277，大阪文化財調査研究センター。
- 塚田松雄（1980）杉の歴史：過去一万五千年間，科学，50，p.538-546。
- Knut Faegri&Johs.Iversen（1989）Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press.

図版 1 花粉化石



- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1. マツ属(試料番号1) | 2. キク亞科(ベニバナ型)(試料番号1) |
| 3. イネ科(試料番号1) | 4. アカザ科(試料番号1) |
| 5. ナデシコ科(試料番号1) | 6. 回虫卵(試料番号1) |
| 7. 鞭虫卵(試料番号1) | 8. ヨモギ属(試料番号1) |
| 9. アブラナ科(試料番号1) | |

(2) 大友氏館跡第25次調査に係る自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大友氏館跡は守護職にあった大友氏の館跡で、巨大な池を伴う庭園跡などが見つかっている。今回の発掘調査は庭園北東側の調査を実施したが、遮蔽施設は、明確には確認はできなかった。また、以前検出された掘立柱建物跡の展開が確認でき、掘立柱建物跡の北側から東側にかけては廃棄土坑や井戸跡が広がる空間であったことがわかった。島津氏の侵攻があった天正14年以後は、当調査区で、町屋の復興に伴う遺構が確認された。主な遺構は井戸跡や廃棄土坑で、玉砂利や瓦、京都系土師器、備前焼、唐津系陶器、ガラス片などが出土しており、町屋の裏手の状況を示している。今回の分析は、14世紀末～15世紀前半の廃棄土坑および、16世紀後半・末～17世紀初めの土坑について、寄生虫卵分析と微細物分析を行い、遺構の性格や当時の植物質食糧に関する検討を行う。また、検出されたガラスの成分分析も合わせて実施する。

1. 試料

土壌試料試料は、16世紀後半・末～17世紀初めの土坑とされるS5 2層とS110 2層の2点、14世紀末～15世紀前半の廃棄土坑とされるS30 4層の1点である。前者の2点についてトイレ遺構の可能性について検証するために寄生虫卵分析を、後者の1点について食糧資源を検討するために微細遺物分析を実施する。

ガラスの材質に関しては、S1下層3層から出土したガラス片1点について蛍光X線分析を実施する。

2. 分析方法

(1) 寄生虫卵分析

分析は、金原・金原(1992)等を参考した。堆積物中に多量の寄生虫卵が見られる場合は、ほぼ無処理の状態でも観察可能である。しか、今回の場合は寄生虫卵が少ないため、寄生虫卵の物理・化学的性質を考慮し、以下の方法を用いて寄生虫の濃集を行う。

試料5ccを正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定を行う。分析残渣中の花粉化石量や寄生虫卵量を測定するため分析量や分析残渣量、プレパラート作成量などを精密に測定し、1ccあたりの含量が求められるようにする。

(2) 微細物分析

試料(18cc)を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実遺体や炭化材などの遺物を抽出する。

抽出した遺物は、種実遺体は個数を数え、炭化材と分析残渣は乾燥後の重量を求めて一覧表で示す。炭化材は最大径を併記する。分析後は、種実遺体を同定対象とする。その他の抽出物と分析残渣は、種類毎に容器に入れて保管する。種実同定は、試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑類を参考に実施し、個数を数えて一覧表で示す。

(3) ガラスの成分分析

蛍光X線分析はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であるが、表面分析法であるため、出土遺物表面が風化の影響を受けている場合、遺物本来の化学組成を導くことは難しく、本来の化学組成を知るためには風化層を除去しなければならない。ただし、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は概略の化学組成を知るためには極めて有効な手法となる。本報告では、非破壊を前提とした材質調査を目的とするため、試料は風化層の除去を行わず、調査に用いる。材質調査に用いた装置はセイコーインスツルメンツ(株)製エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SEA2120L)である。

得られた特性X線スペクトルは元素定性を実施した後、FP法（ファンダメンタルパラメーター法）を用いたスタンダードレス分析により定量演算を行い、相対含有率（wt%）を求めた。なお、本装置による定量可能元素は11Naから92Uの範囲にある元素であり、これら範囲外の元素についてはFP法による定量演算に利用することが出来ないこと、また半定量的に相対含有率を算出しているが、実際にはどの程度の深さまでX線が進入しているのか不確定な部分もあり（例えば表面の風化層のみから発生した特性X線を検出しているのか、あるいは風化層より内部の新鮮部分の材質も含めた特性X線を検出しているのか）、結果の評価には注意する必要がある。本調査における測定条件の詳細は、結果とともに図1に示した。

3. 結果

(1) 寄生虫卵分析

結果を表1に示す。いずれの試料からも寄生虫卵は検出されない。花粉・胞子化石はS5 2層イノモトソウ属が1個、S110の2層からはキク亜科が1個体検出された。いずれも堆積物1ccあたりの花粉・胞子数は10個以下である。残渣のほとんどは褐色に変色した植物遺体残渣である。S5 2層ではほとんど見られないが、S110の2層は約50μlほど検出される。

表1. 寄生虫卵・花粉分析結果

試料名	花粉・胞子数 (個/cc)	検出種類 (個数)	残渣量	所見
館25 S5 2層	<10	イノモトソウ属(1)	微量	微粒炭、花粉胞子ほとんどなし、 残渣は褐色の植物遺体多数
館25 S110 2層	<10	キク亜科(1)	約50μl	微粒炭、花粉胞子ほとんどなし、 残渣は褐色の植物遺体多数

(2) 微細物分析

結果を表2に示す。試料18cc(26.61g)より、種実遺体1個と、炭化材0.04g(最大径6.4mm)が出土した。種実遺体は、栽培種のおオムギ(*Hordeum vulgare* L.; イネ科おオムギ属)の胚乳に同定された。胚乳は、炭化した破片で黒色を呈す。完形ならばやや偏平な紡錘状長楕円体で両端は尖る。腹面は正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。破片は縦溝に沿って割れた半分未満で、長さ3mm、厚さ1mm程度。胚乳表面はやや平滑で、微細な縦筋がある。

(3) ガラスの成分分析

分析結果を図1に示す。検出された元素は、Na(ナトリウム)、Mg(マグネシウム)、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、S(硫黄)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Cu(銅)、Zn(亜鉛)、Sr(ストロンチウム)の13元素である。酸化物換算した場合の質量百分率(wt%)によれば、SiO₂が約67%、Al₂O₃が約6%であり、Na₂Oは約9%、MgOは約4%、K₂Oは約3%、CaOは約6%を占める。Fe₂O₃は2.5%程度含まれ、CuOは0.01%と僅かである。

表2. 微細遺物分析結果

種類名	館25 次 S30 4層	備考
オオムギ 炭化胚乳	1個	破片
炭化材	0.04g 6.4mm	乾燥重量 最大径
分析残渣	0.73g	乾燥重量
分析量	18cc 26.61g	

【測定条件】

測定装置	SEA2120L
管球ターゲット元素	Rh
コリメータ	φ 10.0mm
フィルタ	なし
雰囲気	真空
励起電圧 (kV)	15
管電流 (μA)	50
測定時間 (秒)	自動設定
定性元素	Na~Ca Sc~U

【定量結果】

Na ₂ O	8.78(wt%)	27.788(cps)
MgO	4.03(wt%)	24.838(cps)
Al ₂ O ₃	6.39(wt%)	73.059(cps)
SiO ₂	67.63(wt%)	1360.351(cps)
SO ₃	0.48(wt%)	12.394(cps)
K ₂ O	3.56(wt%)	139.769(cps)
CaO	6.27(wt%)	38.575(cps)
TiO ₂	0.23(wt%)	5.006(cps)
MnO	0.07(wt%)	4.277(cps)
Fe ₂ O ₃	2.47(wt%)	184.267(cps)
CuO	0.01(wt%)	2.120(cps)
ZnO	0.01(wt%)	1.394(cps)
SrO	0.08(wt%)	46.881(cps)

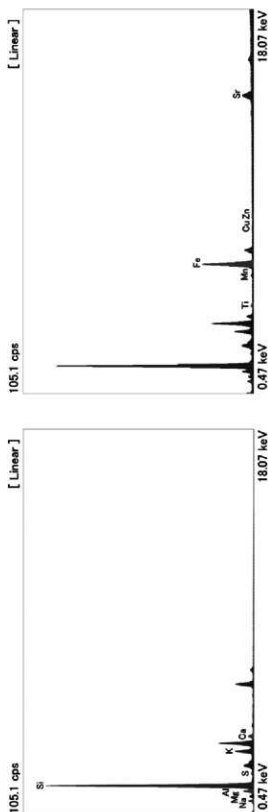


図1. X線スペクトル(左図:励起電圧15kV, 右図:50kV)

なお、本調査では網目形成酸化物である SiO_2 や、修飾酸化物となり得る Na_2O 、 MgO 、 K_2O 、 CaO 、また中間酸化物となり得る Al_2O_3 等について一応の定量は行っているものの、基本的に表面風化層の除去を行っていないため本来の材質を反映した結果とは成り得ていないことに留意しておく必要がある。

4. 考察

(1) 遺構の性格

S5、S110 双方のから寄生虫卵は検出されなかった。寄生虫卵と挙動が類似する花粉化石もほとんど検出されなかった。花粉化石は好気的環境下による分解に弱いことから(中村,1967 など)、分解した可能性がある。このような傾向は、前報の第21次調査でも同様であり、遺跡の埋積土は花粉化石が残りにくい環境であったと考えられる。このことから、埋積時に寄生虫卵が存在していたとしても、風化により消失したと考えられる。

14世紀末～15世紀前半の廃棄土坑とされるS30 4層の微細物洗い出しの結果、炭化した栽培種のオオムギの胚乳が1個と炭化材が確認された。炭化材は当時の遺跡周辺の森林環境に由来すると考えられる。穀類のオオムギは、当時の大友氏館内で利用された植物質食糧と示唆され、火を受け炭化残存したと考えられる。当社が過去に分析調査を実施した大友氏館跡第21次調査でも、16世紀後半の火災処理土坑SX105より出土した塊状炭化物がイネの穎付着胚乳に同定されている。以上のことから、今回確認されたオオムギをはじめ、イネなどの穀類は、当時の大友氏館内で利用された植物質食糧と示唆される。

(2) ガラスの成分

ガラスは珪酸原料に融剤および着色剤を調合し、溶融・冷却という過程を経て製品となる。融剤の種類によって鉛珪酸塩ガラスとアルカリ珪酸塩ガラスに大別されるが、鉛珪酸塩ガラスはさらに鉛ガラス(PbO-SiO_2 系)と鉛バリウムガラス(PbO-BaO-SiO_2 系)に、アルカリ珪酸塩ガラスはカリガラス($\text{K}_2\text{O-SiO}_2$ 系)、ソーダ石灰ガラス($\text{Na}_2\text{O-CaO-SiO}_2$ 系)および高アルミナソーダ石灰ガラス($\text{Na}_2\text{O-Al}_2\text{O}_3\text{-CaO-SiO}_2$ 系)に細分される(肥塚,2010)。

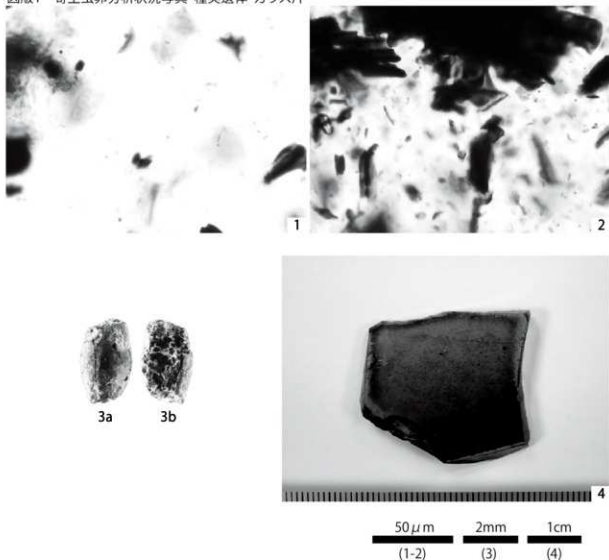
分析試料としたガラスは鉛を含まず、アルカリ珪酸塩ガラスに大別される材質で、修飾酸化物として Na_2O や CaO を6%以上含む点から、ソーダ石灰ガラスと考えられる。なお、ソーダ石灰ガラスはアルカリ原料にナトリウムを用いたナトリウムガラスと植物灰を用いた植物灰ガラスに区分され、ナトリウムガラスは MgO と K_2O の含有量がともに1.5%以下という基準が設けられている(肥塚,前掲)。本ガラスには MgO と K_2O がそれぞれ3%以上含まれることより、植物灰をアルカリ原料とするソーダ石灰ガラスと認識できる。

一方、本ガラスの色調は青緑色を呈するが、銅は CuO として0.01%検出されているにすぎないことより、銅に発色が支配されているとは考えがたい。本ガラスには鉄が Fe_2O_3 として2.5%程度含まれる点から、鉄の還元発色による可能性が高いと考える。

〈引用文献〉

- 肥塚 隆保,2010,材質とその歴史的変遷古代ガラスの材質,古代ガラスと考古科学,月刊文化財,566号,13-25.
石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
金原 正明・金原 正子,1992,花粉分析および寄生虫,藤原京跡の便所遺構—石京七条一坊西北坪一,奈良国立文化財研究所,12-15.
中村 純,1967,花粉分析,古今書院,232p.
中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.

図版1 寄生虫卵分析状況写真・種実遺体・ガラス片



1.状況写真(S5;2層)

2.状況写真(S110;2層)

3.オオムギ胚乳(S30;4層)

4.ガラス片(S1;下層3層)

第V章 総括

第1節 中世の時期変遷について（第237図）

ここでは、第III章の各項目で述べた遺構の、時期変遷について整理する。それぞれの遺構の時期については、各項目の小結に具体的な年代を述べており、これに基づき、第IV章第3節の館Ⅰ～Ⅵ期の時期別に沿って、今回詳細報告した遺構について提示する。

館Ⅰ期段階は、建物跡群が東側で検出されている。これら建物跡群の付近には、今回詳細報告はしていないが、かわらけの一括廃棄土坑が数基確認されており、建物跡群との関連が指摘されるところである。館Ⅳ期やⅤ期の中心建物跡付近にもかわらけ一括廃棄土坑が多く検出されていることを参照すると、館Ⅰ期の12SB145や12SB050等の建物跡群も当該期の中心建物跡と関連する建物である可能性が指摘される。

館Ⅱ期段階は、第237図のオレンジ色で示している遺構が相当する。特に溝跡が多く確認されている。これら溝跡のほとんどは区画溝になるものと考えられ、特に28SD005や32SD003は、この段階の館の外郭溝に関連すると考えられる。

館Ⅲ期段階の遺構は、第237図の緑色で示している。第二章ではⅢⅠ期とⅢⅡ期に分けて報告しているが、ここではⅢ期として一括して述べる。この時期にSG001の掘り込みが行われ、珪藻分析等からSG001の下部には滞水があったことが窺え、景石やその抜き取り痕などが確認される。SG001は、現状大友館内で最も古い時期の池庭跡遺構である。SG001からは良好な状態での遺物は出土していない。ただしSG002の構築土から第154図のようなクロク目痕を強く残す土師質土器が出土することから、これら土器がSG001の下限となる。したがって、SG001の最終機能時期は概ね15世紀後葉頃と推定される。またSG001に伴う明確な建物跡等は検出されていない。その他の遺構として、建物跡群などが庭園域の南東でまとまって検出されているが、これらの建物群の性格などは今後の課題で、同時期の館内の遺構配置を今後の調査によって、さらに明らかにしていく必要がある。

館Ⅳ期段階の遺構分布は、第237図のとおりである。館Ⅳ期は第二章で指摘したように、館が二町四方に拡張された可能性もある。この段階には庭園はSG001が埋め戻され、SG002がほぼSG001と重複する状況で掘られている。SG002の機能した期間は、前述したように構築土中に、在地系のクロク目痕を強く残すかわらけが多く出土しており、これらの土器群がSG002の上限を示しており、館Ⅲ期の新段階まで遡る可能性も考えられる。またSG002の埋め土から薄手の京都土師器皿がまとまって出土していることから、SG002の下限は16世紀中葉頃と推定される。その他の遺構では庭園域の南西部で、溝跡2条と廃棄土坑が確認されている。溝跡のうち1条は、大規模であり、当期の館の外郭溝の可能性はある。

館Ⅴ期については、館は二町四方となり、中心建物跡や館東側の築地塀が築かれたことが明らかにされている。庭園についてはSG002が埋められた後、大規模なSG003が築かれる。SG003の機能した期間は、SG002埋め戻し時には薄手の京都系土師器とさらにSG003の構築土からも良好な京都系土師器皿が出土しており、これらが構築年代を示す資料となる。また廃絶時はSX004から厚手の京都系土師器の他に雄器類や動物骨などが出土し、町屋の遺物組成を示していると考えられることから、SG003の廃絶は1586年の島津氏侵襲後と考えられ、SG003は16世紀後葉～1586年に機能したと考えられる。SG003には導排水路と考えられる溝跡が4条接続している。またこれら溝跡の中で、北溝と東溝の付近には井戸跡や小池なども検出されており、水源として溝との関連が注目されるところである。そのほか、掘り込み整地跡がSG003の北側で3基確認されており、その配置が園池を意識したものになっていることから、庭園跡と関連する遺構であると考えられる。また、SG003の南側にはこの時期の遺構は皆無であり、築山等が想定される。庭園関連遺構配置図については第240図も参照いただきたい。

最後に、館Ⅵ期である。この段階は出土土器や遺構の状況から島津氏侵襲後の1587年以降の状況を示してい

第一期・・・青
 第二期・・・オリーブ
 第三期・・・緑
 第四期・・・青
 第五期・・・茶
 第六期・・・茶
 第七期・・・茶
 第八期・・・茶
 第九期・・・茶
 第十期・・・茶
 第十一期・・・茶
 第十二期・・・茶
 第十三期・・・茶
 第十四期・・・茶
 第十五期・・・茶
 第十六期・・・茶
 第十七期・・・茶
 第十八期・・・茶
 第十九期・・・茶
 第二十期・・・茶
 第二十一期・・・茶
 第二十二期・・・茶
 第二十三期・・・茶
 第二十四期・・・茶
 第二十五期・・・茶
 第二十六期・・・茶
 第二十七期・・・茶
 第二十八期・・・茶
 第二十九期・・・茶
 第三十期・・・茶
 第三十一期・・・茶
 第三十二期・・・茶
 第三十三期・・・茶
 第三十四期・・・茶
 第三十五期・・・茶
 第三十六期・・・茶
 第三十七期・・・茶
 第三十八期・・・茶
 第三十九期・・・茶
 第四十期・・・茶
 第四十一期・・・茶
 第四十二期・・・茶
 第四十三期・・・茶
 第四十四期・・・茶
 第四十五期・・・茶
 第四十六期・・・茶
 第四十七期・・・茶
 第四十八期・・・茶
 第四十九期・・・茶
 第五十期・・・茶
 第五十一期・・・茶
 第五十二期・・・茶
 第五十三期・・・茶
 第五十四期・・・茶
 第五十五期・・・茶
 第五十六期・・・茶
 第五十七期・・・茶
 第五十八期・・・茶
 第五十九期・・・茶
 第六十期・・・茶
 第六十一期・・・茶
 第六十二期・・・茶
 第六十三期・・・茶
 第六十四期・・・茶
 第六十五期・・・茶
 第六十六期・・・茶
 第六十七期・・・茶
 第六十八期・・・茶
 第六十九期・・・茶
 第七十期・・・茶
 第七十一期・・・茶
 第七十二期・・・茶
 第七十三期・・・茶
 第七十四期・・・茶
 第七十五期・・・茶
 第七十六期・・・茶
 第七十七期・・・茶
 第七十八期・・・茶
 第七十九期・・・茶
 第八十期・・・茶
 第八十一期・・・茶
 第八十二期・・・茶
 第八十三期・・・茶
 第八十四期・・・茶
 第八十五期・・・茶
 第八十六期・・・茶
 第八十七期・・・茶
 第八十八期・・・茶
 第八十九期・・・茶
 第九十期・・・茶
 第九十一期・・・茶
 第九十二期・・・茶
 第九十三期・・・茶
 第九十四期・・・茶
 第九十五期・・・茶
 第九十六期・・・茶
 第九十七期・・・茶
 第九十八期・・・茶
 第九十九期・・・茶
 第一百期・・・茶



第237図 庭園地時系列遺構配置図



第238図 園池跡時期別断面模式図(東西方向)

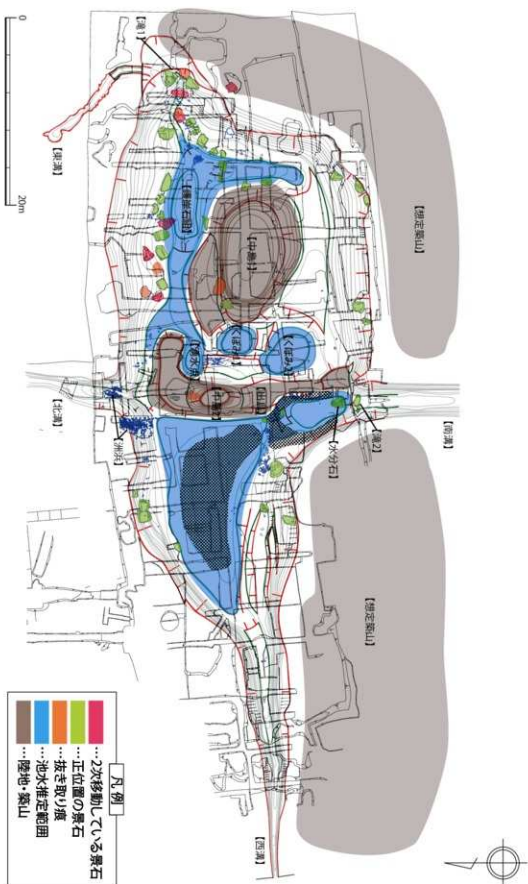
る。庭園域の東側では、多くの井戸跡や廃棄土坑等が確認されており、さらに町51次調査等で掘立柱建物群が検出されていることから、島津氏侵攻後、大友館の旧敷地内には町屋が復興に伴い新たに造られている状況を示している。また、出土土器には雑器類が多く、それまでの館の出土遺物様相を示していたかわらけ廃棄土坑や高級陶磁器等の検出は認められない。

さらにこの時期の庭園域については、園池跡は機能を失い、部分的に埋められるが、すべては埋没せず、SX004とした溜め池状遺構として機能する(第243図参照)。このSX004からは、動物骨や漆器類、下駄、雑器類などが多く出土し、館の遺物組成を示すものではなく、町屋の状況を色濃く示すもので構成されている。SX004は最終埋土に第221図10のような唐津焼片など17世紀初頭から前葉の土器、このSX004検出面の直上層は17世紀中頃までに開通したといわれる初瀬井路に伴い、水田化したことが提示されることから、遅くとも17世紀前葉～中葉頃までには、SX004はその役割を終え、すべてが埋め戻されたと推定される。また、景石25等には幅10cmほどの矢穴跡が確認できる。また第213図割石1はSX004内の西側底部で出土し、景石25は最終的には水田開発に伴い廃棄されたと考えられる。矢穴の時期は、その位置や大きさから、少なくとも17世紀前半頃の水田化する直前までの間の所産と考えられる。

第2節 SG003の構造について(第238～240図参照)

園池跡と考えられる遺構は館Ⅲ期のSG001、館Ⅳ～Ⅴ期のSG002、館Ⅴ期のSG003である。SG001とSG002はSG003の西側で、ほぼ同じ位置に重複しており、切り合いの関係をもつ。またSG001・002とSG003も切り合いの関係があり、SG003が新出する。このような状況から、SG001とSG002の遺構の掘り下げを行うと、SG003の遺構ラインの保護と維持ができなくなるため、SG001とSG002はトレンチ調査のみとし、詳細な構造把握までは実施していない。また、SG003は部分的に埋土を残し、構造把握を中心とした調査を進めている。したがって、ここではSG003の構造について述べていく。まず、SG003とした遺構は巨大な掘り込みを伴い、東西67m、南北30m、深度約2mである。検出標高は約4.1m、SG003最深部の標高は2.2mである。第Ⅲ章で述べてきたとおり、SG003は景石の配置や保水のため灰色系粘土を全面に貼っている状況から、庭園に關わる園池の遺構として認められる。

SG003内の各意匠の詳細は第Ⅲ章第5節(7)の調査結果から考証し、復元すると第238図のような配置となり、第239図と共に第7表でも庭園跡の復元案を示しているの、参照されたい。第238図に示しているように、SG003園池内には様々な意匠が施されている。園池全体の構造は、中心の出島から西側と東側では大きく異なる。東側は大きな中島1や景石を多数配置して、ダイナミックに見せているのに対して、園池西側は東側とは



第239図 SG0031内溝池推定図(1/400)

違いシンプルであり、局所的に大きい景石を配置するが、そのほとんどは斜面を拳大の円礫などで化粧している状況である。以下には園池西側、中央付近、東側に分けて整理する。

園池西側は、南側の南溝との接続部に滝2を設け、その滝2の北側には水分石を配している。滝2は、数個の石で組まれており、東側の景石52Aは1mほどある。第210図の景石52Aと同Bの間は三角形の隙間があり、ここから水が流れる構造が想定される。またこの滝2の三角形の隙間の真下には拳大の円礫が少量出土しており、滝壺状になるところに貼られていたものと考えられる。その滝2北側には水分石が1つあり、その水分石の北側の南北約6m、東西約4mの範囲内には、部分的に拳大～人頭大の円礫等が貼っており、さらにこの周辺には館Ⅵ期の埋土に多量の円礫や緑泥片岩が混入していることから、これらの石もSG003機能時にその周辺斜面などに高密度に貼られていた可能性が高い。また第209図A石の周辺も拳大の石に混じって、50cmほどの円礫が貼っており、またこのA石上で標高3.02mとA石周辺はその北側と南側に比べて約5cm高くなっている。このことから水分石の北側はやや池状になっており、溜まった水が園池西側の広い箇所へA石周辺をオーバーフローする形で、園池西側へ水が流れる構造となっている。この周辺で五輪塔の転用石等が確認されているが、これらは館Ⅵ期埋土に含まれるため、館Ⅵ期段階には存在していなかったものである。園池西側の池底からは多くの円礫が出土することから、池底には石が密集状態で貼られていた可能性が高い。また、園池西側の南斜面であるが、景石51の西側は緩やかなテラスが数段あり、この部分には凸凹がみられる。所々に石が遺存していることから、これらは拳大からやや大きめの礫などが貼り付けられていた痕跡と推定される。園池西側の南斜面の低いところには州浜状の石敷がある。北斜面には、第214図のような洲浜状の集石箇所が認められ、拳大の円礫が集中している。ここから景石3周辺まではまばらであるが、池底の館Ⅵ期埋土に多くの礫が混入していることから、北斜面にも本来は高い密度で貼り付けられていたと考えられる。また、北溝と園池の接続部箇所の33SD088の北溝底部にも拳大の円礫が高密度で貼り付けられている。この北溝西斜面から洲浜状に繋がる範囲も疎らであるが礫が出土しており、北溝底から洲浜部分まで円礫などが密度濃く貼られていたことが推定される。中島2を含む出島状の北側の西斜面は、円礫などは少なく、貼られていたとしても、池底から汀線周辺までであろう。一方で大きな景石は景石3や景石5の配置だけであり、この園池西側と西溝の接する箇所には他の溝と違い、何も意匠を施していない。

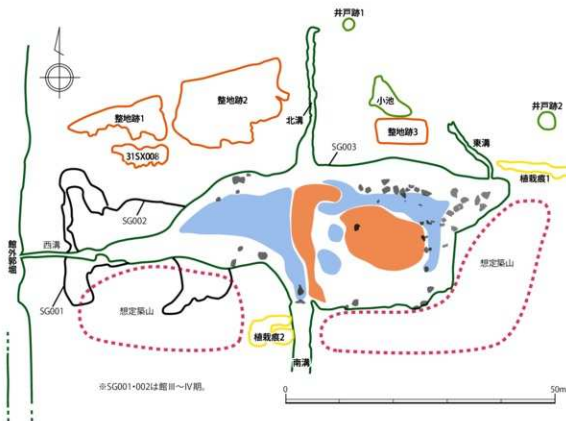
園池中央部の出島状の陸地と中島2は、南斜面から北側に向けて延びている。滝2の東側に景石42などがあり、園池西側と東側に緩やかに傾斜している。この出島状の東斜面にはほとんど礫等の出土はなかったが、西斜面の特に滝2北側では多くの円礫や緑泥片岩などが館Ⅵ期の埋土に多量に混入していることから、こうした礫で出島状の陸地の南側は貼られていた可能性が高い。また出島状の陸地上も多少の削平をうけていることが、灰色粘土の残存状況などから認められるが、植栽痕や柱穴などは確認されていない。

園池東側は、中島1や護岸石組等を配置し、護岸石組の東には東溝との接続部に滝1を設けている。また中島1の東や園池東側の東斜面にも景石を設け、さらに園池東側の南斜面にも大きな景石を配置している。滝1は景石17と東溝が接続すると考えられ、景石17の上面は凹んでおり、この景石17と景石18の間が滝壺状になると考えられる。滝1から護岸石組の東側まで緩やかに傾斜しており、景石20の本来の位置の北側を蛇行しながら、護岸石組に至る構造と考えられる。この間は拳大の円礫などが若干残存しており、当時はこのような円礫が水が流れる部分を中心に葺かれていたと考えられる。また護岸石組内は底部にほとんど礫は貼られていない。護岸石組内の館Ⅵ期段階の埋土中に、拳大の円礫が多量に出土していることから、護岸石組の北斜面や南側の中島1部分の北斜面などにこのような円礫が貼られていたと考えられる。さらに景石26などがある東斜面にも円礫が少量あり、東斜面と中島1の東側の凹んでいる部分にも円礫が出土していることから、東斜面や中島1の東側にも、適量の円礫が貼られていたと考えられる。また園池東側の南斜面には、景石39や景石40などが配置され、第215図のように景石抜き取り痕と推定される箇所もある。景石39から景石53にかけては、10～20cmほどの円礫が少量貼られた状況で残っており、また中島1南側と南斜面の間にも少量の円礫が館Ⅵ期の土に混じって出土した。南斜面にも少量であるが、同様の規模の円礫を貼っていたと考えられる。中島1の西斜面

での礫の出土はほとんどなかった。中島1の高い箇所は削平や館VI期以降の擾乱を受けており、館V期の状況は不明である。しかしながら館VI期の埋土に、第179図31SX100のように破壊された景石が出土しており、中島1にも景石が存在した可能性が高い。また中島1北側に景石抜き取り痕も確認されている。中島1と出島状に延びる間の状況であるが、凹んでいる箇所が2つ確認されている。この2カ所の凹みの用途は不明であるが、魚溜まりなどの機能も想定されるという意見もある。この2つの凹地と中島2の東斜面周辺には、親指ほどの石粒を貼っている状況が確認されている。中島2の北側にも景石の抜き取り痕と推定される箇所が第179・182図に1つある。また中島2の東に接するように、灰色粘土を意図的に貼っていない自然湧水点と推定される場所があり、ここからの池水の供給、特に園池東側の護岸石組方向に向けて給水していたと考えられる。護岸石組の周辺から北溝までの北斜面では、北溝からの流路とともに、人頭大よりやや小さい玉石が多く出土しており、この周辺に化粧石として貼り付けられていたものと考えられる。

SG003の南側は、第V章第1節でも示したとおり、当該期の遺構はほとんどない。これは全く何もない状況かもしれないが、庭園に付属する築山の存在が考えられる。考古学的に積極的な根拠は提示できないが、第149・170・171図によるとSG003機能時の西溝の埋没状況にはすべて南側から土が流入している状況が認められ、南側に築山のような構築物があったことを示している。またSG003東斜面で検出した31SX020矢穴をもつ景石25を廃棄するために設けられたと考えられる。景石の出土状況を踏まえると、景石の本来の位置はさらに高いレベルに設置されていた可能性が高い。こうした点から園池南東側も含めて、園池東側から南側にかけて、築山等が存在していた可能性は高いと推定される。

またその他の遺構として、植栽痕と考えられる12SX070や28SX012などがあり、SG003とも関連がありそうで、庭園全体の構造を考える上で重要である。



第240図 館V期庭園関連遺構配置図(1/700)

第7表 大友氏館庭園跡の調査成果

類別	内 容	調査成果
園池の構造	プラン等	東西67m×南北30m（東は狭く）。東岸は約2mの盛り下げ後、全室に約0.5m厚の灰色粘土貼り付け。 園池中央付近に南北に延びる出島あり。出島を東と西側では豊饒が横断する。出島上に遊覧物となるリットや縁起物等は検出できていない。
	園池斜面の状況（東半分）	南斜面：石張り箇所は少量ばかりあり。量は少ないが2次的に落ちている。 北斜面：石張り箇所あり。場所により縁の大きさに違いあり。中島2北側は人頭大。護岸石能川辺は草大や草大類のもの多い。
	護岸状況など	南斜面：石張り箇所はほとんどなし。 北斜面：一部洲状あり。ほか、池底に2次的に落ちている。
	園池斜面の状況（西半分）	東側：3m以上の護岸石（重石）を多用しており、その際には、小縁を張っている。 西側：東と違い、局所的には重石を設けるが、使用する重石は少ない。一部洲状にして、護岸を形成。その他、粘土貼り付けのみの工法。
	護岸状況（護岸石・石積み等）	
	池底	池底の構造 西側：3m大縁を張り付け、川原石の丸石がほとんどであるが、縁状片等の集積箇所もあり。 東側：粘土のみで、縁状はほとんどない。
	中島	中島1：東西15m×南北12.5m（下で計算） 中島2：東西4m×南北2.5m（下で計算）（出島の一部を高く造成している。） 中島1の北側、中島2の東側にあり、2次的に動いている草大の縁の粘土状況から、草大縁を張り付けていたと推定される。中島2東側のみ、10mほどの小石を張り付け状況が出土。
	中島上の施設	中島1・2ともに不発。但し、中島1には堀V期の層に、破砕された重石があり、重石などが確認されていた可能性は高い。中島2にも確認約50cmほどの石（重石）あり。
	池水	水位、範囲 西側：護岸石能川等を考慮すると2.5～2.6mを想定。 東側：池底石や重石、水分石を考慮した場合、2.5mが妥当。
	湧水施設	①東側湧水地点（粘土貼り付けなしの状況で出土）②南側湧水点（北側） ※ただし、③④は恒常的ではなく、臨時的。
	水利施設	湧水施設 西側に延びる溝。堀外郭の溝と接続。また上記の湧水溝と堀水の接続部には直管を敷いているが、直管は利用していない。また、非常的な排水ではなく、大雨などの臨時排水施設と推定。大雨もいつも排水している状況ではないことから（降雨分等）、排水の可能性低い。
	排水施設	
庭園全体の様相	景石の分布状況	東側は重石を多用しているが、西側は局所のみ利用。東側と西側で景色の違いあり。
	設置構造	園池にある全体を覆う粘土とともに同時設置し固定し、裏地も粘土のみで固定。
	溝	東側溝と南側溝の園池縁部部に設置。
	石材及び産地の特定	安山岩（曙石安山岩・角閃石安山岩）、凝灰岩（永興石含む）、産地は大分県中上流域沿いの山等。
	抜き取りプランの有無	中島1北側に1ヶ所と溝1周辺に2ヶ所。園池東側南側に1箇所あり。
	破砕された景石等	園池東側の景石は意図的に景石が敷かれたり、倒される状況を確認。また園池西側では、意図的に奇岩などの景石を埋められている状況確認。
	その他	中島2の東側にほみ状の箇所が2ヶ所あり、魚塚まりとも想定される。
	地形	庭園東部（最奥周辺）の標定標高4.2～4.4m。中心建物周辺は、礎石痕の状況から5.0mほどと想定。
	地盤の化粧（張り等）	園池構土に玉砂利多く含むため、玉砂利を主に使用か。
	玉砂利の分布	園池全体に入る。景や箇所などは認められない。
庭園鑑賞地点等	縁起について	東側護岸石能川にて、花粉・種子分析結果あり。東溝と南溝周辺に縁起物あり。
	景山	景観はないが、園池南側の16世紀後半の遺構が確認できない空間地に景山を想定。（15世紀代及び1567年以降は遺構あり）
	庭園に関連するその他施設等	縁起道、井戸。
	小池	長軸12mほどの三日月状の小池。園池の北東側の掘り込み型池跡のすぐ北側に隣接。東溝の水溜の可能性や、景色としての空間利用も考えられる。
	景観関連等	堀Ⅲ期・Ⅳ期の園池には粘土構土中からかわらけ一筋発見あり。堀Ⅳ期は構築時の粘土中に京都系土器器底片が散見所出土。
その他	庭園鑑賞地点等	V期庭園の鑑賞位置 鑑賞方法 1567年以降の庭園の様子 改修・造り替え等
	V期庭園以後の様子	掘り込み型池跡が園池北側の西に2ヶ所、東に1ヶ所あり。礎石建物跡の可能性大い。 考古学的には建物から鑑賞する可能性はある。ただその他にも鑑賞地点は多数あると思われる。 庭園跡は、園池はすぐに埋まらず、堀Ⅳ期は、部分的に園池として利用（復興した貯水の利用か）。その後、17世紀半ばまでに、全体を埋め水田化。埋土から玉砂利等が大量出土するため、周辺土で埋めたか（推定）。
	改修・造り替え等	堀Ⅳ期は、部分的に園池として利用。堀Ⅳ期より平面積は狭い。重石は意図的に敷かれているものあり（町の人か？もしくは、権力者か）。
	景石取り上げ	2次的に動いており、そのもとものと正位置が確認できたもの取り上げを行った。取り上げた景石等は、復旧で使用する。

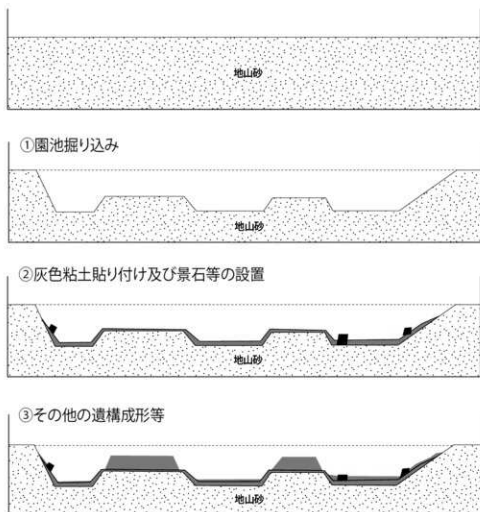
第3節 SG003の構築過程について（第241図参照）

ここでは、調査成果を踏まえ、SG003の構築過程について検討する。

まず検出面から2mほどを掘り下げている。中世大友府内町跡周辺は大分川により形成された沖積地上に立地するため、基盤土は砂質土である。園池の中でも、中島などの高さを有する部分については、地山砂を削り残して構築している。そして一旦園池内を掘り下げた後は、その表面には、厚さ平均20cmほどの灰色系粘土が地山砂面に接するように、園池内のほぼ全面に貼っていたことが確認された。これはSG003機能時に地山砂が露出していると保水や、斜面等の保護が難しいことから灰色系粘土を貼ったと思われる。

また灰色系粘土の貼り付けにあわせて、景石の配置も同時に行っている。景石の設置には直下に栗石などは置かず、地山砂と灰色系粘土のみで行っている。洲浜状などの意匠の造作もまた、景石と同様に灰色系粘土貼り付けに伴い行ったと考えられる。

このような園池構築技法は、土層断面観察等からSG001・002も同様であり、SG001・002もまた灰色系粘土をほぼ全面に貼っている。こうした構築技法が、SG001構築時から行われていたとすると、SG002・SG003と同様の構築技法が継承され用いられたと考えられる。



第241図 SG003園池造成工程図(模式図案)

第4節 SG003に関連する池水の導排水路について

SG003の池水の導排水について整理する。SG003の導排水に関連する遺構には、園池の北辺、東辺、西辺、南辺にそれぞれ溝が計4本接しており、さらに園池内の中央付近に、意図的に灰色系粘土を貼らずに地山の砂を剥き出しにしている箇所があり、湧水地点と推定される。

北溝は、園池の北辺中央付近から北に延び、その北端で溝を東側へ直角に屈曲させ、その3m先には34SE001の井戸跡が存在する。また北溝と園池の接点には溝底から斜面に拳大の円礫が貼られている状況が確認されている。東溝は園池東側の滝1から延びており、その先はやや蛇行しながら、34SE001方向に向かうが、途中で削平を受けているため、どこまで延びるかは不明である。ただ、この東溝から園池東側の滝1を通過して、護岸石組に導水されることが推定される。北溝と東溝内で、導水の有無を確かめるため、珪藻分析を行った。結果は第IV章第1節に記しているが、両溝から珪藻が確認されており、北溝、東溝に水流があり、園池との接点にあたる滝1や洲浜状の円礫敷きの意匠が見られることから、北溝・東溝ともに導水路と判断される。また北溝近くの34SE001や、東溝からはやや離れるが12SE026の配置状況、また34SX003の小池の存在から、それぞれの溝の水源としての可能性があることが想定される。さらに両溝から止水性の珪藻が確認されたことから、井戸から直接溝に流すのではなく、溝の手前に一度、水溜めの装置があって、そこで一時的に水を溜め、必要に応じて流したものと推定される。したがって、東溝と北溝は常時水を流していたのではなく、必要時にだけ水を流していた可能性が想定される。

南溝は園池南辺の中央付近に接している。ここでも接点に滝2の意匠を設けている。この南溝も珪藻分析を行った結果、ここでは北溝や東溝とは違った結果が示されており、前述の溝が止水性を好む珪藻が確認されたのに対し、南溝では流水性を好む珪藻が確認されている。したがって、南溝にも流水があった可能性が高く、水は南溝から滝2を経て、園池西側に流れ込む。しかし、現状では南溝の水源は不明で、この溝と同一遺構と思われる町8次SD103はさらに南に延びていくようであり、その溝の先はわからない。自然科学分析によると流水性を好む珪藻が確認されることから、北溝や東溝のような井戸を活用した状況とは異なる水源を考慮しておく必要がある。

西溝は、東西方向にほぼ直線的に延び、園池の西側を越え、32SD002東側に接する。西溝は、北・東・南溝とは違い、園池との接点に滝等の意匠をもたない。また、この溝は園池接点付近から西側に向けて約28mで、32SD002と接する。32SD002は南北に延びる溝で、幅約4.2m、溝底は標高2.6mと深く、この溝は館V期段階の外郭に伴う溝である可能性が高い。また西溝の溝底レベルは園池側が低く標高約2.6m、32SD002側が高く、標高約3.5mである。西溝も珪藻分析を行ったが、常時水流があった様子はない。西溝を他の3つの溝と比較した場合、園池との接点に意匠を設けていない点が大きく異なっている。また32SD002の溝底の珪藻分析の結果では、いつも水が滞水している状況でないことから、西溝が導水路の可能性は低いと考えられる。さらに32SD002と接することを考えると、悪天候などの折に池水が増水し、園池の水がオーバーフローする前にこの西溝を通して、32SD002の館外郭と推定される大溝に流れ込む状況となる。こうした点から西溝は非常時の排水目的の設置と考えられる。

園池内のほぼ中央付近、中島2の東側に接するところで、一部、園池全体に貼っている灰色系粘土が確認されない湧水点と考えられる場所が1つある。周辺の井戸の井戸底標高は概ね2.2m前後であり、その直上の埋土は、標高約2.5mまで水分を多く含む灰色のシルト質であることが共通している。SG003内の湧水点は井戸底とほぼ同じ標高約2.2mである。したがって、この粘土を貼っていない場所から当時も湧水が湧き（現在は、夏場は湧水が確認できるが、冬場は湧水が確認できない）、池水を補う自然湧水として考えることができる。周辺の井戸跡の粘質土の状況から標高約2.5mくらいまでは、池水を自然湧水で補うことができた可能性がある。

このように導排水路と自然湧水等の考察から、SG003が深く大きい理由について考えてみると、景観とは別に、実用面として2点が挙げられる。1つは西溝の構造から、非常時の臨時的な調整池としての利用、2つ

目に、大友館が沖積地上に位置しており、大量の水を館外から導水することは、その立地から困難であったことが考えられることから、この巨大な園池に最低限の水量を確保するためには、自然湧水を利用したことが想定される。恒常的な湧水を確保するために園池底部を周辺の井戸底と同じレベルまで、深く掘り込む必要があったのであろう。

第5節 SG003に関連する池水の水位について

SG003の池水の滞水の有無は、自然科学分析の成果より、広範囲に渡って滞水していることが確認された。この滞水の池水の水位について検討する。

前述した周辺井戸跡の状況から、自然湧水地点からの湧水による給水に関しては、標高約2.5mくらいまで水位があると考えられる。この場合、この地点は園地東側に位置していることから、園池西側に導水するには、南北に延びる出島状の陸地は標高約2.8mの高さを越えないと園池西側には導水できない。したがって、この自然湧水で補える範囲は園地東側の標高約2.5m付近までと考えられる。

最初に、SG003に設置された景石と水面との関係において、景石の観賞がほどよく可能な水面レベルは、標高2.6m前後である。また園池西側は、景石3や景石5の状況、また園池西側の池底は拳大の円礫などを貼り付けている可能性が高いことから、これら円礫を水中にある状況で見せることなども考慮すると、復元水面標高は2.5m前後となる。これら景石と水面の検討から導き出した水位から、園池東側と西側の池水は繋がる箇所はなく、大きな園池のなかに2つ以上の水面がある状況が推定される。仮に、園池東側と西側の水面が1つになることを想定すると、園池東側と西側の接点の1つである中島2の北側の標高が約2.8mであるため、水面が最低でも2.8m以上必要となる。そうすると、園池内にある景石の多くは景石自体の3分の2以上が水中に沈むため、景石を良好な状態で観賞できる景観は成り立たなくなる。

以上の検討から、SG003の池水の水位は、第239図のように復元されると想定される。

第6節 庭園（特にSG003）の観賞地点について

今回、SG001からSG003の三時期の庭園との関連性が高い遺構が検出された。SG001とSG002は館Ⅲ～Ⅳ期段階の園池跡であり、削平を受けたり、掘り下げを十分に行っていないため、庭園景観の復元は困難であり、その鑑賞点などは不明な点が多い。一方で、館Ⅴ期の園池跡（SG003）を伴う庭園は、その景観を復元できる情報が発掘調査等によって得られていることから、その園池等を鑑賞する視点場について検討する。

一般的な庭園の鑑賞手法としては、建物内部から鑑賞する方法や外で鑑賞する方法など様々である。SG003の調査では、SG003内に橋を架けた痕跡や通路跡、またSG003周辺に園路跡などの通路は検出できていない。また前述のとおり、SG003はその規模が大きいことや、その内部の様相が東側と西側ではその景観が相違していることを考えるとSG003の鑑賞地点は複数ある可能性が高い。

まずSG003周辺の建物跡についてみていく。SG003の周囲に掘立柱建物跡や礎石建物跡のものは確認されていない。しかし、中心建物跡直下や中心建物南側の礎石建物跡を伴う掘り込み整地跡と類似する遺構が、SG003の北側でも3基検出されている。SG003北西では33SX085と33SX13が検出されており、検出面は標高約4.1mで、検出面から最深部まで約0.3mの深さを有する。これら遺構の検出面直上は近世の水田層である。この水田層の機構に伴い、当時の地表面は削られていると思われ、またこの整地層上に柱穴などは見当たらない。



第242図 S6003図地部定礎元等基線図(1/400)

いことから、中心建物跡やその周辺の建物跡と同様に礎石建物に伴う掘り込み整地跡の可能性が高い。整地跡（33SX085）は最深部の深さが約0.3mであった。これを16世紀後半の整地の状況が判明している館20次調査で確認された整地跡では、最深部で検出面より最大0.6mである（第244図）。この館20次の検出面は標高約5m弱で、中心建物跡の礎石痕などの状況から、当時の地表面に近いと考えられる。33SX085等も埋土や構造等が館20次の整地跡と類似することから、同様の規模であったことが想定され、33SX085の上部は両者の深度の差である約0.3mの削平を受けていることが考えられる。こうした想定に基づくと、このSG003北側の当時の地表面標高は約4.3mと推定される。この想定標高が当時の地表面標高とした時、館中心建物跡の想定地表面が約5.0mと想定されることから、庭園側の地表面標高は中心建物周辺に比べて低くなることが考えられる。またこの標高が変化する境は、近世水田層の削平上端ライン付近と考えられ、このあたりには15世紀代と推定される2つの柱穴で1対の遺構が並ぶ区画施設と思われる遺構や16世紀後半のSG003北辺から北へ延びる溝33SD088の北端が近世水田層の掘り込みライン付近で止まるなど、15世紀段階よりこの近世水田層の掘り込み付近は土地利用の違いを示す境となりそうである。したがって、近世水田層の掘り込み部周辺から南側は、中心建物跡等が展開する北側よりも当時の地表高は60～70cmほど低くなると想定される。

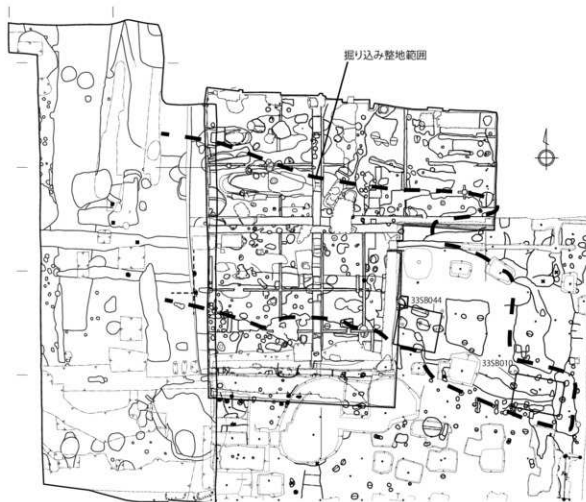
このようなことから、SG003北側に礎石建物が存在していたとしても、その建物の礎石自体が残存している可能性は低いといえる。

次に33SX085と33SX130のプランであるが、両遺構の北辺ラインは同一直線上に延びている。その他の遺構ラインは残存状況が悪いこともあり、ラインは歪んで検出されている。特に33SX130の南側等は数cmの深さが残存しているのみであり、33SX130南側に浅い掘り方のものが疎らにあることなども考え合わせると、これらも同一遺構であった可能性が高い。33SX130のやや南にある31SX008は同時期と考えられるが、33SX085や33SX130の埋土中に多量の玉砂利を含むのに対して、31SX008は拳大の礫が多く検出され、前二者とは異なる性格が想定される。現在の遺構状況から33SX085や同130の掘り込み整地跡ラインを推定復元したものを第246図に示している。

次にSG003北西礎石建物配置の想定である。33SX085と同130は建物跡に伴う掘り込み整地跡と想定したが、北辺の直線ラインは、園地西側の北辺ラインの方向に近似し、直線ラインは整地時に何かしらの規制、あるいは基準に基づいて構築されたことが想定される。その要因は、整地本来の意味から、建物配置であったことが考えられる。こうした想定に基づき、その整地跡内での大まかな建物配置を考えた場合、2案が考えられる。A案は、33SX085・同130の掘り込み整地跡の北辺ラインで建物北側ラインを合わせる配置し、ただその南側は玉砂利敷きの空間を持たせるというものである。B案はこの北辺ラインに沿って北側に礎石建物跡を想定するものである。この場所に当該期の遺構が認められない点も、この想定の根拠となっている。また、その建物の軒先ラインがこの直線上の北辺ラインに揃うという状況が考えられる。そうした時、掘り込み整地跡はその埋土に玉砂利を多く含むことから、玉砂利敷きの空間という想定も可能であろう。A案の整地内南側の空間も同様の機能が考えられる。

以上、SG003北側で確認された北西2カ所の掘り込み整地での建物想定を2案考えてみた。中心建物跡南側の掘り込み整地に伴う礎石建物跡の状況からすると掘り込み整地の大部分を建物跡が占める可能性は低いことは想定できる。このようにSG003の北西の掘り込み整地に伴う建物想定範囲を以上のような2案で考えたが、現状では第246図のA案が、中心建物跡南側の掘り込み整地の中に礎石建物跡に伴う事例などから、妥当なところと考える。

ところで、掘り込み整地跡はSG003の北東でも1基（34SX002）を検出している。この遺構はほとんど遺物が出土しなかったため、時期比定が困難である。ただこの遺構を切る34SK028から厚手の京都系土師器片が出土しており、また16世紀後半の小池とされる34SX003(12SX202)との位置関係からすると、34SX002は16世紀後半代の可能性が高い。またこの遺構は西側の33SX085等と比べて埋土に玉砂利をほとんど含まないという状況とその遺構の規模が小さいという相違点がある。埋土には黄土ブロックを含み、固く締まっていたことが



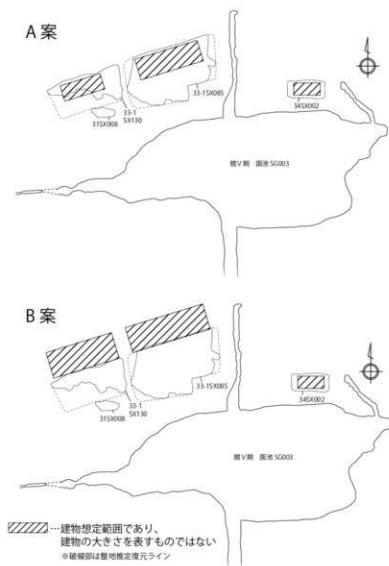
第245図 中心建物跡・南側掘り込み整地跡

ら、34SX002 は建物に伴う掘り込み整地跡と考えることができる。SG003 の園池との関連が注目される。西側で検出した 33SX085 等と埋土や規模の状況が違うため、この場合の整地は、純粋に建物範囲を対象としたと考えられ、34SX002 の掘り方規模に近い建物跡を想定することができる。

以上のように SG003 に伴うと考えられる建物遺構について検討した。建物跡自体は確認できなかったが、これら掘り込み整地跡が SG003 との関連する建物に伴う痕跡であることは十分に考えられよう。また SG003 の周辺において、このような掘り込み整地跡が検出できたのは、SG003 の北側だけであり、東側、西側、南側では検出できていない。このことからすると、この 16 世紀後半の SG003 を中心とする池底の建物観賞地点は、SG003 の北側にあり、建物に関連すると考えられる掘り込み整地跡が東西において確認されたことは、前述した SG003 の西側と東側で景観が相違することと関連があると考えられる。しかしながら、仲隆裕先生より、中島 1 や中島 2 等も、良好な鑑賞地点となり得るという指摘をいただいており、園池の規模等を考えると、建物からの視点だけでなく、野外での観賞を含む複数の観賞地点を考慮しておく必要があろう。

第7節 SG003 から SX004 へ

SG003 の廃絶年代は前述のとおり、天正 14 年（1586）と考えられ、その後、大友館はこの場所に復興していない。しかし、館周辺部で町は復興し、SG003 の東側にも町屋と推定される遺構が多く検出されている。この町復興段階と同時期に機能していたのが、SX004 である。



SX004 は SG003 を切る状況で検出され、第 241 図のとおり、SG003 の多くを埋める中、部分的に粘土を貼り直して、SG003 の深い掘り込みを再利用している。

しかし、SX004 が機能する前及び SG003 廃絶時に、景石に対して 3 つの人的行為が認められる。1 つは、景石が動かされる行為、2 つ目は景石の表面を剥離させる行為、3 つ目は土砂で埋める行為の 3 つである。1 点目と 2 点目は、園池東側の護岸石組周辺で見受けられ、3 点目は、園池西側で確認された。

まず 1 点目と 2 点目である。園池内では、園池東側の護岸石組周辺では、角礫等が多く確認され、また護岸石組の特に南側の景石 21・24 等は表面に明らかな剥離痕があり、護岸石組内の東側と西側に集中している角礫片と同一個体となる可能性が高い。さらに西側の角礫集中箇所を一部掘り下げたところ、集中している角礫片よりも大きな剥離痕をもつ礫が出土している（第 220 図参照）。また景石 8 などはその頂部が割られており、その頂部片は第 218 図の石 A と接合した。さらに景石 19 や景石 20 は明らかに動かされていることが確認され、さらに景石 10 と景石 11 は大きく 2 つに割られている状況を示す。景石 6 や景石 8 は SG003 の機能面直上で間層を挟まずに、動かされていることが確認されている。これに対し、滝 1 西側の景石 19 と景石 20 下面は、両石とも土層断面図第 201 図と第 202 図に示されるように、SG003 の機能面から間層を挟んでいることがわかる。

3 点目の状況は、園池西側の景石 5 などにみられ、土層図第 165 ～ 167 図に示すように明らかに、SX004 が機能する前に一度、埋め戻された状況が確認される。景石 3 などと近接した土層断面図第 157・160 図などに示す通り、景石 5 と同様のことがいえる。

これら 3 点の行為は、冒頭でも述べたように、土層断面観察等から、SG003 廃絶時から SX004 が機能する直前の状況を示していると判断できる。1・2 点目と 3 点目の関係は場所も離れているため不明であるが、1・2 点目については、景石 6 と景石 8 が動かされた石の直下に角礫が巻き込まれていない点があり、角礫は SG003 の機能面よりも 10 cm ほど砂が埋まったその直上に位置しているところが多いという傾向がある。こうした点から、景石 6 や景石 8 が動かされた後に、景石の剥離行為があったものと考えることができる。しかし、景石 19 と景石 20 に関しては、間層を挟んでいるため、景石 6・8 を動かす行為よりやや遅れて行われたと思われる。さらに園池内全体は SG003 の機能面直上に粗い砂質主体の埋土で一度埋められた痕跡が確認でき、園池西側の景石 5 などこの砂質主体の土で埋められている。前述したように角礫はこの砂質主体の土の上に集中している箇所が多く、これらの砂質主体の土が一度に被覆されたものであれば、景石を剥離する前に園池西側の景石 3 や景石 5 は意図的に埋められた可能性がある。

これら破壊行為を時系列にまとめてみると、まず景石 6 や景石 8 が動かされるのとほぼ同時に園池西側の景石 3 や景石 5 が埋められる。そして景石 21・24 等が剥離される行為や景石 19 や景石 20 が動かされる行為が行われるという流れになる。ただし、このようなそれぞれの行為は若干のタイムラグはあるにしても、SG003 廃絶から SX004 機能開始直前までの比較的短時間で行われた可能性が高い。

また景石を破壊した主体者を想定した場合については、以下の 4 点が現状では考えられる。

- ①大友氏が 1586 年の島津氏侵攻直前に館を放棄する直前に破壊行為を行う。
- ②島津氏が一時、館を占領した折に破壊行為を行う。
- ③島津氏が退却した後、一度大友氏がこの館に戻ってきて、館の完全な廃絶を示す意味で破壊する。もしくはそれを豊臣軍が行う。
- ④周辺で復興した町の人々による行為

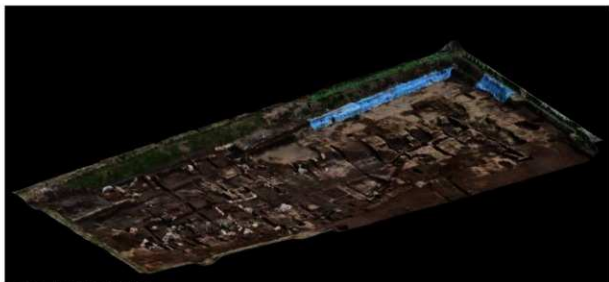
以上、可能性はいくつか挙げられる。また確認された破壊行為は、短期間とはいえ、最低 2 回は行われている。庭園を破壊した主体者が誰なのか。また、どのような意味をもつのか SG003 廃絶時のこれら現象は、今後の検討課題としておきたい。

第 8 節 景石について

第 5 節のとおり、館Ⅵ期段階で、いくつかの景石が 2 次的に動かされていることが調査で明らかにされた。これらの動かされた景石は、今後の整備での活用を図るため、特に庭園機能時に位置していた箇所が判別できた 6 つの景石を、全面 3D 計測した上で取り上げを行った。これら景石の 3D 写真が P265 から P270 までの 6 個体である。見附の方向などを確認した上で、正位置の状況であったと想定される角度で多方向から撮影したものである。

また庭園の復元整備も考慮して、庭園全体の 3D 計測も実施し、SG003 内の地形や円礫から景石まですべてを 3D 計測している。3D 計測はより具体的な記録保存と資するとともに、今後の遺跡整備の活用について様々な活用が期待される。

さらに 3D 計測を基にして、園池や地形と景石、また周辺の想定築山を中心にした 3D 復元を指導者の方々の監修を踏まえて具体的に行った。この庭園全体の 3D 復元案が P274 ～ P276 に示すものである。



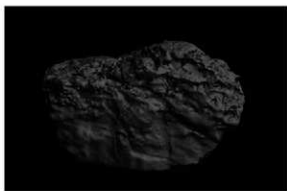
3D 画像 北東からみた園池跡



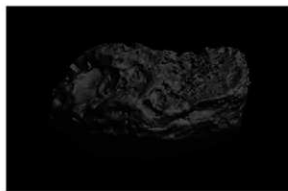
3D 画像 東からみた園池跡



3D 画像 西からみた園池跡



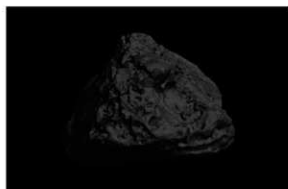
景石6 北側



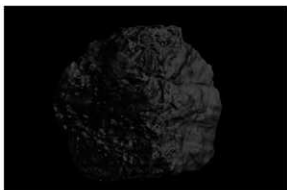
景石6 南側



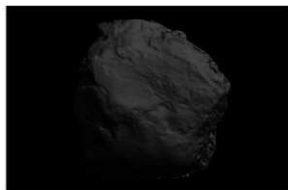
景石6 東側



景石6 西側



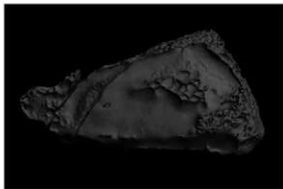
景石6 真上



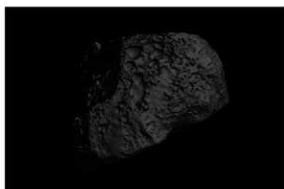
景石6 真下



景石8 北側



景石8 南側



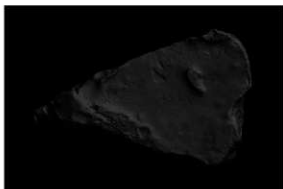
景石8 東側



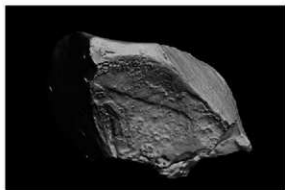
景石8 西側



景石8 真上



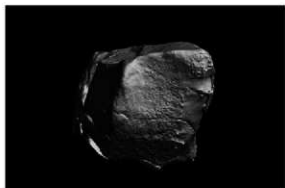
景石8 真下



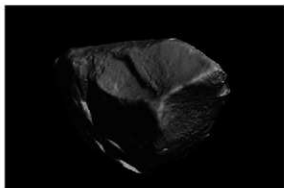
景石10・11 北側



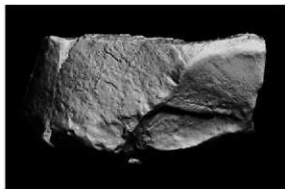
景石10・11 南側



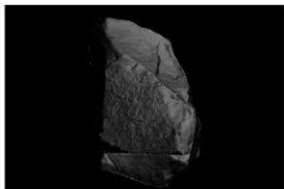
景石10・11 東側



景石10・11 西側



景石10・11 真上



景石10・11 斜め上



景石19 北側



景石19 南側



景石19 東側



景石19 西側



景石19 真上



景石19 真下



景石20 北側



景石20 南側



景石20 東側



景石20 西側



景石20 真上



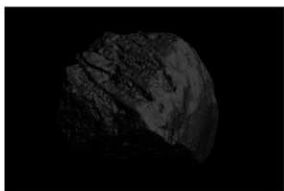
景石20 真下



景石25 北側



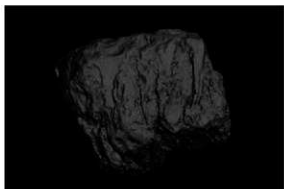
景石25 南側



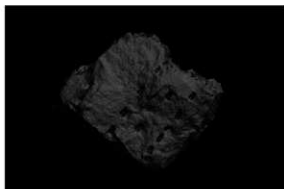
景石25 東側



景石25 西側



景石25 真上



景石25 真下



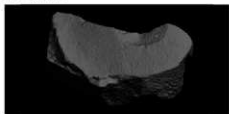
3D 景石 01



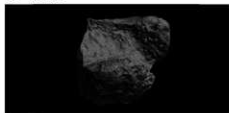
3D 景石 12



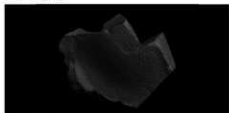
3D 景石 02



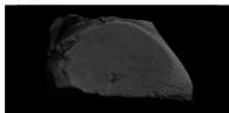
3D 景石 13



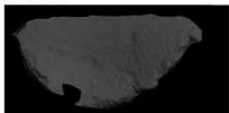
3D 景石 03



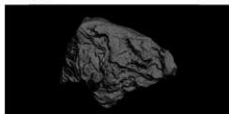
3D 景石 14



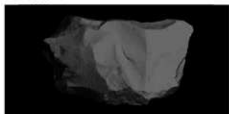
3D 景石 04



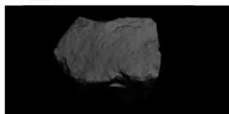
3D 景石 15



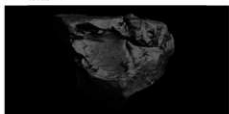
3D 景石 05



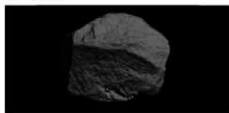
3D 景石 16



3D 景石 07



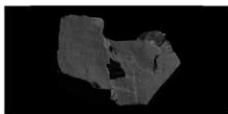
3D 景石 17



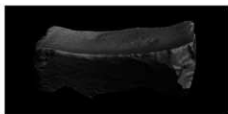
3D 景石 09



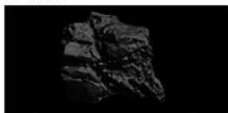
3D 景石 18



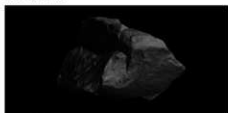
3D 景石 21



3D 景石 30



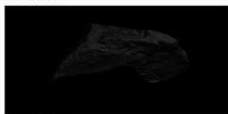
3D 景石 22



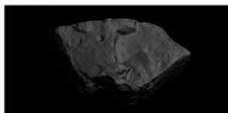
3D 景石 31



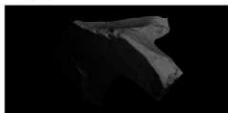
3D 景石 24



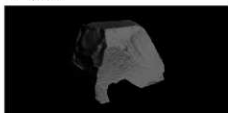
3D 景石 32



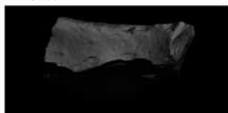
3D 景石 26



3D 景石 33



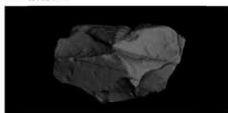
3D 景石 27



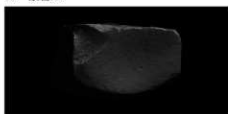
3D 景石 34



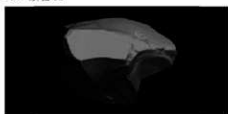
3D 景石 28



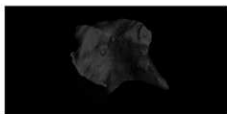
3D 景石 35



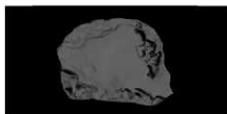
3D 景石 29



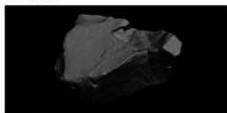
3D 景石 36



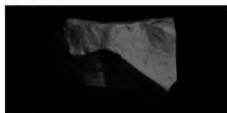
3D 景石 37



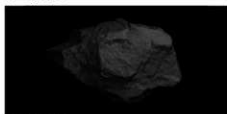
3D 景石 49



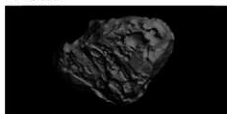
3D 景石 38



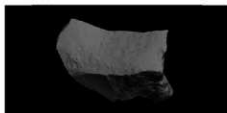
3D 景石 50



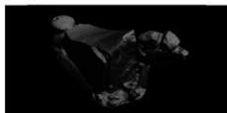
3D 景石 39



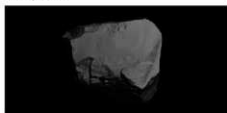
3D 景石 51



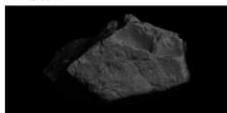
3D 景石 40



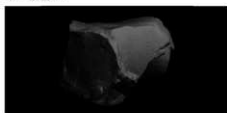
3D 景石 52



3D 景石 41



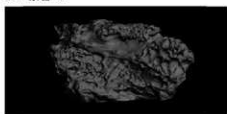
3D 景石 53



3D 景石 42



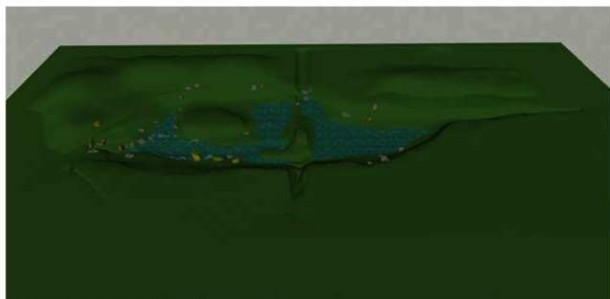
3D 景石 54



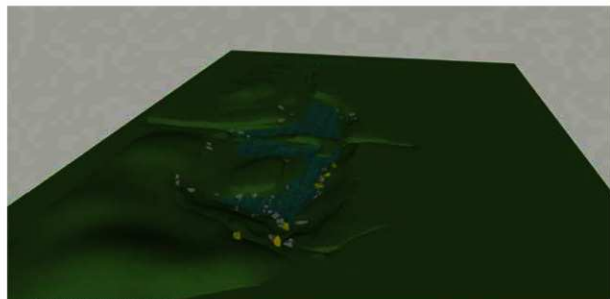
3D 景石 43



3D 景石 55



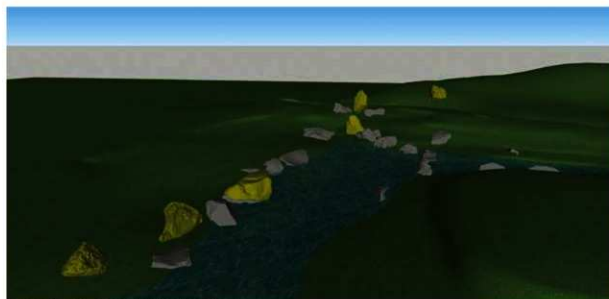
1. 北からみたⅤ期庭園 3D 復元案



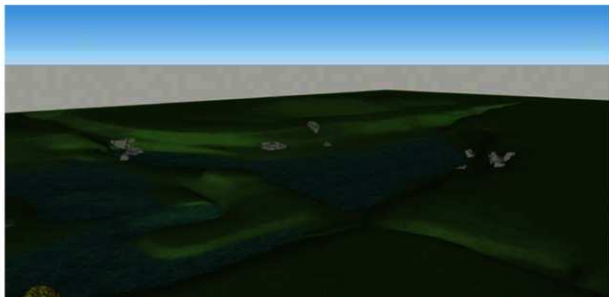
2. 東からみたⅤ期庭園 3D 復元案



3.34SX002 からみた SG003 東側 3D 復元案



4. 中島 1 からみた SG003 護岸石組周辺 3D 復元案



5.345X002 方向からみた SG003 西側 3D 復元案



6.335X085 方向からみた 滝 2 周辺 3D 復元案

遺 物 觀 察 表

第8表 古代出土遺物一覽表

序号	课程名称	学时	学时分配	理论教学学时分配表				实验学时	实践学时	总学时
				讲授	讨论	其他	其他			
第1学期	2019010001 大学物理(一)	72	72	68	4	0	0	0	0	72
第1学期	2019010002 大学物理(二)	72	72	68	4	0	0	0	0	72
第1学期	2019010003 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020001 大学物理(三)	72	72	68	4	0	0	0	0	72
第2学期	2019020002 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020003 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020004 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020005 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020006 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020007 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020008 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020009 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020010 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020011 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020012 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020013 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020014 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020015 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020016 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020017 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020018 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020019 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020020 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020021 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020022 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020023 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020024 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020025 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020026 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020027 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020028 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020029 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020030 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020031 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020032 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020033 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020034 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020035 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020036 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020037 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020038 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020039 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020040 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020041 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020042 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020043 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020044 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020045 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020046 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020047 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020048 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020049 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020050 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020051 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020052 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020053 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020054 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020055 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020056 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020057 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020058 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020059 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020060 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020061 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020062 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020063 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020064 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020065 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020066 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020067 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020068 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020069 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020070 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020071 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020072 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020073 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020074 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020075 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020076 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020077 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020078 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020079 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020080 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020081 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020082 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020083 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020084 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020085 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020086 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020087 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020088 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020089 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020090 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020091 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020092 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020093 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020094 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020095 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020096 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020097 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020098 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020099 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020100 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020101 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020102 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020103 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020104 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020105 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020106 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020107 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020108 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020109 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020110 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020111 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020112 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020113 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020114 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020115 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020116 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020117 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020118 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020119 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020120 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020121 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020122 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020123 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020124 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020125 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020126 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020127 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020128 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020129 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020130 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020131 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020132 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020133 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020134 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36	0	36
第2学期	2019020135 大学物理实验	36	36	0	0	0	0	36		

第9表 建物跡・ピット出土遺物一覧

作品番号	題名	形式	時間	2017年度放映状況				放映回数	上映日	上映内容		備考	計開演回数	観客数
				地区 上映回数	地区 観客数	県外 上映回数	県外 観客数			内容	内容			
第104号	「1939年11月」	上映巻	10分	0	0	0	0	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第105号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第106号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第107号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第108号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第109号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第110号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第111号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第112号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第113号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第114号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第115号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第116号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第117号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第118号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第119号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第120号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第121号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第122号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第123号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第124号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第125号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第126号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第127号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第128号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第129号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第130号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第131号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第132号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第133号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第134号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第135号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第136号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第137号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第138号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第139号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第140号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第141号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第142号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第143号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第144号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第145号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第146号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第147号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第148号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第149号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第150号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第151号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第152号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第153号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第154号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第155号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第156号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第157号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第158号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第159号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第160号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第161号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第162号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第163号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第164号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第165号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第166号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第167号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第168号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第169号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第170号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第171号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第172号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第173号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第174号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第175号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第176号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第177号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第178号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第179号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第180号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第181号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第182号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第183号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第184号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第185号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第186号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第187号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第188号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第189号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第190号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第191号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第192号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第193号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第194号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第195号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第196号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第197号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第198号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第199号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0
第200号	「1939年11月」	上映巻	17分	0	0	1	1	1	11月10日	「大正時代」	大正時代		1	0

第10表 井戸跡出土遺物一覧表

[illegible]

製品ID	製品番号	製品名	規格	寸法(mm) (標準寸法)				材質	組立	付属品		備考	計測単位	標準価格
				全長	全幅	全高	重量(kg)			内径	外径			
製品ID-1	100000-1	標準品	小径	8.0	2.0	4.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	000
製品ID-2	100000-2	標準品	中径	11.0	2.7	5.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	001
製品ID-3	100000-3	標準品	大径	14.0	3.7	6.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	002
製品ID-4	100000-4	標準品	特大	17.0	5.0	8.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	003
製品ID-5	100000-5	標準品	特大	20.0	6.0	10.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	004
製品ID-6	100000-6	標準品	特大	23.0	7.0	12.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	005
製品ID-7	100000-7	標準品	特大	26.0	8.0	14.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	006
製品ID-8	100000-8	標準品	特大	29.0	9.0	16.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	007
製品ID-9	100000-9	標準品	特大	32.0	10.0	18.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	008
製品ID-10	100000-10	標準品	特大	35.0	11.0	20.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	009
製品ID-11	100000-11	標準品	特大	38.0	12.0	22.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	010
製品ID-12	100000-12	標準品	特大	41.0	13.0	24.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	011
製品ID-13	100000-13	標準品	特大	44.0	14.0	26.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	012
製品ID-14	100000-14	標準品	特大	47.0	15.0	28.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	013
製品ID-15	100000-15	標準品	特大	50.0	16.0	30.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	014
製品ID-16	100000-16	標準品	特大	53.0	17.0	32.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	015
製品ID-17	100000-17	標準品	特大	56.0	18.0	34.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	016
製品ID-18	100000-18	標準品	特大	59.0	19.0	36.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	017
製品ID-19	100000-19	標準品	特大	62.0	20.0	38.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	018
製品ID-20	100000-20	標準品	特大	65.0	21.0	40.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	019
製品ID-21	100000-21	標準品	特大	68.0	22.0	42.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	020
製品ID-22	100000-22	標準品	特大	71.0	23.0	44.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	021
製品ID-23	100000-23	標準品	特大	74.0	24.0	46.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	022
製品ID-24	100000-24	標準品	特大	77.0	25.0	48.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	023
製品ID-25	100000-25	標準品	特大	80.0	26.0	50.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	024
製品ID-26	100000-26	標準品	特大	83.0	27.0	52.0	-	白亜色	花菱 黒色 花菱白 金剛 黒色 金剛白	-	-		個	025

第13表 土坑出土遺物③一覽表

[illegible]

第14表 溝跡出土遺物一覽表

[illegible]

第18表 庭園関連遺構出土遺物②一覧表

[illegible]

第19表 庭園関連遺構出土遺物③一覧表

[illegible]

第20表 庭園関連遺構出土遺物④一覧表

[illegible]

第21表 庭園関連遺構出土遺物⑤一覧表

[illegible]

写 真 图 版



33SE086 土層断面 (北より)



12SE026 検出状況 (南より)



12SE026 出土状況 (南より)



12SE026 出土状況 (南より)



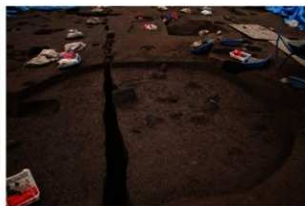
12SE080 検出状況 (北より)



28SE040 検出状況 (南より)



28SE040 土層断面 (北より)



28SE045 検出状況 (東より)



28SE09S 出土状況 (東より)



31SE010 検出状況 (東より)



31SE010 土層断面 (東より)



33SE071 土層断面 (東より)



33SE084 土層断面 (西より)



34SE001 検出状況 (東より)



34SE001 掘り下げ途中1 (東より)



34SE001 掘り下げ途中2 (東より)



34SE001 掘り下げ途中3 (東より)



34SE001 掘り下げ最終 (東より)



34SE001 掘り下げ最終 (南東より)



15K008 検出状況 (西より)



15K008 出土状況 (西より)



15K008 土層断面 (南より)



28SK015 出土状況 (西より)



28SK015 遺物除去後全景 (南西より)



28SK015 南北土層断面 (北より)



28SK020 出土状況 (北より)



28SK020 土層断面 (南より)



28SK030 検出状況 (南より)



28SK030 土層断面 (西より)



28SK035 検出状況 (南より)



28SK035 土層断面 (西より)



28SK065 検出状況 (南より)



28SK065 土層断面 (北西より)



28SK070 出土状況 (南より)



28SK070土層断面 (西より)



28SK071・161 出土状況 (北より)



28SK071・161 土層断面 (北より)



28SK085 土層断面 (北より)



28SK090 検出状況 (西より)



28SK090 土層断面 (南より)

写真図版 6



28SK500土層断面 (西より)



28-4SK035・SD040 検出状況 (北より)



28-4SK035 出土状況 (南西より)



28-4SK035 土層断面 (南西より)



28-4SD040 出土状況 (南東より)



28-4SD040 土層断面 (南西より)



31SK009 検出状況 (西より)



31SK009 土層断面 (西より)



33SK098 土層断面 (南より)



34SK024 検出及び土層断面状況 (南より)



34SK029 検出及び土層断面状況 (南より)



34SK031 検出及び土層断面状況 (東より)



34SK035 検出及び土層断面状況 (西より)



28SD005 遠景 (西より)



28SD005 底面確認状況 (西より)



28SD005 A-B土層断面 (東より)

写真図版 8



28SD005 C-D土層断面 (西より)



28-4SD005-010 土層断面(第119図) (西より)



32SD002と32SD010合流地点周辺 (東より)



32SD002-003 北壁土層



32SD002 トレンチ3 北壁土層断面 (南より)



32SD002 トレンチ4 北壁土層断面 (南より)



32SD003 北壁土層



28-4SD025-030 検出状況 (北より)



28-4SD020東側 検出状況 (南より)



28-4SD020 土層断面(第121図) (東より)



31SD004 S-N断面 (東より)



31SD004 W-E断面 (南より)



31SD002・33SD131 検出状況 (南より)



33SD125 土層断面 (北より)



28-4SD030 土層断面(第126図) (南西より)



28-4SD045 土層断面 (南より)



1SD019 出土状況 (西より)



33SX085 西トレンチ (北西より)



33SX085 東トレンチ (東より)



33SX085 南トレンチ (南より)



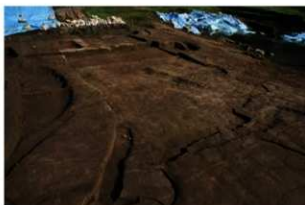
33SX085 北トレンチ (北より)



33SX130 検出状況 (北東より)



31SX008 出土状況 (東より)



34SX002 検出及び一部掘り下げ状況 (北西より)



34SX002 南北土層断面 (北より)



12SX202掘り下げ状況 (南東より)



34SX003 検出及び一部掘り下げ状況 (南東より)



34SX003 出土状況 (東より)



34SX003 土層断面 (東より)



34SX003 東西土層断面 (南東より)



28SX012-013-014 遠景 (北より)



28SX013 土層断面 (北より)



28SX073・074完掘状況 (西より)



28SX073 土層断面 (南東より)



28SX080 検出状況 (北西より)



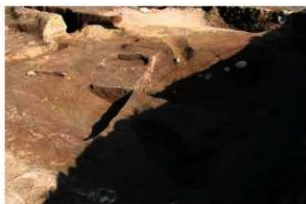
28SX080 土層断面 (北より)



28SX100 検出状況 (南より)



28SX100 土層断面 (西より)



31SX003 出土状況 (西より)



31SX003 土層断面北壁西壁 (南より)



32SX009-014-015周辺検出状況 (南より)



32SX009-014-015周辺C-D-D-E-E-F土層断面 (南より)



32SX009 A-B土層断面 (南より)



土層2 南側西壁 (南東より)



土層2 北側(SG002掘り込み状況) (東より)



土層2 北側西壁 (南東より)



土層2 北端西壁 (南東より)



土層3 西側北壁 (南西より)



土層4 南側東壁 (北西より)



土層4 北側東壁 (北より)



3次調査トレンチ4内景石出土状況 (南より)



土層6 (南西より)



土層8 (南東より)



土層9 (北西より)



土層9 (北西より)



土層11 東壁 (西より)



土層13 (南東より)



土層14 (南東より)



土層15 (南東より)



土層17 西壁 (北東より)



土層18 北壁 (南より)



土層22 南壁 (北西より)



土層22 (北より)



土層23 南壁 (北東より)



土層25 西壁 (南東より)



土層26 (北西より)



土層26 北壁 (南西より)



土層29 西壁中央 (東より)



土層29 西壁南側 (北東より)



土層31 西壁 (南より)



土層34 北壁 (東より)



土層35 西壁 (南より)



土層37 東西ライン (南東より)



土層37 南北ライン (南東より)



土層39 南壁 (北より)



土層40 景石11除去後 東壁



土層40 護岸石組南 (南西より)



土層40 北側 (西より)



土層41 Z S西壁 (南東より)



土層41 Z S西壁 (北東より)



土層41 Z W西壁 (東より)



土層41 Z W西壁 (北より)



土層42 中央 (南西より)



土層42 南側 (南西より)



土層42 北側 (北西より)



土層43 西側 (北西より)



土層43 北壁中央 (南西より)



土層43 北壁中央 (南東より)



土層43 北壁東側 (南西より)



土層44 中央付近 (南より)



土層44 東側 南壁 (北東より)



土層45 N-Z西壁 (南より)



土層45 N-Z西壁 (北より)



土層45 N-Z北側 西壁 (東より)



土層45 Z-W北壁 (南東より)



土層46 東壁 (北西より)



土層46 東壁 (北西より)



土層47 (北西より)



SG003に伴う西溝 掘り下げ状況 (東より)



SG003に伴う南溝(28SD010) (北より)



SG003圓池西側 緑泥片岩等出土状況 (北西より)



SG003圓池西側溝2南側検出土況 (北西より)



SG003園池西側溝2南側検出状況 (北西より)



SG003園池東側 景石15出土状況 (西より)



SG003園池東側 推定湧水点 (北東より)



SG003園池東側中島1 (北より)



SG003犬形土製品出土状況



SG003出土の玉砂利(一部)



SG003中島2から南側出島状検出状況 (西より)



SG003護岸石組西側角礫除去後 (西より)



館VI期西側溝状遺構（西より）



景石8除去後 玉砂利等出土状況



景石10下出土京都系土師器P7



景石13 西壁土層（東より）



景石20 抜き取り痕（北西より）



護岸石組周辺 作業風景



護岸石組西側 第218図4出土状況（北より）



第146図土器集中A出土状況（東より）



第209回F石製宝塔片出土状況



12SD090 土層断面 (北より)



33SD088 トレンチ2 北壁土層 (南より)



33SD088 トレンチ3 西壁土層 (東より)



33SD088 トレンチ3 北壁土層 (南より)



28SD010 A-B土層断面 (南より)



28SD010 北側土層断面及び溝2検出状況 (西より)



5G003 護岸石組西側角礫除去後状況 (北西から)



竹村恵二先生石材調査風景



1次調査区検出状況 (東より)



1次調査区 作業風景 (西より)



1次調査区 大分市議会への説明



3D計測風景(夜間)



12調査区東側 検出状況 (西より)



28調査区遠景 (東より)



28調査区全景 (北より)



28調査区東側全景（北より）



28調査区砂脈検出状況（北より）



28調査区西壁土層断面（東より）（第46図基本層序）



28-4調査区拡張（北西部）検出状況（北より）



28-4調査区西側検出状況（西より）



28-4調査区東側検出状況（南東より）



31景石25出土状況及び土層断面（南より）



34調査区遺構検出状況（南東より）



34調査区遺構検出状況 (北西より)



34調査区中央付近段差土層断面 (南より)



2013年度大友氏遺跡フェスタ



2014年度金原正明先生土壌分析調査



2015年度小野正敏先生指導



2015年度仲隆裕先生 平澤毅調査官 指導



2015年度飛田範夫先生来跡



2015年度大友指導者会



景石11取り上げ状況(南西から)



景石11吊り上げ状況(南から)



景石10・11接合作業(東から)



北西上空からみたSG003圖池跡



第89図15



第89図19



第89図29



第90図30



第90図31



第90図32



第90図33



第90図34



第91図1



第92図10



第92図11



第96図5



第96図10



第97図25



第97図41



第97図49



第99図3



第106図3



第176図34



第176図35



第177図42



第177図44



第190図1



第203図7



第203図9



第203図10



第203図12



第203図13



第203図14



第218図1



第218図2



第218図3



第218図4



第220図1



第220図2



第221図16



第221図16



第221図16



第221図16



第222図14



第223図5



第221図19

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおともしやうかたあし						
書 名	大友氏館跡2						
副 書 名	大分県大分市顕徳町3丁目所在の大友氏館跡確認調査報告書						
シリーズ名							
シリーズ番号	第144集						
編 著 者 名	五十川雄也 佐藤里恵						
編 集 機 関	大分市教育委員会						
所 在 地	〒870-8504 大分市荷徳町2番31号 TEL(097)534-6111 FAX(097)536-0435						
発行年月日	西暦2017年1月27日						
所収遺跡名	所在地	23—37	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
大友氏館跡第1次	大分市顕徳町	44201 201347	(園池跡中心部付近)		1998.07.21～1999.5.19	2200	大分駅周辺総合整備事業
大友氏館跡第3次	大分市顕徳町		33° 13' 34"	131° 37' 13"	1999.11.01～2000.03.31	173.16	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第12次	大分市顕徳町				2002.05.14～2003.01.27	550	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第16次	大分市顕徳町				2004.05.17～2006.03.29	320	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第25次	大分市顕徳町				2011.05.27～2011.08.19	498.1	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第28次	大分市顕徳町				2012.09.14～2013.03.27	1860.6	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第28-4次	大分市顕徳町				2013.06.6～2013.08.9	504	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第29次	大分市顕徳町				2013.06.6～2014.03.25	1567	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第30次	大分市顕徳町				2014.01.17～2014.03.14	508.1	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第31次	大分市顕徳町				2014.05.09～2015.03.13	330	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第32次	大分市顕徳町				2015.02.04～2015.03.20	407.9	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第33次	大分市顕徳町				2015.06.03～2016.03.15	5200	重要遺跡確認調査
大友氏館跡第34次	大分市顕徳町				2016.06.24～2016.11.10	5700	重要遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大友氏館跡第1次	城館	中世	・園池跡	・在地系土師質土器	庭園域
大友氏館跡第3次	城館	中世	・土坑	・京都系土師器	庭園域
大友氏館跡第12次	城館	中世	・竪立柱建物跡(柱穴内遺石あり)	・国産陶磁器	庭園域～中心建物域
大友氏館跡第16次	城館	中世	・礎石	・中国産陶磁器	庭園域～中心建物域
大友氏館跡第25次	城館	中世	・井戸跡	・東南アジア産陶磁器	庭園域
大友氏館跡第28次	城館	中世	・溝跡	・木製品	庭園域
大友氏館跡第28-4次	城館	中世	・堀り込み整地跡	・金属製品	庭園域～館内西域
大友氏館跡第29次	城館	中世	・ピット	・大形土製品	庭園域
大友氏館跡第30次	城館	中世	・溝跡	・玉砂利	庭園域
大友氏館跡第31次	城館	中世			庭園域
大友氏館跡第32次	城館	中世			庭園域
大友氏館跡第33次	城館	中世			庭園域
大友氏館跡第34次	城館	中世			庭園域

要 約	館1次調査において、庭園跡が確認されたことで、大友氏館跡の存在が裏付けられ、平成13年度に国指定史跡となった。庭園跡の調査は、館1次と館3次調査以降は本格的には実施されなかったが、平成24年度の第28次調査から平成28年度の第34次調査まで実施されることになった。庭園に直接関連する遺構としては、園池跡や礎石痕などが確認された。園池跡は最低2回の造り替えが確認されており、最初の園池造成は15世紀後半頃であり、16世紀後半には、戦国大名館に設置された庭園園池跡の中で最大規模の規模であることがわかってきた。しかしながら、1586年の島津氏の子供後侵襲により、館は荒廃し、この場所に再興されたことはなかったが、園池は庭園の機能は有していないが、池の造りとして、17世紀前半頃まで使用されたと推定される。今回の報告では、庭園域として、園池跡と併に、周辺で調査された庭園に関連する井戸跡や溝跡、建物跡と推定される堀り込み整地跡、さらに館12次調査を中心に検出された14世紀後半から15世紀前半頃の大名館に関連する竪立柱建物跡等も述べた。
-----	---

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第144集

大友氏館跡 2

館跡周辺の確認調査報告書

2017年1月27日

発行 大分市教育委員会 文化財課

大分市荷揚町2-31